
真・恋姫＋無双 現代若人の歩み、佇み

Duegion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 現代若人の歩み、佇み

【Nコード】

N5962X

【作者名】

Duegion

【あらすじ】

老若男女いずれもが苦しみ、耐えて、強く生きていった三国時代。王道と霸道がぶつかり合い、大地を血と鉄で染め上げた時代に、二人の若き日本人がいた。

片割れは、悪しきを許さず、その手に握る刀から溢れる光は、大陸奥深くの南蛮の地まで輝やかせたといわれる、王道を敷く者、北郷一刀。

もう片方は、悪しきを許容し、冷えた血と鉄で民草を蹴り、その心には遥か高くそびえる山々を飲み干す悪意を持つといわれた、

辰野仁ノ助。

二人の若人はいかにして、乙女達の戦乱に足を踏み入れ、いかにして世を変えていったのか。

今、ゆるやかに群雄割拠の世が始まっていく。

序章：去る日のこと（前書き）

此度、はじめて「小説を読もう」に小説を投稿させていただきました、

Duegionと申します。真・恋姫十無双シリーズとそのキャラクターを通じて、

皆様方にご作品を楽しんでいただけたら、これに過ぎたる喜びが御座いません。

なにぶん非才な初心者ではありますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

序章：去る日のこと

自称・大陸一の占い師、管輅の耳の傍を甲高い群集の喧騒の音が走っていく。

昼間の通りは客を引き寄せ、客寄せ店員の朗らかな猫なで声が耳を響き、

「わが店の商品は、これぞまさに天下一の名品なり」、

「世に多くの品あれど、わが商品に勝るものなし」と、

あたり障りの良い文句で顔の蔭をたたえる商人らが客の注意を引こうと努めている。

道行く者に憧憬か嫉妬かあるいはひっそりと隠した憎悪の目を向けるのは、

財布すら持てぬ貧民であり、上着や脚絆（きやはん）が破けてほつれ手足が細く弱った乞食であり、

自らの野心と獣欲をひたと隠す夜盗崩れのゴロツキである。

それら全てに無関心を決め込み、

通りの間の細い路地でただ只管（ひたすら）に月琴を抱えて頂垂れるのがこの老人だ。

背筋が曲がり、目元のしわは何重にも苦勞を抱え込み、

僅かにあけられた口からは表の通りを行く人々からは決してもれな
い、

世の真実を知ったことに対する深い感動と、

自分を長らく生きながらえさせた自然に対する深い畏敬の念が僅かにこぼれ出た。

見事に白く染め上がった長髪の一つつが、通り抜けていく静かな風でゆらめく。

「これはいつたい、なんの奇遇であるか。」

老人の苦勞のしわが一本消え去った。

「長らく死に損なつた老骨めが新たに知ることの、なんとも面白きことよ」

僅かに頭を上げた老人の目が静かに開き、

その老齡とは信じがたいほどの目のきらめきが湛えられている。通りを歩く者々はそれだけを見るのならば、

決してこの目が六十を超えた老骨のものだとは夢にも思つまい。それほどきらめきが管輅の目からこぼれ出ている。

口元が釣り上がり、瘦せた頬から骨がわずかばかりに浮き出た。

「『天の御遣い』とはなあ……。それも二人とはなあ。」

目がさらに輝き、開いた口元からは萎びれた舌が見える。

言葉の語尾にて枯れた声が裏返り、路地に溢れる邪氣と吹き抜ける風をさらに強めた。

背を預けている古ぼけて汚れた商店の木壁までもがそれを彩った。

「これはきつと、我が生涯最高の遊びに違いあるまいて。うかうかしていられなくなつてきたわ。」

珂々々と喉の奥から愉快的な声が漏れ出し、抱えていた琴をひしと抱きしめ、

若人がするかのような軽い動きでこの老人も立ち上がった。

眼球に広がるのは、表のゴロツキどもとは比較にならぬ強い邪氣と新たな玩具が手に入ったかのように嬉しく舞う稚児のような喜心であつた。

通りの雑踏と喧騒には目もくれず、細い路地へと体の方向を変えて歩いていく。

長い髪が風にゆらめき、さながら幽鬼を作り上げていくかのよう
に老人の背を押していき、
路地の暗闇が老人の心を知ってかしらさ、さらに闇を増してい
った。

後に『双つの御遣い』とされる噂は、悪意なき管輅の遊び心を通じ
て大陸を駆け抜けていく。

「一つは流星と共に、一つは戦乱と共に世へ降り立ち、この大陸を
猛き者の国とするであろう」。

その片割れの名は、北郷一刀。世を憂い、天に王道を敷く者の助け
となる者。

もう片方の名は、まだ知れぬ。ただ知るのは、

強き武と賢き知にて大地を赤く染め上げる、覇者であること、ただ
一事。

序章…去る日のこと（後書き）

管輅は今回のシリーズでは左慈らとは絡ませず、オリキャラとして、ちよくちよくと出していく予定であります。

というか、小説本文を書き上げるだけで2時間もかかるとは…。
舐めてかかると本当に先が思いやられます。
それでも、ゆっくりと書き上げていきます。

第一章：大地を見渡すこと その壱

空はいつぺんの曇りなく青色に澄み渡っており、この日差しの下で寝転がるには丁度よいほどの気温である。痩せた大地を広く見渡せる小高い丘の上には一本の樹木が大地を震わすかのように、見事にその巨体をみせている。時より吹かれる順風は樹木の枝を揺らし、ザアザアと木を煽っている。

頭をうんうんと唸らせる者がこの地を一度見たら、その唸りを即座にやめて、西周時代の詩経の『風』を編んでいった、一流の詩人になれるかのような気持ちをさせるだろう。

その優雅で雄大な風景には似合わぬ、風がシュツと切られる音が、一定の間隔をおいて続けられている。

それを生むのは一振りの刀だ。片刃で歪曲したつくりをしており、刃の所々には血痕が染付いた痕だろうか拭いようのない穢れが見えている。

刃の先端、刀尖（とうせん）は僅かばかりに欠けており次に人を殺すときには難儀をしそうである。

刀の柄、刀柄（とうへい）を強く握って一心不乱に素振りをする者の額には汗が光り、時々毀（こぼ）れる気合維持のために発せられる鋭い呼吸は、この者の十全足るやる気と、刀を振り続けることに対する少しばかりの疲労を如実に物語っている。

「……………ウツ……………」

刀柄を握る者の服装は、上は数箇所のほつれを直され、大地の煙を吸い込んで茶色が全体を薄く彩り、それでもなお元々の色である青色を残した古びれた服。下は男の細くがっしりとした体に似合うような黒を基調とした大きさの脚絆（きゃはん）で、こちらも数箇所

のほつれが直されており、男の生活に対する生真面目さが現れている。腰には紐帯が巻かれ、結ばれたところより広がる二本の紐と紐帯に括り付けられた小さな袋が、男のしっかした刃を振る動きにあわせて、ひらりひらりと踊り、足を踏みしめ前へ後ろへ体を動かすと共に、踏み直される大地からは土煙が僅かばかりに男の足をなでる。

「ッ
..... フウ..... あああ、疲れたあ。」

その動態からは微塵も似合わない、やる気が一切欠けたため息が男の口から面倒だといわんばかりに毀（こぼ）れ出た。先ほどの動きでもう疲れ果てたというが如く、どさつと地に尻を降ろして樹木の方へ背を預けていく。手にもった刃は手が届くところに突き立てられて、地に刺さったときに割れた土からは煙が風下へ消えていった。地の近くに置かれた手荷物一（中には二・三日分の非常食、水筒、衣料を破いてできた包帯の代わり、金銭、何品かの小物の武器があるが、その出番はまだないようだ。）が、大地を這う風を物ともせず地に横たわっている。その荷物はしっかりと口を結ばれており、簡単に素性を吐くことはなさそうだ。天に面倒臭そうな表情をした顔を向けた男のそれとは裏腹に、意思の強さが見て取れる力強い目が天の先を見つめている。短く切り揃えられた短髪が風に煽られるたびに、男の表情は和やかなものとなっているが、瞳が揺らぐことはまったくない。

人と比べれば十人中六人は男の容姿をみて快男と評し、後の四人のうち三人は唯のヘタレと評し、残りの一人は冷淡と評する。相容れぬ評価ではあるが、その何れもが男が内に抱いた心の造りを端的に表しているとよいだろう。面倒くさそうな演技を貼り付けて背を木に預け、見つめる先に何を捉えているのか誰にも知れない、そんな表情をする男が辰野仁ノ助である。

この大陸ではこの名前とは別の名が、市民や賊の間で知れ渡っている。いついかなるときも、例え周囲を腕っ節で名を言わせた盗賊に包囲されていても、例え無銭飲食で捕まって店の主人に殺意のこもった目で睨まれようと、妙に自信有り気な態度とそれをしつかりと支える武技と小細工で、行く先々で問題と解決と、何よりも人々の呆れと感嘆を生じさせる。すなわち『遊びの仁』。そんな行為を続けざまに起こしていくのがこの男である。「阿呆と罵られようがそんな罵倒は最初からなかったかのように次の瞬間には口笛を吹いている」とも言われるが、男の気丈さと生真面目さ、人の期待に応える誠実さと、何よりも武技や道具を選ばぬ武人としての強さがこの名をただの遊び人で留まらせていない。いざとなれば手段を問わず目的達成のために穢れ役を進んで受け入れていく、現実に対する冷ややかで強かな行動が賊の頭を悩ませ、新入りの賊はその名を聞けば、「背筋が寒くなる」と恐れている。

そんな噂も印象も今この男が出している間抜けな表情と比べれば、本当にこの男がああ『遊びの仁』かと疑いたくなくなってしまう。先ほどまで天の先を見つめていた瞳は既に安定せず、頭はこっくりこっくりと垂れ始めている。ようは眠いのである。『遊びの仁』は風の中を遊んだ子供のように、疲れ始めたらずくに眠気を出す悪癖を、ここでも出している。ついには頭が完全に垂れて、煽られる風が気持ちよいといわんばかりに健やかな寝息を立て始めた。体が木から離れて横倒しとなったその時、紐帯に括り付けられた小袋が解けられて、地に転がって中から小さく畳まれた紙が出てきた。樹木を震わす強い風が吹いた瞬間、小さな紙が大地を離れて宙へ舞い、男の寝息も枝木のささやきも届かぬ場所へと飛んでいく。

紙がひらりひらりと舞っていき、畳まれた紙が風に舞うたびに広がっていく。

やがて完全に一枚の紙となり、文面が見えるまでになった。

そこには短くこう記されていた。

『蒼天已死黄天當立歳在甲子天下大吉』

「蒼天すでに死す、黄天當に立つべし、歳は甲子にあつて、天下は大吉なり」

張角に煽られて飢えた貧民がついには野党となつて漢王朝を激震せしめ、

後の群雄割拠の時代の到来に大きく貢献した、いわゆる黄巾の乱がもうまもなく始まるその頃、

寢息を立てるこの男はそんなことなど関係ないとただ惰眠を貪っている。

「寝すぎた……………の、かな」

当たり前である。既に三刻一（約6時間）も過ぎて、天の赤い光が西に傾き始め大地を斜めに輪切りにしている。空に移る青は未だ残っているが、それでも色が変わり始めている。そんな時間まで馬鹿眠りをしていた男は、割かし焦って近くの町へと足を早めて向かわせていた。寝る前まで使っていたぼろぼろの刀は鞘に収められて紐帯に収められており、男の素性を確りと物語る手荷物は男の俊足の邪魔をしないように力強く背負われている。走るリズムは変わらずに、朧（おぼろ）に地の先に見え始めた町を見定めると、心に静かに安心を湛えた。

時は後漢王朝の末期の時代。外威と宦官による横領から始まる政治腐敗は、大陸の中心である洛陽に留まらず、全土へとまるで火事のように広がっていった。僅か12の齡で帝となった靈帝を支えんがために、皇帝の母やそれに近い者が皇帝の代わりに政治を司った。しかし彼女らははつきりいってこれは不得手としており、さらには朝廷の金蔵は前の皇帝らによる浪費によって金欠が生じる有様。そこで彼女らは自らの信頼を預けるにたる人物、すなわち家族や親族に助けを求めた。彼らは『外威』となつて政治を行おうとした。しかし彼らも職業柄から政治が不得手であり、彼らも同時に助けを求めることとなる。

そして外威は、宮中に入るために男の象徴を切断した野心家達、すなわち『宦官』に救いの手を求めた。これこそが致命的な誤りであったとは彼らは思つまい。

そもそも宦官は後宮の世話をすることが仕事であるために、終身雇用を許された身であり、年とともに発言力が増して周囲に頼られて

いくが同時に野心と権力欲と尊大な自尊心を培ってきた。そんな折に外威から救いの手を伸べられた彼らにとつては、「これぞ天恵！」とも思つたであろう。実質的には外威を上回る権力を持つ彼らは、自らの獸欲と自尊心を満たすために（または金欠政治を是正するために）贈賄政治を始めた。贈らぬものは投獄・左遷の身となり、贈つたものもまた次の贈り物を用意するうちに宦官の欲に飲まれていき、最後には宦官と瓜二つの性格を持つ悪人が蔓延（はびこ）っていく。中にはこれを批判する勇氣ある者たちがおり宦官抹殺計画を密かに練っていたのだが、これの露呈によつて全員処刑の身となつた。

これを見た地方の政治家も、税金として民衆から金銭やそれに値するものを奪うような政治を始めていく。中には宦官に贈り物を捧げ、出世を取り付けるものさえいた。民衆は日々困窮する生活に対し強い悲哀を覚えたであろう。だがそんなの関係ねえともいふかのようにな、洛陽では宦官を中心に贅沢三昧を楽しんでいた。困窮に耐えかねた民衆の中から、生きるために盜賊となつて、血をすすり肉を満たす者も当然の如く生まれる。そしてその盜賊を初めとした悪鬼羅刹・外道畜生の襲撃によつて死する者も悲しむものも当然生まれる。それが漢王朝の末期。辰野仁ノ助が今生きている世界である。

（日暮れまで時間はあるが、宿をとらないと野宿となる。ぶつちやけ無理。）

最近は何そのものを開くことすら出来ぬ者も増えている。明日の食事、果ては今日の食事もありつけぬ者も出始めている。飢えて死する事ほど、惨めで理不尽なことはない。彼はその点、磨き上げた武技と妙技で金を稼げるといふ、傭兵まがいのこと続けて生き続けた。彼らのようにならないよう、自分の心を墮落させないように、

常に自分に言い聞かせそれを実践する。『遊びの仁』の心は、大陸の民衆と同じように逼迫したものとなっていた。徐々に近づき始める町を見て、胸の中の安心感がさらに広がる。町に着いたら、手荷物の中にある金銭をはたいて食事を買ひ、今日も生きてこられたことに対する感謝を胸に食事と酒にありつこう。

「……………舌に転がる肉からはしっかりと染み込んだ出汁がきいており、食事に飽きをもたらさない。喉に渴きを覚えたら、酒を啣（あお）り口の中に残る脂身と共に嚙下（えんげ）する。そしてまた、食されることを望んでいるかのように自らをアピールする色とりどりの食菜をみて、満たしかけた空腹感をもう一度取り戻す。握った箸が僅かに振るえ、皿に残る肉へとまた伸びていく。嗚呼、これぞまさに桃源郷なり。さらば空腹……………」

「……………ウへへへ……………へへッ……………
……………ハッ!?」

トリップしかけた頭を振るい、口からこぼれている涎（よだれ）を拭う。宦官どもには味わえぬ満足感を期待するうちに、口がにやついてしまった。されど致し方なし。日々生きることには全力を注ぐ者にとつて、食事と酒ほど気が緩み、この世の天国を体現するものがない。食事の前の空腹は満たされぬうちが幸福であることを、彼は酒と共に知ったのである。にやつく口をそのままにウへへと馬鹿さを毀れだし、まだ見ぬ町へ足を早めた彼を責める者は誰一人としていない。だがにやつきながら、しかも走る馬にも追いつきそうな速さで大地を駆ける彼を見たら、きつとそれはよからぬことを企む変態にしか見えないであろう。

その時、彼の後方から焦っているかのように鞭を打たれる馬の嘶（いなな）きが聞こえた。商人であろうか？否、それならもっと日が

高いうちに町に入るだろう。口が緩みつぱなしのまま仁ノ助は足を遅くし、後方を見遣る。馬の音がするほうに小さく見える一つの影が現れていた。完全に足を止めた彼は目を細めてその先を見定める。馬に鞭を打っているのは、なにか煌（きら）びやかな服を着た人だ。鞭を打つペースは通常のそれよりも速く、その者自身の疲れが出ているのであろうか、時折ペースが乱れているのが分かってきた。

（……いやな予感がする。ああいう場合は得てしてその後ろを尾けられているんだが。）

口の緩みはとうに消え去り、眼光は鋭く光って馬の方向をみつめている。眉間のしわが寄せられて、彼の周りの空気が徐々に重たいものと成っている。体の向きは町から馬へと変わり、紐帯にさした刀がジャキンと鳴る。いやの予感がすると自然と緊張することが、彼の命を長きに渡り続かせている。やがて馬に乗った者の姿形がはつきりとする前に、馬の後方から一頭のものだけとは思えない土煙が沸いて出た。先に行く煌びやかな服を着た者を追うかのように、そしてそれを捕まえるかのようにだんだんと現れ、次第には数頭の馬が見て取れた。太陽の光に反射している、なにか細長いものを持っている。それを馬に当たaraぬように横に地面と平行になるように広げ、前行く者を執拗に追いつめていく。

（賊か！）

そう思うやすぐに手荷物を地に捨てて馬の方へ走っていく。齒は舌をかまないように噛み締められており、短髪は体が風を切る音と共に揺らめいている。刀の鏢に指をかけて走るさまは板についたもの。鞞の先に足をぶつけることなく、先ほど以上の速さで駆ける彼の姿は先ほどの間抜けさを地の果てへ放り投げだしているかのようである。

辰野仁ノ助は、この出来事を以って、戦乱の波へ飛び込んでいくことになるとは、彼自身は露とも思っていない。そしてこの馬に乗る者も、この一事をもって、己の人生を一変させることとなるうとは、予想だにしなかった。

第一章：大地を見渡すこと その壺（後書き）

この話には書いていませんが、ほかにも後漢王朝が衰退した原因として、

旱魃・疫病・飢饉といった天変地異がありました。

いわゆる、現代の言葉で言うところの食糧危機です。

勝手ながら思ったこととしては、この時代は民衆にとっては救世主のいない「北斗の拳」に思えたんでしょうね。世紀末を様相を呈する世相となつたら、新興宗教にすがり付いて救いを求めてしまうのは昔からのようです。これが、黄布族が爆発的に広まった大きな理由の一つといえるでしょう。

次回は軽い戦闘シーンを入れる予定ですが、いささか描写に不安があります。時代劇を見て読んで勉強いたします。

第一章：大地を見渡すこと その貳

地を走る足の数はゆうに十を超えているのであろうか、不規則にみえて規則的なりズムで音が駆けていく。

一歩一歩がしつかりと大地を踏み鳴らしているのがよく分かるほどである。

その足の持ち主はさぞ強い足腰を持っていることであろう。それもそのはず、駆け抜けていくのは馬ではあるが、しかしその外観は良馬と比べれば痩せ細った印象を受ける。

今日の食にありつけないのは馬も人も同じということが、目も落ち窪んでいるのが痩せた外観をさらに哀れなものとしている。

「オイクソアマア！！てめえ止まれやゴラアツ！！」

「早く走らんかい、テメエラ！！上玉逃がすんじゃねえ！」

馬の一生など気にもかけぬ悪劣で下品な欲を口から吐き出しているのは、

どれもこれも悪玉がそのまま似合いそうな風体をした男共だ。

無精ひげが乱暴に生えた口からは罵詈雑言と共に唾が飛び交い、己の服にそれがついたり、走り去ってきた後ろの大地へと流れて消える。

髪は何十日も水で洗わず放置していたのか、遠目からみても汚らわしい色をしており、

黄色の頭巾で結わかれた髪の間からはしらみが生まれているように思われる。

ボロボロになった服は悪臭を放ち、

薄汚れた黄色が全体に広がっている服と相俟あいまって、

さらに男達を汚らわしくしている。

彼らの手には鈍く光る銀色の鉄、

何人もの生き血を啜った刀が男達の数だけ日の光を反射している。その数は4つ。いずれも手入れのかけらもされていない、使い捨ての刀のようだ（少なくとも男達はそう思って使用している）。

男達の目は爛々（らんらん）と輝き、獲物を前にした獣達の獰猛な光を抱いている。

その光は目の前を必死に駆ける一等の馬、正確には馬の手綱を握り締める一人の女性へと注がれている。

（迂闊だったわ……！もつと早くに町へ来るべきだった！）

内心の焦りを必死に押さえ込もうとするが、その努力が報われずに顔にそのまま焦りが出ており、それをさらに強調するかのように額の汗が何筋も顔を垂れている。汗は首筋にもじわりと出ており、

この時代の民には珍しい健康そうな色をした白い肌を濡らしている。肘ひじから先は元々服にないのであろう、

赤のラインが横一線に袖口を走っており、袖口から生えている両腕には若い女性特有のしなやかで、それでいて力強さが見え隠れしている。

服には所々に藍色と黄色の花柄が飾られており、白色が主体の上着を華やかなもとしている。

胸元には花を象かたどった力チューシャのようなものがつけられており、服を着る者の魅力をより一層高めている。

黒色の紐帯が巻かれており、脚絆きゃはんは赤の短パンとも思わせるかのようなものである。

膝小僧が見えるまでに短い脚絆は活発的な印象を見せ付けている。足には黒の靴を履いており、

馬の走りに継り付くかのように足を使って馬の腹を抱えこんで、振り落とされないように耐えている。

女性が握る手綱は何度も馬を打ちその走りを急かしているが、それでもなお町までの道程が遠くに思える。このまま愛馬が走り続けているのだろうか。それとも私が力尽きてしまうのだろうか。後ろの奴等に追いつかれたらどうなるのだろうか。想像だにしない屈辱と、この世を拒絶したくなるほどの絶望が襲ってくるのだろうか。

(・・・・・・・・・・・・・・・・駄目だ！弱気になっては駄目！)

自らの頭を過ぎる不吉な妄想を振り払って只管ひたすらに前を見つめるが、それでも目には不安が色濃く出て揺らめいている。まだまだ町までは遠い。

20里(約10000メートル、つまり1里=5000メートル)はあるのではなかるうか。

鈍ってきた頭でそう考える。気を引き締めなければ。

そんな思いを強め、手に持つ手綱をより強く握り締めた。

後ろに続く暴君共を振り払うために。

そんな折に、一つの人影が町がある向こう側からゆっくりと現れてきた。

(どうみたって女狙いの賊だな、ありや。)

全くの平野が延々と広がっている。

走りの邪魔をするような障害物(岩・坂・出っ張った丘陵)はほとんどない。

まだ距離は少しばかり遠いが、それでも己と馬の速さを考えれば近いともいえよう。

辰野仁ノ助は馬もかくやといわんばかりの俊足で、

遠くから見えてきた鈍い銀色の光を刃のそれと見定めて、このように思った。

風はやや追い風、

それ故に賊に追われている彼女のもとへ駆けつけることが早くなる
ことが、

彼にとって幸運となった。

刀柄には既に左手がかけられており、

走るたびにゆれないようにひしと押さえられている。

風と己の出す速さに揺れる紐はばたと音を立ててたなびいている。

見つめる先には既に追われている者の姿形がはつきりとし、

それに何かを思っ前にその後ろから迫る四本の銀色に目を奪われている。

太陽の光を西から受けて鈍色に光るそれは、

彼にとって何らかの武器と見定めるに十分であった。

それを裏付けることに四頭の馬を駆る男達の身なりがある。

遠目から分かるほどの年代物の使い古した服装。

女性のそれと比較して、すぐさまに賊と判断できてしまうほどの荒々しい馬遣い。

彼らにとってみても町のすぐ近くまで追う必要はなかったのである
う。

しかし自らが生きること考え欲求を満たすことを考えるあまり、

頭の回転が鈍くなっているのであろうか。

頭の回りが早いと話し合いによる解決が期待されてくるのだが、

こうとなつては話し合いにも応じるような状況ではない。

彼はそう断定して、四人のその頭に巻かれた黄色の布のことを聞き
出してから、

全員を叩き斬ることを決めた。

視界に映る女性の姿がはつきりとわかるほどに接近した。女性との距離は既に三町（約330メートル）よって1町（110メートル）を過ぎようとしている。

助けが来たのであろうか、心なしか女性は手綱を打つペースが安定してきている。

これならば町に逃げて、救援を求めるまで体力は温存できるだろう。距離はさらに縮まっていく。

二町、一町半、一町、半町。

女性の表情が捉えられた。

助けに来たことに対する安堵感、そして一人で馬を駆る四人の賊をやれるのかと疑う不安がないまぜだ。

まあ見ている。男の心には不敵な自信が存在した。

最初の一撃をどのようにやるかで賊共の威勢を挫けるか、

彼は既にその方法を決めていた。

女性と馬を鼓舞するように彼は叫ぶ。

「そのまま町へ走れ!!!」

「おい……え!!!……じゃねえ!!!」

勢いを保って女性とすれ違う彼の前に四人の賊が見定められ、

前の方からなにやら叫び声が聞こえてきた。

察するに女を追う邪魔をするなということだろう。

ここで邪魔をされたら、

最早これ以上追うのは自らの命をいたづらに危険にさらすこととなる。

町から出てきた兵士に取り囲まれ、しかもそれが五人以上だったら俺達は終わりだ。

馬は元々馬屋から奪ってきた駄馬、兵士達が駆る馬と比べれば赤子同然。

獲物を捕らえることが実質的に不可能になりかけているに対する彼らの怒りは、

自分達に己の足で走りながら迫る生意気で憎たらしい男に向けられた。

元々歪んだ顔を顔を歪め、顔のしわ一本一本から汚らしい殺意がにじみ出ている。

刀を握る力がさらに籠められた。

仁ノ助はついに紐帯にさした刀を抜き左肩に担いだ。

賊の一人が我先にとこちら目掛けて疾走してくる。

手に持たれた刀は血の脂をそのままにしており、大きく振りかぶられた。

右からの袈裟懸けにする気であろう。

この世界には未だあぶみ鍙あぶみが発明されてないため、馬を駆るには足腰を中心とした筋肉が強靱であることが必至。

さらに刀を振るうとなればより強い筋力が必要となり、

馬を駆る者のバランス感覚も必要となる。

力がなくば、どんな馬すら暴れ馬となる。

その難度が高い馬術を出来るこの賊は見た目以上に自らを鍛え上げ、自らの武技によってこちらを殺す自信があるのである。

手に刀を持つ姿は中々に板についていた。

最初の賊との距離がさらに縮まる。

距離は四間（5・6メートル、つまり1町1・4メートル）。

双方から相手に向かって駆け寄っている距離なら一秒も満たずに接触する。

そのままさらに近づいた瞬間、賊の刀が鋭い音と共に振り落とされた。

馬の勢いも手伝って本来のそれよりもさらに早く下ろされているのが賊自身も分かった。

「ッオラア！」

「――男はなすすべもなく胸元を深く斬られ傷口から勢いよく血を吐き出す。胸元からは臓器と骨が見えるほどで助かりようがない。賊共はそれを放置して女の方へさらに足を速める。女はこちらを振り向きもしない。が、最後には追いつかれて自らの愛馬から振り落とされる。賊たちは馬もろとも確保し町から離れていく。そして誰も目のつかぬ場所で女をいただく。どのように陵辱しようか。悲鳴をあげて助けを求める女の服を無理やり脱がし破き、自らの暴君を慰めるために女の体を使う。健康そうな肌が地面に押さえつけられ、男共に乱暴にされるたびに徐々に赤くなり始める。上下の口は乱暴にされるたびに興奮してきた。どんなに否定しようとも女の体は男のそれを求めている。白い肌は汗と白い液体にまみれ、土の茶色がそれをさらに彩る。口からは隠し切れない興奮の吐息が走り、その中に女自身の淫靡な欲求が徐々に強く現れていく。そして最後には演技の悲鳴が完全に消え去り、懇願の言葉を出して自ら求めていく肌をすり合わせ自らの女をより強調し荒々しいそれに熱い視線を注いで求める姿に男達はさらに興奮し、より滾るたぎそれを女に押し付けあう。――」。

とまあ、賊の思い通りになるならこんな風になるのであるが、現実とは若干違った。

駆け寄る仁ノ助は馬と接触する寸前に勢いよく右に側に弾かれるように飛び、

さらに賊の刀の範囲から逃れる。

そして肩に担いだ刀で左から袈裟懸けに馬の左前足を切断する。

勢いを保ったまま前へつんのめる馬もろとも、

男は驚愕が混じった悲鳴と共に頭から地面に投げ出される。

それを気にも留めず二人目の賊に向かって仁ノ助は走っていく。

他の賊達は驚きの余り馬を駆る速さをゆるめてしまっている。ひよつとしたら今斬った馬に乗った奴がこいつらの頭、または一番の猛者か。

付け入る隙を与えた賊に乗じる形で二人目の賊に向かって勢いよく地を蹴って飛び掛る。

賊の驚愕の表情に恐怖の色が混じった。

「シャアッ！」

地を蹴って跳躍した仁ノ助は馬上に乗るように飛び掛り、乗っていた哀れな賊の胸に勢いよく刀を突き刺す。

勢いの余り刀は背中を突き破り血が噴出した。

賊が持つ刀を無理やり奪い取ると体を地面に蹴落とし三人目に向かって馬を走らせる。

どうもこの馬は前の主が気に入らなかつたらしく、新しく主が変わったことになんの拒絶もしなかった。

「ああ………こつち来るなアア！」

狙われた賊は悲鳴と共に逃げ出そうとするが、背中をさらしたその姿は刀を刺すのに十分すぎるくらいだった。

仁ノ助は手綱を使って馬を巧みに操り、

賊の馬に近づいていくと手に持った刀を逆手に持ち勢いよく真っ直ぐに投げた。

刀が使い捨ての道具に過ぎないのはこの男にとっても同意見であったようだ。

投げ出された刀は馬の尻に刺さり、不健康そうな黒が混じった赤の血が漏れ出す。

馬は痛みの余り横倒しに転倒していく。

男は悲鳴を挙げつつも手綱を放していない。

それが不運となり勢いよく横から地面に頭を打ち付けた男の頭蓋から、不吉な音が響いた。

男は一度痛みの悲鳴をあげるとピクリピクリと痙攣している。頭蓋だけではなく首も逝ったかもしれない。

仁ノ助は素早く自分の馬を倒れた馬に駆け寄せると、尻に刺さった刀の柄をがっしりと掴んで、

馬の肉もろともえいやと薙ぎ払うように抜いた。

そして最後の一人を左に見定めると馬を駆った。

「ひいい……うわああああ!!!」

最後の賊は蛇に睨まれたかのように体をぶるりと震わせると、やけくそまみれの悲鳴と共にこちらへ馬を駆ってきた。

仲間がわずかの時間で全滅したことに恐怖したのか、

あるいはもう逃げる気すらしなかったのか、

男は目の前の悪夢を是正するために勢いを止めない。両者共に刀を右に構えている。

馬上にて一撃必殺を狙った構えだ。

仁ノ助のそれとは違って、賊のそれはビクビクと小刻みに震えている。

恐怖に負けずに自らを鼓舞し構えを崩さない賊の心なんと健気なことか。

やがて二人の馬が勢いよく交差する。

顔を歪めた賊は交差する敵に向かって刀を力の限り思いっきり振るう。

(これで悪夢が消え去ったら、俺は実家に帰るんだ!!!もう賊なんていやだ!!!)

その願いを叶えるかのように仁ノ助の刀が男の刀よりもさらに早く振るわれた。

右胸あたりをざっくりと切り裂かれ、

男は赤い血を宙にばらまきながら前かがみとなり、ゆっくりと横に崩れていった。

賊の願いは自らの死でもって半ば実現することとなる。

それを実現した男は馬をゆっくりと止めていき、自らが起こした戦果を振り返った。

三人の賊はいずれも素人目でもわかるくらいの致命傷だ。あ

の失血量ではいちいち死を確認し、あるいは止めをさすまでもない。馬を二頭も殺してしまったことが唯一の失点だ。

町まで連れて行けば幾ばくかの金銭の代わりとなったであろうに。

仁ノ助はそこまで思うと、自らの不手際に失意の息を出そうとする。その直前に、初めに倒した賊の姿が目に映った。まだ動いている。

頭から地面に落とされたが無事のような。

手綱を手放してすばやく受身を取ったのであろう、

ゆっくりと立ち上がった賊は頭をぶんぶんと振っている。

それでも右腕は左肩あたりを押さえている。

顔は痛みと女が受けるはずだった屈辱を浮かべており、

こちらを殺意を込めて睨んでいる。

逃げようともしないのは男が乗る馬が二頭とも仁ノ助の方に居るからか、

または戦と共に培ってきた男の武の矜持のためか。

仁ノ助は後者の意を尊重し、

男まで七間（9・8メートル）の距離まで近づくと馬を降りて五歩近づいた。

「賊だな。」

「……だからなんだってんだ。今時珍しいもでもねえだろ。」

くだらない質問だという風に男は血が混じったつばを吐き捨てた。そして左に持った刀を右手に移し、下半身を静かに降ろし下段に構えた。

「……………殺る気か。ならその前に一つ尋ねたいことがある。」

「ああ？」

「貴様の髪を結わいている頭巾はどういう意味を持つ？」

「……………てめえが知ったことでなんの得があるかわかんねえが、
教えてもいいいぜ。」

仁ノ助の内心に、賊が自らの問いに答え得る情報を持っているという確信が出る前に、

賊は深く深呼吸をしさらに構えを力強くした。

体を右に開き左足を前へ一歩出して、右足は膝が曲る程度に後ろへ下がった。

左手は体の前に垂らされ、初めは下段に構えていた刀は肩の高さまで持ち上げられ、

切っ先は天に向かって斜め前に向いている。この男の意が如実に分かった。

すなわち、『俺を倒してから聞きやがれ』。

最後まで自らの勝利に向かって姿勢を崩さない賊に対し、
純粹に武人としての敬意が内心に広がる。

（賊の中にも矜持を持つものがいたとは。）

仁ノ助はそれに応えるために刀を構えた。

体の姿勢は男と同じ。体を右に開いて右足を後ろに引き、足を肩幅に開いた。

異なるのは刀の構え。賊の片手上段構えと違って、仁ノ助のそれは両手を使った下段構えである。

賊の刀が頭蓋に向かって振られる前に、逆袈裟懸けにもって体を右下から左上に斬ろうとの魂胆である。

両者は息を徐々に落ち着かせ、互いにお互いの心が読まれないしていく。

刀は一寸たりとも揺れず、姿勢は金剛神像の如く凜としたものとなっている。

視線がぶつかり互いの眼に映る自分を見定める。

戦意に満ちた空間は一種の隙を許さぬ緊張感を醸し出している。

油断をすれば相手の先手を許すことが手に取るようにわかる。

その結果は己の死だという事も。

空気が張り詰めいき、戦意と殺意が互いの間にて爆発しそうともなる瞬間、

地を勢いよく滑る風が吹いた。

「ッッ！！！！」

両者は弾かれるように前へ飛び出す。

握る刀はぶれず、ただ相手の心臓のみを食らわんと欲し輝く。

仁ノ助は戦意を、賊は殺意を噴出しながら駆け寄った。

空気が刃に切られる、次に切られるのはどちらかの体であろう。

距離が二間にもなり、刀の攻撃範囲に両者が飛び込んだ。

神速の如く振るわれた刀が互いの胸の奥の臓器に向かって交差された。

刀が振るわれた音が響き渡り、両者は一間半の距離を持って走りを止めた。

数瞬をおいたがまだ倒れない、しかし地面には赤い血が垂れている。どちらかが斬られ、臓を食い破られたのは必至である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・アア」

口から血と息を毀れだすのは、はたして賊のほうであった。
仁ノ助持つ刀の刃からは血がべつとりと塗られている。

二人分の血を吸った刀は太陽の光を受けてさらに赤く光っている。
賊の胸は狙い通りに逆袈裟懸けに深く斬られており、
血が体を伝って地面にどろどろと流れ出している。

賊の最後の一刀は惜しくも仁ノ助のそれよりも遅かったのだ。
賊はゆっくりと膝をつき、

刀を持つ力が無くなったかカランと音を立てて刀が地に転がった。
上半身はそれでも地面に倒さないことに、賊の最期の意地が見せられて
いる。

仁ノ助はゆっくりと問う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・答えは？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・ちよう・・・・・・・・か・・・・・・・・く・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・さま・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は僅かに血を漏らして言葉をこぼし、俯うつむいた。

正座をするかのように足が畳まれている、
しかし地には頭を下げたが体は倒していない。

男の表情はよつれた髪によって窺い知る事ができないが、
口元は僅かに緩められている。

己の武威と信仰を伝えることに満足したのであろう、
矜持を持った賊はピクリとも動かない。

これにて賊の荒々しくも充実した生は終わったのである。
仁ノ助は刀を振るい血脂を払うと、賊のこぼした言葉を考え始める。

彼はちようかくといった。これは地名というよりも、奴の主人の名
ではないか？

ちようかく……ひよつとしたらこれは……。

「……つち……す！……く！！」

彼の思考を遮るかのように目の前から人影が複数見えてきた。

先頭を切るのはなぜか先ほどすれ違った女性だ。

後ろから馬を駆る追う兵士よりもさらに早くこちらへ愛馬を駆っている。

ここで仁ノ助はその答えを思いついた。彼らは自分の助けにきたのである。

兵士よりも真つ先に駆けてくる彼女の気丈さに思わず苦笑いが口元に現れてしまった。

『もしかしたらまだあの人が盗賊どもによって危険に晒されているのでは』

と女性の表情が張り詰められていたが、目の前に広がった惨状に思わず口を開いたまま固まってしまった。

この男は馬を駆った賊共を己の足だけで追いついてあまつさえ殺したのだ、

と思われてしまうのだから当たり前のことだ。

呆然としたまま動かぬ彼女を追い抜いた兵士達も同様の表情を浮かべている。

駆けつけるまでもまく賊共が殺されていたのだから、これもまた当然だ。

（さてと、どう説明するかねえ。困ったなあ。）

仁ノ助は苦笑いをそのままに、これからどう話していこうかと頭を悩ませて始めた。

赤い光が天と地を染め上げている。

それはあたかも、これからの彼らの行く末を物語っているかのよう

であつた。

第一章：大地を見渡すこと その式（後書き）

編集してどうしようもない矛盾を訂正しました。

（訂正前）刀もなしに二人の賊を斬り捨てるなんて、

仁ノ助君はすごいね！（棒） 大変失礼しました。

次回には仁君の第一号の嫁が参加します。

第一章：大地を見渡すこと その参

「信じられないわ……」

日の光は完全に西へ落ち、赤く光っていた空は今は星々と月の光によつて美しい輝きを放っている。

雲はゆるやかに流れ時折月の表情を隠すが、隠れていてもなお自らの神々しさを地上へ届けるようかのよう光る月は、

それはえにもいわれぬ美麗さを感じさせる。

それらの光を一身に受けるとある地上の町、

その町の一角の宿にて心を尽くされた料理に舌鼓を打つ者達が居た。赤い光の中で行われた男による賊狩り。

人の口には戸が立てられぬものであり、噂はすぐに町中に広まった。それが実際に行なわれたこと知つて町の者らは驚き、

さらに行つたものは若い青年とも思える風貌をした男だということに再度驚いた。

中にはそれが『遊びの仁』だということに驚きを隠せぬ者も居た（特に大陸の音をよく聞く商人たちや兵士たちがそうである）。

これをもてなすことは近頃落ち込み気味だった町を俄（にわ）かに活気だたせ、

なおかつこれを機に財布の紐を緩めるものがあるのかもしれない。

前者は主に町の者達が、後者は商人を中心としたものたちが互いの利害を一致させ、

この町の宿でも中の上の位置に値する場所にて宴会を開いたのである。

主役の仁ノ助は飲み食いが初日に限つて食事代・酒代・宿代がタダ、助演の女性は酒代・宿代のみタダということとで落ち着くことに、自分達の懐が寂しい民衆の金銭に対する熱い心が見えている。

そんな中で開かれた宴会には二人の予想を反して、一介の町人らが用意できるとは思わない中々に見事な料理が出てきた。

それを見た感想の一つが先ほどの台詞であることは、しっくりくるるところである。

「ハフツハフツ・・・信じられないわぁ・・・ズズツ・・・」
「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

再度女性の口から毀れだした同じ台詞に、仁ノ助と料理を作る主人は信じられないような目を向ける。よくよく考えればその台詞は正しいかもしれない。

仁ノ助はただ一人で馬中の敵の中へ飛び込んで、うち三人を馬上にて殺したのである。

その結果もさることながら、過程にいたってはまさに信じられないの一言に尽きる。

疾走する馬の足をすれ違いざまに斬り払い、迫ってくる馬上の敵へ跳躍して剣を突き刺し、

さらには馬同士で交差する瞬間にもう一人を殺す。

彼にとつては長年の経験から考えるの『たったこれだけのこと』であるが、

はつきりいつて無茶苦茶な所業である。

一般的な兵士はそもそも飛ばない。というよりも、馬上の敵と正面きって対峙することのほうがよっぽどおかしい。

何よりも賞賛されるべきなのは、怪我一つも負っていないということだ。

油断一瞬怪我一生ともいうように、僅かな怪我から死に至ることだつて十分にある。

特にこの時代は医療の発展があまりされてなく、

怪我や病を負えば現代でいうところの漢方を飲ませるのが普通だった。

もしも矢傷を負ってしまえば、それが原因で破傷風にかかってしまい死に至ることも、

この時代の医療レベルを考えれば一般的なことであった。

『経路』という目には見えないルートが全身をめぐるって気や水や血の流れを司っている。

これが滞ることこそ、すなわち不健康の象徴なのである。

『中国医術の基本的考えは、悪いところを取り除くことや症状を抑えることではなく、身体のバランスと保つことである』という、

陰陽五行論より発展された考えがここに現れている。

そんな中で無傷で戦いを切り抜けた男が居れば、

さぞ信じがたいことであることは疑いようがない。

女性はうんうんと頷いて、目の前の食机に置かれたラーメンに自己の姿を認めた。

スープの表面はほどよく入り交ざったメンマが散らばり、

チャーシューはよく焼かれてスープに麺とよく絡むような肉脂を注いでいる。

主演の一つである麺は先ほど味わったところ、

スープの出汁をよく吸い込んでいるのが分かり、

一口二口を噛み締めるほどに口の中に言葉にいえない満足感を広げる。

チャーシューと共にかきこめば、肉の旨みが麺のこしと非常によくマッチし、

この世の天国を脳の中枢に思い描かせる。

噛めば噛むほどに旨みが広がる味わい、

これを知らぬ者ほど世で悲しいものはいない、彼女にそう思わせるほどに十分なくらいであった。

極み付けはもう一つの主演であるスープだ。

否、真の主役ともいうべきだろうか。

わざわざ貴重な鶏を卸して出汁をとり、葱やしょうがを入れてさらに独特の味わいを作る。

口腔に広がる暖かでこったり、それでいてキツくないスープ。

汁に浮かんだ刻み葱がスープの味を飽きさせることを許さない。

口に含めば誰もが必ずや目を見開くことであろう。

次いでその完璧な味に頬を緩ませることであろう。

女性もその類をもれず、スープをみつめて目尻と頬が緩んでいき、

昼間のそれとは全く相反するだらしない表情を作った。

「またこれを飲めることになるうとは、私は世界一の果報者であるに相違ない。」ともいうように、

女性はラーメンが入った器を手にする前に一瞬間を置き、

考え改めたか手に箸を握り締めた。

スープだけでは腹が満たない、合間合間に麺を食べることも忘れてはならない。

女性は新たな標的に目を光らせ、思わずつぶやいてしまう。

「信じられないわぁ……………」

「それはこっちの台詞だ！！！！」

弾かれるように仁ノ助は椅子から立ち上がって改心のつつこみを口に出す。

店の主人はうんうんと首を頷かしていることから、

つつこみたいことはこちらにとっても同じらしい。

女性は至上の喜びを味わう行為を邪魔をされたことに目をぱちくりとさせながら、

店主を見つめ次いで仁ノ助の方を見つめた。

数瞬ののち、頬が緩みが解かれて目には困惑の色を浮かべた。

「……………もしかして、麺が真の主役だった？」

「そこが聞きたいんじゃないんで、こつちがつつこみたいのはお前の食う量だ!!!」

思わず自らが食した料理の数々を脳裏に想起し、

それが盛られていた皿がタワーのように積み重なっていることを思い出し、

そちらへゆっくりと目をやった。

皿の数は種類を問わず大小含めて優に十五は下らないだろう。

積み重ねられたそれは見事なバランスを保って机に鎮座している。

自らの戦果を誇るかのように鼻を鳴らして、自信満々に再度仁ノ助を見た。

「こんなのまだまだ序の口よ。」

「頼むからそろそろやめてください。お願いします、詩花様^{シイファ}。」

先も説明したが、彼女の食事代は自腹である。

二人で食べている立場上、料金の請求先に自分も含まれていることは明らか。

もうこれ以上食べられたら生活必需品すら買えない。

椅子から立ち上がり頭を垂れて腰をほぼ90度に曲げる彼を見て、自信気に満ちた顔に苦笑いを浮かべる彼女の名は錐琳^{すいりん}、真名は詩花^{シイファ}という。

先ほどの戦いに感謝の意を伝えた彼女に対し、

「当然のことをしただけです。それよりも貴方が無事で何よりも良かった。」と返した仁ノ助に、

謙虚な心を見出した彼女はいたく感動し、

自らの真名をあっさりと言ったのである。

当然そのあまりに軽い動悸に驚いて受け取れないと断ったが、

斬り捨てた賊共の攻勢が馬鹿馬鹿しく思えるほどの熱意で迫られ、不承不承という感じに受け取ってしまった。

「この女は放っておくと行く先々で変事に巻き込まれそうだ」という、

この時確信した思いを彼は後年親友に打ち明けている。なんやかんやで食事を交えながら話をするうちに、口調から丁寧さが取れて地が出てくるまでに仲が良くなった二人は、店の主人から振舞われる料理に舌鼓を打っていたのである。

(にしても、近くで見ると遠くで見るとはぜんぜん違うな。)

頭を上げて椅子に座りなおす彼は、

またラーメンに視線を注いで目を輝かせ、

口のか端からよだれがこぼれんばかりににやつく彼女を再度しつかりと見つめる。

目元は柔らかな性格を携えるが如く作られており、

今デレデレとしている眉は平時のときでは穏やかなカーブを描き、戦時には凜とした目つきを支えることを彼は両方とも知っている。

目は大きく可愛らしい印象を十全に表し、

鼻立ちもよく整っており美しさを欠かすことをない。

赤い髪は全体的にショートカットに切られており、

ボーイッシュでありながら自らの可憐さを強調している。

町を歩けば十人中八人は彼女を見つめなおすであろう、

そんな優れた容姿の者の特権を持つ一人が彼女であった。

ラーメンをかき込む姿すら思わず可愛いとも思えてしまう自分に呆れながら、

仁ノ助は目を頭上にやって自分の財布の重みを思い出そうとしていた。

「んじゃ、今は一人旅の途中ってわけなんだ……。ふん、てつきり仕官先を探して大陸を歩き回っているかと思っただわ。」
「仕官は確かに考えているけど、それはまだまだ先の話だな。今は旅すから大陸の情報収集を中心としているよ。」

宴が終わって夜が更けて月の光が真上から差し込もうとするころに、二人は体験談を交えた昔話をして退屈を紛らわせていた。

二人は既に着心地の良い寝間着に着替えており（無論互いが着替えるところを見せても見ても見えない）、仁ノ助は詩花のその姿を見てスタイルのよさに目が奪われた。

世の男共が必ずその手に抱きたくなるであろう、特別大きくはないがそれでも豊かといえる胸に目がいつてしまう。

腹部と腰が鍛えられて引き締まっており、胸の大きさを控えめに強調している。

臀部（でんぶ）は肉付きがよく引き締まり、女性達がうらやむ色気を見事に出している。

普段着の活発さの印象が強かったために、寝台に横たわる彼女から発せられる大人の色気が逆に新鮮であり、豊満な肉体を意識しないように努めようとする。

彼にとつて不運なのは宿主の粹な計らいによつて同部屋となったことだ。

しかも大きめな寝台が一つだけである（詩花は無邪気に喜んでいた）。

「遊び人なら据え膳も食つちまえ」とニヤつきながら去っていった主人と、

彼女の秘密の色気を知らなかった自分に思わずいらつとしていた仁ノ助は、

自らの緊張を紛らわせるかのように自分の体験談を面白可笑しく語っている。

この男は遊びの何とかといわれている癖して、未だにCherry BOYな一面を持ち合わせている。そんな仁ノ助の助平な葛藤を全く知らず、詩花は男の話を表情を二転三転変えながら興味深く聞いている。男の生々しい戦いの経験を聞けば顔を顰（しか）めて、英雄もかくやといわんばかりの冒険譚を聞けばわくわくと続きをせがみ、食事代を払えずに皿洗いと店掃除をした情けない過去を聞けば間抜けな人だといわんばかりに腹を抱えて笑う。彼女との話は延々と続くかと思っただが一つの疑問が仁ノ助に湧いて出た。

「そっぴゃ話は俺ばっかりしてたな。次は詩花の話が聞きたい。」
自分ばかりの話では流石にネタも尽きてくる。
会話が途切れてしまえば後は寝るだけになってしまう。
それを避けるために、話す主体を入れ替えることにした。
突然昔話をする羽目となった詩花は、「あー・・・」と言いながら
気まずそうに頭を掻いている。
何やら彼女の虫にさわるようなことを言ってしまったらしい、
そう思っただ仁ノ助は若干慌てながら会話を続ける。

「あ、いや、別に無理に聞こうってわけじゃないんだ。ただ俺ばかり話すと飽き・・・の。」きて・・・え？」
言い訳に被せられた詩花の言葉に疑問符がついた言葉が漏れ出す。

「えっと・・・今なんて？」
「・・・出なの。」

言い直した彼女の頬が若干の羞恥心を帯びて赤くなる。目は仁ノ助を方を見つめようとせず右側を向いて泳いでいる。それでも完全に言葉を理解するには彼女の言葉は小さすぎた。改めて言ってもらおうともう一度願いを口に出す。

「今・・・なんて？」

「いいいいいい、家出なの！！！！！！！！！！」

完全に熟れた果実のように赤くなった顔を強調するように目を閉じた彼女は、

思わず部屋中に広がるように叫んでしまう。

羞恥心で心も頭もいっぱいいっぱいになり、

嗚呼嗚呼と訳の分からぬ言葉を口に出しながら枕に顔を埋（うず）め始める。

仁ノ助は二の言葉も継げず呆然としてしまう。

昼間、あんなに一生懸命だったのは家出が最終原因？

思わず肩の力が抜けてしまい、ため息が漏れそうになる。

しかし漏らしてしまったら最後、彼女にさらなる恥をかかせることになってしまう。

それは幾らなんでも酷な話となる、そう思い励ますような口調で話しかける。

しかし口に出してしまったのは励ましの言葉ではなく好奇心であった。

「・・・・・・・・・・訳を聞いてもいいかな？」

「・・・・・・・・・・あたしの家、小さい商家なの。」

彼女が枕に顔を埋めながら言葉をこぼす。

訳ありのようである思い出話を話してくれる勇氣に感謝の念が湧く。

「しょっちゅう金のことばかり考えて口に出す父上に苛立って、あ

る日家を飛び出して、それっきり町を転々として食いつないできたの。」

「……………うん。」

「……………でも何処に言っても寂しくて、やっぱり帰ろうかなって思ったの。んで、帰る前にもう一度自分の勇気を試そうかなって思っ……………」

「あいつらに襲われた？」

「そう。」

深いため息が詩花の口から出される。事態は思ったよりも深刻だ。父上は確かに自らの家族のために働いているのである。

しかし彼女の目にはそれが人に媚びへつらって頭を下げる、情けなさとな甲斐なさに映ってしまった。

自分に目を向けるときには、愛情ではなく金を媒介にして見つめていた。

ありのままの自分が父親の目に映っていないと思ってしまった彼女は、

嫌気がさしてこのような事を起こしたのである。

今更帰ることは彼女の思いを無駄にするようでもあるが、父親が彼女の行方を捜しているとしたらそれもまた心配である。

仁ノ助は思わずそう一方的に悩む。

自分が思っていることが決して他人が思っていることと同じではないが、しかし一度情報を他者と共有すると他人も同じ事を思っているかのような思考に陥りやすいのが人間だ。

彼はあえて言葉を口にせず彼女の独白を待った。

やがて彼女がまたため息と共に言葉をつむぐ。

「……………あいつらは初めはあたしが乗っていた金毘（きんび）、愛馬の名前）に目をつけて、次にあたしの体のほうに目をつけたの。

気持ち悪い顔でにやついてきて、怖くなって金毘を思い切り走らせ

て逃げたら追いかけてきて……」

「そして町につく手前ところで、俺と出会ったと。」

詩花はその時の賊の笑みを思い出すだけで不快なのであろう、不快感と怒りがない交ぜとなった雰囲気彼女から発せられる。

彼女にとっての幸運は賊どもが乗っていた馬は駄馬だということ、愛馬は足の速さは良馬と比べれば劣るが体力はそれ以上にあること、賊共のいづれもが騎射ができる腕前ではなかったこと、

そして賊共が彼女の追跡を中断する強い理由が存在したことだ。

もしもいづれ一つの理由が欠けていれば、

彼女の身の安全が危険にさらされる可能性が著しく上昇していたであらう。

この時代を生きるには実力以上に運も重要であることが如実にわかる。

先ほどまで部屋の中に存在した暖かな空気が沈黙によって床に沈溺する。

今空間を占めているのは気まずげな重い空気。

次に何を話したらいいかわからぬ仁ノ助は、

彼女に顔を見られていないことをいいことに、

顔をはつきりと曇らせて唸りながら新たな話草を探している。

対する詩花も自分の話が終わったことを沈黙によって意思表示している。

やがて彼は何も思いつかなかったのか、

不自然な口調で始まりながら話題を強引にを転換した。

「……そ、そういうえば、俺明日にでも買い物を買わせて、明後日の朝には町を出ようと思っっているんだ。」

「……」

「……ええっと、商人の人達に旅で得た小道具やら情報やらを売り買いしてな、衣服とか武器とかを新調するのが予定なんだ。」

身振り手振りおどおどしながら彼が話していく。
彼の歴史を振り返るに、ここ半年は洛陽からほぼ真東、
徐州刺史陶謙が治める地より西の方へと向かってゆっくりと歩みを
進めてきた。

途中途中の町村で日雇いの仕事や短期の荒事を中心に金稼ぎを行っ
ていき、
また人の依頼にしっかりと付き合ったりしながら時を重ねてきたの
だ。

このような拙速な行動をしてきたのは彼の知識にあるある出来事こ
とが思い当たったためでもある。

昨年の夏の終わり（旧暦6月）のころに、
日南郡南方諸国から使者が皇帝の下へと参上し、
洛陽にて饗応（きょうおう）がされたとのことが商人らから明らか
となったのだ。

覚えていることが未だ正確であれば、
あと一月もしないうちに太平道大方の地衣にある、
馬元義が中常侍の封？・徐奉らと内応するも教団内部からの密告で
事が露見し洛陽内で車裂きの刑に処されるはず。

同時に綿密な取り調べにより張角の道術を行っていた者千人以上が
処刑され、

さらに張角に対する拿捕命令が下され、
これに対して張角は予定していたより一月早い二月に決起をするの
だ。

この一連の動きによって遂に『黄巾の乱』が起こされて、
中原全土に戦禍が広がり次の重要な出来事である、
対董卓連合軍結成の下地が出来上がる。

自らがこの乱世の中心に飛び込む気は大して無いが、
それでも現代にまで伝わる三国時代の幕開け、

そして決して滅びない数々のドラマを生んできた英傑たちとの邂逅、
図らずともこの渦中に自分が参加できるまたとない機会であること
は明白である。

仁ノ助の内心は戦禍を憎む気持ちよりも、

それらに対する憧憬や好奇心を中心とした興奮が占めていた。

「もしかしたら自分が彼らのような大人物となるかもしれない、

はたまた彼らの下となって戦うことになるのも悪くは無い。

それ以上にこの時代を自分の力で生き抜きたい。」

これらのことが彼の脳裏を強く占められており、

彼が『遊びの仁』となるまでに活躍してきた最大の理由でもあった。

その彼の心を未だ知らずに枕に顔をうずめる詩花。

彼が自分の予定をあーだこーだいううちに、

彼女を覆う雰囲気から棘がとれてくるのが感じられた。

ひよっとしたら先ほどの不快感が消え去って、自分の話にまた耳を
傾けているのか。

（よし！これで大丈夫！）

彼は安堵感を胸に自らの話を続けようとするが、

その彼の健気な意思をなにかの健やかな息が挫いた。

不意を打たれたように口を動かそうとするのを止めて、首を傾げて
詩花の方を見る。

顔は枕にうずめることをようやくやめて横を向いている。

胸が健康であることを示すように呼吸音とともに上下に動いている。

自分の疲れを癒すために口から幸せそうな息が洩れる。

（あれ？）

頭にわいた疑問を解消するために寝台に横たわる彼女の表情を確か

めることを顔を覗き込む。

そしてそれを確かめると頭に片手を置いて思わずため息を出した。詩花は既に寝息を立てていたのだ。

安心しきって気持ち良さ気に眠る彼女を起こすような邪推な真似をする気は毛頭無かった。

色々な町を回ってきて路銀を稼いできても、今日のように暴漢達に命からがら追われる事は惹起してこようとしなかったのである。体の内にはぬぐいがたい疲労が鬱積し、それが今不快感とと共に吐き出されて眠気がきたのだ。

(まあ、別にいいか。)

疲れている体をゆっくりと休めることもまた喜びの一つである。

今は静かにして置いてあげよう。

そう思った仁ノ助は彼女が眠る姿を見て頬を緩める。

今日一日で驚くくらいに色々な姿を見てきた気がするが、

今の姿は案外彼女に一番似合っているのかもしれない

。何をするわけでもなく、ただぼおつと体を伸ばして羽を広げる姿。乱世に向かつて飛び込むには今少し時を過ごしてより成長する必要があるだろう。

彼女に風邪を引かないように布団をかけ直す。

少しも身じろぎしないことからぐっすりと眠っていることがわかる。そこまでのことをして、ふと肝心なことを思い出した。

(……食事代、明日払うことになっていたんだっけ……)

宴の食事代だけで既に彼の持ち合わせている金銭を軽くオーバーしている。

商人と売買行為を行ってもひよっとしたら足りないなんてこともあ

りうるかも。

思わぬ頭痛を覚えてしまった彼は恨めしげに詩花を見るが、自然と怒る気がしてこなかった。

むしろ彼女の今後の行動が心配につてきている。

目を僅かに覆う髪の毛を掻き揚げてやると、

彼女は少しみじろぎをした後に口元が僅かに和んだ。

よく眠るものだと感心しながら、彼は彼女に背を向ける形で寝台に横になった。

無防備に眠っている女性を襲う趣味は彼には無いが、

それでも自分の後ろに可憐とも美麗ともいえる女性がいることにドギマギとする。

今夜は熟睡するのに一苦労しそうだ。

月の黄色い光が部屋の中を煌かせる中で静かに寝息を立て、集中して眠る努力を始めた。

天下を襲う津波は未だ彼らを飲み込んではいない。

第一章：大地を見渡すこと その四

「……」仁君、そっちの箱持って。「はいよー。」
初めにこの古びれた蔵の中に入ったとき、中は埃と煤にまみれていた。

その中にある一つ一つの物が歴史を刻んだ後を残している。
遙か昔、およそ二千年前からのものすらこの中にあるはあるというのだから、緊張しないわけが無い。大学で東洋史を専攻する仁ノ助は、ただ三国志が好きただけの一般的な学生ではあったが、スポーツで鍛え上げたスリムで引き締まった体が老年の教授の目に偶然とまり、

助教授の人と共に荷物運びを手伝わされる羽目となったのだ。

助教授は役職の割には若く、

三十後半にもなるうかというのに年齢を感じさせない若々しさと砕けた態度が仁ノ助の緊張を解し、

教授がいない時だけため口をきいても良いと気を利かせてくれた。

博物館の特別展覧会、「三国時代を語る秘宝」と銘打った展覧会は日本各地の歴史愛好家を中心として大いに繁盛し、

これの招致と周知に役を務めた老教授は鼻が高そうにしながら仕事内容を伝えた。

曰く、中国本土から持ってきたものは実は余り無いとの事。

曰く、日本各地にこれらの展示品を保管している場所があるとの事。

曰く、そのうちの数箇所は大学の近辺にあるが小物を多く扱っているから信頼できる人に運搬を任せたいとの事。

「よって、君は助教授と共にこれを手伝ってくれたまえ。君も好きなんだろう？」上機嫌に言う教授の言葉に乗り、

彼は自分の好奇心を十全に満たそうとしながら荷物運搬をし、
今最後の蔵の中で作業をしている。

ゆっくりと箱を積み上げられた箱の上に置く。

ここまでの作業は神経を磨り減らすような事が作業の割にはなく、体力は未だ残ったままである。

「おし……これでおしまい、と。手伝いありがとうね、仁君。」

「いえいえ、こつちも楽しませていただきました。」

互いの労をねぎらって笑顔を浮かべて言葉を述べる。

「んじゃ僕はトラックを返しに行くけど、君はどうする？ここからだ家には近いんでしょ？だったら

このまま帰ってもいいんだよ？」

「本当ですか？それじゃお言葉に甘えちゃおうかな。」

意外にももたらされた言葉に驚き、そ

して助教授の心遣いに甘える形でそれに応えた。

今日は久々に良い日となったなあ、明日から祝日を挟んだ三連休だしゆっくりしようかなあ。

彼は明日から始まる連休に胸を躍らせて蔵の外へと出る。

まだ時間は午後4時を回ったあたりである。

よく晴れた日差しは夕焼け前にも関わらず強く輝いている。

「あ、ちよつと待つて。」

助教授がトラックの運転席のドアに手をつけたときに、何か思い出したのか素早く蔵の脇に駆け寄って何かを探っている。

そして見つけたそれを両手で持って仁ノ助の方へ歩み寄った。

小さい年代物の木箱であり、B5サイズほどの大きさをしている。

「これなんですか？」

「教授がさあ、これどこから借りてきたのかわからないっていつて

さあ。んで片っ端から帳簿を調べただけど、これに関する情報がどこからも見つからなくてね。もしかしたら何か別の資料が紛れ込んだのかなって。」

そこまでいうと溜息交じりの言葉を紡ぎ始める。

「現地でもう一回帳簿調べながら作業して来いっていつて調べなおしたんだけど、やっぱりなくてね。完全に別物の資料みたい。」

「それで、どうするんですかこれ。」

「教授がいうに、探すまでに時間がかかりそうだからそれまではこちらが保管していてもいいだろうって。んでその管理を僕が担ったんだよね。」

「ほー……。んじゃ態々自分に向かってこれを差し出してるってことは？」

にやりと笑う助教授、悪戯を思いついた顔をしている。

「本当は絶対駄目だけどさ、この連休の間だけならこれ君に貸してもいいよ。」

「マジですか！？あ、あの、中身をみてもいいんですよね！？」

「どうぞどうぞ。ただし絶対に傷はつけないでよね。あ、ここで開けてもいいよ。」

その言葉に乗じて仁ノ助は自分の興奮を殺しながら慎重に箱のふたをあける。

中に入っていたのは、祭礼用のものであるうか、

額縁が儼かな印象をたたえている、一枚の鏡であった――――。

「ふあああ……………」

随分と懐かしい夢を見た。彼が最後に日本に居た日の出来事、

この大陸に足を踏み入れた最初の日の出来事であった。

(あの後自宅で鏡を持ちながら陶醉していたら、急に光に包まれてこの大陸にいたんだよな。)

まどろむ頭の中で若き日の自分を思い出す。

まだあの頃は全ての人間に一途な希望を抱いていたんだ。

裏切りをされてもすぐに許してしまうお人よしだったことが懐かしい。

徐々に眠気が醒めてきて視界がはつきりする。

一度眠りから醒めてしまつとすぐに眠気が雲散霧消する癖がついているのは、

二度寝している間に敵の刃にかかって死んだ友人を思い出したからだ。

痛みは無かつたであろうが、

抵抗も出来ずに死んでしまったことがさぞ無念であつたらう。

彼のようにならないためにこの癖を意識して作るうとした結果が今のそれだつた。

まだ鶏が鳴く時間でもない。

思わぬくらい随分と朝早くに目が覚めてしまつたらしい。

窓から差す光は部屋の中を夜明けの赤が僅かに色をつけている。

目の焦点を合わせて視覚になんら支障がないことを確認すると、

わずかに臭覚を刺激する甘い香りを認識してそれが漂う方向へ頭を向けた。

詩花がぐっすりとなぜか向かい合う形で眠っている。

ご丁寧なことに一見すると抱き合つて眠っているかのようだ。

彼女の健やかな眠りは安寧をたたえており、まだ一刻は目覚めそうも無い。

早起きは三文の徳というが、

彼女の寝顔をしわが数えられるくらいに近くで見られることは三両の得といったところである。

口元が緩んで髪の毛を昨日の夜にやったようにゆっくりと掻き揚げ
てやる。

「役得、役得」と小さく呟きながら髪掻き揚げる男の心には
自分自身もわからない妙な胸の高まりが生まれ始めたことにまだ氣
づいていない。

「おっし、これで準備万端っていったところね。」

「・・・・・・・・・・。」

刻はあれから五つ半ほど過ぎたあたりか。

一日かけた商品売買と情報売買は功を奏して、
必要な品を買っただけでもかなりのお釣りがもらえたのは僥倖であ
る。

これならこれまで控えてきた服の新調だつてできるかもしれない。
仁ノ助の懐にとって嬉しい出来事が立て続けにおきているのだが、
彼の表情から憂鬱な疲れの色が見え隠れしている

町の通りを歩いて町人達とすれ違つ度に「噂の二人はこの者たちな
りや？」と、

興味津々な目で見つめられるのは若干肩がむずむじしてきて億劫（
おっくう）だ。

そつでなくも二人で買い物をする羽目になった経緯を思い出すこと
も頭を抱える要素となっている。

先ほどまで痛んでいた腹を押さえてこうなつた原因が頭を過ぎるの
を彼はうんざりしながら思い出した。

.....

朝、あれから彼女が起きるまで窓の外をぼんやりと見つめていたら、いきなり腹の真上を強い衝撃が走り自分の体が寝台の外へ弾き飛ばされた。

鍛え抜かれた体でも突然の痛みを発する、「おおおお・・・」と唸りながら仁ノ助は寝台の上に拳を繰り出して膝立ちとなっている阿修羅の姿を垣間見た。

顔が赤くなっているそれは自らの武勇を誇っている。

見事な正拳で男の体を吹き飛ばしたそれは拳だけなら天下を取れるのかもしれない。

ポーズを決めるように息を荒げて佇む姿は絵になって「なにしてんのあんた！！！！」・・・いなかった。

阿修羅と思われたそれは全くの別人であり、実際は寝起きの詩花である。

ただ寝起きという割には顔から眠気が白い湯気となってぶつとんでいる。

男に無防備な寝顔を見られたことを意識する前に、

起きたらなぜか男の顔が目の前にあったことに思わず驚いたが故にこのような怒りの拳を繰り出したのであろう。

そしてその後、前者を意識して乙女の羞恥心を覚えたのである。

顔の赤みは気恥ずかしさに頬を染め上げて、

耳も若干の恥ずかしさを覚えているのが彼女の短髪から見え隠れしている。

大きな胸が荒い息と共に上下し、先ほどの動きで寝間着が着崩れて服の間から胸の谷間と健康なへそが目に入る。

寝汗とは別の汗が胸の上の肌をつつと流れているのを凝視している
と、

彼女はそれを察して素早く両手で胸を抱いて隠す。

その姿が余計に色っぽく感じられて、男の息子がようやく欠伸をしながらもたげ始めた。

未だに大陸に来てから女性を味わっていないそれは目の前にある果実を前に我慢をする気など到底無かつたらしい。

仁ノ助が勃起し初めたそれを隠す前に、詩花は目敏くそれを見つけてしまった。

顔には別の意味の赤みが増してきており、

若干開けられた口からはどうしようもない怒りが毀れ始めている。

それを発するが如く彼女は寝台の上から飛び上がった、

地面に倒れて腹を押さえる仁ノ助に向かって見事な蹴りを繰り出した。
てきた。

「こんのお・・・色ボケエエエエ!!!」

「イヤアアアアアア!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「まあ、あれは仕方ないわよね。あんたも男だっということ完璧に忘れてたわ。」

「だからといって蹴りまでいれ・・・はい、いれますねごめんなさい。ですのでそれはやめて下さい。」

花のような可憐な笑顔で拳を構える詩花に仁ノ助は頭を下げて懇願する。

彼女は過ぎたことを煮え返す性はなかったのか、

笑顔たたえたまま拳を解いて彼の隣を歩く。

しかし彼にとってはあれを過ぎたこととするにはまず痛覚を遮断することが前提である。

ズキズキと痛む腹は彼女が拳だけでなく蹴りにおいても日々研鑽していたことを否が応でも伝えてくる。

頭を上げて彼女を見遣りながら彼は歩みを止めずに話しかける。

「で、なんでついでくるの?」

今彼は明日の出立に備えて街中で買い物をする最中である。

本来なら彼女と一緒にいてくる必要も無いわけだが、

夜寝る間に予定を話してしまった手前、

一応ついてくる権利は彼女にもあるわけだが、念のためその訳をきいてみた。

「うーんと、あれから考えたのよねえ……………」

宙を見据えてあごに手をやって考える姿も中々にさまになっている。目を閉じて顔の笑みをそのままにしている。

「色々これからどうしようか考えたのよ。それで、『冒険譚のつくらないきや家に帰れない』って思ったの。」

「なんでそうなるの!普通真っ直ぐ家に帰ったりするでしょ!??」

「あたしはそう思わないの。んでね……………」

彼の突込みをあっさりと受け流して彼女は閉じた目を若干開けて見つめてきた。

悪戯めいた光が漏れ出しているのを察してイヤな予感が背筋を走る。

「あなたについていったら、正に渡りに船かなくなって考え付いたの。だからこれからよろしくね。」

「……………えー。」

半ば予想していたことが案の定その通りだったことにやっぱりといった気持ちとなる。

自分の買い物についてくる彼女はこれからの仁ノ助の旅に同行する気持ちで付き合っているのだ。

実家から飛び出して町を転々として、さらに見知らぬ男について旅を続ける。

正直彼にはそれが無謀なことだと思った。

これから先、先ず最初に彼がすることといえは黄布の乱に備えて十分な準備を整えて、

その後皇帝からの命を受けて戦に望む諸侯のうちいずれかの軍隊に志願することである。

そして彼はその志願先を既に見据えていた。

洛陽のすぐ東にある潁川えいせんにて歴史的な邂逅を果たす二人の王、劉備玄德と曹操孟徳である。

前者はまさに王道を行く者、正史では行く先々で狸つぶりを見せ付けて危険を察するとすぐさまに逃げ出して、最後には蜀を建国するまでに生きおおせる男である。

後者は覇道を行く者、正史・演技問わずその王才をどの場面でも発揮し、後世には彼は軍人・政治家・詩人として名高いほど。人間チート乙である。

全く相容れぬ天に愛された両者であるが、そうであるが故に天下三分のうち二分を担うのである。

彼らの元へ行くという事はすなわち、群雄割拠の世を生き抜くために戦乱を通じて血飛沫と断末魔が絶え間ない世界に足を踏み入れることである。

仁ノ助はある程度は可能かもしれないが、この女性にはどうみたって不可能である。

そう断じるも『彼女は「やっぱり帰ります」とはいかないだろう。』
という確信のもと、諦めつつも問うてみる。

「それを選んだ理由は？」

「いざとなったら守ってくれる人を、あんた以外知らないから。勿

論足を引つ張らないようにして、自分の身を守るように強くなるわよ！こうみえても武術には一応自信があるし！ただあの時はそれを持ってなかっただけで・・・」

「はいはい、分かりました。どうぞ私めに付いてきていただけませんか、お嬢様。」

彼女の長つたらしい言い訳を聞く気にもなれず、

若干ノロケにも聞こえた理由を聞き流して諦めの境地で話し、買い物続けるために足を速めた。

詩花は一瞬立ち止まって、

自分の願いがあっさりと言った事に喜んで軽くその場で小躍りするようにステップを刻み、腕でガッツポーズを決める。

そして嬉しさをそのままに彼の隣に駆け寄って肘の下辺りを掴んだ。

「ほら！そうと決まればさっさと行くわよ！！」

「おい焦るな！！そっちじゃない！！」

駆け足に走る彼女にひきずられそうになりながら慌てて彼も足を合わせ、

間違つた道へ入ろうとする彼女を止めようと叫んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

以下彼の奮闘をいくつか抜粋する。

「ねえねえ、この綺麗な宝石なに！？触ってもいい！？」

「お嬢様は御目が高くていらっしゃる。これはかの桓帝が側近の娘がご愛用申し上げられた由緒正しき宝玉でございます・・・」

「

「そうなの！？余計触りたくなるじゃない！！！」

「そんな豪華なもんがこんなとこに売ってるわけ無いだろ！！つか触るな！！いじるな！！！！！」

「この鞍いいなあ、金毘（詩花の愛馬）のためにこれ買ってもいいよね？」

「今の鞍だつて十分に良いものでしょうが。あれかなり精巧な木製のやつでしょ。なんで小さな商家のお前がもってるの？」

「家出するときに奪ってきちゃった。てへ」

「お前、実は人の恨みをかなり買うタチじゃないか・・・？」

「お腹減ったねえ、あの店の餃子おいしそうだなあ。あ、その店のラーメンもいい匂いがするなあ。あ！炒飯もまたいいパラパラ加減だあ。」

「YAMETE！！俺の財産の生命力はとくにゼロよ！！！！！」
「・・・ぜろつてなに？（注：この時代の中原には『ゼロ』という数的概念がありません）」

.....

痛かった。なにが痛かったって食費でございます。

仁ノ助の顔が痛みと裏腹に大して曇っていないのは、

午後の情報売買である程度路銀の稼げたからであろう。

後は最後に回る予定となっている鍛冶屋だけだ。

昨日の戦いでは既に使っていた刀は賊の体から抜けなくなっており、賊から奪った刀はいずれも鈍（なまく）らもいいところであった。

油脂はすっかり錆びた鉄にこびり付いていて実践には使い物にならなかったため、

刃をつぶして町の衛兵に寄付をした。

あれならば練習用の刀の代替わりとなるに十分であったのか、衛兵は使えるものはなんでも使うとばかりに快くそれをもらってくれた。

その後開かれた宴に酒が入る前に武器屋の敵つい親父がこちらに近寄って話しかけてきた。曰く、あんたに見合いそうな武器を数本持っているから暇があつたら取りにこい。

どのような武器が手に入るかわくわくとするべきなのだが、なにぶん出費が思ったより嵩（かさ）んでおり気がまいち乗ってこない。

詩花はそんな彼の憂鬱を吹き飛ばすようにわくわくと笑みをたたえながら機嫌よく歩いていく。

「武器かあ……………（チラツ）。あたしも一本欲しいなあ……………（チラツ）。」

「……………一本くらいなら買ってやるから、ちらちらしないの。」

「やった！その言葉信じるからね！！ん〜、出来るなら細剣が欲しいけどすぐ壊れそうだからなあ……………。持つんなら剣はやめて戟にしようかな……………。」

喜びながら自分が持つことになるまだ見ぬ武器に思いをはせる彼女を見て、

開き直つたのか憂鬱な表情は軽い溜息と共に宙へ消え去った。

深く悩まずに現実を受け入れる彼の性格はポジティブシンキングともいってよいのか、または何事にも軽い男というべきなのか。

彼もまた自分に用意されているはずの武器達に思いをはせ、どのような物を持つとか思考をめぐらせている。

剣は既に刀にとってかわられて既に儀式用のものしか見られなくなっている。

双手剣は刀の形状によるが、不可能に近いがもし持てるならクレイ

モアに似た剣が持つてみたい。

刀は刀身が真っ直ぐな直刀が多いが刺すだけでは昨日のようになる、もし持てるなら反りがある呉鉤（ごこう）があればいいなあ。

あと短刀か投げナイフ。

鉞一（えつ、まさかり）は使いにくくて流石に無理だな。

そうこう考えているうちに目的の場所に着いた。

入り口からは中で何かを叩いている音が聞こえてきた。

鍛冶屋の主人が手薬煉（てぐすね）こまねいて自らの職を全うしているに違いない。

二人は互いを見つめ頷きあうと、いざ鍛冶屋の中へと入っていく。

外からの風が入ってくるのを気配で察した主人は、

手に持っていたハンマーに似た形状をしているとんかちに似たような物を置いてこちらを見ずに話しかける。

「機能の嬢ちゃんも一緒か、んじゃ早速見てくれや。俺は回りくどいのは嫌いなんでな。」

「助かります。では早速武器を見させていただきます。」

親父は仁ノ助の言葉にうんうんと返事をして、

奥にある部屋へと武器を取りに行った。

二人は早速どんな武器が出るか呟きあう。

「何だと思う？直刀は必ず出ると思うが。」

「あなたに似合うっていったじゃない。他の男共より背が高いし力もあるんだから、戟か槍じゃない？」

「まあ出来れば槍がいいな。お前はどつする？何か目ぼしい物があるか？」

「うーん、もうちょい探してみるね。ありがと。」

「おい聞こえてるぜ。俺は地獄耳でもあるんだよ。」

奥から戻ってきた親父にギクリとし弁明の言葉を紡ごうとしたが、それを遮るように現れた親父が抱えている思いもよらなかった武器に目を奪われる。

二振りの剣と一つの戟がそこにはあった。

一つは彼が望んでいたがこの時代にあると思ひもしなかった武器、クレイモア・・・の中原版であった。

刃の切れ味と取りわしが良い機動性、

これを生かした攻撃『カット・アンド・スラスト』を使って16世紀前後から欧州の戦争で活躍した武器であり、

著名な使用者としてはスコットランドの英雄であるウィリアム・ウォーレスなどがある。

広刃でなんら彩色が施されていない無機質さを保っており、

十字型の柄がとても印象的に目に映る。

この時代の人に合わせて作られたか、

柄を含めた長さは四尺五寸（135センチメートル）くらいで、一見すると重量は2キロくらいか。

しかしこれでも重量級の鎧を着た相手であつても十分だ。

これを持って戦場に行けば猛者たちの目にもよく留まるであろう。

彼は満足そうに頭を頷かせると、妙なものをみるように二つ目の武器を見つめる。

片刃で反りが入ったそれは呉鉤ではあるが、なぜか形状が日本刀に似ている。

特に刃の刀の鐔が見事な文様を描いているがためにそう思ってしまう。

だがこれはあくまで呉鉤である、故郷にあつた伝統ある人斬り包丁ではない。

彼はそう心を決めるとまずは擬似クレイモアを親父から受け取って両手で握った。

予想よりコンマ3キロは重かったが、それでも誤差の範囲内ではあ

る。

彼は一度刀を振る意を二人に伝えて距離をとらせると、大きく深呼吸をして刃を振りかぶりそのまま軽く音を立てながら下ろす。

振れないことはないことがこの一振りでわかる。

両刃の剣を使うのは余り無かったが、

刃が1メートル近くもあるそれは十分な凶器となり、

同時に相対する敵に恐怖を与えるであろう。

親父の見事な仕事に感服して満足した彼は二つ目の刀を握ろうとし、三振り目の武器を持った詩花の姿を見つけて自分の行為を中断した。彼女が持っているのは典型的な戟であるが刃の裏側から生える二つ目の刃である戈（か）を見ると、戟というよりも鎌の印象を受けてしまう。

使いこなすまでに時間がかかる武器であることがすぐに分かった。

槍のように敵の体を刺して、それが外れた場合には戈でもって引手で掻き切ることを理想としている。詩花が持つそれは長さ七尺（

210センチメートル）ほどの長戟とされるものに分類し、金毘を

駆って戦場を掛けるにはうってつけの武器であった。

ただ彼には一つの懸念がある。

後に諸葛亮孔明によって実戦投入される槍にうってかわられ、その活躍の場を縮小していくことだ。

活躍の場が少なければ武器に対する需要が減少して、当然必要性も減るからこれを扱う職人が居なくなる。

これはあくまでも今の彼女には必要であっても、

未来の彼女には必ずしも必要なものではないだろう。

そんな思いを彼はいつかこれを想起する時のために心に残す。

彼女もまた武器を扱いたそうにしていたが、

武器屋の中はそれを振り回すには若干狭すぎていた。

詩花は残念そうな表情をして刃をみつめている。

「遊びの、実はまだ他にもおもしろいもんがあるんだが。」

そう呼びかけられた仁ノ助は、
クレイモアを壁に立てかけて親父の方を見る。

親父が手に抱えていたのは一つの木製の箱である。

こちらを見たのを認識すると親父は箱の中身をみせるように蓋を開ける。

中にあつたのは数本の短い刀であつた。

柄を含めて長さはわずか八寸（24センチメートル）もないのではないことから、専ら投擲（とうてき）用のナイフと解したほうがよさそうだ。

これもまたクレイモアと同様に特徴がない外観である。

だが暗器として扱うならば武器に特徴など関係はない、

むしろ無いほうがいざ暗殺に使ったときに面倒にならずに済みそう
だ。

思った以上の成果を得られて顔がにやける。

そんな彼を見て親父は自分の仕事が役立つことを誇るように笑みを浮かべた。

刻は夜明けの一つ手前というべきか、

朝早くに出立して足を稼いでおくことを決めた二人は商人から譲ってもらった馬と金毘に乗って町の外へつながる門に向かつていた。

両者の鞍には必需品を入れた大きさ二尺ほどの袋が乗せられている。仁ノ助は昨日の買い物で購入した藍色の外套（がいとう）を青の上

着の上に着けている。

服の前面を閉じるような結び目が見当たらないことから、外見を意識して作られたものらしいことは明白であった。

しかし外套の中にはいくつもの手製の結び目があり、

この中に投げ刀が鞘に入った状態で手に届く位置に収められている。左の腰には新しく手に入れた双手剣を差し、

呉鉤は馬に乗せた鞍につけられて馬が動くたびに震えている。

詩花は自らの戟を左手で後ろに流すように持ち、右手で器用に手綱を操る。

やがて門前に差し掛かって衛兵に呼び止められる。

一昨日に使い捨ての刀を寄付した兵だ。

両者は馬を立ち止まらせて彼の方をみる。

「もういくのか。」

「ええ、長居ができぬ理由ができました故。」

「そうか、ならば引き止めんが、二人とも、くれぐれも気をつけろよ。特に最近は何やらきな臭い動きが続いているからな。」

「ご忠告痛み入ります。もし再びこの町に来ましたら、その時は共に盃を交わしましょう。」

「お世話になりました。またいずれお会いしましょう。」

「ああ、達者でな。元気でやれよ！」

衛兵と言葉を交わして有難いことに激励まで受けた二人は笑顔とともに別れの礼をする。金毘がぶると震えて嘶（いなな）き声を出した。

そして二日間世話になった町の外へと目を向けて馬を歩ませていく。門を過ぎようとするあたりで詩花から声がかかる。

「ねえ、折角だからあんたの馬を走らせてみない？」

「それって、競争しようっていうことか？」

彼の返しににやりと笑い、彼女は手綱を強く打って地の先へと駆けていく。仁ノ助はするいぞと叫びながら急いで自分の馬を走らせていく。その様子を門から見ていた衛兵が苦笑いで送っていった。人馬の体が風を切る度に、彼が纏った外套がゆらゆら音を立てている。

鞍にくくりつけた刀は馬の動きに合わせてるように、鞍に当たっては金属音を出している。

彼女は本気で走ろうとはしなかったのだろう、

五町（ 550メートル）ばかり馬を走らせて並走の形をとった。

彼女の方を見遣ると、今までの一人旅の孤独が吹き飛んだかのように清々しい笑みが顔に満ちていた。

仁ノ助はそれを一瞬見つめて再び前を見る。

中原の空は未だ平和をたたえているが、

その下の大地はすぐに血で赤く染まることだろう。

日の出の光を受けてまばゆく光り始める西の空に一羽の鳥が飛んでいくのがみえる。

そして彼は馬上からその下に広がる雄大な大地を見渡した。

これからの戦乱に対する不安と、群雄達の活躍を間近で見れる興奮が、

彼の胸のうちをとぐるが巻くようにならない交ぜとなっている。

第一章：大地を見渡すこと その四（後書き）

今回からタグにある通り、不定期更新の様相を呈してきます。
あらかじめご了承くださいませ。

また、第一章までごらにいただきました真に感謝申し上げます。
今後とも遅筆ながら努力させていただきます。

第二章：空に手を伸ばすこと その巻

二月の冬の寒さで凍える洛陽の市場、
その中心で四肢を縄で縛られながら甲高い喚き声を挙げる男がいた。
風体は野蠻そのものを表しており、
男の髪を結わく黄色の頭巾が出自を公然と語っている。
喚き叫ぶこの者の名は馬元義という。
朝廷内の欲まみれた宦官達と内応をし、
時がきたら皇帝の膝元であるこの町で決起を行い、
朝廷の腐敗を一気に武力で断じる手筈となっていた。

ところが彼の部下である唐周が皇帝直属の宦官にこの事を密告、結果として計画は露呈してしまい彼は拘束される。

「……以上の罪によってこの男を車裂きの刑に処する！！恐れ多くも皇帝陛下に反旗を翻そうとした、鬼畜所業を企む男の末路をしかと目に焼きつけよ！！！！」

彼の目の前に立つ役人が高々と宦官によって書かれた書状を読み上げた。

彼らの周りを何事かとみつめているのは、
いずれも飢えと貧しさを体の何処かしらに見せている住人達である。

宦官による腐敗政治が町を蔓延って以降、
日々自らの生活は困窮する一方をたどり、
それに加えて冬の寒波が町をなでているので体が震えている。
腐敗政治を弾劾する者達が処刑された以降は、

このようにして事ある度に謀反者が現れては公開処刑にされている。
群衆は慣れきった様子で処刑の成り行きを見守っている。
役人が書状を読みあげを終わった後に、

近くに待機する騎手たちに手をさつと振り合図をする。車裂きの刑とは別名八つ裂きの刑ともいわれる残酷な死刑方法の一つである。

人間の四肢に縄を縛って馬車につなげる。

そして馬車を引く馬が一気に発進して勢い任せに体を引き千切り、右腕・左腕・右足・左足・胴体の五つに体を分解するのだ。

恐怖を与えるために生まれてきたかのようなこの処刑はこの大陸では昔からあるものであり、

宦官たちはそれを民衆への威圧目的で使用しているに過ぎないが、それでも余りあまつて惨い計であることは変わりない。

騎手たちが合図を見て馬車に乗り手綱を持った。

後は役人が処刑執行の合図をするだけである。

事此処にいたって自らの最期を感じたのか、

自分の氣勢を見せ付けるかのように馬元義は叫んだ。

「蒼天の獣達よ！！！！！！！！！！」

彼の叫びに驚いて役人達が彼を振り向いた。

これから体を千切られる男とは思えないほど、

目は狂気と自信で爛々と輝いており、

口元は限りない侮蔑の笑みを浮かべている。

「貴様ら畜生どもをこの手で殺せぬことが残念の極みだわ！！！！！！」

「！！だが我が為さずともいわずれ天が貴様らを食い殺すであろう！！」

「！！せいぜい楽しみに待つておれ！！！！！！！！！！」

男はさも愉快的な気持ちであろう、

洛陽の町全体に響かんばかりの哄笑を洩らした。

手が縛られていなければ腹を抱えて転げまわっていただろう。

男の狂気に満ちた行動に拭い難い恐怖を抱いたのか、

役人が顔を歪めて声を裏返させて命を下す。

「や、やれイイイ!!!」

騎手たちが鞭を強く入れると馬達が嘶いたのちに前へ向かって勢いよく直進する。

勢いをもって千切るのであるから縄は幾分長く、

馬が距離を稼いでいくと巻かれた縄が徐々に引っ張られていく。

馬元義は狂った哄笑を途絶えさせない。

役人が苛苛しながらまだかまだかと馬の走りを見届けている。

ついに馬車がその距離に到達し、

馬元義の体に括られた縄に瞬間的に重圧を加えた。

自らの四肢を強烈な力で引っ張られるのを笑みの中で感じた彼は、

次の瞬間に訪れる圧倒的な衝撃を脳に焼けつけられた。

そして血飛沫が舞う宙を見つめながら天の悟りを開いたかのように想起する。

それが何かをはっきりと知る前に、

彼の意識は雲散霧消して暗い深淵の中へと堕ちていった。

「『張角らの賊軍、予想以上に巨大なものなり。よってそなたを遺憾ながら騎都尉に命じるが故、朝敵殲滅に全力を注げ。』、か・・・。自分達が危うくなった瞬間に政敵を頼るとは。誇りのかけらも無い連中ね。」

部屋の主が己の猥欲ことしか知らない無知な宦官に対して嘲る。

次いで自分の中に沸き立つ戦意の昂ぶりを感じ、大陸を巻き込む戦乱に思いを馳せる。

その後、史実どおりに黄巾の乱が始まった。

太平道の教祖である張角は軍事行動計画を事前から用意周到に巡らせていた。

信徒たちは黄色の頭巾をつけ一斉に蜂起し、中原各地に動乱は広がりを見せる。

張角は自ら天公將軍と称し、

張角の弟張宝は地公將軍、

張宝の弟張梁は人公將軍と称した。

天地人をもじったそれは森羅万象の大元である天と地と人が味方であることを印象付ける。

対して靈帝は三月に何進を大將軍として首都防衛の任に当てて、同時に洛陽に至る八つの関に都尉（軍事指揮官）を置き守備を固める。

平行して二次にわたって続けられた党錮の禁を解き、弾圧されていた知識人らが黄巾賊に加わるのを妨げた。

さらに反乱討伐軍司令官として、

北中郎將の盧植に冀州の張角討伐を、左

中郎將の皇甫嵩・右中郎將の朱儁に潁川の黄巾討伐を命じる。

いずれも賊達が大勢集結している場所であり、

確実に鎮圧するために信頼できる武將を遣わしたのであろう。

兵力は皇甫嵩・朱儁ら連合軍が4万。

盧植の冀州討伐軍もほぼ同等であり、腐っても朝廷の力を見せ付ける。

しかし彼らだけがこの乱を治める人物ではない。

不敵な自信に満ち溢れたこの者は他者を圧倒するほどの気を放っていた。

人々から畏敬の対象とされるまでになったこの者は、

既に討伐に向けて自軍に向けて出陣の準備をするように命じてある。

後は報告を待つだけである。

「華琳様、出立の用意が委細整いました。」

この世界には恐ろしく似合わない猫耳フードをした女性が部屋の中へ入ってきて、討伐軍の用意が出来たことを報告した。華琳と呼ばれた少女はそれに目をやる。

「相分かったわ、桂花。では早速行きましょうか。」

「はい華琳様、宦官共の度肝を抜いてやりましょう。」

二人の少女が崩されることの無い自信を醸し出して部屋の外へ出て行く。

前を悠然と歩く少女の目には霸王の威光が、それについてくる少女は前に行く少女に畏敬と陶醉の視線を向けていた。

「ついに、乱世が始まったみたいだね。」

「はい、ご主人様。このような時こそ、どうぞ私の武をお使い下さい。」

「愛紗だけではないのだ！鈴々も敵をばったばったと倒せるのだ！」

「あ、私だけ除け者にされてる感じがする！私だって頑張るもん、ご主人様！」

雲ひとつ無い快晴の空の下で戦乱の世などを気にも留めず明るく話す四人の構成は、

男子一人に対して女子三人である。

偃月刀を掲げる少女と蛇矛を元氣いっぱい振り回す少女に、華やかな笑顔でその二人の間に入る少女はさながら姉妹のようであり、

三人からご主人様と呼ばれる少年は明るくいつも通り振舞って自分を元氣付けようとする姿に笑みを零す。

四人が乗る馬が先頭となつてその後ろを何十、何百の人間が武器を持ち糧食を持ち旗を掲げて続いていく。

空に翻る刃門旗は十字に交わされた剣の表しているようにみえる。自らの名を一字とつてつけるのが普通であるがこれは例外であるらしい。

自らの出自を表さぬそれは、はたしていわば寄せ集めの義勇軍であり、

この四人の呼びかけを通じて参加を希望した志願兵が占めており、戦意が高く同時に連帯感が高いことが兵達の行進からみてとれる。

義勇軍でありながら中々の練度であるが、

やはりそれは正規軍には劣ることが否めない。

軍の頭脳がいなくては数百の兵など有象無象の蟻の群れ、

敵との戦力差が大きければすぐに蹴散らされることであろう。

それを十全に承知している彼らは、少女の一人の幼馴染である、

幽州太守公孫贄に保護を求めて行軍をしていた。

途中の黄巾賊をまとめて倒さんばかりに進む彼らの行く手は、

未だ遮るものが一つもなかった。

賊共に包囲されていることを気にしないかのように夫婦漫才を始め
ている。

その姿は賊共の気を逆撫でするかのようなのであるが、
武器を構えるそれは一寸の油断も隙も見当たらない。

男性の名は辰野仁ノ助、大陸には『遊びの仁』として主に市民や一
部の商人の間で評判になっている男で、飄々とした性格とは裏腹に
完全に任務に全うする冷徹さを持ち合わせており、新人の賊を狩る
ことには定評がある。不運にも周りの賊は彼を知らないようだが。
女性の名は錐琳、真菜を詩花という商家の娘であり、家でのついで
という名目で仁ノ助の無頼旅に一緒についてきている気概さを持つ
女性だ。戟に関しては心得があるようで、賊共を威圧するように時
折戟を振り回す姿は板に付いたものだ。

しかしいかに二人にとっても、

五十近くの賊に周囲を包囲されれば突破は容易には出来ない。
尚且つ、賊共がこちらを生かす気が無いことが丸分りのため、
なんとも面倒極まりなく憂鬱な気がさらに高まる。

仁ノ助は胃がきりきりと痛むことを覚えて、こうなった原因に思い
を巡らせていた。

第二章・空に手を伸ばすこと その巻（後書き）

第二章は黄巾の乱終結までやる予定です。

桂花、かわいいよ桂花。罵倒してください。

第二章・空に手を伸ばすこと その弐(前書き)

連載僅か数日でユニーク10000越え(平成23年10月20日現在)とは、

本当に感謝の言葉が尽きません。

有難うございます、有難うございます。

第二章：空に手を伸ばすこと その武

「――山肌を薄ら寒い風が撫でている。

さほど標高は低くは無いはずであるが冬の終わりではここを登るのが厳しいかもしれない。

早くも登頂を後悔し始めた仁ノ助と詩花の上を、

一羽の渡り鳥が知らぬ顔でゆったりと飛んでいく。

一月も旅を一緒にすれば二人の間の気心はよく知るといふもの。

最初は些細な事に互いで遠慮をしたり気を遣ったりしていたが、それは旅を続けていくうちに無くなっていき、

逆に意見の衝突を起こしたり互いの武技を研鑽しあったりする仲とまでなった。

そんな中、洛陽方面から来た商人と道話をした時、面白い情報をもたらった。

『蒼天已死黄天當立歳在甲子天下大吉』のもと各地で蜂起が始まったらしい。

「遂に黄巾の乱が始まった」と、情報を得た仁ノ助はこのように思った。

既に洛陽とそれに通じる関所は厳戒態勢であり、正式な通行許可書を携えていないと近づくこともままならない。

宦官達は賊達の蜂起を一瞥してたかが貧民風情がと侮っていたのだが、

その蜂起の規模の大きさに驚いて自らの懐を守っているという感じである。

仁ノ助は史実の出来事が正確に起きていることに一先ずの安心をした後、

騎都尉（ある程度の兵権を持ち独立軍を動かせる重職）として潁川に赴くはずの曹操に目をつけて、

先回りをしようとする行動をしていたのである。

しかし現在位置からは若干歩みを速めないと曹操軍が戦いを始めてしまい、

自分が戦う姿を認めてもらえないと危機感を募らせたのか、

若干の強行軍を敢行することを決めて、二人は馬に鞭打って山中に足を入れたのであった。

「ううう………やっぱり冬の山は無理だったのよ………」

「

……いけると思うんだけどなあ………」

ぶるぶると体を震わせて詩花が弱音を吐く。

それもそのはずで彼女はいわば半袖半ズボンの格好をしており、

どうみても山中を抜けようとする者のする格好ではないことが明らかである。

仁ノ助は外套で身を覆っているために寒さにはある程度の抵抗があるが、彼女はそうではない。

ちよつとした風が吹度に風に体をびくりと震わせる。

楽観的な見方をする仁ノ助をじろりと睨んだ彼女は、

天を仰ぐように空を見つめて、寒さを気にしないかのように宙を舞う鳥の姿を認めた。

その瞬間、彼女の脳裏には画期的な考えが閃く。

わなわなとふるえる口元に不敵な微笑をたたえて言葉を紡いだ。

「ねえ知ってる？わ、渡り鳥は寒さから逃れるために遠くへ飛んで

いくつて………」

「本当かよ？」

彼は頭にわいた疑問を口に出す。

渡り鳥は、食糧・環境・繁殖などの目的に応じて定期的に長い距離

を渡る鳥だ。

彼女の言うことは確かにその通りではあるが、渡り鳥の性質そのものを指した言葉ではない。

彼女が言いたいのは、『凄く寒いから、山から降りない?』ということだ。

そんな彼女の心の叫びを体現するかのように、

顔、特に唇がわなわなと震えて青くなっただけ、

目は今にも生死の狭間で泳いでいますと主張するかのように若干血走っている。

予想以上に必死な彼女に若干引きながら彼は問う。

「じゃあ代わりにどうする気なんだ?」

「ふ、ふふふ。渡り鳥は暖かいところに行くのよ。だ、だから、わ私たちもそれ、それを追いかけるの!」

山中の寒さを強調するように演技っぽさが滲み出しながら体の震えを大きくする。

そこまでするくらい寒くないはずなのだが、

一刻も早くここから抜け出したいのかオーバー気味に言葉を出している。

仁ノ助は彼女の頼みを受け入れることに慣れきってしまったのか。

彼女の当てずっぽうな答えに呆れながらも、

それに異は唱えずに頷いて、空を飛ぶ鳥をみつめた。

本来なら北西に抜ける予定だったが、渡り鳥は北東の方へと向かっている。

風はさらに強さと寒さを増していき、冬山の真骨頂を見せ始めている。

纏った外套がばたばたと風に揺れて、詩花はついに悲鳴をこぼして寒さに耐え始めた。

もう我慢の限界なのだろう、仁ノ助の言葉を待たないうちに北東方

面に向かつて下山を始めた。

金毘も我慢が出来ない彼女の意をよく知っており、なるべく風を受けないように気を使わせながら足を速めている。

山中に置いてけぼりにされると身の危険がさらに増すと分かっているのか、

仁ノ助も自分が乗る馬を操ってすばやく彼女の後を追い始めた――

第二章・空に手を伸ばすこと 第一章

山を降りた二人はどういう訳か麓に広がる森林の中を突っ切って平原に出てしまった。

途中から寒さを逃れるために走っていたのではなく、

どちらが早く走れるか互いに対抗していた気が仁ノ助の中にあった。彼女に追いついて文句を言う前に前方の方から土煙が上がる。

大地を震わす音も聞こえており、さらには命令のような怒号が飛ん

でくる。

何を叫んだのかはわからないが、尋常ではない様子で迫ってくる土煙の中からその正体を突き止めた。

煙を上げているのは三十は数えられそうな群れた男達であり、汚らわしい風体とちらちらとはためく黄色の頭巾、そして手に持ったぼろぼろの刀が、

彼が群れで追いはぎをする黄巾賊であることがすぐにわかった。顔を顰めて踵を返し二人で逃げようとするも、

森の中からさらに二十人はいようかという数の賊が出てきた。

元々五十人だったその賊は味方を二つに分けて、

一つは追い込みの役を徹し、もう一つは逃げる獲物の行く手を阻むやり方で商人らを狩っていたのであるう。

何やら組織的にもみえる動きでこちらの周囲を包囲してくる。

包囲が完成していない間に突破しようとするれば出来るかもしれないが、

弱り目に祟り目というべきか、自分の馬が思ったよりも疲弊しているのが馬の荒げた息よりわかった。

先ほどの競争で体力をかなり消耗したのであるう。

これから先の戦ではこの馬では使い物にならないと考えながらも、仁ノ助は使い物にならない馬から降りて腰に差したクレイモアを抜いた。

「ちよつとあんた、正気なの！？やるんなら馬上でやりなさいよ！
！」

「こつも包囲されては馬の機動力が殺されてしまう。それに俺の馬はお前のより利口ではない。乗って戦えば足手まといとなる。」

「あああもつ！！！！しょうがないわね！！！！」

詩花は投げやりな声を出して手に持った戟を一度振るうと、開き直った様子で金毘から降りる。

馬上での有利を放棄する気かと驚いた仁ノ助は問いたです。

「お前が降りてどうすんだよ！！金毘なら突破できるだろ！？」
「あんな糞つたれな賊なんて、あたしの愛馬諸共狙ってくる手合いに相違ないわよ！！！金毘を殺されるよりも、降りた戦った方がましね！！！」

周囲を取り囲む賊共を煽る形で彼女が言葉を出す。

それを聞いて当たり前ではあるが野蛮な男共は怒り狂い、不敵に武器を構える二人を大声で罵声した。

小娘一匹になめられては俺達の沽券に関わる。

そう思ったのか、痺れを切らしたかのように包囲陣から二人の賊が飛び出してきた。

いずれも若く、よほど屈辱的だったのか怒りでいきりたった様子で突っ込んでくる。

「なめんなクソゴラア！！！！」「死ねよやああ！！！！！」

三流のする事だな、包囲をするなら一斉に襲えよ。

そういわんばかりに仁ノ助と詩花が、互いに一人の賊を捉えて同時に地を駆ける。

仁ノ助はクレイモアを天に突き刺すように上段に両手で握って構えた。

三尺は超える刀身を視界に入れて凝視した賊は、

相手の思わぬ獲物に僅かな恐怖を覚えて足取りを遅めてしまった。

それが決定的な命取りとは経験少ないこの者は知らなかったであろう。

足取りを崩して止まろうとする賊の懐に一気に飛び込んだ仁ノ助は、冷えた目で男を見据えながら地面を強く踏みしめてクレイモアを一気に真下に降ろす。

轟音を奏でながら刀身の刃は賊の頭の天辺を捉えて、勢いを全く殺さずに首・胴体・股を縦に真っ二つにするように降ろされ、

次いでその断面をなぞるように血飛沫が勢いよく仁ノ助に振りかかる。

自分の体を何かが両断した、そう思う暇もなく賊は死を迎える。

凶刃の殺傷から一瞬遅れて賊の体が崩れ落ちる。

膝をつく賊の体が二つとなって地に降ろされた刃を挟むように別れた。

綺麗に両断された体からは、男の不健康な血がどばどばと毀れ出ており、

傷口からは腸が脂肪にまみれて地面を赤と桃色で彩った。

振り下ろされた刃は早くも次の獲物を求めてぎらついている。

一方で詩花は余裕を持った表情で迫り来る賊をみていた。

旅の途中で賊に襲われたことは何度かあり、殺すのも慣れ始めている。

今度は武器をちゃんと使って相手を丁寧に封殺しよう。

そう思った彼女は賊の動きを強制的に止めるように戟を真っ直ぐに突き出した。

突然迫りくる刃にびびった男は足に思いっきり力を入れて走りを止める。

しかしそれでも刃は顔を貫くと思ったのか、刃を避けようと顔を背けた。

男の勘が冴えていたのか刃は先ほどまで頭があった場所を素通りした。

だがこれはあくまで戟であり、決して相手に刺すだけで終わるものではない。

詩花は引き手に思いっきり力をこめて戟の戈の部分、援（えん）^しまたは枝一、を相手の首に寄せる。

戈の刃は男の頸動脈があるあたりに吸い寄せられるように持つていかれて男の首を切り裂いた。

赤い噴水が男の首から漏れ出し、男が驚愕の表情をたたえて口をぱくぱくと動かす。

刀を離して傷口に手をやろうとするも力が入らない様子であり、血がさらに流れ出す。

そして力尽きたかのように地面に倒れ付すとぴくぴくと痙攣を始め、男の体は死後硬直の準備を始めた。

男の血の噴水が彼女の体を赤く染めるが、

嫌悪感に耐えるかのように表情は敢えて作られていない。

仁ノ助と詩花は素早く馬の傍に戻って互いに背中を預け。

あつという間に二人の仲間が殺されたのを見て賊達はどよめく。

それでも数的優位が変わらないのか、

獲物が持つ長い武器の餌食にならないように遠巻きから威圧し始めた。

かくして一つの膠着状態が生まれるのである。

膠着状態から半刻が過ぎようとしていた。

あれから数人が襲い掛かってきたがいずれも二人に殺されている。

襲い掛かってくる度に刃が煌いて、透き通った空に断末魔を響かせていた。

仁ノ助が難なく賊を斬殺するのに比べて、

詩花の方は未だ戦いに慣れていないのか、

一人ずつ丁寧に攻撃を裁いて相手の隙を捉える戦い方で凌いでいる。そろそろこちらのうちの一人が殺しの初心者だという事がばれていくはず。

彼の予想は的中しており、賊達は自分達の優位を崩そうとせず徐々に包囲陣を狭めている。

また賊たちの中でもそれなりに腕に覚えがある者達が、一人また一人と刃を交わしては包囲に戻る戦法をしてきている。

決して陣を崩さずにこちらを追い詰めている賊達は、追い詰めた猫を絞め殺すかのように余裕を見せはじめている。

それを見て仁ノ助の表情に不敵な笑みが毀れ出る。

彼の一人旅でこのような事態に陥ったのは何度となくあり、そのいずれもで自分は機転を利かせて生き抜いてきた。

此度のそれはこれらの歴史の中と比べるとちよるいものだ。

彼は賊共の余裕を嘲るかのような体の力を抜くと、

刀身に被った血脂を払うように刀を振るい、

始めに裁いた賊を殺したやり方を髣髴（ほうふつ）させるかのように、

両手で柄を握り上段に構える。

ゆっくりと脇をしめて刃が煌くように刀の角度を調整する。

そうすると刃は太陽の光を受けて切っ先を獲物を欲するように輝かせた。

その対象が自分達であることを包囲する賊達は悟り、

何人かの者は最初に切断された男の遺骸をちらりと見た。

あのようなのかとたじろぎを見せながら包囲陣を狭める行動を一時中断した。

しかし仁ノ助は動けない。詩花が息を切らしているのがわかるからだ。

斬った数は少ないが賊共の攻撃を完全にかわすことが難しいのだろう、

頬には小さな掠り傷が出来ており一筋の血が首まで伝っていた。丁寧に狩ろうと意識しすぎたのか攻撃の一つ一つが正確ではあるが遅すぎる。

それによってあっさりと殺すことができたのは最初の一人のみであった。

後は全て賊自身が隙を晒すのを待ち続けて、晒した瞬間に刃を振るう攻撃手法である。

待ちに徹する時間が長いとこのように息を切らすのは当たり前前話である。

顔についた賊の返り血を拭いつつしかと前を見据えて武器の構えを崩していないのは褒めるべきではあるが。

互いが探り探り緊張の切れ目を探している。

仁ノ助たちが一瞬でもタイミングを間違えれば賊共が一斉に突っ込んできて、

賊共が間違えれば仁ノ助が一気に呐喊（とっかん）してくる。どちらとしても、両者は次の攻勢で勝負を決める気であった。

攻撃の意図を探らせないように静寂を保ち続けていく。

森林に近いこの平原は今、木の葉一つも動かない無風状態であったが、

両陣営が放つ殺意に圧されてか徐々に大地が歪むように感じられた。まるで大地を大勢の人間が動いているかのようで……大勢？

緊張の糸が途切れたかのように賊たちがあらぬ方向を指して喚いている。官軍であると。

その声がさした方向へちらりと目をやると、

大地の先から大きな土煙が迫っているのが見えた。

それに呼応してか六町（660メートル）ほど離れたこの場所でも大地が震えるのが分かる。

普通なら勘を研ぎ澄ませれば感づけるのかもしれないが、

互いの武器に意識を向けすぎたのかこの距離になるまで気づかなかつたらしい。

驚き焦る賊たちの間隙を一気に突くのならばこの好機を利用しない筈が無い。

仁ノ助はクレイモアを袈裟懸けを狙うように刀を構え直しながら目の前で狼狽する賊に突っ込んだ。

こちらに対する意識が途切れていたのか、

賊は体を深く斬られ夥しい血を撒き散らすときに至って初めて仁ノ助の攻撃を悟ったようだった。

斜めに振り下ろされたクレイモアの動きを止めずに、

左に一回転しながら隣に立つ賊の胸部を切り裂き、

さらに回転の反動を利用するように剣を右斜め上に向かって薙ぐ。

胸部を切り裂かれた男は不運にも頸部を切断されて、

間抜けな表情をした頭部が赤黒い血を切断面から出しながら遠くへ飛んでいく。

賊達は突然自分達に振りかかる事になった災禍に鋭く悪態をつきながら、

森林から出てきた者達は森林の方へと悪運が尽きぬことを願いながら逃走し、

運悪くそちらの方へ逃れられない者達は一目散に東に向かって逃走した。

それを易々と逃がす気は無いのか仁ノ助が逃走する者達を後ろから追っついていこうとする。

一方で詩花は緊張感と疲労でいっぱいになったのか、
戦の石突を地に立てながら肩を荒げてで息を整えている。

(やはり追撃は出来ないな、これはあの軍隊の仕事だ。)

男の思いを応えるかのように賊共が指差した方向からたくさん馬

蹄が大地を駆ける音がする。

先行してきた部隊なのであるう、

騎兵で固めたそれは徐々に姿を明らかにしていった。

機動力と突破力をいかすためには馬の足、そして装備が軽いことが
必須。

この時代の騎兵ははつきりいつてしまえば、

重装騎兵を除いて歩兵よりも軽装なのである。

密集隊形で固まった歩兵に突っ込めば動きが止められてすぐに戟や
剣の餌食となる。

また馬上からの攻撃は止めを刺すことが困難であることから掃討戦
にも向いていない（馬上槍が得意な時は別だが）。

今回の場合は敵兵を追討することではなく、敵が逃げ込む先を知る
ために、

そして自分達の安全の確保するために騎兵を先行させたのである
う。

この軍の頭は随分と賢いらしい。

やがて騎兵を先導する、恐ろしい見た目の大剣を片手で背負う女性、
指揮官と思われる、が隣に馬を寄せて話しかけてきた。

「無事のような。後はわれわれに任せおけ。」

「ご助力、感謝申し上げます。これに乗じる形となって恐縮ではあ
りますが、どうか私の連れを・・・」

「ああ、そのために来たのでもあるからな。」

女性は部下に仁ノ助と詩花を保護するように命を事前に受け取って
いたのであるう、

命を出すまでもなくすばやく彼女の部下が駆け寄ってくる。

「こちらです、馬の方も面倒を見ましょう。」

「ありがとうございます。」

彼らの厚意はこの状態ではとてもありがたい。

肩で息をする詩花は武器を騎兵の指揮官の部下に預けて、肩を支えながら金毘に乗せられている。

金毘が心配するように鼻を鳴らすと彼女は疲労を抑えながら首を撫でる。

それを見ようともしせずに指揮官は一刻も早く戦果を挙げんと馬上にて命令を下す。

「賊共を一人残らず逃がすな！！！！我に続けえええ！！！！」

「殺すのが目的ではありませんよ、将軍！！！！」

副官と思われる男性が指揮官を諫めるもそんなの知らんといわんばかりに女性は馬に鞭を入れた。

逃走した黄巾賊の後を追撃して討ち取らんとする鬨気が暑苦しくなるほどに伝わってきており、

彼女が騎兵と共に去って行くとなぜか妙に空気が冷えて感じてしまう。

それを半ば呆れた視線で見送っていると、

残った親切な部下が仁ノ助の方をみて言葉を紡ぐ。

「我が軍の大将があなたに会いたいとの仰せであります。どうかご足労願いたい。」

「それは大いに喜ばしいことではありますが、一つお伺いしたい。あなた方は『誰の軍』ですか？」

彼の質問が意外なものだったであろうか、部下の人は一瞬目を瞬かせてしまう。

しかし直ぐに気を取り直して誇りに満ちた表情を出して応えた。

「我らの主にして騎都尉であらせられる、曹孟徳様の軍隊です。」

第二章：空に手を伸ばすこと その弐（後書き）

誤字訂正いたしました。（猛徳 孟徳）

情報提供、感謝申し上げます。

ていうか史実の人の名前を間違えるとかどんだけって話ですよね。。。

以後更に精進いたしますので、どうぞご容赦くださいませ。

（チラツ、ツンデレ猫耳軍師マードー？）な方はご辛抱ください。
次回に出します。

第二章：空に手を伸ばすこと その参

整然とした軍隊は総勢ゆうに数千はいつていようか、
自軍の軍規の厳しさを表しているかのように無駄な動きを一切しない。
い。

行軍を一時止めて休息をとっている最中でも、
輜重（しじゅう）部隊、つまり補給部隊を中心に軍隊が生き物のよ
うに蠢いているのが見える。

こういうのはどういう目的で動いているんだっけ、大学で教わった
知識を思い出す。

確かあの教授は、兵站こそ軍の生命線、と言っていたな。

――軍隊の一般原則として、何よりもまず補給部隊が充足してい
ることが肝心だ。

それも洛陽から何十、果ては何百里もの距離を行軍するとなっては、
当然部隊を支える糧食や軍需品が大量に必要なのは必至。

長期持久戦となれば戦線維持のためにさらに消耗が嵩（かさ）み、
軍は疲弊して鋭気を失っていき、戦意も喪失していく。

さらに軍需品の消耗が嵩んでいくと財政が著しく逼迫（ひっぱく）
されることとなるため、

戦争を長期化させないことは国家の基本的な考えであり、
これが出来ない国は例外なく滅んでいくのだよ。

戦争の害悪を知らない国は、戦争による利益も知らないのと同意義
なんだ――。

日本に居たころ、大学の老教授に教わった『孫氏兵法』の知識はこ
こでも役に立っている。

この軍隊が非常に有機的に、かつ効率的に動いているのがだんだん
と分かってきた。

その彼の思考を阻むように隣から「おー！」という歓声が挙がる。それを見ると、やはりというべきか声を上げたのは詩花であった。彼女はこれほどまでに蠢いている軍隊を見るのは初めてであるのか、驚きの声を漏らしながら右へ左へと視線を変えながら眺めている。そんな彼女を微笑ましく思ったのか、陣営内を先導していた案内役の兵が話しかけてくる。

「如何です、とても素晴らしい軍隊でしょう？」

「ええ！！ほんつとにすごい！！！」

子供のように喜びながら詩花は視線を動かすのを止めない。気持ちには分かるが、できればもう少しおとなしくして欲しかった。お転婆な妹に連れまわされる苦労性な兄とはこういう気持ちなのだろうか、
なんだか恥ずかしくなってきた仁ノ助は顔を手で押さえて溜息を漏らした。
彼女と旅をしてから溜息を漏らす回数が増えている気がする。

やがて歩いていった三人は一際大きな目立つ曹操軍の本陣に辿り着く。
入り口の両脇を見るからに屈強な精鋭の兵士が固めていた。
本陣の幕の中からは『曹』の一字が風に揺られてはためいているのがわかる。
あれは牙門旗、すなわち軍の旗印であり、軍の精神的な拠り所でもある。
案内役の兵が真剣な目つきとなって言葉を出す。

「ここからは二人で入ってください。決して無礼な態度をとらないように。」

「承知しました。ここまでご案内有難うございます。」

案内役の兵が駆け足となって二人から遠ざかる。

彼は所属している部隊に任務遂行を上申してから、次の任務に当てられるのだろう。

仁ノ助は大きく深呼吸をして心の整理をする。

この中に曹操孟徳、乱世の梟雄が自分達を待ち受けているかと思つと緊張で胸がいっぱいだ。

詩花はどうやって緊張を解しているのだろう。

気になった彼は彼女の方を見遣つた。

彼女は手のひらに何度も文字を指で記してはそれを飲み込む行動をしていた。

手のひらに書かれているのは『人』なのであるうか。

乱時の時にでも凜とした表情で一心不乱に『人』の字を手のひらに書く姿は、

見ているだけで可笑しいものがあり、思わずくくつと笑い出してしまふ。

そんな彼を非難するように詩花が睨んでくるが、

それでも緊張するのか今度は顔の緊張を手で解し始めた。

彼女の微笑ましい行動を見ていると自分の緊張が和らいでいく。

意識してかしないでか行われる彼女の行動に「ありがとう。」と感謝の意を告げると、

彼女は意味が分からないという風に視線を向けてきた。

それに一瞬笑みをこぼすと、顔つきを真剣にして本陣の幕を見つめる。

彼は意を決したのか、本陣の中へ入っていくために足を動かす始める。

そして幕に手をかけてついに中へと入っていった。

第二章・空に手を伸ばすこと その参

「よく来たわね。私が曹孟徳、この大陸に葉を唱える者よ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

えっ、なにこれ。女・・・・・・・・だど？

自らを曹操と名乗った少女に対して仁ノ助の脳は軽いオーバーヒートを起こしていた。

あの大軍人・大政治家・詩人でもある曹操は史実では列記たる男だったはずだ。

その彼が、この世界では神様が薬でもキメてとち狂ったのか、女性となつているとは、

いかに現実への適応が早い人間あつてもこれ絶対に予想し得ないことだ。

史実の彼の評価など彼女の容姿を見た瞬間に脳から剥がれて、驚いたまま開けられている口から宙へ毀れだしてしまった。

金色の髪を二つに分かつように髑髏（どくろ）を象った髪飾りがつけられ、

分かたれた髪の毛はなぜかドリルを描いて垂れている。

凜々しく覇者の表情をたたえている顔は気品と自信に満ち溢れてお

り、

彼女のきりつとした瞳を美しく見せている。

全体的に深い蒼に染まった服を着装しており、彼女をより威圧的に見せるのに十分働いている。

同時に胸元が若干開けられた作りとなっており、

そこから僅かに胸の谷間が見えて彼女の女性の色気を見事に出している。

胸の上をコルセットのように巻いた縁が金色をしている紫の帯は、彼女がもつ知性と理性をさらに高めている。

濃い紫の色をしたスカートから健康な色をした肌が見えている。

白のハイソックスのようなものを履き鉄の具足をはいた彼女の足は組まれており、

自らの偉大さをさらに高めるかのようである。

改めていうが、彼が想像した曹操とは力と野望に満ちた若い青年である。

自分の予想が大きく外れた彼は驚きの余り彼女の言葉に答えることができない。

「あなた、華琳さまのお言葉に答えないなんて無礼が過ぎるんじゃないの!?!」

甲高い声で非難されて仁ノ助は「はっ」と意識を取り戻した。

慌てて声のした方へ視線を向けると、

この軍の軍師であろう猫耳フードを被った女性がこちらを視線で殺すように睨んでいる。

「最低限の礼儀くらい弁えなさいよ、全身性液人間!!!!」

吐瀉(としゃ)物を見るように吐き出されるえげつない言葉に心が

大きく傷つく。

この軍師はその可愛らしい外見とは全く異なる物を内心に持っているようだ。

だがそんなことに気をとられていると本当に無礼が過ぎてしまう。

これはまずいと焦って言葉を出そうとするが、

視線の端でわなわなと震える人影を見て視線だけを送り、

そしてその正体が詩花であることに気づくと彼はこの世の終わりのような表情をした。

なにかマズイがイヤな予感がする、こいつが惹起する結果で俺達の処刑もあり得るかもしれない。

そう思った彼は曹操に向けて言葉を発するよりも詩花の怪しげな震えを止めることを選び、

急いで彼女の肩を掴んで意識を取り戻させようとする。

しかし彼女の方が彼より一瞬早く動き、

肩を掴まれる前に神速の如き速さ猫耳軍師の方へと駆け寄り、息をはあはあと荒げて熱っぽい視線で彼女に言い寄る。

「かわいいいいい！！！！なにこの娘！？！？持ち帰って愛でていい！？いいわよね！！！」

「ちょ、ちよつとあんたにするの！？！？こんのおおおお、離しなさあああい！！！！！」

戟を握るときよりもさらに強くなる握力で軍師の両肩を握った彼女は、

可愛い可愛いと叫びながら興奮の息をさらに荒げ、彼女の顔に自分の顔を近づける。

軍師は顔を青ざめながら自分に近寄る彼女に抵抗するために、彼女の顔と胸に手をやって非力な腕力で押し返そうとする。

鼻に指を突っ込まれてさらに間抜けな姿を晒すこととなっても、詩花は猫耳軍師に興奮し続けている。

「はあはあ、可愛いよ君いい！！はあはあ・・・食べていいわよねええ！？」

「やめてええええええ！！！！助けてください華琳さまあああああ！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

目の前で行われる変態的な女性の醜態と哀れな軍師の抵抗を見て、両者の主の立場をもつ二人は啞然としてその成り行きを見ている。軍師の抵抗が強くなって悲鳴がさらに高まり詩花の興奮もつられて高くなっている。

その時、本陣の外から馬の嘶きが聞こえてきて、次いで猛牛のように女性が勢いよく本陣の中に入ってきた。

その者とははたして自分達を助けてくれた騎兵隊の指揮官だった黒髪の女性だった。

その後に続くように水色の髪をした女性が後に続いて入っていく。

「華琳さま！！！！賊共の逃げ先をつきとめま、し・・・・・・・・た？」

「華琳さま、主命滞りなく勤め・・・・・・・・。」

二人は目の前で行われる混沌とした格闘に思わず啞然とした様子となり、

主への報告が言葉を紡いでいくにつれて萎みがちとなってしまった。黒髪の女性は数秒目をぱちくりさせると目に正気の色を取り戻し始め、

子供が仕返しを企むような笑みを浮かべる。悪戯めいた表情は全体的に豪快な印象を受ける美顔に意外と似合っている。

「本つつつ当に申し訳ありませんでしたつつつ!!!!!!!!!」

地に付かんばかりに頭を下げる仁ノ助。

目と表情は今までの人生の中で一番真剣なものである。

その隣には頭から煙を上げて伏せている赤い髪の毛の変態がいた。

煙は頭部に大きく出来たタンコブから出ているらしい。

この変態、詩花は意識を完全に失って白目を出しており、

体が時折ひくひくと痙攣していることから殴られてさほど間を置かれていないことがわかる。

怯えた感情を出しながら猫耳が真っ先に口火を切る。

「当たり前よ!!!なんでこんな変態を躰けておかないの!?!?!?ほんつとつに使えない男ねっ、この全身バカ性液魔人!!!」

彼女の仁ノ助への評価が人間から魔人へとランクアップしたことは喜ぶべきなのであろうか。

彼女の方を見て魔人呼ばわりを止めて欲しいと言ってやりたいが、

今は素直に頭を下げて詫びをいれなければならない。

さもなければ軍師を愚弄しその主をも辱めたとして斬首となってしまう。

「.....いつも威張ってるからこうなるんだ。」

曹操を挟んで軍師の反対側に立つ体験を背負った女性が言葉をさらりとこぼす。

それは聞き捨てならないと軍師の怒りの矛先が変わる。

察するに両名は相当相性が悪いらしい。

「なによっ!あんだこそ煽ってないで助けたらどうなのよ!?!?!?いつも突撃ばかり考えているから頭回っていないのね!?!?!?」

「なにをいう！！ただ真つ直ぐ突撃するだけの脳ではないわ！！
！！たまに曲りながら突撃している！！！！！！」
「突つ込むところがそこではない気がするが、そんな姉者も可愛い
な。」

竜虎交わらずといったところか口論がさらにヒートアップする。

水色の女性は黒髪とは姉妹の関係であるらしい、

拳を握って力強く違う点を反論する女性を微笑ましく思って暖かな
視線を送る。

頭を上げていれば、その視線がバカな人をカワイイと称する日本の
友人を想起させるものだとわかっただろう。

仁ノ助はその口論を聞き流して頭を下げているため見る事が出来
なかった。

やがて疲れた口調で曹操が二人の口論に口を挟む。

「二人ともそこまでしなさい。」

「い、いえ、そうのような気は一切ございません！！」

「そ、そうです華琳さま！！全部桂花が悪いんであって私はっ、」

「それ以上の言い訳は無用よ、私に恥をかかせる気なの？」

本陣に人を招いた手前で部下の醜態を態々見せるほど彼女は愚かな
人間ではない。

二人もそれには異を唱えるつもりが無いのであろう、

不承不承という感じで喉元に出掛かっている互いへの罵倒を飲み込
んだ。

もう一人の女性は何も言わずに臍（ほぞ）を噛んでいる黒髪の女性
の隣に立っている。

曹操は改めて頭を垂れる仁ノ助を上から見据えた。

「部下の失態を詫びるわ。あなたにも恥をかかせてしまったわね。」

「いえとんでもありません。むしろこうなつた原因は私の連れでありますが故、それを止めなかつた私にこそ責任があります。」

頭を上げずに仁ノ助はさらに詫びを入れる。

騒動の元々の原因は彼の連れの暴走であることは間違いない。後で原因をきつく問いただすことにしよう。

彼の謝罪は理解は出来るがという風に曹操は顔を顰（ひそ）めて再度言う。

「あなたの気持ちは分からないでもないけど、これ以上互いが詫び続けたらきりがないわ。今回の件は叱責だけで済まして、話が進むようにお互い手を打ちましょう。」

「……………承知いたしました。」

彼女の言葉に自分達の死が回避されたことへの大きな安堵の念が生まれ、

仁ノ助は感謝の意をたたえてゆっくりと頭を挙げた。

軍師がこちらを非難するように目を向けているのに対しばつが悪くなる。

しかし既に先ほどの話で互いの失点を認め合つて終わりとしたのだ、彼女の抗議はここで受けることは面子上ふさわしくないだろう。

今は幸運にも曹孟徳の陣営に招かれた理由を聞くことが先決である。彼は曹操を見つめて言葉を慎重に選びつつ問うた。

「して、此度私らがここに呼ばれたのは如何様な理由があつてのことでしょうか。」

「順を追つて説明しましょう。我らは今漢王朝の勅命をうけて黄巾討伐に向かつて出撃した、左中郎将の皇甫嵩・右中郎将の朱儁の連合軍の援軍として潁川に向かつているところよ。」

黄巾賊が主に集結している地点は曹操が向かっている潁川と冀州である。

史実において皇甫嵩と朱雋の連合軍が乱の序盤に辛酸を舐めていることから、

敵はかなりの数を持ち、または中々に頭が切れる将軍が居るらしい。事実その通りで黄巾側の将軍は波才といい、

朱雋の軍隊を数の暴力で敗走に陥れた後に皇甫嵩が立て籠もる長社を包囲するに至っている。

ただ仁ノ助は曹操が女であるこの世界に対して認識を改めており、必ずしも史実通りに事が運ぶとは限らないとして、

波才以外の人間が軍を指揮していることもありうると考えていた。其れはともかくとして、この軍が潁川の波才率いる賊軍を破ることを目的として行軍しているのは曹操が今語ったとおりだ。

途中途中に現る賊軍の一派を討ちながら行軍しているのかもしれない。曹操はさらに言葉を続ける。

「軍の進軍経路を確認していきながら進軍していると、予め放っていた細作から報告があったのよ。『前方にて賊軍と何者かの抗争あり』と。」

あの時の戦闘を思い浮かべる。

細作は見通しが良い所からこちらを発見したのであるう。

自分達はそれに意識を向けるほど余裕が無かったわけだ。

というより、ここで曹操軍と邂逅することが彼にとって予想外だったのだが。

「それで騎兵隊を先発隊として、賊軍を奇襲しその落ち伸び先を突きとめよと命令させたら、あなたたちを見つけたの。」

「……………ご説明ありがとうございます。しかし敢えて申し上げ

げますが。私達を保護したらそのまま解放して、行軍を再開するのが普通ではないでしょうか？」

彼の疑問を溶かすように曹操が口を吊り上げて応える。

「数十人の賊に僅か二人で拮抗せしめたのよ？これは中々の武者でなければ出来ないことだわ。」

良い獲物が手に入ったとばかりに曹操の目に若干の光が見える。

挑発的でいてそれでいて淫靡に見える目が、だからこそ危険に感じてしまう。

世界が違えど曹孟徳という人物に違いはないと彼は確信する。

「天下を歩む我が軍は兵の数は多けれど、それを指揮する強者が少ない。乱の前も荀？のように傑出した人物を掘り起こしているけど、それでも少ない。」

「.....」

やはりというかなんというか、猫の耳を模した服を被っている少女は荀？であるらしい。

曹操に褒められていると感じて頬を赤く染めている

それに捉われることなく、彼には次に曹操が話す句がなんであるかはつきりとわかってきた。

その彼の予想を当てるように曹操が事の答えを言った。

「喜ばなさい。あなた達の武を見込んで、我が軍の客将として扱ってあげるわ。」

「なっ、この変態共をですか！？」

無視を決め込んでいた荀？が大きな驚愕を浮かべて曹操に言う。

汚い吐瀉物のように蔑んでいた者達が急に仲間となってしまうのだから無理はなかるう。

「桂花、これは私が決めたことよ。なによりあなたにとっても仕える駒が増えるのは悪いことではないでしょう?」

「それは確かにそうですが・・・」

「ならば納得しなさい。憎悪と嫌悪感に捉われては軍師としての理性を失ってしなうわ。私がそれを許すと思つて?」

「・・・いえ、決して許さないでしょう。出過ぎたことを申し上げました。お許しください。」

曹操に諫められて荀?が頭を下げた許しを請う。

曹操はそれに「うむ」と応えて表を上げさせた。

荀?が頭を上げるところを恨み骨髓に徹す如き仇であるかのように睨みつけていた。

内心ではあらん限りの罵詈雑言を述べて呪詛を送っているのだろう。正直こちらは恐ろしい歓迎を喜ばしく受け取ることはできない。若干顔をひくつかせながら仁ノ助は曹操に伝える。

「・・・非力な身ではありますが、連れ共々謹んで参軍させていただけます。」

「それでいいわ。天下に覇道を敷く軍に加えられたことを光栄に思いなさい。」

曹操が彼の言葉に満足そうに頷く。

(人物マニアであることも史実どおりとは、難儀しそうだな。)

目を閉じて礼をする彼の内心を露知らず、曹操は思い出したかのようになんと言葉を続ける。

「そういえばまだ名前を聞いていなかったわね。あなた、名は？」
「こちらに伏せる者は鍾琳と申し、私は辰野仁ノ助と申します。・・・
真名はございません。」

曹操を初め四人（詩花は気絶中）は彼の名に不思議なものを見るような表情をし、
次いで真名を持っていない事実には驚く。

真名は例え皇帝であっても神聖にして不可侵なくらい重要なものであり、

これを人に預けることは魂を預けることも同意義である。
それを持たぬ仁ノ助はその名前もそうであるがこの世界では非常に珍しい者である。

騎兵隊を指揮していた女性が目を怒らせて仁ノ助に問い質した。

「貴様ああ！！華琳さまに預ける名がないとはどういうつもりだ
ああああ！！！！」

「落ちて着け姉者。態々剣で斬るようなことではないだろう。」

大剣の柄を掴んでこちらに詰め寄ろうとする女性を。

隣に立つ女性が冷静な声で諫め、詰め寄りを止めようと後ろから抑える。

曹操はそれに慣れているのかそれには目もやっていない。

仁ノ助は目の前で突如怒る女性に無視を決め込んで言葉を続ける。

「・・・ですので、私を呼ぶ時は『仁』とお呼び下さいませ。」
「・・・真名を持たないならば仕方ないわね。ここは妥協してあげます。」

真名の代わりに名を一字だけで呼ぶように求めた彼に、

曹操は仕方ないとばかりにそれを受け入れた。

主の受け入れを聞いて黒髪の女性は怒り出すのをやめて、ゆっくりと再び主の隣に立つ。

それを自然な様子で受け入れた曹操は言葉を続ける。

「では仁、あなたには春蘭の部隊に一時的に入ってもらいます。その後の活躍次第では隊を率いさせることも考えないではないわ。」

「ご期待に必ずやお応えしましょう。してそのお方とはこちらの・・・？」

仁ノ助がちらりと黒髪の女性に目をやって問う。

それに答えるように女性が胸を張り、誇り高く答える。

「私こそが曹孟徳一の猛者、夏侯元讓だ！」

「姉者が度々迷惑をかけてすまない。私は夏侯妙才という。」

曹操の隣に立つ黒髪は夏侯惇、隣の水髪は夏侯淵なのか、随分仲が良さそうな姉妹だ。

最早驚きを表さない仁ノ助は二人に向かい敬意を表す礼をする。

先ほどまであちらは怒ってはいたが今からは時に寄っては背中を預けることとなる。

信用がならないといえども表面上は納得する度量があるらしい。

しかし反対側に立つ軍師はそうではないようだ。

二人が名乗ったのにも拘らず口を噤（つぶ）んで沈黙を保ち、まだ睨みを利かせている。

だが自分だけ名乗らないというのもまた無礼と思ったのか、酷く不機嫌な声で本当に不承不承という風に言った。

「・・・荀文若よ。」

王佐の才はもう話すことは無いとそっぽを向く。

これで全員が名乗ったことになる、一人は未だに気を失っているが。

「ではそろそろ進軍再開といきましょう。潁川まで気を緩める事を無いようにせよ！」

「「「「はっ！」「」「」」

四人はそれを聞いてすぐさま行動に移った。

夏侯惇の後を追うように仁ノ助と夏侯淵が続いて本陣を出る。

荀？は全軍に出立の命令を出すために遅れて本陣を出た。

そして本陣内には悠然と佇む曹操と、未だに気を失って口から泡を吹いている詩花が残された。

「……………えっ。これ私が面倒見るの？」

第二章：空に手を伸ばすこと その参（後書き）

会話の続け方にかなり悩み、

その結果手抜きのような形になってしまった・・・。

初心者つぷりを露呈する形となってしまったことが恥ずかしいです。

補足としては、当時の一般的な軍隊の補給原理は、すなわち現地調達でした。

簡単に言つと周辺の村々からの徴収・略奪等になります。

軍隊の士気確保のために略奪をすることは、

三国時代でも、またはポエニ戦争あたりの古代ローマでも見受けられていました。

今回は曹操軍が黄巾族と戦つこととなります。

第二章：空に手を伸ばすこと その四

燭台に乗った蠟燭（ろうそく）の小さな光が暗い部屋を僅かに明るくしている。

灯す光は机に広げられた何かに地図に向かって顔を寄せて苦悩の皺を見せる熟年の二人の男の表情を照らした。

部下達には決して見せない濃い疲労の色を見せて囁きあう。

「……既に一月経っている。敵陣の包囲を崩す余裕も心なしか日に増して小さくなっている。」

「どこかの機会で均衡を崩さねば我らは自滅するのみ、であるか。」

二人の男は自分達が置かれている現状をよく理解していた。

長社が黄巾賊によって包囲されてから既に一月が経っており、その間城壁の外から寄ってたかる賊軍に城壁の上より弓を浴びせたことはあれど、

敵軍はこちらの兵糧が尽きるのを待つように突撃を仕掛けてこない。攻城戦は基本的に守るほうが有利に働く傾向がある。

『孫氏兵法』によると、城攻めにおいてはまず攻城戦の準備に三ヶ月がかかり、陣地設営にも三ヶ月がさらにかかるものであり、

そこまで時間をかけても攻撃態勢が充分に出来ずに早合点して突貫してしまつたら、

貴下の兵の損害は著しいものとなる。

それに城攻めというものはその特性上攻撃側の兵が多くなければ成功しにくい。

両陣営のうち、確かに黄巾側の兵力の方が多いのではあるが、

それでも数は十万といったところで二人の連合軍は現状で三万五千ほど、

城攻めを良く成功させるにはまだ足りないといったところである。結局賊軍は一月のうち何度も攻撃しては撃退されている。

賊軍の指揮官の波才は黄巾賊にしては頭が切れる部類に属する將軍であるが、

この戦では一貫して力攻めに頼っているところから戦術に長けた者ではないらしい。

一方で、自軍は結局はただの烏合の衆であるという特徴を良く見切っているともいえるが。

「賊軍共もいい加減痺れを切らして無理にでも攻めてくると思ったが、思いのほか我慢強い。」

「だが所詮は兵法を諳（そら）んじること出来ぬ赤子同然、機会が来ればすぐにでも討ち果たせるわ。」

「その赤子に貴様が敗北したことを忘れてはいまいか？」

「覚えているわ。貴様こそ、老碌（ろろく）しないように気をつけろ。」

憎まれ口を叩きあいながらもそこには長年競い合ってきた者のみに通じる絶対的な信頼感があった。

如何に不利な戦であろうと、將軍とは決して最期まで諦めをしないことだ。

それをこの男達は熱く戦意で滾る目線で語っている。

老碌と称された男は皇甫嵩、赤子に負けたと罵られた男を朱儁という。

皇甫嵩は何か閃いたかのように蠟燭の火に目をやって問う。

「朱儁よ、確か賊軍は平野に陣を敷いていたな？」

「ああそうだ。見事なまでに素人の付け焼き刃に過ぎん陣であった。何か策でも？」

朱雋が賊軍を貶して問い返す。

皇甫嵩は蠟燭の火から目を離さずににやりと笑う。

「斉国の田単は包囲された城において、密かに城に開けた穴から角に短剣をつけて尻尾にたいまつをつけた多量の牛を放った。

尻を焼かれた牛は怒り狂い、敵陣を混乱に陥れると城に籠っていた自分達も出撃、包囲陣を見事突き崩し敵将も討ち取ったという。」

「なるほど………火刑か。悪くは無い。」

遙か昔の中国の戦国時代における田単の火牛の計をなぞったそれは、現状を一気に逆転させるのには悪くない手段である。

まして相手が農民上がりの賊軍となれば、一気に燃え盛る火を見るだけで恐慌状態となるであろう。

朱雋は獰猛な笑みを浮かべて皇甫嵩の言葉に賛同する。

皇甫嵩もまたこれまでの屈辱を晴らさんとはかりに戦意を燃やしている。

長社に包まれる戦場の霧は、一気に晴れようとしていた。

曹操軍が進軍を続けていくと、先に放っておいた斥候が息を切らして報告してきた。

曰く、長社は包囲されており、賊軍の数は数万を優に越えるのと。

彼我の戦力差が十倍以上もあると知った荀？は曹操に対し、

「通常の野戦では数の暴力により自軍が飲まれる、よって夜に紛れて敵軍を奇襲すべし」と提案した。

曹操はこれに特段の異を唱えずに採用、

軍の前線に夏侯惇と夏侯淵を配置して機会を見て襲撃をかける心構えでいた。

仁ノ助と鍾琳は両名それぞれの軍に組み込まれており、

仁ノ助は突撃隊の最前線にて夏侯惇のすぐ後ろから敵陣に切り込むこととなっている。

鍾琳は武芸に通じていなくは無いがそれでも馬上槍をするにはまだ実力に不安が残るため、

第一陣が切り込んだ後に夏侯淵と共に第二陣として切り込むこととなった。

なお、鍾琳の陣営配置には軍師荀？の猛烈な推薦があったことを補足しておく。

余程近くに置かれると嫌だったんだろうな。

長社に着くまでは後半日もかからない距離まで彼は来ている。

到着するころにはかなり夜もふけているだろうから、

到着直後から夏侯惇率いる第一陣と共に突撃するだろうな。

その間まで彼は自らの戦意の構築に勤める事としている。

「お前の剣は随分珍しい形をしているな。」

自分の隣に馬を寄せて男が聞いてくる。

夏侯惇の副官でもあり、自分より歳は六つ七つは若く見える男は興味津々といった感じで自分の腰に差されたクレイモアに目を向ける。彼の名は曹仁といい、同じ『仁』の文字を持つ仁ノ助に親しみを寄せている。

仁ノ助もそれには満更でもない様子であり、

曹仁の興味に火をかけるように鞘からクレイモアを抜いた。

「ほおおおお………」

感嘆の声を上げて曹仁は無骨に光る刀身を見つめる。

若々しい反応に笑みが毀れてつい口が饒舌となってしまう。

「双手剣の部類では意外と軽いほうでな、片手でも充分に振れるもんだ。」

「十字に交わされた剣というのは見たことが無いなあ………」

「まあ、お前の場合はアレがあるからな………」

仁ノ助は苦笑いを浮かべて軍の先頭で馬を進める夏侯惇を見る。

その背に担がれた幅広の大剣、七星餓狼はそれを背負う物の力強さを象徴している。

(比較対象があればじゃ形無しだよ。)

無論クレイモアとて充分に強力な武器である。

片手で両手剣を振るうことにも強靱な体が必要であり、それが出来る仁ノ助は充分に鍛え抜かれたことが分かる。

ただし夏候惇も七星餓狼を片手で振れる。
あれは見た目に反せず非常に重量がある武器であり、
一振りするだけで轟音を立てて空気を震わす業物である。
クレイモアが人間を両断するに留まるのに対して、
この武器は人間の肉体に当たってしまえばたちまち肉片となって体
が四散することだろう。
武器が起こす結果が違うのであれば比較の仕様も無い。

「言っておくけど、アレは例外中の例外だからな。真似しようとするなよ?」

「無理ですって。俺はまだ人間でいたいし。」

さりげなく夏候惇を人間として扱ってないことを露呈しつつ、
曹仁は自分が片手で担ぐ戟に目をやった。
詩花が持つそれよりも二寸は長く、また武器の質も良い。
敵の血を多く吸うことになるうとも簡単には刃の通りを鈍らせない
だろう。

「ふふふふ、私の七星餓狼が血に飢えているぞ………!!
ああ戦が待ち遠しい!!!」

「時に落ち着け將軍、まだ六刻（12時間）かかるぞ。」

早くも血に飢え始めている夏候惇を諫める。

夏候淵はいつもこんな感じで止めているのだろうか、しかも愛を持
つて。

自分とは違う次元に生きる人間達が次々と出て来る現実に対して早
くも疲れてくる。

その点、曹仁はとても普通な人間で安心する。

彼にはこの思いが分からないだろう、いや分かってほしくない。

そんな思いを抱きながら曹仁を生暖かい目で見る。

「・・・がんばれよ。」
「？」

首を傾げる彼の姿は歳相応の若々しさを見せており、思わず可愛くみえてしまったのは内緒である。

「・・・この期に及んで一体どういっつもりだ？」

日が夜に差し掛かっている。太陽の赤光が仄かに空に血の色を想起させる赤を残している。

嵐の前の静けさを醸し出す長社の黄巾陣営。

その中で波才は張角の使者として使わされた黒ずくめの服を着た男を睨む。

その男はこちらの問いを全く気にしていないかのように、これまでの略奪で奪ってきた品々に興味深そうに、ふてぶてしく目を向けている。

「どういっつもりもないだろう？態々俺が出向いてやったのに可笑しな奴だな。・・・うん？これは・・・避妊具か？」

「・・・それはただの玩具だ。で、さっさと俺の質問に答える。何しにきた？」

親切にも略奪品の解説をする男に思わず微笑し、
黒ずくめの男は手に持った愛玩具を弄びながら面白可笑しく答える。

「ただの伝令だよ。よっぽど重要らしく、一介の馬鹿な賊を介せず
に俺を遣わすほどだ。予想は出来るだろう?」

元山賊の自分自身を馬鹿にしているような気がしてむかむかと腹が
立ってくる。

男はそれを意識してかしないでか話を続ける。

「『三つ子のあやしは計画通りに進行中』だとさ。いやあ、凝った
暗号ですこと。」

「・・・っ・・・」

暗号を言うあたりからから自分をみつめてきた男の視線を見て、
先ほどまで溜めた怒りが沈んで背筋に冷や汗が流れる。

茶化するような口調とは裏腹に視線が完全に冷え切っている。

もしかしたら先ほど言った伝言の内容を粗方分かつているのかもしれない。

だがここで動揺したらこいつに何かを悟られてしまう。

冷えた視線を熱するように波才は威勢を取り戻して睨みつける。

数秒の間、視線は僅かでも離れなかったが、

黒ずくめの男が波才の努力に諦めたかのように笑みを零すと言葉を
続けた。

「まあ俺は伝えることは伝えたいし、すぐにでも広宋に戻るとしよう。
では波才殿、後は委細よろしく。」

二の次を言わせないように矢継ぎ早に言葉を出すと、
黒ずくめの男は飄々とした態度を崩さずに本陣の幕をくぐって外に

出た。

そのすぐ後、馬が駆ける男がしたことから本当に直ぐ帰ってしまったらしい。

内心に溜め込んだ怒りと同様に吐き出すように溜息が毀れた。

（なぜあんな奴を重用するのか理解が出来ませんよ、張角様……）

彼の脳裏に自身が崇拜する人物が浮かび上がる。

その者が持つ気性あの怪しげな風貌を持つ男を受け入れるとは到底思えなかった。

風貌もさることながら、その内心も彼には見えてこない。

常に自分の心の深奥を覗き込んでくる視線にはかなり耐えかねるものがあつた。

しかしいつまでもそんなイヤなことを気にしている場合ではない。

頭をぶんぶん強く振って波才は現状打開の戦術を編み出そうと苦悩する。

既に自軍の兵達は攻撃が進まないことに苛立ちを募らせており、下手を打てば暴発させてしまい自分すら危つくなる危険があつた。

苛立ちを消すために時折官軍に攻撃を仕掛けているが、相手方はひたすらに防御を固めており攻め落とすにはかなりの犠牲が伴うだろう。

また、そろそろ糧食も心細くなってくる頃合である。

進軍の度に略奪と陵辱を横行してきた彼らは、

一月半でも足を止めてしまうと食糧不足が発生してしまい、軍隊全体の補給が滞ってしまう致命的な弱点を供えていた。

これを避けるためには城を攻め落とすか若しくは諦めて周辺の村へ行くしかない。

しかし蒼天の獣達を目の前にして背を向けるとなると、

黄巾の信奉者達からの圧力が厳しくなり、やはり自身の命が危うく
なってしまう。

どうあがいても八方塞に見えてしまう現状に波才は頭を抱える。
そして悩んでいるうちにまた日が過ぎていくことの繰り返しをこの
一月は続けている。

その例に漏れず、波才は再び日を跨いで策謀することを決めた。
既に昼のうちから自軍に危機が迫っているとも知らずに。

たいまつを持ってゆっくりとした歩みで陣外を見張る。

波才軍陣営を哨戒する兵は大層不満そうな顔で職務に就いていた。

かれこれ一月は女も抱かず、酒も満足に飲み干せやしない。

頭はいつたい何をしているんだ、早く攻撃しないのかと不平不満が
ぼろりと毀れてくる。

表で不満をいえないのは、不満をいつてがために軍規を正すために
見せしめとして処刑された奴を知っているからだ。

しかし見えないところでは誰もが波才の事を快く思っていないのは
明らかである。

この哨戒をする男も同じ口で、この半月は何度も陰口を叩いている。
退屈の余り欠伸が出そうとなり、目をつぶって大きく口を開ける。
その瞬間、ひゅんと風を切る音が走って賊の口の中で止まった。

口腔の奥に止まった衝撃と違和感に強く驚いて声を出そうとしたと
き、

二つ目の音が今度は男の喉下に刺さる。

声帯を見事に射抜かれた男は口の奥から血反吐を毀れだし、どろりと溢れ出す血を止めようとして喉元に手をやり、さらに追い討ちをかけるように走ってきた三つ目の音が頭を刺すと、糸が切れた人形のように血に倒れ付した。数秒経つても男が起きてこないことを確認すると、ゆっくりと黒影から数人の者達が走り寄ってくる。

「よし、手筈通りにやれ。」

走り寄ってきた男達の中から一人が囁くと、全員が音を一切立てないように黄巾賊の陣営に侵入していく。どうも入って二町（220メートル）もしないとところに兵糧を蓄えている場所があるらしい。

よくもこんな馬鹿なことした連中に自分達は追い込まれたものだと思いながらも、

男達はゆっくりと懐から水筒を取り出す。

しかし中に入っていたのは火の勢いを増す油であった。

彼らはそれを兵糧や天幕に範囲が広がるようにかけると、

近くにあつた棒を拾い上げて篝火から火を灯した。

一瞬火が強くなり男達の表情が見える。

鬼気迫つた様子のそれは、これまでの恨みを晴らすかのように皺を寄せており、

目には簡単には消えそうにない復讐の炎が映り出されていた。

男達はそれぞれ油をかけた場所に火をつけると、

火が広がらないうちにその場を後にしていく。

他の場所にも火をつけにいくのであろう、男達は振り向くことを一切しなかった。

「夏侯惇將軍。夜空が燃えているぞ。」

「ああ分かつている!!!」

仁ノ助は長社まで残りは二里（ 8キロ）もない所まで彼らは足を進めている。

曹操軍第一陣の行軍の足は若干速められており、暗い夜空に一際目立って輝く赤い光の根源に向かう。

この不自然なまでに輝く光はどうみても原因は炎である、それもかなり勢いが強く燃えているのが遠目からでもわかる。

一里にも近づくと敵陣に起きている事態が明白となる。

陣地のあちこちから燃え滾る炎が地を舐めて這っており、

天へと灰色の煙が何十もの筋を出して上がっている。

その炎の中から逃げ出そうと何万もの黒い影があちらこちらへと右往左往している。

皇甫嵩立案で朱雋実行の火計は見事に炸裂したのである。

その結果惹起されたのは賊軍が混乱の極みに陥り、

包囲された連合軍は士気が轟々と高まって反撃の一撃を痛烈に決めたことだ。

あの調子では官軍により数千以上の首級があがることだろう。

哀れ勢いが強まる炎に焼かれ悲鳴を高らかに大地に響かせる一般賊兵とは対照的に、

賊軍本陣から組織的に一つの方向へと伸びていく列があった。

三十六計逃ぐるに如かずとばかりに火の手魔の手から逃れようと一心に駆けていくその人の列は、

それ故に考える暇がなく立ち往生している賊と比較すると不自然であつた。

「みたところアレの先頭に敵将と見たほうが良さそうです、將軍！」

曹仁が顔に戦意をたたえて大きく声を出す。

戟を握る力が強くこめられているのが肩の緊張から分かつた。

地を素早く駆ける馬にさらに鞭を入れるが如く、

夏侯惇が自軍に向かって怒号を叫ぶ。

「者共おおおお！！！！我に続いて突撃せよおおおお！！！！！！」

曹操軍第一陣に選ばれた猛者達が魂の底から雄叫びを上げて將軍の言葉に答えた。

自らの本懐を遂げるがのように夏侯惇は我先にその列に向かって突っ走る。

仁ノ助は駆け馬に鞭を打ちながら眼前に広がる有象無象の獲物の中から、

自らが狩るべき対象を冷静に選び抜く。

いくら切れ味が良い武器であろうとも油脂がのってしまえば鈍ってしまう。

なるべく最小限の敵のみを殺しながら敵将に向かわねばなるまい。

「曹仁、俺は先に駆けるぞ！！」

「副官を差し置いてそれはない……ってちよつとおっ！！」

本来夏侯惇の背中を守る立場にある曹仁は突込みを入れるも、

仁ノ助は二月以上も乗っている駄馬に鞭を入れてさらに早く駆けていった。

彼はこの戦で馬を変える気ではいるのだろうか、
本来以上の力で走らされている馬は哀れのあまり口から涎を垂らしている。

敵との距離が四分の一里（1キロメートル）となったあたりから、
目に節穴でも開いていたのか漸く賊軍が新たな敵にどよめいている
のが分かってきた。

この戦は相手のさする功名として頂けそうである。

青臭くさらに不健康な血をさらに大地にぶち撒けようと、
夏候惇と仁ノ助は待ちきれんとばかりに己の得物を抜く。

目の前を必死に逃げる賊はちらりとこちらを振り返るとさらに足を
速める。

中には剣や糧食を手放して足を動かすものも居る。

それら全てを餌食にしてくれんと、遂に曹操軍が黄巾の軍列に食い
込んだ。

真っ先に武器を振るつたのは前を行く二人と半瞬遅れた曹仁である。
七星餓狼の勢いは凄まじく、脛の裏の赤い脳みそすら剣に当たった
瞬間に八方に吹き飛ぶ。

クレイモアが振るわれるたびに体の一部を切り落とされる賊が喚き、
その悲鳴を黙らせるたびに後続の騎兵隊が戟と槍、剣を振るい血で
悲鳴を飲み込ませた。

右に左に得物を振るって賊の半身をただの挽肉にしながら夏候惇は
勢いを止めずに直進する。

不運にも立ちほだかる人の群れを踏み潰し斬り倒して進む姿は猛将
の名に恥じないものである。

視界の端にそれを度々入れながら仁ノ助はひたすらに馬を駆けてい
った。

賊の貧弱な、またはそれなりに鍛えられた筋肉を断ち切ることは容
易であったが、

何分その数と視界の前から勢い良く飛んでくる血飛沫と肉、遂には脳みそを零しながら半分に分解した頭部が飛んでくる有様である。

余りにも馬鹿力で突っ込む馬鹿が彼の気持ちをつんざりさせていた。まだ抵抗する気がある者中にはおり、

横から急に飛び出してくる槍や剣が馬の体に当たらないように、右手でクレイモアを掴みながら左手で手綱を豪快に操る。

しかしそれでも馬に掠り傷が小さな刺し傷が徐々につき始めていることは変わらない。

心臓が破れんばかりに息を荒げる馬は直ぐにでも死んでしまいそうな勢いだ。

それに決定打を決めようと遂にやけくそに投擲された剣が偶然彼の馬に深く刺さった。

痛みで絶叫しながら横に倒れる馬の手綱を無意識に放し、素早く鞍につけた呉鉤を攫い、

回転しながら受身を取った仁ノ助の前に青筋を立てて槍を構えて突っ込む賊が現れる。

こちらを運の無い將軍の一人と捉えたのか怒りを滾らせて狂声を挙げながら槍を突き出した。

仁ノ助は突き出された槍の穂先の近くを反射的に掴むと、クレイモアを振るって槍を半ばから両断した。

自らの得物を潰された賊は驚愕の表情をたたえて、次いで返す刃で頭部を横から振るわれて鼻から上の表情を地面に落とした。

(クソ、早く賊の馬を奪わんと・・・・・・・・っ！)

勢いのままに進む曹操騎兵隊に目をやり、

それに合流しようとして賊軍から馬を持つ者を暗闇を焦がす大地を見渡して探し始めたとき、

半町（ 55メートル）もしない所に一人だけ賊軍にしては豪華な衣装に身を包んだ男が馬に乗ろうとしたのを見つける。

それを見た瞬間仁ノ助は敵軍の先頭に行く物は將軍の囿ではないかと直感的に考える。

クレイモアと呉鉤をいっぺんに左手で持ち、

外套のうちに括りつけた投げナイフを一本抜き、

助走をつけてそれを投げながらあてずっぽうにその者に呼びかける。

「おい波才！！！！！！」

「っ！？！？！？」

鞍に腰掛けた男が勢い良くこちらを振り返った時、

力強く投げられたナイフが馬の後ろ足を一本断ち切った。

突然無くなった平衡感に驚いた馬が横倒しに崩れて波才が地面に投げ出された。

それに止めを刺そうと仁ノ助が呉鉤を右手に持って疾走した。

波才が自分に迫りくる二本の剣に目をやると、

足元の地面に落ちている二本の剣をむんずと左手で掴んで素早く立ち上がり、

剣の柄を右手で持ちながら仁ノ助の胴体に向かって投擲する。

飛来した剣は風を勢い良く切りながら迫るが、

胴体に刺さる前に油脂が刃全体に広がった双手剣により弾かれる。

金属が碎かれる音がして剣が

波才は剣を右上段に構えると仁ノ助に向かって走っていく。

飛び掛る火の粉は自分で振り払うために剣を持って疾走する。

「っらあああ！！！！」

両手で柄を掴むと得物の距離に入った仁ノ助に向かって勢い任せに振るっ。

波才自身が知らぬことに生命の危機に瀕した彼は人生で最も冴えた一撃を繰り出していったのだ。

しかしそれを嘲笑うかのようにクレイモアの刃先でそれを防いだ仁ノ助は、

向かってきた波才の体の右後ろに向かつて地を飛ぶ。

火の粉が突然視界から消えた波才は口を開けて啞然とする。

しかしその一瞬の啞然により背中ががら空きとなり剣を持つ力を緩めてしまった。

跳躍した仁ノ助は波才の右肩と首の間から左胸に向かつて呉鉤を真っ直ぐに刺した。

そして素早くそれを引きながら、抵抗が弱まった剣を弾いてクレイモアを返して波才の首に向かつて走らせる。

力が抜けた波才のそれは首に迫りくるそれを止める手段を持ち合わせていない。

振られたクレイモアによつて肉が裂けて骨を絶ち斬られ、途中で途切れた頸動脈と静脈から赤と黒の噴水が吹いて鉄の臭いが増した。

飛んでいった首は回転しながら宙を舞つていき、

仁ノ助は上から落ちていくそれを非常に器用に呉鉤の刃端にぶすりと刺す。

乱戦となつて辺りから沸いて出て来る賊の攻撃をひらりとかわし、左手に持つクレイモアでその賊を威圧するように体の動脈が通る辺りを狙い振るう。

未だ鈍りを生じない刃先が賊の体を裂き血が噴出する。

思わぬくらい血液が溢れ出すことに悲鳴をあげる賊を掻き分けて主を無くしてぼつりと佇む馬を見つける。

仁ノ助はその鞍に乗つてすぐさまに鞭を入れると、呉鉤に刺した男の頸を高々と上げて叫んだ。

「敵將波才、討ち取つたりいいいいいい!!!!!!」

「やはりこうなるか……。」

あれから黄巾賊は総崩れとなった。

首領を討ち取られた彼らを指揮する代替わりは存在せず、

勇気あるものが代わりを務めようとするも曹操軍から連合軍から刺し込まれる刃の数々、

飛来する矢の数々に寄って次々と命を落としていった。

曹操軍と連合軍はさらに戦果をあげんと追撃の手を苛烈なものとし、結果的に首級数万が地に倒れ伏すこととなったのだ。

その惨状を見渡しが良い崖から眺めていた黒づくめの男は、

先ほど波才と話したときの飄々とした口調を消してつぶやく。

これがこの男の素であり波才に対してのはただの一時の戯れだったのっだろう。

冷ややかに現実を見つめ直す男は見飽きたものを見る暇が無いのか、馬を返して鞭を打った。

（これで乱の趨勢は決まったも同然、後は如何にして三人を逃がすかだ……。）

ここで散った数万の元農民の命など初めから興味など無かったのか、彼は自らが寄せる広末にいる三人の主を考え始める。

走り去った彼の後ろでは猛火の燻りが未だ白煙となって残り、朝焼けをたたえている空を不安気にさせていた。

第二章・空に手を伸ばすこと その四（後書き）

改めて自分が書いてきた話を観ると、
表現が単一化、または語彙が少ないことがわかってきた。

まだまだ修行が足りないようですね・・・。

第二章：空に手を伸ばすこと その五 エロ表現有り

火の手が僅かに燦る大地には濃厚な鉄の臭いが混じっている。血液に含まれる鉄分と金属が熱して溶けた臭いだ。

その上を興奮冷めやらぬ格好で闊歩し、堂々と城に入る者達は城内から受ける喝采に胸を張り、顔や服装に付いた血を拭うこともせず笑顔たたえている。

「良い機会に援軍に来てくれた。感謝するぞ曹操。」

打って変わった城内、領主らが常は政談をする広い部屋にて、無精ひげが生えた顔を朗らかにして皇甫嵩が目の前で礼をする曹操を讃える。

自らの策が大きく成り、加えて曹操による追撃でさらなる犠牲を賊軍は強いられた。

最早乱の趨勢は決したも同然、後は勢いのままに駆逐するのみである。

「いえ、我が軍は皇甫嵩將軍と朱雋將軍の計に乗じたまでです。この戦の大功はお二人にこそございます。」

漢王朝最期の名将とまでされた皇甫嵩に対しては、如何に傲岸な曹操といえども素直に敬意を表している。

「謙遜するな。賊軍の將軍たる波才を討つたのは卿の将であろう、我々の兵共が皆そういつておる。」

「恐縮です。」

朱雋の言葉は確かにその通りである。

仁ノ助は見事に波才を討ち、結果としてこの戦の第一勲となった。客将の身でありながらこれほどの活躍をしたものが中原博といえどもそうは居ないだろう。

曹操は思わぬ拾い物をしたことに中々の喜びを感じていた。

この時点で彼女は仁ノ助を手放す選択肢を抹消していたといっている。

実はこの時点で朱儁も中々の拾いものをして先の乱戦で十分にそれを活用したのである。

その者とは、呉郡・富春の生まれである孫堅文台、後の呉の基礎を作り上げた女傑である。

朱儁はこの手駒を遊ばせる気は毛頭なく、今後も活用していく方針でいた。

「・・・して曹操よ、貴様はこれから何処へ向かう？俺たちはこれから汝南へ向かうが。」

正史においては、汝南から潁川にかけての黄巾賊は皇甫嵩と朱儁旗下の軍隊により壊滅する。

また、両将軍・両軍隊共に量も質もまだ充実しており、賊軍相手に遅れをとることはないであろう。

「我が軍はこれより黄巾賊追討にうつり、豫州平定を目指し進軍します。」

史実では曹操の活躍はこれ以降なく、後に功績に寄って済南の相となって平穏な統治を実現することとなるが、

この世界ではさらなる追討を行うつもりであるらしい。

これには大きな理由がある。

豫州刺史である王允が幕僚らを率いて賊軍を打ち負かしており、

それに追われた形で西華に集結しているて彭脱軍を討てば豫州平定が成ってしまうのだ。

賊軍残党も残りは二・三万といったところであり、戦術と天を見誤らなければ現存兵力で王允と合流した後でも制圧可能と判断できる。

よって賊軍討伐と自軍勢力の拡大を狙える同時に狙える、一石二鳥という事なのである。

「ふむ、ならば同じ目的というわけだな、しばらくよろしく頼むぞ。」

「はっ、私にお任せあれ。」

自信満々といった風に若き霸王が朱儁の言葉に頭を垂れて礼をする。口元には彼らには見えないように野心の笑みを浮かべており、まさしく乱世の梟雄と評されるにふさわしいものであった。

城内と城外では戦の後始末に追われる雑兵がひっきりなしに作業を
しており、

大地から炎で焼かれて焦げた肉体と血の臭いが誰もいない城壁の上
まで伝わってくる。

いつまで経っても慣れそうにないその不快感に、

詩花が手すりに肘をつけながら顔を顰（ひそ）めた。

乱戦の夜を切り抜けたにしては浮かない顔をしている。

それは自分の未熟さを責めているかのような表情であった。

「ここに居たのか。てっきり何処かで吐いてるかと思ったが。」

言葉に嘘偽り一つ無くデリカシーの欠片も無い事を言いながら仁ノ
助が城壁に上がるための階段を上ってきた。

顔には静かな平穩さを取り戻しており、

否応なく匂ってくる死臭がなければいつも通りといった感じである。

「そんなに柔な奴だと思う？」

「これを見て吐いても、別段柔だとは思わないさ。」

目を城外にやりながら彼は言う。

視線の先には賊となっても自らのために家族のために必死で戦い、
その甲斐虚しく刃傷を負って死に矢が刺さって死に地を失って死に
炎に焼かれて死んだ民草が居る。

時勢の波に必死で抗っても自らの生を肯定しない現実を考えれば、
成程そんな非情な現実に吐き気を催すのも不思議でない。

「ま、そんなことじゃないんだけど……。」

軽く息を吐いて投げやりに言葉を濁す。

このような現実がいつか生じるのは頭で既に考え付いていたことだ。その中で自分ももがくことになることも。

今更だといわんばかりに彼女は彼から視線をそらしている。

いつも気丈でいて明るい彼女が悩んでいる姿を見るのはかなり珍しい。

会話をすれば悩みをいくらか晴らすことも出来ると仁ノ助は彼女に近寄って話しかける。

「……俺でよければ、助けになる。」

言葉少なに語る彼に若干可笑しく感じてしまい微笑を浮かべた。

視線をそらしたまま背中を城壁に預け膝を抱えて座り込む。

その彼女の横に仁ノ助は片足を投げ出しながら座った。

小さく、それでもはつきりと伝わるように詩花が語る。

「……でっかくなつたなあ、て。」

「背丈は変わっていないさ。」

「まあ、ある意味背丈みたなものなんだけどね……。」

冗談めかして空気を軽やかな方向へ変えようとする彼とは対照的に、詩花の表情は先ほどから曇った笑みを浮かべたままだ。

彼女の比喩が分からなかった仁ノ助は敢えて聞こうとせず彼女の言葉を待つ。

「……私達つてさ、一緒に旅して何ヶ月だっけ？」

「……あの町から大体二ヶ月と少しだな。」

初日から大食いっぷりを見せて金銭に多大な損害を与えた彼女には呆れ返った。

それを気にしないかのように、以降の旅でも度々そのような損害が

生じ、
その都度懐が軽くなっていくのが忘れられない。馬鹿食いにも程がある。

「あんだ、なんか失礼なこと考えてない？」

突如向けられた冷ややかな問いにどきりとして彼女を見る。
これまでの旅で若干伸びてきている赤髪は目元まで垂れており、高所を吹く緩い風によって揺れる髪の間から彼女の瞳が見えた。冷ややかな問い方とは対照的になぜか瞳が揺らめいているのが見えて不思議に思う。

彼女は答えを出さない彼から視線を離して正面を見据えて「ま、いっつか」と呟く。

「その旅でね、一緒に武芸を磨いたりしてきて、昨日やっと大きな戦に臨む事となったでしょ？」

「かなり緊張していたが、それなりにうまくやっていたじゃないか。」

夏候淵隊率いる第二陣に配属された彼女は、
馬上槍をする突撃隊には加わずに夏候淵將軍に襲い掛かる賊軍共を率先して討つ、

いわば親衛隊のような仕事をしていた。

將軍の露払いになればいいやと考えて戟を振るっていた彼女は、
その思い以上の結果を出すこととなり、結果首級二十余をあげる戦果と成った。

実質的に初陣でこれほどの活躍をするのは充分過ぎるほどであり、
夏候淵將軍からも直々に賞賛の言葉もいただいている。

参軍して僅か一月もしないうちに結果を出した彼女は曹操軍でも強者の部類に入っていると聞いてよい。

しかし彼女の心はそのような礼讃を齒牙にもかけておらず、憂鬱な息を漏らしている。

「あんと比べればあたしなんてさ、小さいよ……。」

仁ノ助は何もいえなかった。

一緒に居てきた旅仲間が一人だけ突出して先に抜きん出ていることに、

彼女は自分は大したことが無いと思っているのだ。

彼は首級数十と敵将を突撃して討ち取り、自分は穴熊を決めて雑兵二十余り。

起こした過程も結果も違えば、

それをするための勇気もないと自虐しているかのようだった。

そもそも男性と女性の筋力の違いがあるということを説明しようとしたが、

夏候惇将軍がその常識を彼方へ吹き飛ばしている事に気づいて止める。

結局彼は何ていつてやろうか考え付けないうで居た。

「でも私、決めたの!!!」

さつきまでの口調など無かったように詩花が飛び上がるように立ち上がる。

憂鬱な気分まで演技だったのだろうか、

だとすれば彼女は十分過ぎるほどに役者である。

流石商人の娘といったふうに彼は突然の彼女の変化に目を見開いて見上げる。

肩越しに振り向かれた彼女は不敵な光を目にたたえており、

晴れやかに前向きに浮かんでいる微笑が印象的だ。

詩花は微笑を可憐な笑顔に変えて、

ふわりと仁ノ助の方へ向き直って力強く宣誓する。

「あんとこれから一緒に居て、隣に立つても大丈夫なくらいに強くなります!!!」

虚を疲れたかのように仁ノ助は一瞬固まって、

次いで思い出したかのように朗らかに笑い出した。

さっきまでの杞憂を吹き飛ばす事といい、

今の宣誓の唐突さといい彼女はただいつも通りを振舞っていただけで、

実際は自分がこの戦で緊張していただけじゃないか。

思わぬことで解決した自分の悩みとそれに頭を抱えていた自分が馬鹿らしくなり、

思わず軽やかに笑い出してしまふ。

「ちよつ、ちよつとお！笑わなくてもいいでしょうが!!!」

自分の精一杯の宣誓を笑い飛ばされたことに抗議して、

詩花が膝を付いて彼の二の腕を叩き始めた。

本気でやる気がないそれはじゃれる様に叩くのを止めない。

仁ノ助もそれを分かっているのか笑いを止めずに片手で止める様に仕草だけをする。

そして彼はふざける意味合いで彼女の叩き手を右手で掴んで引き寄せた。

「あつ。」

突然叩き手を掴まれた彼女はびっくりしてバランスを失い、

偶然彼の胸元に倒れこむように転がってしまう。

それを仁ノ助は咄嗟に左手で庇う。

「あつ……。」

息が顔にかかるくらいに接近した両者は示し合わせたかのように言葉を出すと固まった。

——普段のお転婆さとは反対に、揺れる赤髪から見える瞳も筋が良く通っている鼻も綺麗であり、

先ほどの動きで赤くなっている頬も可憐な要素の一つである。

厚い胸板に押し付けられた彼女の豊胸はふくよかさを表しており、それを強調している腰の細さもそこに回した左手から伝わってくる。慈愛を母性と象徴するかのような臀部もまた魅力的で、そこから生えている見事な美脚もまた——。

(……はっ!?)

突如意識された女性らしさに彼の脳に電波が送り込まれた様子だったらしく、

それを振り払うように彼はそれを元居た次元に放り出すと現実を認識する。

おふざけも過ぎると彼女から鉄拳をいただくこともありえるだろうと考えると、

冷や汗が背中を垂れるのを感じた。

弁解しようとした彼は詩花を改めて見つめると言葉を出そうとするが、

なぜかうるまった彼女の瞳を認識すると言葉を喉元で止めた。

口元から漏れる息は静かに熱を帯びており、

それが首筋にかかるたびに羞恥心が湧き上がる。

しかし彼はそれを意に介せず彼女を見つめ続ける。

染み一つ無い彼女の柔らかな頬にゆつくりと手を当てる。びくりと一瞬震えると彼女は期待の色を浮かべて静かに、しかしはつきりと頷く。

それを了解と受けると仁ノ助は意を決したように顔を近づける。瞳に映る自分の姿がはつきりと見えてくる。

もしかしたら戦地に赴く時よりも緊張しているのか、顔が妙に真剣みを帯びていたのが可笑しくて小さく噴出してしまった。

突然緊張の糸を切らされた彼女は半瞬固まると、

赤く染まった頬をそのままに不貞腐れたように彼を上目で睨んだ。

「空気を読んでよ」と暗裏に言われた様に感じて彼は瞳だけで謝罪を表すと、

小さく尖っている彼女の唇に自分のそれを重ねた。

今度こそ成った出来事に彼女は満足したのか、

幸せそうに顔が蕩けて目を閉じて甘いそれを感じ始める。

誰も居ない城壁は風も止んでおり、物音一つしていない。

数秒口付けを交わしていた彼らは唇を離すと、

緊張していた互いを小さく笑ってもう一度唇を合わせた。

今度は詩花が積極的になったのか彼の後頭部に手を当てて離さないようにしている。

仁ノ助も彼女の勇気を汲んで背中に回した手を少し力を入れて彼女を更に自分に寄せる。

より熱さを増した接吻は唇を合わせるだけでは満足せず、

口から開けられた舌を拙く絡ます段階まで来ていた。

歯の間の歯垢を舌で舐め採って飲み干すと、彼女に対する背徳的な優越感は沸いてきて、

さらに接吻をやめられなくなって舌をより積極的に彼女の舌と合わせた。

時折口から毀れ出る小さな喘ぎ声が愛おしく思えてさらに抱きしめる力を強める。

彼は自分の中の欲が彼女に嚙下されているのを満足して感じつつ、さつき彼女の言った宣誓が一種のプロポーズではないかと臆気に考えていた。

「うあ……あんなのもするのか……!?」

階段の端から僅かに顔を出した女性が顔を赤くして、誰も居ない城壁で交わされる男女の逢瀬に目を離せずに居た。目の前で行われるそれは枕を重ねる淫靡なものとは全く違い、一種の神聖さを催しているかのように見ているこちらが恥ずかしくなってくる。

「……あの、そろそろバれますから戻りましょうよ、將軍……」

女性の顔の上から逢瀬を見る男は僅かに顔を赤くしながら、恥ずかしくなりながらも決して目を離さない上司を叱責する。彼とてこんなことはしたくないのだが、しかし上司が暴走されては副官たる自分も立場が危うくなるのだ。必死に叱責しつつ時折目の前で抱き合う男女をちらちら見る姿は形無しであるが。

「なにをいつておる曹仁！こんな恥ずかしいこと、人に見せるほうが恥ずかしいだろうが！！……えっ、舌も?!?!?」

「ちょ、声大きいですって！お願いですから戻りましょうよ……うわ、すっげえ……」

苦勞性な曹仁は余り経験豊かではないのか、今度こそはつきりとそれを見つめてしまおう。

その下の夏侯惇將軍も目をきらきらとさせて凝視し続けている。あういうことは彼女は主と枕元でやっていたりするのだが、人が行っているのを見るのとは別物であるらしい。

「……………ふむ。私もああいうのは昔はやったなあ……………はあ。」

言葉の最後に憂鬱な溜息を漏らして曹仁の上から羨ましげに逢瀬を見つめる女性が居た。

赤と桃色が混ざったような髪は肩を少し過ぎた部分で切られており、意思が強烈に伝わってくる目は今は嫉妬の下火で焦がれている。

脇が空いた赤いチャイナドレスのような服を着ており、詩花よりもさらに大きい胸を強調するかのように服は胸の谷間を隠す部分がない。

女性らしさを十二分に出しすぎているこの女性の名は、孫堅文台という。

「いやあなたも止めてくださいよ。なんで出歯亀決め込んでるんですか？」

「あ奴によろがあつて来たのだが、こつも燃え上がられては待つしかないでないか……………結構好みだな。」

ぼそつと誰にも聞かれないように呟く彼女もまた顔から赤い色気が出ており、

とても三児の子を持つ四十路一步手前の女性とは思えないほど瑞々しい。

目の前で行われる男女の口付けは一つの展開を見せ始めている。

詩花が仁ノ助に掴まれていた手は彼の手ときつく指を絡められており、
もう片方の手は彼の胸に置かれて体はしな垂れている。

仁ノ助は彼女の腰に抱かれていた手を徐々に豊かな母性へとつつと這わせており、

その先端の突起に指が付いた瞬間彼女がびくりと震えて僅かに瞳を開けた。

既に隠し切れない情欲が目に映っておりそれを抑えようとしている理性もまた倒錯的だ。

両者の口から垂れる口腔の液は銀色の橋を作りながら垂れていく。

その間でも彼は丸みを帯びた彼女の乳房に愛撫を加えるのをやめておらず、

その豊かな丘を手で包み込んだときに愛撫の手を彼女が掴んだ。

唇を離してごくりと詩花は喉を鳴らし、

彼の手を徐々に自分の体の下の方へ導いていく。

胸元から下りた彼の手は腹部を通して彼女の美脚の間の秘所へと辿り着く――。

「……………ってそれはいかんだろおお!!」

「ちよつ、將軍まってええ!!!」

このままではアレをしてしまうと危惧した夏侯惇は赤らめた顔のまま遂に彼らの方へ突っ込もうとし、

それを曹仁が神速の速さで反射的に片足を掴んで止める。

下半身から消えたバランスのために彼女は勢い良く地面に顔を打ち付ける。

打ちつけた瞬間、城壁の上に骨と石の衝撃音が響いた。

(ああ、まずいな)

既に官軍の兵より『猛虎』と呼ばれて畏敬される彼女の戦力、そして彼女に付き従う精強な数々の将兵を気概なく利用できるといふのは、

まさに棚から牡丹餅と行っていいほどである。

しかし憔悴しきつた彼はそこまで考えが及ばないのか気が滅入った返事をして黙り込んでしまふ。

詩花になんといつてまた話をすればいいのか、彼はそればかりに思考を費やしている。

頭に手をやって眉間に深い皺を寄せる彼は浮気がばれた夫のように必死であつた。

「そう落ち込むな！ いざとなれば私もソツチで助けてやるからな！ どっしりと構えている！！」

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

肩に手を回され意識的にふくよかな乳房を押し付けてくる彼女の意を気にも留めず、

彼はまた深い溜息をついた。

一歩進んでは一歩退く現実には慣れていたつもりなのだが、そうでもなかつたらしい。

いつも通りに晴れやかと輝く太陽が恨めしく思えてきた。

黄巾の乱の合間にも、確かに癒しはあつたのである。

第二章・空に手を伸ばすこと その五 エロ表現有り（後書き）

短かったです。これにて詩花が嫁確定となりました。

孫堅も実は嫁候補として考えてはいたんですが、

そういう立場よりも性的な意味も含めた師弟関係の方がやりやすかったりすると考え直して、これからのプロットを編んでいきます。

第二章：空に手を伸ばすこと その六

長社の大勝利の後、曹操・皇甫嵩・朱雋の連合軍は汝南へと行軍を
してはや一月。

仁ノ助は藍色の外套をはためかせながら新たな愛馬を駆って進んで
いる。

愛馬の名は吉野、彼が日本に居たところに幾月か滞在していた場所よ
りとった。

前の駄馬と比べればこれはまさに良馬の中の良馬か、
彼の親愛に満ちた行動もあって日若くして人馬一体となるに足りた。
主以上の我慢強さと精強さを持つ彼はまさに仁ノ助のもう一つの魂
となったのだ。

吉野の上より後方を振り返って自分に付き従う凡そ二百の騎兵を見
る。

あの戦の活躍の後に曹操は事前の言葉通りに彼を二百の騎馬隊長に
封じ、

自軍の戦線構築を一部任せるに足りると公言した。

彼の戦振りを見た夏侯惇と夏侯淵、そして曹仁は異議を唱えなかつ
たが、

軍師である荀？は怨嗟の目を向けてきながら反対の意を奏上した。

曰く、客将である彼の身には過ぎたることであり曹操軍の連帯感を
緩める危険があると。

自軍出身でもない彼を徒（いたずら）に重用すれば、
信賞必罰の『賞』の重みを失しるが如き事であり、

兵達の忠誠心を揺るがす行為であるという点でみれば、彼女の言う
ことは意味がある。

しかし曹操はこの意見を十分に聴いた上で言った。

曰く、斯くの如き戦振りをする者は我が軍には少なく、また兵達に

自分の活躍次第では出世・褒美もあり得ると思わせることも大事。これらの益は賞の重みを失する危険可能性を上回るものであり、よって彼を登用すると。

荀？はこれを聴いて苦虫を噛んだ顔をしながら渋々承諾した。こうして仁ノ助は客将という立場から正式に曹操軍の一将軍となった。

また同時に賊との戦で活躍した者達を賞賛し、特別優れたものに対しては一部兵を任せる立場を置いた。

詩花は先の戦で賊二十余を討ったことを考慮し、

目出度くも夏侯淵將軍の副官という立場を奉じられた。

尊敬する將軍の傍に置かれることを喜びつつも、

猫耳軍師を狙った獲物を見る目でじろりと見たのも追記しておく。

「西華にて、黄巾賊が集結しているとのこと。数はどのほどでしょうか？」

思慮に耽っていた仁ノ助を隣で馬を進める青年が尋ねる。

頭に黒の鉢巻を巻いており歩みと共に鉢巻の紐がふらふら揺れる。

偶然にも仁ノ助と同じ色の外套を着ており、

歩みを共にする姿はさながら仲の良い兄弟に見える。

正面から見ると仁ノ助は青の上着を、この青年は白の上着を着ておりここで初めて服の違いが分かる。

外套の上より大きな蛮刀を背負うこの青年は、曹洪といい、

先の戦いにおいて詩花と同じく軍功を挙げて特別な立場を与えられた者の一人である。

その軍功は首級十五であり、それでも曹操軍の新兵の中では傑出したものだ。

実力もまた軍功に恥じないものがあり、長社にて仁ノ助と模擬試合を行った結果七戦三勝四敗。

それ故に仁ノ助は彼の力を疑う余地も無かった。

「推測に過ぎないが、先に戦に敗れた者も合流しているとするところか？」

「やはり数だけは一人前ということですか。」

敗れ続けになつているとはいえ戦力の確保には困らぬ賊軍。

張角による太平道術の信奉者、および生活の糧を求める民草と賊の連合軍とはよくいったもので、

合わせて十万にも満たないこちらから見ればその数だけは羨ましい。

「だが先の敗者が合流しているとなると当然その敗北も知ることとなるから、脱走者や離反者にも困らないだろうな。」

「彼らの求める物はすなわち『生活の安寧』、それが黄巾で実現できぬならば自らの傷の浅いうちに逃げるのも当然です。」

同時期、豫州刺史の王允が幕僚を率いて黄巾賊との戦いに臨んでおり、

それによつて賊軍は劣勢に立たされると聞く。

さらに荊州南陽郡の賊軍の将である張曼成が南陽太守の秦頡の攻撃により殺害されている。

こちらはすぐに別の将である趙弘が擁立されて宛に籠城していた。遠からず多くのものが脱走、もしくは官軍に降伏をすることである。

西華での戦いはいわばそれを確定するための一戦といえる。

「俺達の勝利は確定しているも同然だから心配の必要は無いがな。」

「全くもって同感です。」

まだ見ぬ新たな戦が迫っているのにも拘らず二人は至極冷静でいた。自身の戦才によほどの自信があるのか、はたまた敵が予想以上の脆弱さを併せ持っていることに安心しているのか。どちらにとっても彼らのどっしりとした態度に部下たちは何の負の心を抱いていない。上司が安定して構えていれば部下も安心できるということである。黄巾の乱は今、折り返し地点を過ぎていた。

第二章：空に手を伸ばすこと その六

大地を無数の足が駆け地面を穿ち震わす。猛る戦意を咆哮に変えて戦士達が人中に呐喊する。馬を駆るその者たちは手に持った鉄の武器で敵の肉体目掛けて斬り付ける。苦痛の叫びと断末魔をあげて人中を掻き分けられる者達は黄色の頭

巾をはためかせて恐れ慄き逃げ出す始末だ。

自らの持つ得物で反撃する暇を与えられずに殺される者、
暇をもって武器を振り回す者、それでもなお殺される者、
無数の人馬がひしめく戦場にて、仁ノ助もまた目を戦意に滾らせて
獲物の頸に刃を振りぬく。

妖刀でプリンを斬るが如く男の頸が濃厚な鉄の臭いを放ちながら胴
体から刎ねられる。

返す刀で進行方向に居る敵、そして振りぬいた先に居る敵を同時に
裂く。

頸を斬られた男は喉奥深くから赤黒い肉を露出させて勢い良く噴出
す血を抑えようとするも、

次いで腹を愛馬吉野に強烈に蹴られて後ろのめりに倒れた。

障害物を一つ轢殺したところで馬の足は緩むことは無い、

主の手綱に導かれて走る姿は颯爽としたものだ。

体の後ろになびく外套は返り血で紅く染まっていた。

官軍によって黄巾賊は散々に蹴散らされていた。

我が猫耳軍師による、馬の機動力を生かした攪乱攻撃を基にした戦
術は、

小が大を駆逐する戦果を十分に見せ付けている。

曹操の寵愛を受けんがために奮闘する軍師のためにもさらに力を振
るうとしよう、

そう決めた仁ノ助は敵中を自ら率いる騎馬隊により縦横に駆け巡っ
ている。

戦線が敗れ続けになっっている賊軍は唐突に迫りくる騎馬の群れを避
けようとするもそれをする前に背中を斬り付ける。

彼のほかにも官軍に籍を置く孫堅が同じく騎馬で敵中奥深くまで侵
攻している。

両翼より勢い良く抜かれている賊軍は戦意を既に放棄しているよう
で、

自軍の陣営には既に賊の投降者が集結しているようだ。

呆気ない程に簡単に事が済んでしまい気が緩んでしまつても、刃を閃かす事には何の支障もない。

クレイモアを振るう度に敵の体から血飛沫が飛び、

刃にこびり付いたやつれた脂肪や筋肉の繊維を振り払いながら次の獲物に刃を振るう。

死臭にまみれていく自分の姿を若干誇らしく思いながら目を光らせる。

恐怖に駆られて武器を振るう民草を斬る事に喜びは感じずとも、

えもいわれぬ爽快感が得られるのが一人（ひとしお）である。

その快感に脳が犯される前に、

副官の曹洪が血に濡れた蛮刀を振るいながら駆け足の馬を寄せて告げてきた。

「孫堅殿が敵中にて孤立した模様です！」

史実でもあった事がこの世界では起こらないと期待していたのだが、やはりそうなつてしまい舌打ちが漏れる。

猪突猛進は孫家の代々に伝わる事なのだろうか、

いやただ余りある戦意が彼女を幾らか無謀にさせただけであろう。

馬は走り続けている限りにおいては戦場で無敵となる存在であるが、その絶対的な前提が崩されれば騎手は唯の歩兵と化す。

後は物量で圧してしまえば何の支障もない、むしろ厄介な相手を殺せただけ得と成ろう。

助けになるといいながら助けになられる立場になる彼女にほとんど呆れ帰るが、

しかし自分の中に残る仁心が彼女を助ける決断を迫った。

「ちっ！場所を教えろ！！救援に向かうぞ！！」

「了解です！私が先導いたします！！！」

勇敢にも先達を願い出た彼を尊重して騎馬隊の先頭を執らせる。血に滾った曹洪は「やあつ！」と声を上げて馬に鞭打ち足を速めた。邪魔をする敵を最小限に狙い殺す姿は仁ノ助が教授した通りの姿である。

頼もしくなる戦友に笑みを零して、

彼は更に戦場の地に卑しい血を注ごうと凶刃を振るっていく。

彼に続く騎馬隊の兵達も同様であり、戦場は更に凄惨さを増していった。

金切り声のような悲鳴が響き渡って男が血に倒れる。

腹から左胸を深い裂傷が襲っており何かに持っていたのか男の血が肉片と共にばら撒かれている。

しかしこの男が先ほどまで生存していた空間では、

斬殺・刺殺・出血多量死などは正常なことである。

それを象徴する殺戮が三人の女性により延々と繰り返されている。

少し長めの両刃剣を棒切れでも扱うように軽々と振るって賊の命をあっさりと奪う者、孫策伯符。

見事な徒手格闘にて男共の肉体を破壊しながら手に持った両刃剣、

南海霸王を宙を裂くかのような速さで振るう者、孫堅文台。

その二人を支援するために手に持った長弓に二本の矢を番えては放ちを繰り返す者、黄蓋公覆。

朱雋將軍の配下として参軍していた孫堅を支える二本の大黒柱は、顔に余裕の色を浮かべて共にこの難局を切り抜けようとしていた。

「母様もこんな雑魚共相手に無理するわよね。」

「ふむ、雪蓮の言うことにも理があるな。何かあったのか、嵩蓮？」
目敏くも射手を狙ってくる賊の刃をひらりとかわしその頸に矢を突き刺すと、
素早く抜いて鏃（やじり）が血脂で鈍らないうちに最小限の動きでこれを放ちながら黄蓋は問う。

騎兵隊を率いた孫堅は真っ直ぐに賊軍に駆け入ると、
これを縦横無尽に浅く深く荒らして回り正に鬼神の如き活躍をしたが、

退き時を誤ったか官軍本軍との連絡線を雲霞のような物量で絶たれた後、

さらには馬上で手綱を扱っていたところをを矢で射掛けられて落馬、
思わぬ負傷を負った彼女を守るように付き従っていた二人が共に馬から降りて支援し、

周囲に賊の死体の山を築くに至っていた。
結果から見れば孫堅は確かに今回は無謀ともいえる突撃をしたといつていいだろう。

賊を斬り血飛沫をかわしながら孫堅はふむと顎に手を当てて問いに答えた。

「長社の戦いの後に知り合った男が居てな、いつか助けになると約定を交わしたのだ。」

後ろから迫る髭面の男を振り向きもせず頸を斬り飛ばす姿はさながら修羅のようである、

しかし顔に浮かべる色は戦士のそれではなく男を想う女性のそれであつた。

「しかし今の武技では彼を十全に守ってやるとは出来ぬと思い、なれば修羅の場にて武を磨けば良いと思うたまでよ。」

豪快に自らの無謀を男への思慕がためと称して笑い飛ばす。

孫策は久方ぶりにみた母親の女性の顔を見て驚きを隠せない。

彼女の父、孫堅の夫は末弟である孫尚香が生まれてすぐ病で早世の身と成った。

思い出に僅かに残る彼は優しくも一族のために懸命になる父親であり、

孫堅もそれを頼もしく見つめていたのが印象的だ。

あれ以来女の顔を見せることを失くしたが今をそれを浮かべている。どのような男に遭って再び女の情を思い出したのか興味がわいてくる。

腹から出て来る腸を押さえようとする賊に丁寧に止めの一刀を振るうと、

その興味を口から問いにして出す。

「ふ〜ん、どんな男に遭ったのやらねえ……。興味出てきたかも。」

「おい馬鹿娘、あれは私が目をつけたのだ。手を決して出すんじゃないぞ？」

確か此処は修羅場といていたのだが、その場でも母娘で男を取り合うのか。

相変わらずに自らのペースを崩さない二人に黄蓋はやれやれと頭を振る。

その間でも互いに出来た小さな隙を埋めるように剣を振るう姿は、母のそれは一瞬の油断もない老虎か、

娘のそれは獲物を全て喰らい尽くす若き虎か。

徐々に成長を見せてさらに武を天下随一の物へと磨き上げる姿にはりと思う。

母親も若き頃からその才覚を政戦双方に渡って見せてきた。

これならば我が誇りを預ける一族の未来も安泰と思ひ、黄蓋を疲弊を全く見せずにとだ弓を射掛けている。

放たれるたびに賊の体の急所に刺さることからその腕前は百発百中と分かる。

この者の腕前をもつてすれば孫一族の発展を更に助けられることは請負だ。

ますます賊たちの体が積み上がって死臭をあげる。

いくらかこの殺戮にも飽きてきたが、それでも敵を殺すことはやめない。

彼らは自分達の数だけは自信があるのか攻めの手を緩めない。

その状況を打ち払うかのように馬が大地を駆ける音が轟々と響いてきた。

その方向からは悲鳴と剣戟の音、僅かに聞こえるのは肉を切り裂く音であろう、が耳に入ってくる。

十中八九孤立した自分達の救援のために来た官軍であろう。

また一人心の臓を射掛けて殺すと黄蓋はそちらを見遣った。

僅か三人で戦況を作り出す彼女らは全員が全員修羅となれる武技を持っている。

その事実にも恐ろしくなりながらも仁ノ助らは遂に彼女らを視界に捕らえた。

周りには幾重にも渡って賊の死体が地に伏せており、

その死体の円の中心に開けられた場所にて彼女らが迫りくる賊達をいとも容易く裁いている。

恐れ戦く賊共であるが数に任せて攻めを崩さぬ姿は馬鹿の一つ覚えといったところか。
弓矢を射掛けようとする者はすぐさま彼女らのうちに射手によって逆に仕留められている。
放置していても勝手に生き残りそうだと一瞬思ったが、
やはり数の脅威から守る事を考え直した仁ノ助は吉野にさらに足を速めるよう鞭を入れる。

「將軍！先達は私が・・・！！」

曹洪の抗議は後で聴くこととしよう。

クレイモアを握る力を入れなおして曹洪の馬を追い抜かず。

彼が先に狩る筈の賊の頭を横殴りで両断し、宙に茶色の脳みそが飛び交う。

排泄物のような色の雨を潜り抜けと進行方向横から槍が顔目掛けて差し込まれる。

上半身を屈して避けるとお返しとばかりに双手剣をそちら目掛けて返す。

間一髪でそれを避けた賊は頭ではなく胸を深く斬られ傷口に上着の切れ端が染みこんだ。

戦場では良くある惨状を自らの体で覚えることになったその者は悲鳴を漏らす前に曹洪の蛮刀により今度こそ頭を割られる。

先に行く吉野は仁ノ助を乗せて賊の死体を波を駆けていく。

時折踏みつける凶刃の慰めになった肉に蛆が這いかつており、それごと踏み潰すとぶちぶちと音を立てているのがうっすらとわかり少し気分が悪くなる。

人間の肉体を裂くことは慣れてもその後自然発生する蛆達の饗宴は見るに耐えない。

地獄を生きるには卓越した武技以上に地獄をなんとも思わぬ精神が必要である。

あるいはその悲惨な光景を茶化すかのような余裕が。顔を横一文字にクレイモアで薙がれて絶叫を上げる賊を無視して、ようやく彼は件（くだん）の騒がせ者共の元へと駆けつけた。

「猪突猛進にも程がありますよ！？孫堅！！」

三国時代を代表する豪傑相手ではある程度の敬意を示すのは彼の流儀であるらしい、

先日とんだ恥をかかせた者に対しても形上礼儀を示すがやはり根に持つものがあるのか語気が荒い。

軽く業物を振るって刃に滴る血脂を払うと孫堅はにこやかに答える。

「お前の無茶に合わせてやろうとしたのだがな、これも一つの愛という奴だ。」

「こんな形で返されるほど重い愛をもらう立場ではないはずなんですが！」

彼らの間を邪魔しようとする無粋な輩の臍に剣を突き刺して、中に蔓延ったすかすかの骨諸共振り払う。

新たに戦場に飛び込んだ曹洪が刀に光る血脂を払いながら馬上から声をかける。

「馬を用意しています！！お二方はこちらへ！！！！」

孫堅の近くでさらに敵を屠りつつあった孫策と黄蓋が呼ばれる。

黄蓋は弓を番えて放つことを止めずに用意された馬に近付いて慣れた捌きで躡けた。

孫策は興味深そうに仁ノ助をみつめていたが、

それを許すほど状況は優しいものではないと思ひ直して黄蓋とは別の馬に乗る。

後一人地に立っている孫堅はクレイモアを振るいつつあった仁ノ助の後ろへと駆け乗った。

「おいあんた!？」

「負傷して一人では手綱を操れんでな、頼むぞ青年。」

傲岸不遜に言いやってきた彼女に溜息が漏れそうになる。

真っ直ぐに槍を突き出した賊の槍の穂先を切り落とすと刃を反転させて首筋へ滑らせる。

ひうと悲鳴をあげる賊はこれを見事にかわしたが、

次に打ち込まれる南海霸王によって頭蓋を両断され、多量の血が流れ出した。

狩り尽くしにも飽きた孫堅は仁ノ助の胸の前に手を回して体を固定する。

これから再度敵中を駆け回るために馬は足を速めるだろうから、それに備えて体を振り落とされないようにする対策ではあるが、背中に圧しつけられる女性の象徴にどうしても意識が向いてしまいたいそうになる。

彼女の豪胆さを示すかのような大きな果実が外套越しに柔らかさとふくよかさを伝えてくる。

今度こそ溜息を漏らした仁ノ助は煩惱を振り払うように吉野に鞭を入れなおした。

「目標確保オ!! 騎兵隊退けえええええ!!!!」

あらん限りの声をあげて剣戟響く戦場に命令を出す。彼の声は確かに伝わり騎兵隊各位が馬を返して行く。彼らが走る後には一筋の退却路が出来ていた。

「お二方、私の後ろにお続きください!!」

蛮刀を横に構えて曹洪が馬に鞭を入れた。後ろ足をあげて甲高く嘶いた後に走り去っていきそれに二人の女性が続いていった。残された仁ノ助は後ろから抱きつく孫堅に語りかける。

「我々も行きます。」

「ああ、期待しているぞ。」

さらに強く抱きついてきた彼女にまた溜息が漏れそうになった。これのお返しにはある程度の期待を寄せなければ割に合わない。戦が終わったらその滾りをそのままに彼女が寝る枕へ押しかけるのも悪くないか。

詩花との逢瀬によってそれまで押しとどめられていた性の枷が外された彼は邪なことも考え始めているに至っていた。

吉野の腹に走りの合図を送るよう蹴ると彼はその意をはっきりと汲んで走っていく。

顔を横切っていく風によって体に付着した赤い体液が洗われていく。前後から圧力を感じている彼はそれを意に介せず、介そうとせず、吉野の手綱をさらに強く握りしめた。

「おい仁!!!」

「なんですか!?!」

剣戟と悲鳴と雄叫び、さらに断末魔が響くこの場では大声で叫ばないと相手への意思疎通もままならない。

さらに一騎で駆け抜ける自分達に目を付けた馬鹿共が先ほどまでのお返し、

または地獄への道連れといわんばかりに一齐に武器を振るってくる事もあって手綱捌きをさらに集中せねばならない。

片手で武器を持ってそれを振り払う孫堅の援護も有難いができればそのまま振るって欲しい。

今はそれどころではないのだから、という愚痴は内心にしまったまままで後ろから掛けられる声に大声で返す。

「この礼は弾むぞ！！！楽しみにしておけ！！！！！！」

「・・・期待してもいいんですよね！？！？」

彼の雄としての疑問に彼女は刃をさらに振るうことで応えた。

顔に返り血がついたままの彼女は自らに剣戟が向かってこない一瞬をぬって仁ノ助に甘く艶やかに囁く。

「・・・よいぞ。」

腹にしがみついている片手を彼の股間まで下ろす。

戦場の熱く暴力的な滾りを象徴しているそれを指のひらで淫靡に一撫し、

雄の欲望を出すように隆起するように掴んで二度三度上下に擦りあげると、

再び腹に手を回して賊の血飛沫を上げ始める作業に戻る。

彼女の許しからいたたく夜の行為、

それから得られる多種多様、無数の快楽を想像するとさらに硬く勃つてしまう。

それを遮る何処か誰かの悲鳴が彼を現実に取り戻す。

突如目の前に投げかけられた槍の穂先を無意識に掴むと彼はそれを賊中へ投げ返す。

惹起される人の死を見返ることなく彼と吉野は走っていく。

今彼の脳裏を占めているのはこの戦場からの生還と新たな武勇、

そして最大のものは雌を魅せる孫堅との耽美な情事。

彼女の豊満な肉体を己の厚い肉体で味わうことを何よりの楽しみと

その指揮官である盧植は洛陽から派遣された小黃門・左豐に賄賂を贈らなかつたために讒言を受けて左遷、

新たに中郎将である董卓があとを継いだが、
盧植と違つて彼は本当に何もすることがなかつたと思つたのか、
自分達との交戦にて敗北をして軍の陣地を遠くに置いてこちらを監視するに留まつている。

今は新たにこれに合流した公孫讚軍と袁紹軍が中心と成つてこちらを攻めている。

数はそれでも自分らが上であることに変わりない、

しかし武将と兵の質で敵軍側の方が圧倒的に有利なのは明白である。
豫州・潁川平定後、官軍の援軍が向かつてきたらそのときで終わるだ。

今喜びをもつて舞台を踊り歌う三人の少女らを盛り上げている彼ら、
その勢いをさらに焚きつける少女ら、
少なからずこのうちの半数は大地へと還る事だろう。

それを知らぬが仏と騒ぐ彼らを見るに耐えられず男は市内へと足を運ぶ。

賊軍が跋扈するこの場所は彼らの本拠地であるがためにある程度の治安維持、

またの名を武力統制が行き届いているのか身内限定で安全な場所となつている。

元々農民上がりのものが多いためか農具や食料品を扱った店が立ち並んでいる。

いずれはそれも尽きる物と知りつつ売りさばく彼らを見て罪悪感が沸いてきた。

彼らより立場が上の自分であるにも拘らず、

なぜ軍事的行動を縮小していくように働きかけられないのか。
遠くから聞こえてくる歌声と歓声に耳を傾けたくない。

「・・・その若いの、止まってくれんか。」

ぞわりと耳元に入ってくる皺がれた声に顔を向けた。よつれた白い服を来た爺が路地の中で腰を掛けている。手に持った琴は年代物であろうか、艶やかな光沢が目に残る。見事に蓄えた口ひげを撫でながら爺は再度言う。

「ぬし、中々に懊悩しているようだな。その先は、あれであろう?」

目を黒ずくめの男が来た方角へとやって爺はにやける。

老人が見遣った先には喚き散らして奇声をあげる群集ではなく、それが向かう先にいる少女らであると悟り警戒する。見事な洞察力故、この者を見過ごすことが出来ない。腰に刺した刀の柄へ気づかれぬように手を滑らせる。

「さらに言ってやりたいが、ここでは何分人が多いのオ・・・。」

老人はその見た目とは対照的にすらりと立ち上がって路地の奥へと歩んでいく。

人目の付かぬ場所であるそこは、立ち並んだ家屋によって完全に日光が遮られている。

(付いて来い、ということか。)

男は柄に手をやったまま老人の後を追うように歩んでいく。入っていくと肉の腐臭が漂ってくるのがはつきりしてきた。食糧事情をめぐってはここでも問題が顕在化してきており、これを扱った一種の賭博も行われていると聞いている。

その成れの果てが彼の足元に無様に転がる骸骨なのであるうか。

「こつちじゃ、若いの。右側の小屋じゃ。」

彼の思考に老人の声飛び込む。

小さく開けられた木の扉から老人が顔を出してこちらを呼んでいる。目立たぬ所に設置された扉は周囲の風景に溶け込んでおり入り口が判明しにくい。

このような所にて話がしたいとはこの老人もお尋ね者と言う所なのだろうか。

取っ手が無いそれを押すと木が軋む音をして開けられる。

日の光を受けた部屋は埃が宙を舞っているのが分かり、さながら一種の隠れ家のように感じられる。

男は刀を腰から抜くと左手で柄を掴み壁に背を預けた。

目の前で悠然と座り込む老人は琴を地において手の中にあるサイコロを弄っている。

「はてさて、どう語ってよいものやら……」

「戯言で戯れるほど暇は無い。さっさと用件を言わぬと斬るぞ。」

男の半ば本気の脅しを受けた老人は珂珂と声を出して笑う。

「うむうむ、若人はジジイと違って血が滾っているかのオ。ならその滾りを後ろの阿呆へと向けてくれんか？」

彼の問いかけに半瞬理解が遅れるが、

後ろから唐突に襲ってくる殺意を感じ、身を反転させて柄から刃を神速の如く居合いで抜く。

一線で切り抜けられた刀は彼が背を預けた壁を深く切り裂く。

その壁の向こう側から肉が裂けて血が吹いた音がし次いでそれが地面にどさりと倒れる音がした。

肉を両断させた刃には不思議なことに返り血がこびり付いていない。

それを許さぬほどの技量の持ち主なのか男は険しい表情をしたまま
気配を探っている。

（・・・これしきの草に気付かぬとは不覚であった。だがこの老人
は気付いて尚且つ教えた。争い事を齎しにきたわけではないようだ
な、）

軽く刃を払うと鞘に収めて男は老人の話に傾注する準備を整えた。
これからが本番という風に老人は口を吊り上げる。

「あの女子共の中に、実は本物の張角が居ないと知る者はこの所
少なくなる一方だと聞く。なぜかわかるか？」

いきなり事のコアをつく問いに内心に驚きを隠せない。
だがそれを表に出す事は無く男は淡々と応えた。

「『太平要術の書』を手に入れたのは張三姉妹ではなく、実際には
張角という老人であること。

その老人を殺して書を奪ったのが、張三姉妹を我らの棟梁と仕立て
上げたのが、

彼女らと共に拳兵した、大洪・楊鳳・白爵の三人であることだ。」

三国志演義にて張角は薪拾いの最中、南華仙人よりこの書を授かる。
その中には風雨を操り病を治す方法が記されており、彼はこれを使
って太平道の始祖となる。

やがて彼は腐りきった漢王朝に業を煮やして反旗を翻す。

その彼の拳兵に合わせて兵を起こしたのが大洪・楊鳳・白爵という
高齡の老人共だ。

彼らは張角が持つ書には不老不死を実現する文書が記されていると
考え、

彼と同名の少女が現代で言うところのアイドル活動を行っているのを聞き及び、

老人である張角を謀殺して書を奪うと少女ら姉妹を巧みに自分らに取り込んだのだ。

そして書を使って賊軍の意識から老人の存在を消して、

変わりに彼女らを『太平要術の書』をもって世を正す張三姉妹として賊軍を率いる清涼なる者と意識を変えさせる。

瑞々しい彼女らはその活動と容姿も相まって賊軍のアイコンとなるに至り一層の団結力を得るまでになる。

しかし書による洗脳を免れた者達、姉妹の活動初期から彼女らを支える者達が内部にて反抗勢力となり、

綿密な脱走計画を策謀する事態へと発展した。

それを快く思わぬ三人の謀人はこれを消さんと自らの草を派遣、賊軍内部深奥にて暗殺が度重なる事となる。

黒ずくめの男も三姉妹を初期から支えてきた者であり脱走計画の立案者でもある。

日々不老不死の研究として略奪の際に誘拐してきた女を淫靡の極み暴力の極みを持って陵辱し、

子供を狂気の沙汰を持って宴の肴へと調理する狂人共。

その餌食ならない保障が彼女らにはこれ一つ足りともない。

「珂珂珂珂、やはり目をつけただけあって整理された答えを出すではないか。」

彼の気持ちを汲んだ上で喉の奥を震わせて老人は笑う。

髭面に寄せられる皺一つ一つに隠しきれない邪気が漂ってくる。

「それを聴いた上で問おう、若人。ぬしは修羅羅刹となつてでもあの者達を助けたいかア？」

語尾を可笑し気に延ばして老人は尋ねる。

好奇心に満ちた瞳の中に眉間の皺を寄せる黒づくめの男の姿が映った。

睨みながら考える姿は絵になった物、男の冷淡な顔立ちを際立たせる。

男は数瞬間を置いて答える。

「……既に羅刹となった身だ。修羅が付こうが関係ない。」

「……そうくると思ったわ。」

予想通りに事が運んで老人は愉快に膝を叩く。

目の好奇心を一気に邪気に変えて光らせる老人は幾分低められた声で言う。

「大陸一の占い師、管輅じゃ。ぬしの名は？」

態々自分を呼んでおいてそれはないだろうと思いつつながら男は心える。

「……丁儀、字は正礼。」

「よかろう丁儀、我らはこれより一蓮托生の身ぞ。」

立ち上がった管輅は丁儀に近付いて肩をぽんと叩く。

その厚意を意に介せず彼はゆつくりと言葉を紡いだ。

「……俺の昔馴染みで、信頼できる者が官軍に居る。此度の乱の事情も身で把握しているはず。

何らかの形で計画に巻き込めば無理にでも協力を得られることができるかもしれない。」

丁儀は笑みを深めた老人に遠慮がちに小さな声で言う。

敵方の呼称を出された管輅はさも愉快だといわんばかりに目を吊り上げる。

「……名は？」

「……曹軍の辰野仁ノ助。親友だ。」

第二章：空に手を伸ばすこと その六（後書き）

丁儀は、後漢末期から魏初期にかけての人物ですが、今作品では仁ノ助の昔馴染みという形で出します。大陸に降り立って以来の仲という設定です。

途中のアウアウなシーンはセフセフなのかな。

第二章：空に手を伸ばすこと その七 エロ表現有り

天幕の下の切れ目より僅かに日の出前の太陽の光が差し込む。その眩さに目を細めながらのっそりと仁ノ助は起き上がる。

体には何の衣類が着けられておらず、寝台に備え付けられた薄い布団がその体を隠すのみだ。

小さく欠伸を漏らしながら、隣で気持ちよさ気に眠る全裸の女性を見る。

この女性が昨晩から数刻に渡って自分の体に組み伏せられて快樂の声で喘いでいた事が記憶に新しい。

最後に男を受け入れてから数年は経っていると言う彼女の体は、貞操を守りぬいた彼の欲望を受け入れたときに違和感を感じるほどであった。

しかし人生で始めて味わう女性の体に自制が利かぬ彼は獣欲と本能が滾るままに腰を動かして彼女を強引に攻め立てた。

瑞々しさを未だ失くさぬ彼女の体は久方ぶりの雄で熱く火照り、溢れ出す愛液が性交の色をさらに淫らで妖艶なものとし、彼の攻めをより激しく触発した。

その残滓が彼女の裸体にいくつもの部分で残って乾いている。発情しきった雌として彼をいきり立たせ続け白い液体を放出させ続けたこの女性、

孫堅はその行為の前に彼と真名を交換しており、それを呼び合いつつ互いの昂ぶりを高めたことが思い出された。

孫堅は史実ではこの後宛城攻略戦に参加、これの落城に大きく貢献する事となる。

朱雋が洛陽内の何者かに更迭を上奏された事を聞き及び、

補給線遮断・包囲戦法を捨てて力攻めに転じたことの結果である。

敵將趙弘は初戦にて斬り捨てられ、新たに韓忠が將軍となり宛城す

る。

これに対して官軍は二正面作戦を敢行、一方の部隊によって賊の注意を引き寄せ、

もう一方に精銳を集めて一気に城内に突撃する戦術であったが、

これが大いに的中する所となりさらに陽動軍も敵の攻撃を跳ね返し逆侵攻をかける。

逃げた賊も徹底的に叩き潰した結果、史実では五ヶ月近くも小競り合いが続いてようやくの終結を迎える。

ただしこの世界ではどういふ訳か史実の出来事が早送りのように起こっていることから、

こちらの小競り合いも大して無い物と推測できる。

一方で皇甫嵩軍であるが、この後東郡倉亭においてト己軍を打ち破る事となり、

さらに広宋方面への援軍として活躍する。

その結果、乱全体の最大の奉仕者は彼という事となる。

自軍ら曹操軍は都の守備を守る部隊ではあるがその特例上独立行動が認められており、

もしや倉亭でや洛陽に向かうのではなく広宋へと向かうことになるのではないか。

覇道を忠実に敷く我が主の事、その可能性は無きにしも非ずである。

その時、彼の隣から呻き声が聞こえてくる。

孫堅、嵩蓮が身じろぎしながら起きたのだ。

起きた際に布団が肌蹴って彼女の豊満で淫靡な裸体が露となる。

両者の求めから発生した熱い体液が付着しており、

行為の熱烈さを想起させるかのうように大きな母性の頂点に立つ桃色の乳首が尖ったままである。

下腹部から腿にかけては彼がかけた熱い情交の後が残っており臭いたつ。

僅かに開かれた鍛えられた美脚の間から愛液と自分が注ぎ込んだ精

液が滴っている。

昨晚の興奮を覚えたままで居るのか彼女の頬が欲望に駆られた時のままの表情をたたえている。

その艶めかしい姿が自分を誘惑していると思えず、彼の雄に血が通ってそそり立ち自らを強調する。

仁ノ助はまだまだ足りないとはかりに彼女に覆い被って、僅かに寝ぼけて開けられた口に深い接吻をする。

そして流れのままに寝台に押し倒すと彼女の雌に自分の雄を擦り付け始める。

「お、おい！あつ、ま、まだ、あん！やるのか？はああつ、ああん！」

「後一刻は大丈夫さ。楽しもう？」

「ば、馬鹿者お！んんん！んふう、ああん。」

彼女の反論を熱で押さえつけるように再び舌を絡ませ始める。

肉体も頭もそれを受け入れることを拒んでいないのか、

嵩蓮は目を閉じてそれを感じ頸に手を回してより深いものをせがみ始める。

足に回された彼女の脚のお陰でより二人の間の隙間が埋まり密着した快樂が生じる。

そして昨晚のように彼が主導権を握って彼女の中へと攻め入り、それに彼女が大いに悦んで喘ぎ声を漏らしながら、夜は静かに明けていく。

第二章・空に手を伸ばすこと その七

丁儀は頭を頭を抱えて深く悩ませてられえいた。

自称大陸一の占い師によつて一蓮托生のみとされたのが運の尽きか。少なくともこのまま計画を秘匿していたらと思うとやり切れなくなる。

「うんうん、じゃあここはこの流れで……」「違うよれんほーちゃん、この後はこれで……」

「二人ともそうじゃなくて、ちいの考えではこうで……」

女子が三人集えばかしがましいとは誰が言ったか。

目の前で机を挟んで真剣に討論する三人の姉妹、張姉妹が何故か自分達が立案した脱出計画の修正会議に出席しており、尚且つその脱出の流れについて口々に言い合っている。

長い桃色の髪を黄色のリボンで留めた澁刺とした可憐な女性は騒ぐたびに胸が揺れるのが目に毒である。

この者の名は張角、真名を天和というなんと幸運に恵まれそうな少女だ。

水色の髪を葉っぱの形をした緑色の髪留めでサイドポニーに纏め上

げウエーブにしている。

人一倍張り切って声を上げるこの者は張宝、真名を地和という。赤縁の眼鏡をかけている少女は紫の前髪を開くように髪留めをし、冷静の話を進めている。

この者の名は張梁、真名を人和という。

つまりこの三人の少女は黄巾の乱の首謀者と目されている張三姉妹なのである。

綺麗なラインを描く肩と健康な腹部を露出した服装で三者がアーダコーだと語る。

本来なら秘密会議なのに、なんでこんなに騒がしくなったのだ。

その原因である老占い師を睨みつけるがそれは椅子の上で胡坐をかいて舟を漕いでいる様子だ。

この老人、管輅のすることの突拍子さには驚く暇も与えられなかった。

脱出計画そのものの秘匿性を無くして黄巾内分での分裂が周知の事実だと喧伝したのだ。

その結果乱を起こして自軍中枢部に居る大洪・楊鳳・白爵の三者を守る陣営と、

張三姉妹を信奉する陣営とでの対立が生じ、広宋における陣営間の抗争が激化していった。

これを受けて両首脳に位置する者達は表に出ることを控えていき、これがために身の安全をより近いところで確保するに至ったのである。

彼女ら三名を自分の手の届く範囲で守ることが出来るのは僥倖ではあるが、

大洪らから放たれる暗殺者の数は増える一途と辿り、これを妨げるために警備を厳にすることへの努力が一層大変となった。

「全く……人の気も知らんでよう寝るな。」

転寝をする確信犯に向かって恨み言を言う。

寝たふりをしていたのか老人は目を閉じたまま答える。

「知っている上でやったまでよ。彼女らを見よ、ふぁんが傷つくの
を率先して止めようとしているではないか。」

卓上で交わされる熱を帯びた議論を垣間見て老人はさも当然のよう
に言う。

広宋に居る限り両者の対立によって内部間死傷者は増えていくのだ
から、

大洪らと官軍の隙を縫って脱出してしまえば問題ないと彼女らは議
論の前に言った。

確かにその通りなのだがその前提を作り出す事が難儀なのである。
現在官軍は広宋を幾重にも包囲しており脱出経路など見当たらない。
さらにこれに合流するために宛城を落とした官軍の一部がこちらに
向かっているらしい。

まともに草をも放てぬ状況で何とか掴んだこの一報は非常に大きい。
恐らく向かっているのは漢王朝屈指の名將軍、皇甫嵩であろう。

彼が合流して幾日もしないうちに官軍の総攻撃が始まる。

これに抵抗する賊軍の中には当然多くの脱走者や降伏者が現れるか
ら、

その中に溶け込むようにに自分達も紛れ、行方を晦ませる。

理想的に事が成らないのは承知の上、しかしやらねば命が無い。

官軍側は自分達乱の首脳部を決して許さず処刑でもって治めるだろ
う。

片や大洪らは陣営の和を乱す自分達の利用価値を既に無きものと見
て、暗殺の魔の手を伸ばしている。

「懊惱するな若いの、貴様は生真面目に考えすぎじゃ。」

老人の悪戯な、僅かに優しさが滲んだ声に思考を止めて表をあげる。管輅は確信しきった笑みを浮かべていた。

「此度の乱はもうじき終わるよ、ぬしの友も此処に来ておるわ。」

突然拳がった旧友の名を聞いて驚く。

なぜこの老人は援軍として来ている官軍の中に仁ノ助が居ると言うのだろうか？

何か確証があるのかと問うと老人は喉を喜悦で震わせて答える。

「前も言っただろう、わしは大陸一の占い師ぞ？」

にやりと邪な笑みを浮かべる管輅に丁儀は薄ら寒い思いをした。

西華の戦いにて敵將軍彭脱が夏侯淵將軍率いる部隊によって射殺されると、

周囲にいた賊共は波を打つように降伏を申し入れてきた。

その数は驚嘆の数十万、官軍連合軍の数倍はあろうかという数だ。

その後始末には軍師の方々が頭を悩ませていたようだが一端の一將軍である自分には関係の無い話である。

其れは兎も角として、今後我が軍は皇甫嵩將軍と連合軍を組んで、広末にて抵抗を続ける黄巾賊本拠地攻略戦に臨む事となった。

朱雋將軍らはこのまま宛城へと向かい攻城戦に参軍し、司馬の張超や荊州刺史徐キユウ、南陽太守秦頡らと足並みを揃える起算らしい。

一度抱いた女も配下であるが故にそちらへ赴くというのが至極残念であったが、

去り際に交わされた言葉により彼は新たな愉悦感を覚えることと成る。

「……………いずれ娘も祭を交えて楽しもうぞ。」

詩花が居るのも関わらず新たな欲望の捌け口が増える事となるとは、広末へと向かって足を進める彼の心は満足感でいっぱいであった。

「また妙なことを考えていないでしょうね？」

隣で馬を進める曹洪が目敏く声をかけてくる。

曹一家というのは勳が鋭いものが多いのか、こちらの考え事がどのような類のものかすぐに当ててくる。

苦笑を浮かべて仁ノ助は心配性に成りつつある相方に弁明する。

「してないよ。ただこれから、どんな戦いになるか思いを馳せていただけだ。」

「あなたを考えれば充分妙なことに成り得ますな。こちらの胃の事も考えていただきたい。」

将来胃薬を重用する羽目になりそうだといわんばかりに曹洪は溜息を漏らす。

その態度が普通ではない女性陣に苦勞する自分と重なってみえて可笑しくなる。

彼にとっては十分自分は普通ではない人間ということなのか。

「熟考した上でしているだろう？」

「していません。あなたは自身の思っ以上に感情的です。」

自分の起こしてきた行動を思い返すと、成程確かにそうである。

殊女性関係に至ってはまさに感情の赴くままに行動しており、

戦場での行動は其れなりに考えてはいるがそれでも血が滾って考えが及ばないこともあったのだろう。

もしかしたら夏侯惇將軍以上に突発的な將軍なのやもしれんと考えが至り、

それを否定せんと言葉に険を寄せる。

「次回からの戦ではそうはならんさ。そのためのお前でもあるんだらう？」

「無論援護は致しますが、將軍の問題は將軍ご自身でお片付けくださいませ。」

冷ややかに言葉を紡いだ副官がこの場では正しいと思い、

仁ノ助は言葉の端に僅かに出かけた矛を収めて前を見つめる。

進軍を始めてより早二週間で冀州へと入った官軍は既に広宋を包囲している軍と合流しようとしていた。

「見えましたね。」

地平線の彼方から徐々に見えてきた群集を捉えて曹洪が呟いた。

遠目から見ても分かるくらいの大群衆、大軍勢。

高く掲げられた旗は自らの將軍の一字を刻んで我こそここにありと言つようにはためている。

最も多く見えるのは『袁』の一字、袁紹本初率いる軍勢の旗だ。

黄色の旗、いやよく見たらあれは金色の旗、金の旗は黄巾賊の党旗

と同じ色をしているのだが、

賊共の物などただの紛い物であると言ってるかのようだ。

あれを指揮する袁紹はなぜ態々賊と同系色の軍旗を掲げているのだろうか。

次に見える旗は、『公』、ということは公孫讚軍か。

より多くはためく袁紹軍と比べれば地味な印象を受けるほど控えめに旗をはためかせている。

その軍旗に紛れて、十字に交わされた剣の印の旗が靡いているのが分かった。

「・・・曹洪、あの旗は何処の者だ？」

「公孫讚軍の元に身を寄せる『天の御遣い』という人物が率いる義勇軍かと。」

天の御遣いという単語に疑問符がわいた。

そのような噂は史実には無く、また自軍に居たときも聞き及んでいない。

「ご安心を。ただの世迷い言の一つとして広まっているだけです。で、信憑性はほとんどありません。」

それもそうだろう、皇帝を差し置いて天を語るなどという事があったら、

不敬の極みとして噂を流布したものは全員処刑に連座する事もあり得るからだ。

例えその命令を言い渡すのが宦官でなくても同じ事をするだろう。

ということはあれは本当にただの義勇軍なのか、その割には規模が多い。

あれを指揮する者は余程信頼されているか、または畏敬されているのだろうか。

ひよつとすると、指揮者は劉備なのだろうか？

「義勇兵のまとめ役は誰か知ってるか？」

「天の御遣いと称されている、北郷一刀という男らしいです。」

同郷ですか？と彼は問う。

中原では見られない名前のために尋ねてきたのだろうが、彼自身そのような名を持つ友人は日本にも中原にも居なかった。頸を横に振り、仁ノ助は十字の旗をじつと見つめる。

他の軍から際立って目立つその印が彼には不気味な存在に思えた。

天幕、諸侯、金ぴか、高笑い、溜息、学生、疑問。

これが今彼を取り巻く状況である。

無事に合流した官軍本陣にて軍議を開くとの通達が入り、皇甫嵩將軍に追従する形で曹操も参加、その折に何故か仁ノ助が参加の許可を受けたのである。

主の命に逆らう理由が特に思いつかなかった彼はそれを首肯し、猫耳軍師の嫉妬と憎しみの視線を受け流して本陣天幕に入ったのである。

中に待ち構えていた諸將は皇甫嵩が入ると、実質的にこの乱で最も活躍する勇将である彼に敬意を表す礼をした。

「お待ちしておりましたわ、皇甫嵩中郎將。早く軍議に入ってあの賊共をさっさと片付けてしましましょう！」

天に高らかと響く笑いをするこの女性が袁紹と聞いた時に胃が痛んだ、と同時にある種の納得ができた。

後漢時代に四代に渡って三公である、司徒・司空・太尉を輩出してきた名門の後取り娘、

その彼女が若き日より帝王、または英才教育を受けていたことは想像に難くない。

その過程で自らの一族が漢王朝の歴史に大いに貢献したことを知り誇りに思ったのであろう、

そして自らもその末端に加えられる名誉を受けたいと思っているのだらう、

自己意識が過剰となって軍旗や将兵の鎧もが派手なものとなっていてるのはこのためか。

名門の生まれを誇るかのように煌びやかな表情で高笑いをする彼女を痛々しく思うのは身勝手極まりないの話だと知りつつも、

面倒に付き合わされる身にもなってほしいと内心で愚痴を言う。その愚痴を溜息に変えて疲れた表情をしているのが、公孫瓚將軍である。

袁紹の幼馴染である彼女は事ある度に迷惑につき合わされその尻拭いをしているとか。

年齢の若さに似合わず苦勞の皺が眉間に寄せられているのが可愛そうに思える。

しかしその思いが隣に立つ男を目で捉えたときに雲散霧消した。

太陽の光を浴びて白く輝く服は何処かお嬢様学校に通う学生服のような煌びやかさを放ち、

諸侯を見渡して顎に指やって深く考える面立ちは端正なものである。

(この者が北郷一刀なのか、なんというか、学生なのか?)

彼の疑問は皇甫嵩の袁紹に対する返しによって遮られる。

「そう急くな童（わっぱ）、四面楚歌となった奴等など鎧袖一触ぞ。」
確信に獰猛な満ちた笑みで彼は答える。

彼にとつて見れば波才を破った以降の賊は稚児に等しいものだといふのだろう。

童と称された袁紹は不満気な表情をしたがそれを抑えて改めて問う。

「北中郎將の盧植と東中郎將の董卓、いずれもその忌々しい奴等に負けていますわ。何か秘策でもお有りですか？」

両將軍のうち前者は主に洛陽から発生した政治的理由から左遷、後者は乱の行く末に待つ漢王朝衰退から発生する自分の栄達を狙つての待ちの姿勢、

これらが敗因となり賊軍側が勝利を重ねて威勢を盛り返している。最近はその内部で積極派と消極派による激烈な内部闘争があると噂されるが、

それでもなお大量の兵を率いていることは確かであり、馬鹿正直に官軍の威勢を見せ付けるだけでは勝てぬ相手でもある。

だがそれを意に介していない様子の皇甫嵩は自身有り有りな表情を崩さない。

「有るからこそよ、こうしてわしが笑つておるのは。」

皇甫嵩はそう答えると自らが考える作戦を説き始めた。纏めると以下のようなになる。

賊軍側は今まで官軍を何度も打ち破つて優位に立っている心構えであり、

ここに一種の油断を見出すことが認められる。この隙を突く。

まず最初に賊軍と正面でぶつかり、早々に退却してわざと敗戦を装

う。

援軍何するものぞと賊軍は意気を高め油断をさらに晒すこととなる。退却した自軍を休めた後、夜から早朝に変わる瞬間、人が最も油断する時に奇襲をかける。

気が緩みきつた彼らは為す術も無く打ち倒されることと成ろう。

「悪くはありませんわ。それならば一撃を加えるのみで彼らは本拠地を明け渡すことと成るでしょう。」

「私も同意です。戦術に長ける者が指揮を執らぬうちに先制攻撃を仕掛ける、戦況はかなり有利なものとなりましょう。」

「奇襲となれば私の白馬隊の機動力が十分生かせましょう。異が御座いません。」

官軍を率いる三將軍それぞれから肯定の意を聞いたのか皇甫嵩は大いに満足の首肯をする。

上意を下すものが連帯すれば戦場での指揮系統の混乱も無いだろうと仁ノ助も内心で安心する。

「なれば早速軍の配置、作戦の流れを決めようではないか。」

皇甫嵩の鶴の一声により四將軍が高々と戦術論と戦略論を語る議場が作られる。

仁ノ助はこの議場に出る幕が無く手持ち無沙汰となり、近くに立っていた件の御遣いと称される男に話しかけた。

「貴殿が、件の御遣いですか？」

話しかけられた男は僅かに吃驚してこちらを見遣った。

もしかしたらこの男は曹仁と同年齢ともいえるくらい若いのかもしれない、

腹の底から自軍の端までいる兵まで伝わるように声を上げる。

その命令を聞いた兵士達が一斉に城壁に殺到する。

いち早く着いた者から順番に鉤爪のような形をした道具を取り出して城壁の合間にある石壁の隙間に爪を食い込ませる。

何度か動かして固定された事を確認するとそれを使って足を使って城壁を登り始めた。

十分に陽動されていても尚城壁の上には敵兵が居るようで、

こちらを見定めると城壁の上から弓を射掛けたり石を落としたりして妨害してくる。

数が少ないながらも抵抗してきた彼らを報うように自軍の兵士が傷ついていき、

力尽きた者は鉤爪を手放して高さがある城壁から落ちていく。

「ちっ、腐っても兵士の癖しおつて！」

悪態をついて女性が痺れを切らしたように城壁に走っていく。

あと距離が五尺ともいうところで女性が勢いよく地を踏んで飛ぶ。

非常な急傾斜を描く城壁をもともせず、女性は壁を蹴って上部へ上部へと跳んでいく。

城壁の手すりに手をかけると腰に差した剣を一気に抜いて振るう。

猛烈な勢いで下部から迫ってきた女性に驚いた賊はその表情のまま頸部を切断され、

自分が落として殺してきた官軍の兵の元へと飛んでいった。

返り血が自らに降りかかる前に女性が一瞬の合間で二人目へと飛び掛る。

横殴りに振るわれた剣は男の体を両断するに留まらず、城壁の一部を破壊するに至った。

刃筋が良かったのか血が溢れずに居る男の上半身を飛び越えて、

その後ろで固まっている男の頭部を返す刀で半分にした。

消し飛ばされた頭部から勢いよく血飛沫が飛び今度こそ彼女の体に

血臭をつけた。

「母様ア、張り切りすぎよ？」

遅れてきた女性、孫策が当たり前のように一気に三人の賊の体を切れ裂く。

体を半ば切断された男達はか細い断末魔をあげて後ろ向きに倒れる。だんだんと自分の若い頃に似てきた娘に嵩蓮、孫堅は我が子を優しく見守る。

その間でも南海霸王を振る手は止まらず、今顎を深く切り上げられた禿げの男が絶叫を上げた。

血が迸っている男の体を力強い直刀蹴りで吹き飛ばすと、隙を付くように突っ込んでくる男の懐に入ると股座から左腹までを切り落とした。

消える重力を感じた男は次いで強烈な痛みを覚えて運よくも気絶したようだ。

僅かに優位に立っていた賊達は二人の修羅が自分達へ殺意を向けているのを察すると、

恐怖の叫びをあげながらある者は喚いて逃げ、ある者はやけくそとなって突っ込んでくる。

それら全てを容易く斬り捨てながら嵩蓮は自分を熱く抱いた男を想う。

(こやつ等に比べれば、あの男の方が余程諦めが悪いぞ。)

少なくともそれを夜の寝台の攻防で味わった彼女はそう確信している。

優位から劣勢に落とされても決して諦めない彼は今、広宋にて賊の本軍と戦っている頃合だろう。

その彼と再び合間見えるには更なる研鑽が自分には必要。

衣類から露出した部分を狙って刃を振るい、見事そこから肉体をそぎ落としながら嵩蓮は男を想っている。

たちこめてきた死臭の中から孫策は剣を振るいつつ自らの母を垣間見る。

修羅の表情で敵の急所を斬り、息絶やす彼女に一縷の女の顔が見受けられた。

その女の行く先には前の戦いで自分達を救出した騎馬隊の指揮官がいるのだろう。

（母様があれ程入れ込むとはねえ、面白くなってきたじゃない。）

賊の胸部から引き抜いた剣を後ろに振るって襲ってきた男の刀を持つ手を斬りおとしながら孫策は思う。

仁ノ助を取り巻く情勢にまた一人普通ではない女性が参戦の意を抱いた瞬間であった。

宛城を攻める官軍の勢いは止まらず、孫母子もそれを焚きつける様にさらに血を求めていった。

第二章：空に手を伸ばすこと その七 エロ表現有り（後書き）

執筆作業の参考までに、池波正太郎の『剣客商売』を購入。
面白くてついつい五巻まとめて買ってしまった……。

今後の戦闘描写の助けになればいいなと思いつつ、
黄巾の乱は徐々に集結に向けて動いていきます。
なんか真の主人公が丁儀になりそうな予感ができて不安になって
きました。

第二章：空に手を伸ばすこと その八

嵐の前を静けさをたたえる戦場、広宋。

初戦にて見事に敗走を装った官軍は戦いの英気を養っている。向こう側に陣取る賊軍では勝利の宴を催していることだろう。

敵軍が目の前に居るのにここまで油断も隙もありもしない失態を重ねる彼らには最早一遍の同情も覚えられない。

業に始まった乱は、官軍によって裁かれることになるのだろう。

そしてこの乱で疲弊困憊となった漢王朝とは対照的に、

各州にて活躍した諸侯の下には知識人や商人、武将が自然と集まっ
ていき、

群雄割拠たる三国時代の到来を告げていく。

夜空に映る月がその大陸を静かに眺めているかのように輝く。

地に群れる人を、天は唯静観するだけなのだろうか。

「湿気た顔しているわね。」

後ろから掛けられる声に彼は振り向く。

腕を組んで数歩後ろに立っていたのは既に戦闘着、といつてもいつもの服だが、に身を包んだ詩花だった。

後半刻もしないうちに自分達は夜に紛れて静かに行軍をする。

朝焼けに浴びた目的地、敵陣地を蹂躪し、その勢いで広宋まで侵攻するのだ。

それに参加する興奮を隠し切れない兵達はそそくさに出陣準備を整えている。

しかし自分だけは妙に憂鬱な表情をしていたのか、気づきもしなかつた。

「……………考えてみたのだがな、これまでも、これからも、よ

り一層の死者が出ると思ってたな。」

後漢王朝の繁栄期には約五千万以上もの民草が、
三国時代が進むと中原の総人口が僅か約六百万人まで減少するのが
史実である。

自らの民族を十分の一まで淘汰する、凄惨且つ残酷な未来が今から
行われる戦いにより決定的となる。

その事実を思い起こすと彼は深く思い悩んでしまう。
ここまでしなければ中原は統一されないのか。

自分もその殺戮の一端を担う人間となるほど、冷酷な人物と成るの
だろうか。

いや、実は今既にそうなってしまうのではないか。

考えれば考えるほど弩壺にはまりそうになる思考を消すために彼は
月を見上げていたのだ。

「・・・分かっていたんでしょ？あの時、士官をすると決めた夜か
ら。」

自分達が旅先で同部屋となった夜を言っているのだろう。

彼女の言葉に視線をそらして顔を俯かせる。

分かっていたはずだが、ただ認めたくなかっただけなのだろうか。

自分の心に整理が付かなくなり、そんな自分を彼女に見せるのが恥
ずかしくなる。

緩やかに地を這った風が両者の間を吹き抜ける。

風で揺れた前髪を押さえつつ詩花が言葉を紡ぐ。

「簡単に割り切れることじゃない。悩んでもいいわよ。いつまでも
ね・・・。」

ゆっくりと近付いてく彼女を目の端で捉える。

距離が一步まで近付くと背中に重みを感じ、腹部に彼女の柔らかな腕を感じた。

後ろから優しく抱きついた彼女は子供をあやす様に続けた。

「いつまでも、私が居るから・・・気を落とさないで、ね？」

静かに彼女の言葉が心に沁み込でいく。

嵩蓮を抱いた時にはこのような安堵感が感じられなかった。

あれはただ若い情熱と飢えた愛情を満たすための行為、その間には安らかな物が存在しなかった。

しかし今背中から胸の奥まで感じるのは、確かに安堵感。

一人流離って行く内に生じた孤独を癒すそれであった。

思わぬ感情に目頭が熱くなり、それを誤魔化す様に、彼女に悟られないように、

抱きついてきた彼女の腕を解くと正面から抱き合う形となる。

三寸ほどしか身長が違わない彼女の口から漏れる息が首筋を撫でる。

くすぐりたいそれに仁ノ助が僅かに顔を動かして彼女と見詰め合う。

そういえばこうやって話し合うのも久しぶりな気がする。

あの時は事に及ぼうとして失敗したが、今回ばかりはそうはさせない。

僅かに潤んだ瞳に真剣な色を浮かべ彼女の口をゆっくりと、優しく彼女が抱いてきたように奪う。

目を閉じて受け入れる彼女はあの時と同じように幸福で満たされていた。

唇から感じる甘みは女性の柔らかさを象徴しているかのようで頭がくらくらする。

何度も繰り返したくなるそれを断腸の思いで彼は止めると、呟いた。

「行こうか。」「……………うん。」

抱き合う腕を解くと肩が触れ合う距離で二人は歩みを自陣へと進める。

広末の夜は、静けさを解きつつ過ぎていく。

第二章：空に手を伸ばすこと その八

広末、黄巾党本拠地にある城、その城壁に立つ丁儀がいつも以上に張り詰めた表情で地平を睨んでいる。

妙な胸騒ぎで眠れぬ夜を過ごすよりも哨戒をすることを選んだ彼は、その哨戒の目的地である城壁の上から官軍が居る方向を警戒していた。

脱出計画が公然のものと成った今では内部分裂は激烈さを増している。

これに嫌気を差した者達が続々とこの城から密かに脱出し官軍に降伏していることから、

ここでの対立も周知の事実となっていることだろう。

そしてその対立から生じた隠し様の無い隙を彼らがついてくることもはつきりとしている。

自分達がそれに抗する力が無いことも、だ。

いつか訪れる官軍の総攻撃の際には火事場泥棒のように大洪らの目を潜り抜け脱出する。

(・・・不安だな。)

目を細めて表情を曇らせる。

普段三姉妹や不信感が拭えない老占い師には絶対に見せない表情だ。こうして独りとなった時にしか彼はこれを現さない。

他者の中で孤独を感じるよりも、自分から孤独を選んできた彼の昔からの癖である。

その彼を社交的なものとしたのが張三姉妹であり、向こう側で眠っているであろう仁ノ助だ。

健やかに眠る彼女らとは違って、彼は今なにをしているのだろう。

いずれ対決する事に備えて、彼も眠れぬ夜を過ごしているのだろうか。

それとも、いつも通りに飄々として緊張感を感じずに寝ているのだろうか。

立場を忘れて旧友を心配する彼は、老人がからかうように生真面目なものだ。

真剣な表情で考える彼を起こすように朝焼けが差し込んでくる。

徐々に夜の暗闇が晴れていく、太陽の光がただ黒く暗いだけの空を僅かに青くしていく。

そして緩やかに時間が流れていくと、青い空に赤みが訪れていき、地平の向こうから光り輝く太陽がその御尊顔を現していった。

眉間の皺を寄せていた彼の顔を照らし、体から出る影を伸ばしていく。

眩さに目をさらに細めた彼は思考を止め、地平線を改めて見つめた。

そしてその中から僅かに見える旗を見定めると、瞠目した。
ひしめく旗は自らの党旗ではない。

一つにはためくそれは『袁』の旗、袁紹軍の部隊である。

そしてもう一つの旗、深い蒼か紫にも見えたそれに刻まれた文字は『曹』。

(・・・来たか、仁ノ助！)

己の旧友がこちらに迫っているのを瞬間的に察した丁儀は踵を返して城内に眠る彼女らの元へ走っていく。

階段を降りるのが億劫となつて後十五段となつた辺りに前へ飛ぶ。

着地の勢いを見事に殺しながら彼は疾走していく。

己の最後の砦に居る彼女達だけは守ると堅く誓つて、彼は足を速めていった。

皇甫嵩が言っていた鎧袖一触とはこの事か。

北郷一刀は日本で俄かに流行つていた言葉を脳裏に浮かべながら戦況を見る。

夜に静かに近付き、朝焼けになつた瞬間官軍は怒濤の勢いで賊軍を襲撃した。

宴の終わりの後を匂わせる賊軍陣営から男達が焦りながら身支度を整え戦いの準備をし始めたが、遅すぎる。

第一戟を加える任に当たつた『公』の旗印が、白馬の群れをもって剣戟を振るつた。

中原随一の錬度を誇る公孫讚の騎馬隊、白馬義従は猛烈な勢いで賊軍を蹂躪していった。

断末魔と悲鳴、絶叫が騎兵が掛けて行く音で掻き消され、彼らは完全に混乱状態に陥って退却の選択を即座に選んだ。

一気に戦線が生じ、また同様に崩壊した。

逃げていく賊軍を追撃するために皇甫嵩と公孫讚、そして錬度に不安がある自分達の軍隊が追い回す。

窮鼠猫を噛むというが、その抵抗すら飲み込んでいく官軍が圧倒的に見える。

その戦端に未熟な自分を支えてくれる少女達が居ることを彼は嬉しく、誇りに思う。

「はわわ……今までは比べ物にならないくらいの勢いでしゅ。」

「あわわ……もうただの追討戦になってしまってますしゅ。」
仲良く舌を噛んだ二人の少女が緊迫した空気を和ませてくれているように安んじてしまう。

茶色のベレー帽のようなものを被って、緑色の腰帯を巻いた少女があの諸葛亮だとは誰が思うだろう。

今まで見てきた情けない官軍とは違い、経験豊かな勇将に率いられた軍隊は生き物のように動いて賊軍を蹴散らしていく。

その光景に諸葛亮、朱里は「はわわ」と驚きを露にしている。これが彼女が『はわわ軍師』と言われる所以の一つになっている。

隣で驚く彼女は同様に『あわわ軍師』とも言われるが、実際は天下一同も言っていないほどの優れた戦略家である、鳳統なのだ。

この小さな義勇軍に臥龍と鳳雛の両方を備えることができたのは、天の御遣いといわれる自分だけの名声だけではない、実質的には桃香たち、劉備三姉妹のお陰である。

その三姉妹のうちの二人、愛紗と鈴々、関羽と張飛はまさに豪傑の中の豪傑といわれる少女達だ。

その名に恥じぬ武勇っぷりを族たちに対して見事に振るっている。青龍偃月刀、蛇矛が轟音をあげて猛威を振るう度に風が猛烈な勢いで巻き上がる。

賊達の体が飛び、散り、千切れ、砕ける。

つんざめくような声を上げて賊が吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる衝撃でもう一度か弱く鳴く。

それらを纏めて薙ぎ払う様に血飛沫の濁流を生じさせる。

あまりに圧倒的な光景に、本来凄惨さのあまり吐き気を催すそれがまるでゲームの中の演出のようにみえる。

有り難い事に現実離れた光景のために一刀は正気を保ち続けてそれを見られていた。

「ここ戦いの趨勢はもう決した、と行っていいんだよね？」

劉備玄德と名乗る少女が相も変わらず無双を誇る二人の妹を頼もしく見つめながら問う。

長い桃色の髪は戦場に吹き荒れる風に煽られて、

土煙が入らないように目が細められている。

戦渦が通った後を確かめるように通っていく、時折まだ息がある者がここぞとばかりに襲ってくるが、

自分達の周りを確りと固める兵達がそれを距離をとって刺し殺す。

義勇軍がちゃんと訓練通りに連携していることに満足しつつ一刀は答えた。

「うん、本拠地の陣営がこれだけ荒らされれば黄巾党は壊滅も同然。乱は終結へと向かうだろうね。」

史実においてはこの地域の賊達は年が変わっていても尚ほど抵抗を

続けることとなるが、

組織立ったものではなく、青州のように残党が一気に集結しなければ義勇軍である自分達の必要もないだろう。

一刀は早くもこの乱の終結を感じ、自らの活躍は朝廷にある程度は認められることとなって何処かへの地に封じられる事となると確信していた。

その地を拠点に、この三姉妹の乱世が始まることも。

馬に己の足に、一気に殺到する様は圧巻の一言。

城に押し寄せた大軍勢の中、その中の一部隊を指揮している仁ノ助は吉野の上より感嘆の息を漏らした。

城といってもこれはむしろ一つの石造りの砦といった所か、

平原での数に物を申す戦闘を主体においてか砦からの抵抗が弱い。

ここまで攻め立てられる前に官軍を蹴散らしてきた一方で、

このような城砦戦となると一気に脆弱さを露呈するのは賊ならではのいったところか。

早くも一番槍を争うかのようには兵士達が城壁に道具をかけて、

鉤爪のようなものを先端につけた長梯子を立て掛けて登り始める。

一度石に食い込めばそう簡単に外せる事は無いだろう。

組織だって抵抗しようとする賊を夏侯淵將軍率いる騎馬隊が騎射で討ち落としていく。

弓に投石に必死に抵抗する様は健気なものがあり、

かつて大陸に大きな波紋を生じさせた賊達の最後の努力を思わせる。

しかしそれも今日限りで無意味と成る。

青州に集う賊の残党のような例外を除けば此度の戦にて完全に趨勢を決する。

それを象徴するかのように、今一番槍、否、一番剣が城壁の上へと到達した。

「夏侯惇、一番槍イイイイイイイイイイイイ!!!」

我が軍一の剣士の豪快っぷりには笑いしか出てこない。

自ら先頭に立つて城壁に取り付いた彼女は勢いを増しつつ城壁を登りきり、

辺りに群れる賊を七星餓狼を一度振るって大きく吹き飛ばすと、それを天に高々と掲げて自らの武勇を内外にみせつけるよに勝ち誇った。

將軍が率先して武功を上げる姿に官軍の兵達の威勢がより沸く。

一方で賊達は目の前に居る武将がかの夏侯惇だと聞いて恐れ戦く。

ここに逃げてきた者達からその豪傑さをたんと聞かされていたのだらう、

自ら進んで彼女を攻撃する者は居らず、逆に仲間をけしかけようと牽制を始めた。

目の前で始める賊達の争いに耐えることを知らぬ將軍は大剣を右肩に担いで吼える。

「どうしたああああああ!!! 来ぬならこちらから行くぞ、賊共オオオオオオ!!!」

語気を荒げて一気に駆け寄ると力のあらん限りに剣を振るった。

城壁の石壁をも巻き込んだ一振りが強烈な暴力を無抵抗な阿呆共を襲う。

抗うことが出来ぬ一撃は文字通り賊達の肉体を手に持った武器ごと

『消し飛ばした』。

半身のみとなつた男は数歩よろめくと傷口から溢れ出す血の音を立てて崩れる。

大きく体右上部を削られた強面の男は勢いのままに城壁内部へと吹っ飛び、血の噴水を撒き散らす。

他の有象無象にいたつては敢えて言うに及ばず、豪快の一字の元に肉片を晒した。

剣を振る勢いを止めずに襲い掛かる夏侯惇から仁ノ助は視線を外す。もはや城壁は制圧したも同然となつてしまった、呆気ないことながら。

今ようやく曹仁が梯子を上りきつて戟を振るいつつ何かを將軍に向けて叫んでいる。

予想するに難くない、突撃馬鹿に対する文句だろう。

城門に何度も大きな破城槌が叩き込まれる。

空気を震わす振動を生み、門上部に溜まった埃や石の欠片が落ちていく。

数十人がかりで持ったその城砦攻略用の代物は我が軍師考案の武器である。

それについての専門知識を持ち合わせていないのか使用用途に限られる代物だが、

ただ突破することに関して言えば十分に及第点を与えられるものである。

「後三撃、といったところですね。」

歴戦の曹洪といえども本拠地を制圧する興奮で声が若干震えている。それを抑えようと深呼吸しつつ、手に持った蛮刀に込める力を何度も確かめている。

なんだかんだ冷静に振舞いつつも、やはり若人に違わないのか。

振るう。

大きく切り裂いたそれは致命傷、口から小さな末期の息を漏らしながら男は倒れる。

その男の最期を看取ることなく目的地へと走っていく。

慌てふためいて色んな方向へ走っていく者達の間を駆け縫った丁儀は拠点中央西側にある洛陽の宮殿を模した館に辿り着いて以降、

この期に及んでまだ暗殺者を向けてくる老翁たちに辟易しながら斬り捨てていた。

今この瞬間にも彼らの魔の手が自分達に振るわれている。

自分は兎も角、天和達はこれに抗する手段を持っていない。

彼女らが集う部屋には幾人か兵を配置したが、それでも尚不安が残る。

その不安が杞憂であることを願いつつ丁儀は足を速めていた。

(・・・っ!?)

曲がり角を曲った瞬間、自分に向けて飛んでくる小刀を反射的に刀で弾く。

足を止めて飛んできた方向を見遣ると、また暗殺者と思わしき男が立っていた。

一般的な兵の身なりに包んだ男はこちらを警戒しつつ半身を開いて待ち構えた。

今までの暗殺者達は攻めの一手を選んできたがこの男は違うのか。

違和感を纏めて捨てるように手に持った刀を上段に構えて突っ込む。相手の手に持たれているのは一振りの刀、刃渡りは三尺もない。

平均的な武器であるそれはそれ故に大した硬度を持っておらず、数度打ち合えば刃毀れが生じる代物である。

もう片方の手に持たれたのは同じ形の刀。

両方の剣とも腰の辺りで構えられており、片方の刃の切っ先が自分に向いている。

もう一方の刀は中段構えのような型で構えられた。成程、一撃目にこちらの刀を弾きながら身をかわし、二撃目に後ろに持った刀でがら空きとなったこちらの腹部を狙う心胆なのだろう。

しかしその攻めは先の者達によって経験済みだ。振るわれる前に、斬る。

詰め寄った丁儀は上段に構えた刀を神速の速さで振り下ろす。

切っ先の速さだけを観測するならば、きつと音速を超えていただろう。

対する男は驚くべき速さで振り下ろされる刀に目を開くと瞬時に両手に持った刀を顔の前で交差させた。

間一髪、男の顔を断ち切る筈の凶刃が受け止められる。

舌打ち交じりに丁儀は鞘を男の喉目掛けて突き上げたが、

それを頸をひねって交わした相手は丁儀の腹を蹴って距離を取る。

大した痛みは無かったが一瞬怯んでしまいみすみす相手に有利な距離を取らせてしまった。

先の刃の振りを間近で垣間見た男は最早一遍の隙も見せなくなり、双方の刀を腰溜めに構えてこちらの攻めを待っている。

(・・・斬らねば、進めず、か。)

男の先にある部屋に用があるのだが倒さなければ通れない。

これを無視すれば背中から斬り付けられ仕舞いである。

先の防御の早さを見る限り、この男もかなりの手練れであることが伺える。

ならば遠慮は無用、いかなる手を使ってでも罷り通るのみ。

丁儀は鞘を腰に差し直すと両手で刀柄を掴み右肩に担ぐように構える。

状況、敵一人。間合いは目測で四間(7・2メートル)。

互いに二歩踏み込みそこから前へ出ながら刀を振れば相手の肘の先が斬れる距離だ。

一心に防御を選ぶ相手は床を踏みしめたまま動かない。故に進む。一步踏み出す。相手はまだ動かない。

二歩踏み出す。相手の肌には緊張感が水と成り落ちていく。

三歩踏み出す。直後、相手が床を蹴って前へ突っ込んだ。

右手に持つ刀でこちらの頸を狙い、左手に持つ刀でこちらの武器を押しさえようと横より風ぐ。

勝機は、先。相手よりも早く斬る。

肩に担いだ刀を相手の左手に持たれた刀身の中程へと打ち下ろし、目視で左側から来る相手の突きを体を沈めて交わす。

足を確りと踏んで下ろされた刀は体重移動がしつかりとかかって見事狙ったとおり打ち込まれ、

相手の得物を中程より折る事に成功した。

直後、頭上より相手の殺気を感じる。

突きを狙った刀をそのまま下に下ろして無防備な自分の頭部を割ろうとする気か。だが予測できている。

しかと踏みしめられた足は刀を振り下ろすためのものではなく、地を踏みしめる反動で後ろへと跳ぶ為のものである。

体をさらに深く沈めて刃が届く時間を稼ぎつつ、

丁儀は地を這う虫のように飛び退き、直後彼の頭があった場所を刀が勢いよく通過した。

得物を折られた男はそれに見向きもせず、使い物にならなくなったそれを投げ捨てる。

右手は鐔近くを、左手は拳一つ分を開けて柄を握る。

こちらの喉元を狙うように切っ先を向ける、中段の構え。

攻守両方において得意とした構え、彼の意識に攻めが浮かんだ証。左好機と捉えた丁儀は構えを新たなものとする。

柄の握り方は目の前の男と同じ、拳一つ分が開いている。

構えも同じ中段の構え、喉を狙ったそれは微動だにしない。男も、空気の流れが切れるその一瞬を待つて動かない。相手の刀の切っ先には集中せず、相手の心の動きを狙う。一分でも気を乱せば、そこにはどうしようもない隙が生じる。大きく踏み出せば刀身が相手の体に深く食い込むことが出来る位置、危険を侵す愚は両者共に避けていた。自然と、両者から音が発することが無くなる。

——遠くより剣戟の音がしている、既に官軍は想像以上に近い距離に來ているのか。

意識の彼方でそのような思いが巡った瞬間、男の視線が僅かにぶれる。

その隙を丁儀は絶対的に見逃しえなかった。

大きく前へ詰めるように跳び出し、四半瞬遅れて男も跳び出す。しかし構えが中段から上段に瞬時に移行した。

男の視線のぶれは、攻めの構えを変える事にあつたのか。

中段からの突きを十二分に意識させておき、攻撃の瞬間に上段に構えなおして呐喊する。

突きによる攻撃に意識を向けすぎた自分は突如変化したそれに機を取られて攻撃の手が僅かでも緩んでしまうのだろう。

それを見逃さず、男は上段からの打ち込みでこちらを仕留める気なのだ。

論理には適う、だがそれでこちらを殺るには足りぬ。

男の思惑を裏切る形で、丁儀の刀が男の頸元に突き刺さった。

驚愕の色を瞳に浮かべた男は喉に走った衝撃により思わず手が後ろのめりとなり、

上段に構えられた刀が手から毀れていく。

床に突き刺さる切っ先の音がすると同時に刀を勢いよく引く、そして迸る血飛沫をさらに煽るように刀を返して首を刎ねる。

見事な断面からは男の鍛えられた筋肉と骨が見え、そこに通う血管から血が噴水のように噴出し、天井や壁に飛び散り、床を赤く濡らす。

男の体は首を刎ねられた勢いで地面にうつ伏せに倒れ付すと死後痙攣を始めた。

丁儀は返り血を浴びないように既に後ろに退いていた。

この者の行為が下策となり自らの命を捨てるに至った理由は主に二つ。

一つは、こちらの刀の振りがただ腕のみにより生じると誤解したこと。

刀の振りは腕というよりも体全体を使って体重移動を行うことで完成する。

足の裁き方から指先の力の入れ具合、細部はそこより始まり、無数に派生する。

ただ腕の筋力のみでは刀刃を扱う巧者には成り得ないのだ。

二つ目は、こちらの攻めの意識を読み違えたこと。

こちらは最初から相手の攻撃が突きだけなどと想定していない、想定していたのはただ一事、敵の命を散らすことのみだ。

如何に殺すは下策、ただ殺すのみが上策と知れ。

死んだ強敵に助言を送るように内心で言葉を思うと、

丁儀はそそくさとその場を後にした。

後に残されたのは床に突き刺さった一本の刀、半ばより折られたなまくらの刀、

そして腕が達者であった一人の武士の亡骸だけであった。

(思ったより時間がかかった！無事で居ろよ……！)

彼は答えを確かめるように遂に目的地である部屋の扉の前へと辿り着く。

そして予め決めていた合図、すなわち決めていたやり方で扉を叩く。二度続け、一拍置いて一度、さらに一拍置いて三度続けて。そして彼は扉をすばやく開けると一秒も満たない時間で中に入り、これまたすばやく扉を閉める。

直後彼の胸に衝撃が走って吃驚としてしまふ。

一瞬殺られたかと思つたが、女性特有の甘い香りが鼻につき、桃色の髪の毛が視界に入ったのを見て安堵した。

刀を持たぬ腕で自分に抱き付いてきた女性、天和をあやすように背中を撫でる。

殺される恐怖に苛まれてきた彼女は息を震わせて声を漏らした。

「ああ………よかつたあ………」

胸に顔を埋めて心よりの安堵を浮かべて涙交じりに甘えてくる。

それを甘受したい気持ちはやまやまだが今は一刻の猶予も無い。

抱きついてきた彼女を離して部屋の中を見つめる。

地和と人和が互いに抱きつき震わせた息を整えている、こちらも恐怖から解放されたと思つているのだろう。

八人の男達の死体が真新しい血の臭いを出して転がっている。

うち四人はこちらが配置した護衛兵である、殉職した彼らに敬意を表す。

残り四人はやはりというべきか、大洪らの暗殺者と思わしき身なりであつた。

「二人はそやつらが、二人はわしが斬つたよ。」

後ろから掛かつてくる声に驚愕して頸だけで振り向いた。

扉を抑えるように管輅が腕をたらしめて背をかけていた。

僅かに顔に返り血がついている事から、また手にもたれた細長い片刃の刀から滴る赤い水を見るに、斬つたのは本当らしい。

この男の手札の多さに呆れ、ついで思わず笑いたくなる。

「本当に底の知れない男だな、吉兆のみならず武技すら操るか。」
「ぬしも若いのにやるな、わしなんて返り血を浴びるまでに衰えてしまったよ。」

若いときはこんな体たらくなど晒さなかったわと老人は珂珂珂と面白くという風に笑う。

いつも通りの態度を崩さぬ事からまだ余裕があるらしい。
好都合だ、自分達が逃げ切るためにまだ多くの敵を斬る事となるかもしれない。

老人は邪気と稚児のような悪戯気な輝きで目を爛々と輝かせると、喉の奥からそれを吐き出すように言葉を紡ぐ。

「では、始めようかの。」

第二章：空に手を伸ばすこと その九

ただただ蹴散らすのみ、眼科の敵は敵にあらず。激しく燃える火ほど素早く鎮火していくものだ。

また彼らは張三姉妹という一種の象徴を抱えているが、それはただの形骸に過ぎない。

見栄えが悪い老人よりも見栄え良い美女を棟梁として据えて組織を連携させるのは良くある寸法だ。

だがしかし、それを確かめる術が自分達にはない。

張三姉妹というが、実際のところ老人であるかもしれない、むしろそちらの方が理に適う。

これほどまでの大軍勢を彼らは組織したのだ、それを考えるほどの頭がただの象徴にあるはずがない、

黒幕は広宋中枢部にいる、真の張三姉妹だ。正確には張三兄弟か。これを我が軍が討ち取ることで、さらなる名声を手に入れることが出来る。

そう考えている曹孟徳の中の敵は既に見定まっている、すなわち漢王朝で利権を貪る獣、宦官である。

正確に言うならば、彼らを束ねる老獪な男、張讓こそ、十常侍こそが敵だ。

既に洛陽では宦官らによる売官行為が多発しており、それを炊きつけているのが十常侍である。

また乱の勃発時、自分達の悪政が原因で起こったと言った郎中の張鈞に対し、

張讓らは官職についていた一族を全て退職させて皇帝に資産を献上して隠遁するなどの行動によって靈帝の怒りを消し、逆に張鈞を賊への内通者と讒言して死に追いやる。

しかし遂に彼らの中の一人が内通者だと発覚する事態に至ると、

豫州刺史の王允は張讓が太平道の信奉者だと靈帝に暴露する。これに靈帝は激怒するが、張讓は既に亡くなっている者に自らの罪を擦り付けることによって責任回避をし、その後王允を讒言によって左遷に追いやった。乱時において州の平定を行った功労者に対する労いのそれもない、また史実には翌年に起こる事であるが、洛陽の帝の宮殿にて火災が起ると十常侍は各地からの復興費を着服し私腹を肥やしたのだ。余りにも目に余る行為の数々、曹操の怒りを買つには十分過ぎるものであった。

この乱の後、各地で台頭する地方豪族のいくつかは漢王朝に対して反旗を翻すことになる。

そして乱で活躍した諸侯がそれを鎮圧するに至ってさらに自分達は強力なものとなる。

政情不安定な王朝では膝元で漂う不吉な気配、中原全土に漂う諸侯達の戦意の高まり。

さらに病弱な帝ももうまもなく崩御といつていいほどの身、自分達の政権確保のために政敵を減らそうと内部分裂を行うことになる。

恐らくこの乱で被害を最小限に留めた董卓辺りがそれを鎮圧して政権を牛耳り、軍政を敷くだろう。

その後自分達は反董卓連合軍を組織して彼を倒し、新しく据えられた帝を救出、

曹孟徳を丞相として新たな王朝を築き上げ、中原を統一する。

不遜だとか不敬だとか言われるような思考ではあるが、ただの妄想に等しいとなじられる物ではあるが、

彼女はそこまで読み切った上で、自分の新たな手駒である、

今張角を直接討伐する任を与えられている仁ノ助の活用を考えていく。

中原全土にはある噂が流れている、すなわち占い師管輅が流した噂によると、

『一つは流星と共に、一つは戦乱と共に世へ降り立ち、この大陸を猛き者の国とするであろう』とのこと。

流星が何を示すかは皆目見当がつかないが、戦乱と共に世へ降り立った者が仁ノ助であることは間違いない。

その理由の一つに、彼の持つ珍しい名前の配列。

これが示すことは彼がこの大陸生まれの者ではないということだ。

世へ降り立つということは、彼が何らかの理由でこちらに渡ってきたということなのだろう、

自分から話さず仕舞いなので確かめる術は無いが。

第二の理由に、この大陸の不問律を弁えていないということ。

それはすなわち、異国の蛮族の言葉は話さない。

彼は時折訳の分からぬ言葉を話すことがある、例えば「マジ」「や」「ワット」など。

これにて曹操は彼がいわゆる『天の御遣い』と成るに足りる人物であると確信できた。

曹操はそこまで考えてにやりと不敵に笑う。

仁ノ助には悪いが、彼には天の御遣いとなってもらい、我が軍を強固に団結させる一つの象徴にさせよう。

唯の噂で有名無実となっている『双つの御遣い』、それを有名有実とさせてしまふ。

そうして強固に成った我が軍はこの大陸統一に最も近い軍となる、霸道はいよいよ軌道に乗るのだ。

淫靡に笑う曹操は大陸全土の者から見ても危険な空気をばら撒いていたが、

横に立つ猫耳だけはそれを淫蕩として表情で眺めていた。

第二章：空に手を伸ばすこと その九

走る、走る、暗闇の中を手を持った松明の光のみが照らす。

丁儀が右手に松明を掲げて前方を照らし、時折後ろに居るものがちやんとついてきてるか確かめる。

張三姉妹は数々のらいぶを経験しているのか未だに走りに影響は無いが、

しかし息が若干切れ気味でありそろそろ休憩を挟まなければ成らない。

最後尾を勤める老人は恐ろしいことに息一つ切らさずに付いて来ている。

老人の手に松明を、腰には細長い刀を納めた鞘があるにも関わらずだ。

琴はどうしたと聞いた所、あれは一種の心得だから捨てても平気と返された。

丁儀が辿り着き、彼女らが立て籠っていた部屋には一つの隠し通路

があつた。

大きな机の下に人一人分しか通れないような細い穴が二重三重にも隠されており、

縄梯子がかかつてそれを降りていくと延々と続く細い通路がある。

脱出計画の立案当初から設置をしていた長さ八里にも及ぶ地下通路は、

信奉者達の血の滲むような努力の末に完成されたものだ。

彼女達が立て籠もっていた理由の一つに丁儀が到着するまでこの通路入り口の安全確保も有つた。

広宋近郊にある森に直通しているこれを辿って自分達は今脱出を行っているところなのだ。

「はぁ……はぁ……今っ……どのくっ……らい!？」

「大体っ……後半分つてとこかな……ちい姉さん……っ」

人二人分の幅しかない通路を腹を押さええて走る地和はかなり苦しそうだ、

それに返す人和も額から汗を流して息を荒げて返す。

思った以上に消耗が激しい、今休憩するのは危ういが、しかしなければ走りもおぼつかない。

万が一このまま出口に辿り着いたとしてもその後の逃走が心許ない。

「……一端休憩しよう!体力が続かないだろう!？」

「大っ……丈夫!まだいける!!」

普段の威勢で返そうとするも息がつつかえて尚苦しそうである。

今でも十分に無理をしているのは明らかで見えて胸が痛む。

それに反論しようと口を開くが、天和の言葉がそれを抑えた。

「お願いっ……まだいけるからっ!!信じてっ……!!」

三姉妹の中では唯一息を切らさずに安定したペースで走る彼女、その彼女の言葉に後ろの二人は大きく頷いて走りをとめない。彼は尚言葉を言いたげにしていたが後ろから見えてくる管輅の咎める様な視線を受けて口を閉ざす。彼の視線の意味を理解したからだ。もうじき自分達の逃走に彼奴らが気付く頃合、既に止まる事はただの自殺行為に過ぎない。となればここで立ち止まる理由が無くなったも等しい。丁儀は改めて前を向いて走り続けていった。出口までの距離は、後四里もない。

目の前を走る剣閃を仰け反って回避し、お返しとばかりにクレイモアを振るう。

恐慌に駆られて滅茶苦茶に剣を振っていた男は胸部の骨の間を見事に断ち切られて両断された。

その技量の持ち主である仁ノ助は全身が返り血で濡れており、そこから漂う生臭い鉄分の臭いで鼻をやられている。

突如左側から襲ってきた剣を反射的に打ち返し地面に落とす。刃を返して頸を斬るが骨に当たって食い込んでしまう。

相手の胸部を蹴りつけて無理矢理抜くと濁流のように血液が逆流して肉体外部へと吹き飛ぶ。

その返り血を諸に顔に受けてしまい、左目にかかってしまう。

視界を一つ奪われた仁ノ助は左目を瞑りながらまた新たに獲物へ向かっていく。

広末にある宮殿の東部にて曹操・袁紹連合軍は凄絶に賊軍守備兵と交戦をしていた。

ここには敵方の精鋭が集められているのか、予想に反してかなりの激戦をする羽目となった。

乱戦の様相を呈したそこに騎馬隊を無闇に突っ込ませると馬をやるるばかりか、

味方にも被害を出しかねないと判断した仁ノ助は曹洪に騎馬隊から歩兵戦闘の勇者を選ばせ追討戦の指揮を任せると、

獅子奮迅の勇者らと共に騎馬から降りて一気に宮殿へと突っ込んだ。未だに犠牲者が出ていないことから、勇者であることは確かであるらしい。

円陣防御を組みながら徐々に宮殿へと接近すると、彼は部隊を少数に分割して宮殿制圧の命令を下した。

その後の建物内部での戦闘は激化の一途を辿り、遂にこちらにも負傷者を出す事態となってしまうている。

今彼は呉鉤を腰に差してクレイモアを縦横無尽に振って唯敵の首謀者の元へと向かっている。

この乱の首謀者を討ち取り、それを大いに喧伝すれば敵の士気は一気に下がる。

その後は降伏すればよし、抵抗すれば殺すを方針に戦闘を継続すればいい。

油脂がペンキのようにこびり付きながらも鋭さを失わないクレイモア、それを打った敵面の親父の感謝しつつ、

彼はひたすらに敵を切倒して行く。殺した数は五十を越えた辺りから覚えていない。

柱の影から通路の突き当りの角から通り過ぎた部屋の中から飛び出

して襲い掛かる賊共に辟易としてくる。

其れほどまでに張角・張宝・張梁という者達は大切なのか。

彼が知る芳もないが本物は既に逃走済みであり、

今宮殿に残っているのは大洪・楊鳳・白爵の三人の老いた狂人だけだ。

仁ノ助にいわせれば、どちらを討ち取ったとしても首謀者に変わりはないのだが。

彼の走りは止まらず、遂に一際大きな扉の前に辿り着いた。

扉の取っ手から縁に至るまで豪華絢爛に彩色されたそれは、

どうみても「首謀者の部屋」といってよいほど自らを主張している。溜まり溜まった不満の反動がこのような自己顕示欲の塊として現れるのは何処の国でも一緒か。

頬までべっとりとした血臭漂う鉄で濡らして彼はそう想起した後、数歩後ろへ退く。

そして一呼吸を置くと勢い良く前へ駆け出して扉を真っ直ぐに蹴りつける。

中にかけられた錠は脆い物なのか、鉄が砕けた音と木が大きく軋む音がした。

仁ノ助は先ほどより距離を取ると、再度駆け出した。

今度こそ全身の力を込めて扉を蹴りつけると、自分の二倍は大きな扉が僅かに開かれる。

その隙間から見ると錠が完全に壊れており、後は扉を押しだけで中に入れそうだ。

だがその意識を中から漂ってきた肉の腐臭が遮る。鼻をやられてい

るのも関わらず、それが何かを認識できてしまう。どうしようもなくイヤな予感がするが、それでも進まねばならない。深呼吸をして彼は扉の取っ手を押す、老廃した木が歪な音を立ててゆっくりと開いていく。

臭いがさらに強まって眉が顰められる、目付きがさらに険しいものとなる。

開かれる大扉の中に入っていった仁ノ助は、そこに広がる狂人の惨状に目を見開いた。

とても大きな広間の中の至る所で人間の禁忌が犯されていたのだ。

左手に見えるのは、積み重ねた木の上に置かれた大釜、その釜の口に手が届くように置かれた脚立。

大釜の周りには痩せ細った幼子の死体が幾重にも積み重なっており、釜の縁からは皮膚と肉の繊維が溶けて垂れている、小さな手が見える。

恐らくこれで子供を煮えたぎった釜の中に突き落として溶かしていたのだろう。

その熱の勢いをまだ残しているのか、熱気で空気がぶれている。

その釜の奥には何やら食卓が（こしら）えられている。

その食器に乗せられている物を視認した瞬間、仁ノ助は吐き気を催して口元を抑える。

釜で溶かした幼子の死体が乗せられていたのだ。

熱を残して湯気をあげている事からつい先程まで饗宴をしていたらしい、

液体となった肉体から脂肪が溢れて食器の外まで毀れている。

肉の中から見える骨も沸騰した血液が染み込んだのか、薄桃色に染まっている。

そして食卓の中央に置かれた、絶叫の表情を見せている人間の生首。釜で溶かされていないのか外形が崩れていない代わりに、

口元に何か焼かれた黒いものを差し込まれている。

彼はそれが何か見当が付いた、馬の睾丸である。

顔をさらに青くした彼は見たくもない物を見たくなる好奇心を抑えきれず、右手を見遣り、過去最大の後悔をする。

右手奥には何体もの全身を分割された馬があつた。

体のあちこちに大きく鋭い針が打ち込まれており、馬の皮膚や硬い筋肉ごと貫通している。

ここから睾丸を切り取って生首に啜えさせたのだろう。では、生首は？

その答えが右手手前に目を移した瞬間に判明した。

地面に差し込まれた大きく太い針が数本並んでいる、まるで煙突のようだ。

その針の先端にはそれぞれ、全裸の女性が突き刺さっている。

血が滴り落ちて針の根元まで垂れており、何日も経っているのか黒く乾いている。

女性の菊穴は大きく拡張されている、殺される前に獣姦を強制されて陰茎を突き入れられたのか。

口元からは萎びれた舌が垂れており、目は何も映していない虚ろなものである。

それも当然である、眼球はくり抜かれているのだから。

底なしの虚無が死体の瞳から発せられており、それが仁ノ助の目とあつた瞬間、

彼は吐き気を抑えきれずに遂に床に勢い良く吐瀉物を吐き出す。

(惨い………)

思考するのがやっとの彼は嫌悪感の余り涙をぼろぼろと零していく。目の前の光景が現実のものとは覚えず、彼の拒絶が口から吐き出される。

腹を押さえて吐き続けた後、頭をゆっくりと上げて広間奥に静かに佇む男を見定めた。

仁ノ助に背いた形で膝をついて天を仰いでいる。

よれている白髪は腰の辺りまで垂れているほど長く男の異様さを際立たせる。

全身を白の衣で覆い、死装束を思わせる。

幽鬼のように佇む男の傍には、二つの死体が喉元に短刀を刺して倒れこんでいる。

既に老いて成分すら不足しているのか血液が赤黒い。

魂が抜け落ちたその死体は生前、楊鳳・白爵と呼ばれていた老人であり、

この狂気の饗宴を実に愉しんでいた者達の成れの果てである。

そしてただ膝を突く老人、大洪は深く深く哀しんでいた。

『太平要術の書』、老張角が南華老仙より手に入れたその書には風水を読み人の気を操る術が書かれていると聞いた。

事実老張角はその書に書かれていたことを利用することであるような人望を集めていたのだと思っていた。

仙人が持っていた書には必ずしも使ってはならない術も記されていたはず、

その中に一つに不老不死の実現もあっても不思議ではない。

そこで自分達は各地の黄巾党の人員や賊達を焚き付けて乱を起こし、張三姉妹という女共を確保すると、首尾よく張角を殺害、書の強奪に成功した。

しかし書を見ると驚くべきことを発見した。

正確には、何も発見できなかったといつていいだろう、なにせ書には一語たりとも記されていなかったのだから。

仙人は老張角に書を渡した意図、それは『自然を受け入れよ、心のおもむくを感じよ。』ということだ。

何度も科挙を受けては不合格する、その事実を老張角はただ受け入れて特に何も感じぬ程精神を研ぎ澄ましていた。

だが精神を洗練させて尚張角は悩んでいたのだ、自らは唯浮世を儂んで享楽に更けているだけではないのか。

科挙を受ける事で自らの全てを満たそうとしてはいないのか。

そんな時に彼はこの書を頂き、そして仙人の意図を驚くほど自然に受け入れることに成功した。

そして彼は自らの欲を完全に捨てる事に達すると、困窮する人々を助く事に生命を費やし始めた。

科挙を受ける過程で学んだ知識、特に風土や気候、医療法などを活用する。

そのような事を続けるうちに彼を『大賢良師』を呼ぶ人々が現れ、信奉者が増えた。

同時に、彼が使う術を秘術と呼んで羨み妬み、付狙う者が現れる。それがただ大洪・楊鳳・白爵の三人であるだけの話だ。彼らがやらなくても、他の誰かがやっていたらう。

書を見た彼らは何も記されていない事、すなわち仙人の意図を読み違えたのだ。

『自らの力で成就せよ。』と彼らは解釈したのである。

その後彼らは乱の発生以降各地で女子供を広宋に置いた本拠地に集めると、

不老不死を実現するための崇高な実験と称した饗宴を開く事になる。哀れな玩具を愛でる様に様々な行為をしていく。

手始めに性的なもの、強姦・輪姦・獣姦・玩具を用いた行為・薬物行為・嗜虐的被虐的行為。

序で殺意が溢れるもの、刺殺・斬殺・絞殺・殴殺・出血死・拷問死等。

序で食的なもの、老廃物を使った物・人肉料理・人的な肉とそれ以外の肉の融合。

最後に、彼らのうち楊鳳と白爵は自傷行為を始めるに至ってしまった。

不老不死の実現などは、所詮はまやかしの産物であると悟り、それを世に現そうとした自分達が余りにも矮小に見え、そして魂に何ら価値を見出せなくなったのだ。

空虚な表情で饗宴を愉しみつつ、彼らは自らの死の実現を模索していき、そして今日官軍の攻撃を媒介に自殺を遂げた。

対して大洪は諦めなかった、自らの人智を外れた外道を肯定する事は彼にとっては何よりも耐え難い事であった。

この乱の発起人として、彼は内心に溜まっていった尊大な欲求を只管（ひたすら）に追及した。

饗宴を愉しむことは無く、唯不老不死を見つめて追い縋って行く。そして遂に彼も二人と同様の結末を見出してしまったのだ。

『人間は有限の生物である、人智を外れようと外れまいと』。ただ呆然と天を仰いでいるのは絶望に支配されているためか、若しくは自らの行為の空虚さを改めて確かめているためか。

それを確認する前に、彼の首筋に一刀の双手剣が突きつけられる。

仁ノ助が顔を歪めて剣を構えていた。

顔色は未だに青く、唇と手は震え、息が心の底より震えているかのように漏れている。

人間は自分の理解し得ない物に出くわすと神に救いを求めるか又は恐れ戦くだけなのか、

彼も怒りが沸く以上に、この現実を起こした者を恐れている証左を現している。

剣を突き居られている事を気にする素振りを見せずに大洪が時間をかけてゆつくりと彼を振り返る。

何の色も浮かべていない、ただ自らの深淵を露出させている瞳に仁ノ助が僅かに悲鳴を漏らす。

老人は艶が抜けた嘔（しわが）れた音を喉元から発する。

「分かるか？」

「イツ……」

突如問いかけられた哲学が未恐ろしいものに聞こえて彼は顔を更に引き攣らせる。

口腔が乾き、喉元から徐々に彼の我慢が切れそうになっていく。

老人は頸をゆつくりと傾げて問い返す、その姿はまるで菩薩の様。

「……………死が、分かるか？」

その問いを聴いた瞬間、彼は胸の中、脳の中の全てが爆発したような錯覚をする。

突き付けた剣を勢い良く振りかぶる。

腰を捻じり、腕を伸ばし、半身を円を描くように開く。

そしてそれらが最大にまで延びきった瞬間彼は吼えるような絶叫を広間に響かせて剣を振るう。

視認も出来ぬほどの速さ、凄まじいほどの切れ、全てを本能のおもむくままに発する。

しかし斬られたのは突き付けられた頸ではなく、脂肪が削れ痩せ細った胴体である。

肉・骨が絶たれる音はしない、そこから溢れる水もない。

ただの一閃は、事象の発生を置き去りにした。

数秒の後、ゆっくりと老人が倒れていく。

斬られた場所、胸部よりやや下の部分から男の体が分断された。

剣筋の余波で両腕も上腕部半ばから断ち切られている。

やがて、非常に自然な流れで男の体から血が流れ出していく。

傷口からは老人の衰えた心臓が脈打っているのが僅かに見えている。

床が赤黒く染まっていき、仁ノ助の軍靴の元へと流れていく。

命の流れが弱まっていくに至り、大洪は口から大きな感嘆の息を漏らし、大地に天に自らの生を感謝した。

遂に悟った、不老不死の総てを。

肉体を放棄し、魂の救済を求める。その先にこそそれがあるのだ。

生の終焉より死が始まる。

死の先に、不老不死がある。

遂に悟った天の教えに落涙をして、老人は穏やかな笑みを漏らして言葉を紡いだ。

「……………死だ……………総て……………死だ……………」

「・・・・・・・・」

大洪はゆつくりと言葉を漏らしていくと、目の中に宿り始めた感涙を零し、止まる。

喉元は僅かでも息をしようとはしない、動かない。

血液の流れを司る心臓の動きが確認できなくなっていく。

瞳の中の瞳孔が開いていき、光が急速に失われていく。

正気の中の狂宴を催す天下随一の純粹者の時が、静かに穏やかに静止した。

仁ノ助は目の前の恐怖の象徴が消えていくことに唯呆然としている。やがって気付いたように剣を振るった構えを解いて、老人の足元に落ちていく一冊の本を見つけた。

血塗られたそれは何年も時を刻んでき痕を全体に残している。

屈んでそれを拾い上げて表紙を見る。『太平要術』、そう記されていた。

ゆつくりと立ち上がりつつ、中身を確かめるために捲っていく。

何も記されておらず、ただ赤く頁が染まり、紙が皺だらけとなっただけ。

捲っては表紙を見るをただ繰り返していく。

老人の行為を確かめるように、自分の行為を確かめるように。

数分はそれを繰り返し、そして両腕を垂らす。

手に握った本は彼が剣を握るそれよりももっと弱い、か弱い力で握られている。

奇しくも先程老人が行ったように天を仰ぎ見る。

染みだらけの天井が見えるだけで、空間が閉ざされている。

「・・・・・・・・分かんねえよ・・・・・・・・」

表情に出た呆然を声色に浮かべて小さく呟く。

ゆつくりと頭を垂れて頭を掻きつつ、大きな溜息を吐いた。

心の底から疲れ切ったように、何をすべきか分からず途方に暮れる様に。

天の光、太陽の光、希望の光。

それを一身に感じる、先程まで暗闇を被っていた身が輝いてくのを感ずる。

小さな森の中にまで届く光、その中に爽やかに吹く順風、可愛らしく囁（さえず）る小鳥。

ようやく自分達は辿り着いたのだ。天下の大地に。

そう思わせるほどの開放感を丁儀は一抹に感じ、彼は手を体の後ろに回して指を三本突き出す。

地面に作られた小さな穴から桃色の髪の少女、天和がひょっこりと顔を出す。

突然感じた眩さに目を細めながらゆっくりと体を出していき、地面に腰を下ろした。疲れを癒すように瞳を閉じる。

薄紫の髪をした少女、人和が周囲を警戒しつつ体を穴から出していく。

姿勢を低くしつつ丁儀の隣に這っていきゆっくりと息を出して地面に仰向けに倒れこんだ。大粒の汗が額を伝っていく。

水色の髪の少女、地和がそそくさと出てきて否やすぐに大きく深呼吸をする。

久しぶりに感じた自然を一心に吸い込みとゆっくりと身の内に溜まった負の心を吐き出し、朗らかな笑みを浮かべた。

何気ない風に老人、管輅は疲れを感じさせない動きで地面に這い出して若々しい動きを保って立ち上がる。

目線はぶれておらず、耳と勘だけで周囲を探っている。危険が感じられないのを察すると近くの木に背をつけて一呼吸をした。

序で、こちらをからかう様に視線を合わせてくる。瞳には悪戯気な光が宿っていた。

「……………うまくいったじゃろう？」

その意を汲んで苦笑いをする、丁儀はゆつくりと天を仰ぎ見た。爽快な風を肌を感じつつ、木々の先についた葉の間から太陽を見遣る。

それを掴むように彼はゆつくりと空に手を伸ばす。

久しく感じていなかった、穏やかな気持ち、それを彼は心行くままに抱いている。

大陸を覆う黄巾の乱、その終わりを知らせる銅鑼が、広末に響き渡った。

第二章…空に手を伸ばすこと <完>

第二章・空に手を伸ばすこと その九（後書き）

やっと乱が終わった・・・。

ここまで読んでいただき、有難うございました。

次章からは、反董卓連合軍編を開始いたします。

それに備えて資料集めをさせていただきたく存じ上げますので、
今しばらくお待ちくださいませ。

閑話休題：読まなくてもいい 乱の後の説明のこと（前書き）

さっさと物語本章に入りたいがために、
あっけらかんとした手抜き説明文を作ってしまった。

主に乱後の軍功や世相の悪化などを軽く説明した文章です。

H23：11/2

草稿を見たとき、本文中には無い欠落部分があったことに気づいて、
急ぎ編集いたしました。申し訳ありません。

閑話休題：読まなくてもいい 乱の後の説明のこと

黄巾の乱、その首謀者である大洪・楊鳳・白爵は息絶え、真の張三兄弟として沈められた。

官軍も諸侯も、ましてや朝廷もアイドル女三人如きでかのような大軍を組織できるとは一分も思っていなかった証左である。

三者の死体が広宋から洛陽へ送られ、市中に辱めを晒した。

其れでも尚各地で残党が跋扈する状況が続いていたが、組織的な乱はこれにて終焉を迎えたのである。

そして、此度の乱で活躍した諸侯達に相応の報酬が送られていく。

最も活躍した將軍、皇甫嵩は左車騎將軍に任命されて槐里侯に封じられ、八千戸の食邑、つまり領地を与えられ、冀州牧を命じられる。朱儁將軍は右車騎將軍と光祿大夫、さらに錢塘侯に封じられて特進の位も得て、食邑五千を加増された。

盧植將軍は罪人に落とされ官職剥奪で収監されていた身であったが、乱の終わりと共に許され尚書として復歸する。

豫州刺史の王允は宦官による讒言で洛陽で投獄されて死刑に処せられるところであったが、多数の助命嘆願により許され、尚書令となる。荊州刺史の徐キユウは汝南太守、東海相となる栄達を果たす。

騎都尉として潁川での討伐戦に向かい、勢いをもって広宋へと軍を進めこれを討ち果たした曹操は東郡太守に任命されるがこれを拒否、朝廷は代わりに彼女を故郷豫州刺史と封じる。

宛城攻略戦において自ら戦線を切った孫堅はその武勇を賞賛され別部司馬に封じられる。

幽州太守公孫讚は騎馬隊により戦線維持を勤め上げ、楽浪郡や山東半島まで勢力を伸張することを許される。異民族撃退の意も込められているのだろう。

義勇軍である劉備軍（北郷はあくまでも旗印）は、漢王朝への忠誠

心・公孫瓚將軍の推薦を受けて平原県の仮の令という地位を得、のち平原国の相となる。

袁紹將軍は本来は何進大將軍の參謀のような役割を担っていたが、此度の乱では最終戦のみ出陣、司隸校尉の役割を受ける。

董卓將軍は東中郎將に任命されていたが賊を相手に敗退を続けたために免職となった。

同時に靈帝は新たに西園八校尉という官位を制定、親衛隊の役割を持つ西園軍の指揮官としての地位を作る。

信賴できる宦官で十常侍である蹇碩（けんせき）や、乱で活躍した曹操・袁紹などが封じられる。

しかし黄巾の乱が起こった目的の半分は達成されたといっても良かった。すなわち、漢王朝の打倒である。

漢王朝十三州のうち八州で行われた騒乱の末に、万単位での蜂起が相次ぐ情勢となってしまう。

これを受けて漢王朝は『州牧』を新たに制定、当時軍権が認められていなかった刺史に軍権を認められた形である地位で、

朝廷は基本的には刺史をそのまま牧に任じた。その結果もはや州は中央政府公認の軍閥と化したのである。

各地に反旗の芽を植えつける愚行をするまでに衰えた朝廷、それに付け入る形で乱が小規模であった涼州のような地域では漢政府の統制が弱まったために反乱が発生していく。

また異民族が辺境から中原へ侵入、治安がさらに悪化の一途を辿っていく。

これらの侵攻を受ける身と成った州牧達は地域の文化水準の向上と開発を促し、これらの地域が自立する素地を築いていく。

軍閥による統制は群雄割拠の世を構築する下地を完全に作り上げていったのだ。

乱の論功を受けた將軍達も各地の乱の鎮圧に出征していき、同時にまた軍功をあげて帰還する。

涼州で起こった反乱の鎮圧には孫堅・皇甫嵩・董卓らが出陣、功績として孫堅は長沙に太守として赴任、董卓は前後左右將軍である前將軍に任命される。

目まぐるしいほど時が早足で駆けて行く。上記の事が発生するのに半年もかからなかった。

乱の鎮圧から早半年、後漢王朝の統制能力は各地の豪族達に実質的に委譲されたと言って良い。
そんな折、一つの大報が中原を駆け巡った。

—————靈帝、崩御す。

第三章：血を払うこと その巻

豪華絢爛・美麗の極みを湛える洛陽の宮殿。

魑魅魍魎（ちみもつりょう）ともいふべき怪人達が暗政を誇る場所である。

靈帝の崩御、それが引き起こしたのは煉獄へと続く謀略の数々であった。

靈帝の後継者候補はその時二人がいた。何太后との間に生まれた劉弁、王美人との間に生まれた劉協。

何太后は元々身分が良い人間ではない。豚殺し、つまり屠殺業を生業とした家の生まれであり、

宦官に賄賂を出して後宮に入った後、皇帝の寵愛を受けて子を産んだ。

この子、劉弁は母である何太后の実兄に大將軍何進があり、さらに何太后を推挙した宦官からの支持が得られていた。

一方で劉協の母である王美人は子を生んだ直後、寵愛の独占を恐れ嫉妬した何太后に毒殺されており、

子は靈帝の母である董太后のもとで育てられており、影響力は無きに等しいものである。

この情勢に何進と宦官の政治対立が絡んだ。

西園八校尉は大將軍が統率すると靈帝時代に定められていたのだが、実際には信頼された宦官が置かれていた。何進にとっては面白いくない。

加えて宦官の方も実家が豚殺しの何進を心底見下しており、宮廷は二つの勢力に分断される。

何進・何太后の外戚派と、それに対抗するために協を立てたい宦官派である。

弁皇子が即位すると、何進はその政治権力を振るって対立派に対する弾圧を開始する。

十常侍である張讓を裏切らせて同じ宦官である蹇碩（けんせき）を謀殺、協皇子の見方である董重、董太后を自殺させる。

権力者たちの権謀術数によって洛陽の空に悪雲が立ち込めている。そう思わせる程に今日の空は暗い、今にも雨が降りそうだ。

洛陽に置かれた大屋敷、何進は顔に年齢相応の皺を浮かべて窓の外を見上げている。

先程来た草達の報告によれば、宦官達が自分達に向けてくる敵意がさらに上昇しているらしい。

そのような分かりきった事は日々宮廷にて感じる奴等の視線で承知していた。

皇帝の目前では態度に顕しはしないが、その裏で姑息に密かに互いの心臓を狙いあっている。

潰して滴り落ちる血で自分の天下が実現できるからだ。

それは何進にとっても同様の見解であり、彼女自身もそれを欲している。

中原一の陶器職人によって作らせた見事な造りの杯に並々と中原一の美酒を注ぐ。

薫り立つ酒の色香に酔いしれながらそれを一気に飲み干した。

飲み慣れたそれは決して飽きを齎（もたら）さない、それに満足しながら手元にある書簡に目を通す。

董卓ら地方武將に送った洛陽への上洛を許す書状である。

「政治的な圧力だけではやはり無理が祟ってくる、自分の持つ大將軍の地位だけではどうにもならなくなってきた。

かくなる上は軍事力を要した威圧こそ執るべし。」

そのように語ったのは何進の政治的に友好関係である袁本初であった。

最初は積極的に宦官排除に乗り出したいが、宦官に恩を感じる妹らとの対立が生じかねなくなり及び腰と成った何進に対し、

袁紹は再三地方の諸將を都に呼び寄せて圧力をかけるように催促し続けてきた。

何度も聞くに堪えなかったのか何進はこれを受け入れ、西園八校尉らに兵を集めるように伝達すると、董卓らを洛陽に呼び寄せる勅令を出す。

あの袁紹から勅令を出したことに異を唱えられ、無闇やたらと宮廷内に入れるべきではないと諫言されたが、

この状況を惹起させた本人にそれを言う資格があるのだろうか。

何進は自らの仲間と称して近付いたあの高慢ちきの女を思い出すだけで不愉快と成る。

先程から飲んでいる酒ではそれを癒すことも出来ない。

だがこの不快も、宦官達を排する後に無用の長物となりうるだろう。自らが栄達の極みより天下を傀儡を通じて支配する、その世が実現する日までの辛抱である。

心のうちより込み上げて来る笑いを僅かに顔に浮かべると再び杯を仰いだ。

豫州、我が主の新たな領土となったこの地にて未だかつて無い繁栄が訪れている。

その繁栄を吸うように市内に通っている通りでは活気がみなぎっていた。

汚職官吏の罷免し徴収した税金を公正に運用し続け民に還元していく結果民心が高まり、

国内の生産性が見違えるほどに上昇していく。

また淫祠邪教を禁止することによって平穏な統治を敷くことに成功国内の安全性も確保されていき、様々な人材がこの地へ訪れ士官の意を露にしている。

それを屈指の人材マニアである曹操が見逃すことは無く、優秀な人材が次々に登用されていった。

典韋・許褚ヨ・楽進・李典・于禁・程？・郭嘉・蒋済らなどがその才覚を十全に発揮。

この名を上げた中で唯一蒋済のみが男であることが仁ノ助にとっての救いか、

有名武将は軒並み女性となるこの世を儂み、互いに酒を大いに交わしたのが記憶に新しい。

朝起きたら周囲が嵐の後のように破壊しつくされていたことが気がかりだったが、

誰もそのことについては深くは教えてくれず、「もう飲むな」と言われるのみであり、二人で頸を傾げたものだ。

以降もこそそと隠れては飲んでいるが酒量は抑え気味である。

閑話休題、この町も豊かとなる一途を辿っており、曹孟徳は霸道を着実に邁進しているのが分かる。

しかしその過程で行う大量殺戮を容認するほど自分の心は鍛えられていない。

何処かに心の逃避先を探さなくては心が磨耗していくだけだと彼は悟っており、

今はその逃げ口探し、または心の癒し探しの方へ興味を動かしている。

「ねえ……」

「……ん。」

頭の上の方から掛けられる声に目を閉じたまま返す。

爽やかな風が彼と、問いかけた人物の周囲を緩やかに駆けて行く。

「……そろそろ交代しない？」

「……あとちょっと。」

甘えるように自らに膝枕をする女性の膝に顔を埋める。

春に咲く軽やかな花の香りがしているように錯覚し、猫のように喉を鳴らして息を漏らす。

当初はそれをくすぐったそうにしていた女性も慣れたらしく身じろぎ一つしない。

しつこい男を起こそうと肩に手をやって揺らす。今度は先程より強めの声で言う。

「もう三回目です。交代です。」

その言葉の裏には自分も甘えたいと思う気持ちがあるのだろう、そう邪推した仁ノ助は目を僅かに開いて彼女、詩花を見てにやにやと笑う。

待たされ続けた彼女は不満の色を浮かべてこちらをジト目で睨んでいる。

顔立ちの良い容姿が絵になっており、表情が二転三転するのを見るだけで面白くなる。

今この瞬間にもそれをさせたくないが十中八九機嫌を損ねてしまう。

だがやる。

仁ノ助はにやけた面をしたまま彼女に問う。

「何がしたいの？」

「・・・わかるでしょ。」

「言葉にしなくちゃ分からない。」

むっとした彼女は数瞬躊躇うと顔を若干照れているように赤くする。視線をこちらと合わせようとせず、ちらちらと窺って来る姿が可愛らしい。

口を尖らせて小さく、しかしはつきりと聞こえるように呟いた。

「・・・・・・膝枕、したい・・・です。」

仁ノ助は良い物がみれたといわんばかりに破顔し、ゆっくりと起き上がると彼女の肩を優しく掴む。

そして壊れ物を扱うようにゆっくりと大事に自分の腿に彼女の頭を乗せた。

もしも彼女に尻尾が生えていたならばはち切れんばかりに振られていただろう。

途端に機嫌を良くした彼女はにやけ笑いを浮かべて甘えてきた。両手を胸の前に祈るように合わせる。

自分の腹に向かって体を向けるように頭を回し、自分が愛する男の臭いを確かめようと深く息を吸う。

それを胸いっぱい吸い込むとにやけた顔が和やかなものと成る。犬のように甘える彼女がこちらをちらと見る。

揺れる赤髪の中から潤んだ瞳がこちらを覗く。互いが何を期待しているか分かってしまった。

仁ノ助はゆっくりと地面に仰向けに倒れこむと彼女が喜び勇んでその上に飛び乗り、自分の胸に顔を埋める。

詩花の体温がより近くに感じられ、その柔らかな肌は服越しにでも伝わる。

新鮮な果実のように吐息が甘く胸を撫で心を安らかな物にする。彼が見つけた心の癒しがそこにあった。

先の乱の終わりより二人はこのようにして空いた時間を見つけてはすぐベタベタする関係となっていた。

その折でも大食漢を見せ付け、猫耳軍師を狙う詩花には胃が痛くなるものがあつたが、

それを抜きにしても戦乱の際に互いの心についた傷を癒す事が叶っている為に、

互いの存在に依存する形となってしまうている。

しかし周りから見れば終始甘い雰囲気を出し続ける色ボケにしか見え、

実際恋愛に奥手な堅物、特に曹洪などは二人の距離が近いときには近寄られなくなっている。

また曹操が新たな任地に派遣された時には逆に二人をくつつけて自分から遠ざけようとした人間も居たほどだ。

何処かの猫耳腹黒毒舌どえむ軍師では無い。あれは常にこちらの命を狙ってきているような気がするだけで実害は今のところ無い。

胸を指で小突かれる感触がし思考をやめて視線を送る。

詩花が興を殺がれたように自分の後ろの方へ視線を送った。

それを行く先を確かめようとなんとか頸を振り向かせてる。

腕を組みながらなんともいえない表情で顎にちよび髭が生えた三十手前の男性、蔣済がこちらを見つめている。

彼自身は何度も見慣れた光景であるのであり、実際に曹操軍の中で一番その胸焼けがしそうな光景を見る立場にある。

辰野仁ノ助率いる千の騎兵隊、昇進して騎兵隊を率いることになった曹洪に代わって就任した第二番の副官である。

「まああた懲りずによくやりますねえ。場所を徐々に人気の無いところに変えつつあるのは、ある意味成長している証拠ですが。」

「・・・さ、最初は確かにベタベタしすぎたって思ってるわよ。だから、こうやって・・・ねえ?」

「いや、俺に振るなよ。」

ばつが悪そうな顔をしつつ問題の根源が暗に仁ノ助であると指摘し、彼は決まりきった事のように嘯(うそぶ)かれるそれを冷静に否定する。

このままいけばすったもんだの末にまたイチャ付き始めることを経験で学んでいる蔣済は溜息を付きそうに成る自分を抑えて語りかける。

その努力が彼の新たな上司と似た物であるのは気のせいだろう。

「はいはいご馳走様でしたと。そろそろお仕事的时间に戻っていただけますか、お二方。」

「時間に関しては節度を守りますから、大丈夫ですよ。」

投げやりな口調で内心とは裏腹にどうでもいように口を出す。

詩花はそれを聞くと、最後に一度胸に頬ずりをして名残惜しげに立ち上がる。

僅かに乱れた髪を整えつつ顔に笑みを浮かべて仁ノ助に手を振りながら早足に去っていった。

彼女の姿が見えなくなると、蔣済は安堵の溜息を漏らし仁ノ助を見る。

「甘やかしすぎると、夏侯淵將軍のお説教が始まりますよ。」

「流石にそこまではしない。二人で会うのは休憩時間が重なった時か、夜くらいだ。」

「十分惚気てるっつての…。」

肩まで伸びて手入れがされていないぼさぼさの髪の毛を掻きながら
小声でぼやく。

仁ノ助に敢えて聞こえるように言ったその御小言に仁ノ助は苦笑い
を浮かべて謝罪の意を手で伝える。

それを受け取った蔣済はもう大丈夫ですと手を振ると先程の表情か
ら一変、

真剣味を帯びた軍師の顔をつける。腰を下ろして地面に片膝をつけ
ると言葉を伝える。

「洛陽内にてかなりきな臭い情勢が続いています。外戚派と宦官派
の武力衝突は近い物と。」

「…痺れを先に切らすのは両陣営の者ではないだろうな。」

言外に両陣営外の人間が原因となって衝突が起きると言っている。

蔣済は首肯をしてさらに言葉を続ける。

「これに先立つて、袁昭が外戚派一の権力者である何進大將軍に接
近しているとか。」

「名門が豚殺しに？…内心、袁昭は心穏やかに接していないだろう
よ。」

「と、いいますと？」

蔣済の疑問を聞き入れつつ仁ノ助は寝転がっていた体を起こす。

片膝を曲げて体に引き寄せ、眉間に皺を寄せて思考をしながら話す。

「彼女が取り入る最大の理由は、推測するに『名門の沽券』だ。三
大に渡って四公を輩出し続けてきた彼女の家柄とは対照的に、何進
はほとんど自力で何もせず、ただ妹が皇帝の寵愛を受けているとい

う理由のみで申し上がった。ただ一代のみで宮廷に入るまでに至った市井上がりの下賤奴に、これ以上良い思いはさせたくないという嫉妬心が湧くのも自然だ。」

「……故にこの政乱で最大の實力者である彼女に取り入りつつ、勢力拡大を図り、然るべき後に實力をもつて蹴落とす。確かに私たちの推測にすぎませんが、納得できない話ではありませんね。」

仁ノ助は座り込んでいた体を持ち上げて立ち上がる。

彼の視線の先には毅然とこの地を治め続ける、曹操の城が見えた。今彼女は洛陽に選りすぐりの護衛と共に滞在している。

自らの主は何を考えてこの政乱を見据えているのだろうか、またその先に何が起こると考えているのだろうか、部下でありながらその答えが見つからない。

人に自らの内を読ませない雰囲気を持つ彼女は圧倒的に感じるが、長らく付き合っているうちに非常に寂しい思いをしているとも思ってきた。

圧倒的であるが故に、心を真に許す人間もそういないのだろう。また袁昭とは旧知の仲と聞き、彼女から一方的に好敵手と思われることも分かってきた。

この政乱の中心に自らの友人が居ると知っている曹操は如何なる思いを抱いているのか。

服についた土や草を払うように体を叩く。

人の気を詮索しても詮無きこと、今はただ史実を思い起こして行動するのみ。

「既に何らかの政治的且つ排他的手段を行使しているはずだ。そこから一気に火がつくぞ。」

「あるいは軍事的行動であるかも。」

「……そうでない事を祈ろう。戻るぞ。」

「はっ。」

先に歩いていく仁ノ助に続くように蔣済が立ち上がる。自らの主が政治や謀略にも精通しうると判断したのか、彼の顔は満足そうだ。

例え皇帝であつても自らの試金石とする傲岸な一面を持つ蔣済、飄々とした態度を崩さずに天下を傍観する仁ノ助、

ただの偶然で合わされた二人は思いの外、相性が良いらしい。

仁ノ助は後ろに続く満足気な男には話さなかつた一つの確信を持っていた。

事の基本は史実通りに進む、例外は無いということだ。

よつてこれから何が起ころうかも大体が思い出せる範疇（はんちゆう）にあつた。

その彼の記憶にある出来事が、洛陽内にて着実に進行している。何進暗殺である。

「蔣済。そういえば詩花は何処行つた？」

「彼女はまだ休憩時間がありますので、おそらくいつものラーメンか炒飯か餃子か肉まんか、」

「それ以上言うな。……ツケは俺か？」「何をいまさら言っているんですか。」

溜息が漏れる。胃が痛い。肩に手を置かれて同情された。何故か悲しい。

洛陽の空は曇りに閉ざされ、薄ら寒い風が馬車に乗る自分の首筋を撫でる。

先日までは暑い日が続いてきたというのに今日に限ってはこれか。

何進は思いのままにならない天候にうんざりしつつ馬車の椅子に凭

(もた)れ掛かる。

馬車を通る道は大将軍の通る道、宮廷へ真つ直ぐ続く道だということとで洛陽の中ではかなり清掃が行き届いている場所である。

それでも尚通りの隅や陰、家屋や商店の奥から覗く瞳は汚れている。自らもその場所より栄達したというのに、彼らは何故そこに留まるのか。

幾ら彼らであろうとも蛍雪の功を知らぬ訳ではないだろうに。

都に何時の間にか蔓延っていた貧者の悲哀から視線を背け、自らの政敵が居る宮廷へと目を向ける。

他の有象無象を威圧するように豪華絢爛を誇るそれは貧者達のそれと比べて非常に富んでいる印象が受ける。

無論、その富は貧者達より骨の髄まで吸収した物であるのだが。

だがそれも此度で仕舞いとなる。何進は皇帝からの勅命のために宮廷に赴いていた。

自分達の常道の外れた軍事的行動を触発させる催促、その原因は偏に宦官にあるのだろう。

特に十常寺。彼らは自らの政敵と賊を相争わせることで双方を疲弊させ、

民の不満の矛先をそらせた際に両者を駆逐しようと狙ったために、

賊と通じたのだ。

毒をもって毒を制す謀略は、賊側の想像以上の大軍勢によって破綻した。

袁紹は、軍権を握る立場でありながら賊と通じる不正義を行うまでの売国の輩となった宦官を許せないで居る。

そして彼女は決して好意的ではない自分と接触し、

宦官排斥という点で利害を一致させ軍事的行動をするに至ったのだ。無論これは洛陽に危険を齎す下策であるという点は否めない。

しかしその危険を飲み干す事で宮廷に蔓延る蛆虫達を一掃出来るとなれば御の字だ。

そんな折に何太后から自分宛へ直接勅命が下った。

『皇帝陛下の急迫の用有り。宮廷へ参内せよ』とのこと。

遂に幼帝が動く事態にまで事が悪化したかと頭を悩まし、序で一世一代の機会が到来したと胸を躍らせる。

ここにて皇帝より宦官排斥の大義名分を勅命にて戴き、一気に蛆を排す。

幼い内に自らの権力を混乱間もない宮廷に広めれば、妹と協力して天下を統べる事が出来る。

自らの内にこれらの計画が一気に思い起こされ含み笑いが浮かぶ。最早自分達を遮る障害は無い、自分は天下一の出世者となるのだ。

袁紹がこれは十常寺による畏だと警告していたが、

それを態々恐れるようになっては洛陽に居住する英雄達に対し面目が立たなくなり、見縊られてしまう。

「大將軍、宮廷に到着いたしました。」

考え事をする内に宮廷へ到着したらしく、御者が恐る恐る後ろに踏ん返り返る女性へ声を掛ける。

それを聞いた何進は鷹揚に頷くとゆったりとした動作で馬車を降り、

自らの威厳を見せ付けるように宮廷内へと続く大きな階段を歩いていく。

宮廷内には武器を携帯する事が禁じられているが、既に何度も通い慣れた場所であるため最初から持つてきてない。

自分を通つていく道に居た宦官・官僚達が頭を深く下げのを当たり前の様に見遣りもせず、ただ歩く。

皇帝陛下が居る間までは二つの大広間を通り抜けなければならない。一つは『生の間』、いうなれば大規模な玄関とすべき場所である。宮廷に入る者は必ずここを通らねばならず、此処より幾つもの間や路へ分岐する。

さらに其処からこれまた幾つもの間や路へ分岐するのは言うにも及ばず。

二つ目は『威の間』、一定階級以上の人間のみが入ることを許される間で有り、

皇帝陛下の御前にて自らや宦官たちが政を語り政策を策定する場所へ通じる唯一の間。

これ以外に通じる路は皇帝の部屋や緊急用の脱出路、將軍達や宦官達の控え室をおいて他に無い。

今何進はこの部屋に入つる直前の所であり、いつも通りの感覚で歩いていていた。

(・・・?衛兵はどうした。)

この宮廷にて唯一武器の携帯を許可された皇帝直属の衛兵の姿が見えないことに気付く。

見回りの時間もあるのだろうが、この間には常時数人が徘徊しているはずだが、今日は其れがない。

この期に及んで何進は自らの胸中にイヤなものを感じた。

その彼女の危機意識の低さを嘲笑うかのように、威の間の入り口の扉が閉められた。

それに間をおかず、生の間に繋がる幾つもの部屋から数十人の兵が雪崩れ込み、咄嗟のことに身動きができない何進を包囲し武器を向ける。皆一様に殺気に溢れていた。

「な、なにをするか！我は大将軍であるぞ！?!？」

「……既には入らぬ肩書きと成つておいでだ、肉屋。」

自らの出自をなじりながら兵達の間から一人の壮年の男が割り込む。その後ろに続いてもう一人肥えた男が現れる。

目の前にこれから起こる惨状を今か今かと楽しみにしている男共、名は段珪、そして畢嵐という。

両者は共に十常寺の宦官であり、暴利を貪り私腹を肥やす事を生業とした畜生である。

その二人が此処に居るといふ事はこの兵らは宦官らが買収したか、若しくは私兵か。

「……どういふつもりだ。皇帝陛下の御許を汚すつもりか。」

「骸がそれを気に留める必要はなかるう？」

「然り然り、貴殿は生まれた場所に居るだけのこと。豚は豚らしくな。」

含み笑いが毀れ出し然も愉快だといわんばかりにこちらを見下してくる。

腹の底から理不尽な現状に対する怒りがこみ上げる。

青筋を立たせ目尻をひくつかせながら何進は怨嗟の目を向けた。それを歯牙にもかけぬ段珪は思い出しかのように言葉を続ける。

「おお、そういえば貴殿は出自故真名を持たぬ身であったな。」

彼らが次に何をするのか直感した何進は目を見開いて言葉を妨げようとするが、それを言う前に段珪が手を振りかぶり、それを悠然と下ろす。

「兵共、この『豚足』を誅滅せよ。」

気を吐いて武器を構え一気に殺到する兵達を見据えながら何進は思う。

外道畜生の蛆共を誰ぞ私の代わりに滅してくれと。漢王朝を救ってくれと。

体に何十もの刃が突き刺さり奥の奥まで肉を断ちながら侵入し、自らの臓器や骨を喰らっていく感触を覚えて、何進の意識は暗転した。

「念のために頸を刎ねろ。」

二人の声ではない、皺枯れた老人の声が威の間に響く。

威の間の扉、僅かに開けられた隙間から張讓が事の成り行きを見守っていたのだ。

兵の一人が血濡れの床に倒れこんで命を散らした何進の頸目掛けて剣を振り下ろす。

艶を失って血色が青くなっている頸は力任せに引き千切られる音を立てて胴体から離れていく。

振るった者も何進には恨みを抱いていたのだろうか、

剣の勢いはかなりのものであったために頸がころころと生の間入り口の方へ転がっていく。

このような騒乱を起こして静寂を保つのは流石に不可能だったのか、何事かと宮廷入り口からざわめきが聞こえてくる、勘付かれたのだろうか。

「何進將軍が此処にいらつしやいますでしょう!? お通しなさい!」

この甲高い声、袁紹の声かと宦官達は顔色を失う。

この誅滅から間を置かずに軍事的制圧、または勅命をもって都を制圧せねば自分達が危うい。

彼女を足止めして何とかこの惨状を隠さねば成らないと思ひ命を下す前に、

誅滅に興奮して自らの正義感に震えた兵の一人が転がった何進の生首の髪を掴み入り口の方へ叫ぶ。

「朝敵何進はたつたいま不義の罪を受けた!!!! 貴様らはこれを持って疾く失せよ!!!!!!」

手に持った頸を入り口の方へ持つのも汚らわしいといわんばかりに投げつけた。

放物線を描きながら宙を飛ぶそれは切断面から赤い液を垂らしていき、

地面にどんと音を立てると階段を転がっていく。

赤黒いそれは音を立てて転がり落ちていき、階段を登っている最中の袁紹の足に当たって止まる。

我慢も何もない彼女は怒りの余り髪が逆立ち青筋を立てている。

念のために袁術に協力して兵を引き連れることと成ったがそれも無駄足だったのか。

連れて来た兵達に怒声を響かせてる。

「十常寺を、宦官を皆殺しにせよおおおおおおおおおおお!!!!!!」

何百もの兵が宮廷を震わせる雄叫びをあげて雪崩れ込んでいく。

手に持たれた剣や刀が雲の切れ目より差し込む日の光を浴びて煌いていた。

都、洛陽にて漢王朝の一つの区切りが敷かれる、その瞬間であった。

第三章：血を払うこと その貳

雪崩れ込む兵達は一気に眼前に佇む宦官の私兵に斬りかかる。何進の首を投げた者がまず最初に剣の錆びになつたのを皮切りに、私兵達は主を差し置いて逃亡を図り始めた。

「き、貴様ら待たんかアツ!!!」

畢嵐が突如窮地に晒される自分を守るように声を震わせて叫ぶが誰も聞き入れない。

何故栄光の極みに入る自分一人が死なねばならないのだ、せめて誰か一人でも守ってくれてもよからうに。

ふと思いつく、自分の隣には段珪が居た事に。少しの間でも肉盾にはなろう。

僅かに開けた希望の道に縋る様に振り向くが、誰も居ない。

慌てて後ろを向く。威の間への扉がゆっくりと閉じられていき錠が閉まる音がした。

その後慌てて誰かが走り去っていく音が聞こえる、おそらく段珪と張譲だろう。

なぜ二人は自分を助けられないのだ、同じ宦官であろうに

「おいお前ら、助けるおおおお!!!」

鬼気迫る顔で扉の向こうへ叫ぶが返答の一切が聞こえない。

再度叫ぼうとした彼の頭蓋に金色の大槌が振るい落とされ、

接触の瞬間から頭部が衝撃で歪み、獣欲で散々に肥えた肉片を圧縮するように潰した。

強靱な力で落とされた大槌は地面との接触面から男の成れの果てを漏らしている。

男に槌を振るつた武將、顔良はおかつぱのような前髪を血で濡らすこと無く、矢継ぎ早に命令を下す。

「宦官達は髭を生やしていません！！生やさぬ者は皆敵だと思い、制圧しなさい！！！」

宦官以外にも髭を生やす者は居るだろうにそれは気にする事ではないと言う。

宦官鎮圧の性急さを求めるあまり命令が大雑把なものとなっているが、袁紹はそのような小さな事を気にも留めていない。

肩を怒らせて宮廷に入る彼女は生の間より連なる各部屋や通路に侵攻する自らの兵を睥睨すると、

第一線を指揮する自らの最も頼みとする武將、顔良と文醜に視線を送る。

何を言わんとするか彼女らはすぐに理解する。

『皇帝陛下とその親しき方々を保護せよ』ということだろう。

大剣を担いだ文醜が威の間を閉ざす扉へ疾走すると、勢いのまま剣を振るう。

唸りをあげて振るわれた剣は扉を見事に粉碎する、この剣は斬り捨てるよりも破壊に重点を置いているのだろう。

そして破壊した扉から開ける光景に眉を顰める。この期に及んでまだ忠誠心を見せる私兵が威の間で待ち構えていたのだ。

数も中々のものであり、斬りぬけるには些か時間がかかりそであると察すると、顔良に頸を振って加勢を頼む合図を送る。

それを受けた文醜は手錬れの兵達を率いつつ一気に攻勢を強めていった。

目の前で始まる戦闘に目を遣りつつ袁紹は焦りを覚える。

早く皇帝陛下を確保しなければ、さもなれば宦官達に連れ去られてしまふ。

彼女の危惧は確かに当たっていた。今この瞬間、既に張讓と段珪は

皇帝と劉協などを連れて脱走していたのだ。
袁紹が良かれと引いた大吉は凶に変わりつつあった。

第二章：血を払うこと その弐

只管に膝を上げて走る、着物が足に絡まないように祈りつつ。
本当はもつと早く走りたいのだが子供を二人、女を一人連れている
自分達には無理がある。

しかもその子供が劉弁と劉協、女性が何太后とくれば尚更だ。

また数十人の宦官たちを連れての逃走である、足は遅くなる事が必
然といつてもよかった。

それでも張譲らは北宮へ難を逃れるために足を速める。

太后に何進が叛乱を起こし、宮殿を焼き始める尚書闈（もん）を攻
めたため自分達は危難を避ける必要がある。

后・天子および陳留王（劉協）を率いることで、また省内の官属を
脅すために複道によって北宮へ逃亡するとなんとか説き伏せ、今に
至る。

既に宮廷内では阿鼻叫喚が響いており、それらが断末魔だと認識すると鳥肌が立つ。

此処から近いところでも剣戟が響いている。精強さを持つ袁紹軍は宦官という不義を討つ正義に燃えており、

一方で自分達の私兵は数も少なければ士気も小さい。私兵達が自分の逃げ出す時間を稼げるか疑問に思う。

進退窮に迫った彼に追い討ちを掛けるように聞き慣れた声が伝わった。

「貴様張讓！！何処へ行こうというのだ！？！？！」

後ろから掛かるそれに振り向くと、戟を持って追ってくる盧植が居た。

この危難に彼も動いているのだろう、尚書として皇帝を探して安全を確保しようとしている最中に自分達を見つけたようだ。

焦りを更に強めた張讓と段珪はそれぞれ幼い天子と陳留王の手を引っ張ると、

何太后を置き去りにして走り去り、取り巻き達もそれに続いていく。彼女は殺されても良いのだろうか。

盧植は舌打ちをすると呆然とその場に立っている太后に声をかける。

「ここは危険です、私の兵が駐屯する場所までお連れ致します！！」

反応がない。ただ息を荒げて現実を受け切れないようだ。

彼女の返答を待たずに盧植はその手を掴む。

その瞬間に至って太后は目を開いて彼を見遣った。

憔悴し切った表情を浮かべ、実年齢より齡十は老けて見える。

「こちらです！！！！！」

異を唱えることを許さないように無理矢理手を引つ張つて連れて行く。

本当のところ彼も太后に対しては好意的ではない。

これを無視して天子様方を助けに向かいたい。

しかしこのような場所に放置されては徒に状況悪化の原因となってしまう。

自分の立場がそれを看過する事も出来ない、今は誰か彼らを助けに行ってくれる様に祈るのみだ。

歩を進めて宮廷を行く盧植は前のみを見据えている。

何太后はそれに引つ張られつつ自らの内に抱いた疑問を消化しきれないで居た。

「なぜ自分は置いていかれたのか」と。「なぜ誰も助けてくれないのか」と。子を思う母の心はとうに死んでいたのだ。

髭が生えているかいないのか、それで宦官かどうか分かるという。顔良は袁紹の言葉を信じて命令を下したが、どうみても宦官でない者も斬られている。

斬られるものは老いも若きも関係ないらしい。

流石にちよび髭や薄ら髭は斬られても仕方ないかもしれないが、顎鬚を見事に生やした者は何故斬られたのだ。

日ごろの恨みを晴らさんといわんばかりの暴挙である。

これは自軍の軍規を再度改める必要がある。

暴虐の最中でも自軍をしつかりと考える袁紹軍の数少ない常識人で

ある顔良は、
背中を見せて逃げていく本物の宦官を屠りつつ戦況を振り返る。
武器を持たない彼らは無抵抗の獣同然、自軍の刃から逃げる手段は
最初から無かった。
宮廷は北門以外は自軍の兵達で囲っており、時が来れば北門も封鎖
される。
封鎖される前に逃げられてしまえば元も子もないのだが。

「將軍、右から二つ目の通路に男が逃げました！！」

兵の言葉に意識を現実に向け、その通路へと目を向ける。
武器を振りましても多少は窮屈しない場所だと考えると、兵達を連
れてそこへ走っていく。

通路へ入ってすぐの所、距離十間もしない所に男が足を抑えて蹲っ
ていた。

この男には見覚えがある、大將軍何進の義弟である、何苗だ。
異兄妹である何太后が皇后となったために取り立てられて、肉親だ
からという理由だけで車騎將軍まで上り詰めた男だ。
將軍にも拘らず裾が長い着物を着ているのはどういうことか。
案の定走るのには向いてないらしく、足首を抑えて唸りを上げてい
る。

急ぎの余り裾を踏んで転び、運の悪いことに捻って使い物にならな
くなったのだろう。

何苗は唸り声を上げていたがこちらに気づくと顔を一気に青ざめた。
声を震わせて自分達に向けて命乞いをする。

「ま、待つのだ！！私はか、宦官ではない！！！！」

そういつと何苗は着物の裾を上げて自らの陰茎を見せる。

宦官達は宮廷に入る前に自らの陰茎を切断する決まりがあったので

「皆の者、この男が我が主を誅滅と称して殺したのだ！復習をする者はいるか！？」

慟哭を交えながら言葉を継げると、兵達は顔を歪めて涙を流し始める。

溢れるそれを拭うことなく目の前に座り込む男を殺意を込めて睨むことは忘れない。

それだけで十分に答えは知れたようなもの。

「「「「はっ！！！！」」」」

異口同音に話す兵達は我先にと何苗に武器を向けて殺到する。

悲鳴を挙げた彼は這って逃げようとすもそれを許さぬように体に凶刃が刺さり、命の水を流していく。

目の前で行われていく凶宴から目を背けて顔良は再び戦場へ走っていく。

先程から主の仇を殺すという大義名分を内に抱いた何進の兵達が率先して宦官を殺している。

怨念を昂ぶらせて殺戮が繰り広げられていく宮廷を見渡しつつ彼女は憂慮する。

自分達はとんでもないことをしているのではないかと。

顔良は頭を振ってその思考を追いやると部屋の中へ逃げ込んだ宦官の一人に目を向ける。

大槌を振るって部屋の扉を粉碎すると中に一人の男性が虚脱感を顕すようにこちらを見ていた。

その表情を見向きもせず、彼女は手に持った正義の鉄槌を下す。

瘦躯の身体が圧倒的な力によって爆ぜ、鮮血が部屋の中に飛び散る。五臓六腑総てが細切れとなったただの肉となり、血煙をあげている。

それを睥睨しつつ顔良は新たな犠牲者の下へと走っていく。

今は唯、自らの主に尽くすことのみを考えよ。無駄なことは考えな。
そう自らに言い聞かせつつもこの騒乱の行く末を彼女は見通せないで居た。

柱から生じている炎は火の粉を噴いており地面を舐める勢いだ。

それより生じた火が洛陽のあちらこちらに飛び散り新たな火災を生んでいる。

皇帝の膝元に住む者達は家財一切を纏めて逃げようとしているために大混乱を生じている。

これが豪勢の極みを誇った宦官の都の末路だというのだろうか。否、自分は違う。

穀門（京師の北門）を歩き出て馬車を確保、小平津に奔走している中、張譲はそう言い聞かせる。

他の宦官達は置き去りにしてきた。良い囷となってくればよいが袁紹は自分達を未だ捕捉し切れていない、宮廷に居る同僚たちには悪いが身代わりになって時間を稼いでもらおう。

だが彼女はそうであっても部下達、まして自分の政敵らは見逃すはずがない。

今頃陛下達の行方が知れぬことに気づいて捜索隊を組織している頃合だ。

同時に自分達十常寺も見られないことを察しているはず。

なればさらに馬の足を速めなければ成らない。

自分の乗った馬車には二人の人質、劉弁と劉協、そして段珪が同乗している。

劉弁は自らの愚昧さを呪っているかの様に顔をくしゃくしゃに歪め今にも泣きそうである。

それは靈帝時代より続く王朝の問題に対して何も出来ない自分に対する呪いでもあった。

対する劉協は落ち着き払った様子で揺れる馬車の中で身じろぎ一つしない。

自らに迫る運命を諸共しないこの少女、果たして齡一桁の者であるのだろうか。

段珪がそれを奇妙な物を見るような視線を禁じえないでいる。

それを尻目に見つつ張讓はやがて自らの内に一つの確信が沸き口元を僅かに歪めた。

(所詮は手籠めの利かぬ小娘のやる事よ、企画力も行動力もありながら最後の詰めが甘いわ。)

まるで自らの逃亡がうまくいくかのように思う。

無論そのような事はありません、既に盧植將軍が軍の指揮権を一時的に預かると次々に洛陽内の鎮圧を行っており、

同時に皇帝陛下の御許の安全のために閔貢という將軍に洛陽外の探索を命じていた。

猛烈な勢いで走る馬車といえども、探索用に武具を軽いものとした騎馬隊にはすぐに追いつかれる。

普段の張讓ならそこまで頭が回るはずだが、切羽詰った様子から考えもよらないらしい。

既に二刻は馬を走らせているという時、不気味な音が車軸から聞こえた。

思わず危機感を抱いた張讓は馬の足を緩めていって近くの草林に足を止めた。

段珪が顔から冷や汗を流して問う。

「・・・破損したのか？」

「おそろくな。此処からは歩きぞ。」

二人の少女の手を掴むと張譲はむんずと馬車を降りる。

辺りは暗闇に包まれ虫の鳴き声が旋律を奏でていた。

風流なそれに耳を貸さず、張譲は段珪に向かって首肯すると歩き始める。

段珪は自らの足を動かすまでに追い詰められたことに深く溜息を吐くが、置いて行かれまいと後ろへ続いていく。

長々と続く道をこれほどまでに歩く経験は無かった。

半刻も歩くうちに足が疲弊の余り鉛のように感じてきた。

それでも自分達を追ってくる兵達に追われまいとする焦燥感が胸の中を踊る。

重い身体を引きずるようにまた歩き始める。

「はあ・・・・・・はあ・・・もう、無理、だ。」

一刻歩いたあたりで段珪が膝を突いた。それを聞いた張譲は足を止めて振り返る。

数瞬止まったのちまた歩こうとするがその意に反して足が棒となり、思わず膝を突いてしまう。

性も根も付き果たしたかのように酸素を求めて激しく息をする。

最早これまでかと張譲は目を悔しさに潤ませる。劉弁も疲れ果てて咽喉の渴きを潤さんと何度も唾を飲んでいく。

河のせせらぎが涼やかに響き渡る、その静けさに石をなげつつように劉協が問う。

「そちも終わりか？」

相も変わらず冷ややかな声、息を切らせながらそれに振り向く。凜とした佇まいで膝をついた自分を見下ろす姿、もしかしたら劉弁以上に利発なのかもしれないと思った自分は正しかったらしい。

皇帝にあらずして皇帝の風格を放つ少女、それに圧倒される老いて腐った自分。

その対照に笑みが毀れ、朝廷に忠義を尽くしていた宦官始まりの自分を思い出す。

桓帝に仕えていた自分は何のために働いていたのか、それを漸く思い起こす。

このような若人がより世へ台頭しやすくなる世を創る為、その為であった。

劉協はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「そちは宦官の僕として汚泥を越え年月に従ううちに、国恩を売り歩く狼藉を働き、あまつさえ帝主を脅迫し王室を覆した。

今天下の時は止まり、その針を動かす我らは河津にて遊んでおる。

新（後漢の前の国号）が亡んで以来、姦臣賊子は治者の様を見せておらん。」

「――そちが死なねば、わらわがそちを殺すぞ。

なんと毅然とした態度であらせられるか。これぞ漢王朝始まって以来の名君子であるぞ。

張讓は疲れを忘れ涙を流す。そして頭を深く下げて礼をする。胸のうちに抱くのは大いなる忠誠心、新たなる希望であった。

老廃した自分達は乱を起こすまでに腐敗したが、この方が皇帝となつてしまえばそれもすぐ収まるだろう。

そしてその隣に居るのは新しき世を創る若人達である。自分達は最早不要。

精力溢れた若々しさを髣髴とさせる表情で張譲は、中原の希望に向けて別れを告げる。

「我らはこれより深き水の底に参ります、陛下はどつぞご自愛下さいませ。」

さらに一度頭が地面に触れるまでに頭を垂れると、

穏やかに立ち上がって段珪を見遣る。彼も自分と同じような表情を浮かべていた。

頬を伝う涙まで一緒だとは思ってもよらなかったが。

そして互いに頷き会つと一歩一歩河津へと足を向けていく。

水はひんやりとした空気を張り詰めており、一種の神々しさすら浮かべているようだった。

足を水に浸すと体温が刺激されるほどの冷水を感じる。

しかしそれで歩みを進めるほど自分達は柔な人間ではない。

焦らずに自然に任せて足を進める、牧歌的な雰囲気は二人を包み込んでいく。

宦官になった当初は大変な生活が続いていた。

男根を切った事で尿道の操を失い仕事中に小水が漏れる事があった。それが故に若い宦官達は窮めて強い悪臭に悩まされていた。

その苛烈な職場に慣れようと、自らの願望を遂げようと心を鬼にして働いた。

その結果、高度な政治闘争を発展させるほどに自らは成長したが、同時に心が非情となってしまった。

今その非情が消え去っている。情熱と理念が胸の中で生まれていく。

(我が生が報われる・・・！漢が・・・報われる！！)

彼の脳裏に凱歌をあげて宮廷に君臨する劉協の姿が描かれていた。凜々しく美しく、美人の極みの如く成長した彼女が手を振って民衆の歡喜に応えている。

それはなんとも感動的で、喜ばしい光景であるのだろうか。

張讓は老いて皺だらけになった顔に大きな喜悦を表しながら、水の中へ浸っていく。

頸、彼の汗も流れていき咽喉の動きが見られなくなる。

口、僅かに開けられた場所に冷水が侵入していき彼の意識を少しずつ奪う。

目、涙が溢れた瞳を水面を伝う波が攫っていく。

そして遂に頭頂部までもが水の中へと消えていった。

二人が消えていった水面から気泡が生じていくが、数分経った後に消えていく。

服の重みで水面の底に沈んでいった張讓と段珪、世の栄華を悪徳で実現した二人にとっては穏やか過ぎる死であった。

劉協はそれを最後まで見届けると、隣で蹲って泣いている姉に目を向ける。

何のために泣いているのかすぐ検討がついた。

此処までの悲惨な逃走のためではない、自らに対する不甲斐無さの為でもない。

腹を押さえてただ泣く、着物に包まれた体の腹部から静かに音が鳴った。

それを聞いて劉協は柔らかな笑みを浮かべた。姉は、生まれて初めて飢えを体験したのだ。

これは大きなことだ。貧しいものが苦しむその理由を体で感じ取れる、施政を司る者が何よりも大切にしている事を姉も経験した。

これより世を治める時に当たってこの体験は大きな一歩となるだろう。

「姉上、お気持ちは分かります。朝方から何も食べておらず、また長き歩きのあまり私も身体が震えております。」

ですがこのまま夜風に当たるとお体に障ってしまいましょう。恐れ入りますが、もうしばらく歩き屋根のある場所で休みましょう。」

妹の健気な言葉に姉は頭を上げると、涙でくしゃくしゃになった顔で頷き立ち上がる。

幼い妹の手を掴んで悠長ではあるがしつかりとした足取りを運ぶ。

姉の威厳を見せている姿に劉協は頬を緩める。

そして姉の負担を減らそうと歩幅を合わせようと努力を始める。

未だ成長途中の小さな足で必死についてくる妹に負けないように姉は涙を止めて前を見据えた。

最後にあの者達は命を掛けて教えてくれたのだ。

一歩一歩ゆつくりと自然に任せて歩く。それが歩きであつても人生であつてもだ。

心臓が止まるまで毅然とした歩みを止めてはならない。皇帝であるからこそ、そうあれかし。

成長を見せ始める姉、それを支える妹は腹違いの差を越えて仲を深めていく。

歩みを再開して半刻も経たぬうち、満天の星空が輝くその頃、

二人の努力を祝福するように一つの明かりが彼女らの視界に現れた。それを目を凝らして見ると、光は都で見た炎とよく似た、しかし優しい赤をしている。

小さく煌くそれは何かの窓から漏れているように見えている。

窓？疑問はすぐに解ける。光は生活の明かり、窓とは小さな小屋の窓であつた。

「……麗月、行くわよ……」「あ、姉上！そんな引つ張らないで

！」

真名は麗月という劉協は急いで掛けていこうとする姉に引き摺られ、
そうになりながらも、

同じく笑みを浮かべて走りよっていく。

長らくの疲れを癒せる場所である其処は、二人にとっては正に安息
の場でもあった。

俄かに騒がしくなった外に家屋の家主が怪訝な顔をする。

夜遅くまで占いをしていたので小腹が空いてしまった。

それ故に少し遅めの夜食として粥を食べた後改めて占いをしよう
と思った矢先の事であった。

駆け寄ってくる足音を聞き分ける。大人のどっしりとした足音では
なく、子供の小さく軽やかな音である。

老人は念のために掴んでいた仕込刀を床に置くとゆっくりとした動
作で戸の方へ歩く。

ドンドンと外側から拳で叩いてくる音がする。

「はいはい、少し待ち為され。」

夜遅くだというのに元気な事だと老人はぼやきながら戸を開け、瞳
目する。

夜遊びをする貧民の子供かと思いきや、立っていたのは身なり風体
がとても整っている少女二人だからだ。

然もやんごとなき位の方に相違ないと思ひ老人は慌てて膝を突いて
頭を下げようとするが、

それを後ろ方に立つ少女、妹だろうか、が手を翳して止める。

「よいぞご老人。このような夜半に訪ねてきた我らの方こそ貴方に
礼をせねばならない。」

感謝すると言うと二人は頭を下げる。

老人は「はあ」と言葉を漏らすのみで突然に事態に頭を整理しきれないで居る。

少女らは頭を上げ再度小さい少女が話す。

「その上で申し上げる。我らは今し方まで遠き所より歩いてきた身で、朝方より何も食べておらず疲弊で目も冴えぬ有様。ついてはご老人、」

其処まで言った辺りで年上の少女の腹が音を立てた。

思わずそちらを見ると、少女は羞恥で赤らめた顔を背けてしまう。

自分の緊張感が解された老人は本来の態度を取り戻すと、珂珂珂と笑って優しく語り掛ける。

「まあ、汚いところではありませんが上がって下され。お粥をたんと差し上げましょう。」

二人は喜びで顔を見合わせると、礼儀正しく「失礼」と言うとそそくさと家に入る。

しっかりと戸を閉めて老人は床にあがって釜にかけた火に手を翳して体温を上げようとする少女らを見る。

疲労をしていたというのは本当らしく、両者共に安堵の溜息をついている。

目を細めて穏やかな表情を浮かべていると、年上の少女が思い出したかのように老人に問う。

「そうだ、貴方名前は？後でお礼をしなければならぬし。」

老人は長く生えた白髪を震わせて笑うと悪戯気な光を瞳から出せて

応える。

「そうですね………占父と御呼び下され。」

占父と自称する老人、管輅は新たな玩具が入ったと内心喜んでいた。

その管輅は目の前の二人が皇帝とその妹だと薄々感づき始め、さらに心を躍らせ始めた

第三章：血を払うこと その参

延焼の夢が終わり、朝日が洛陽の空を照りつける。

まだあちこちで火が燻りを見せるが、親衛隊や兵隊の多大な尽力により一夜で鎮火に成功した。

民衆も何進軍の兵を引き継いだ呉匡が指揮を執ってなんとか暴動しかけた混乱を収めている。

その裏で、宮廷から漂う濃厚な死臭が鼻を突く。

死体を数えている作業が続いているようだが、おそらく千を越えた宦官が殺されたのだろう。

またそれに拍車を掛けるように、新たな死体が発見されたりしている事から死者の数はさらに増えていくのは明らかだ。

このような事態を起こしたのは宦官達であり、何進達である。

城壁の上を警護する兵はそう心で呟き、洛陽に広がる歪な光景から目を背け、

希望の光に満ちる城壁の外の大地に目を遣る。

皇帝陛下を探すために探索隊が夜遅く真夜中近くに出立した。

流石に宦官たちと言えども、馬や馬車などを使ってもそう遠くへいけまい。

何故なら洛陽中の良馬は騎馬隊や補給部隊が独占しているからだ。

逃走に使うための馬など、所詮は痩せ細った駄馬に相違ないだろう、初めから詰んでいる。

後は窮鼠となった彼らが思い切った行動に取らねばよいが。

兵はそこまですを思考すると大地の先の地平線から徐々に現れる物に目を奪われる。

日の光を後光として静かに全貌を現してくるそれは、はたして人の群れであった。

騎馬隊かと思つて心を躍らせかけたが、その規模を考えて思い直す。

時が経つと共に続々と姿を見せていく、数はゆうに三千を越えているようだ。

その仲ではためく旗を見て新たな疑問が沸く。旗は『王』と『閔』の字を記している。

騎馬隊を組織した閔貢將軍、そして皇帝陛下へのお目付け役として王允尚書令が洛陽に出ていたのだ。

だがその騎兵の数はあくまでも追跡という目的のために二百も満たない数であった。

それが目の前に広がっていく人の群れ、その数は騎兵の十倍なのである。

何処の部隊なのだろうか、皆目見当がつかない。

やがて複数の旗が己の存在を誇示してきた。旗の字は『董』。前將軍董卓の軍隊であった。

中々に整理が行き届いた広めの家屋の中に男が座っている。その手には長々と文章が続けられているためか厚めの手紙が握られていた。

『久しぶりじゃ。ぬしが言うように、案の定洛陽で軍事衝突が起こつたらしい。最もそれと呼べるような規模ではない。

結果から話そう。何進が殺され、十常寺も全員殺されたか自決したらしい。また宦官側も二千近くの犠牲者が出た。

皇帝陛下と陳留王は拉致されたようだがどうにか抜け出したらしく、偶然夜半にわしの所へ来て一晩を明かしたぞ。あの時の二人の安らかな顔をぬしにも見せてやりたかったわ。

朝方になって洛陽の方へ歩いていくと後方の方から大勢の軍勢が歩いているのが見えたわ。予想通り董卓であった。涼州から洛陽に向けて上洛したらしいの。

その後洛陽からの騎馬搜索隊と共に帰還した董卓はその大軍勢でもつて一気に騒乱を鎮圧、皇帝の庇護者となった。ぬしならここで袁紹と董卓の政治対立が生じると思うだろうが実際はそうではない。

袁紹は叔父である袁隗が朝廷に居る手前勢力拡大を上手くできずにおり、さらに彼女は何進の配下じゃ。大將軍残兵を率いるほど人望もなかったから権力確保がうまくいっていなかった。

対して董卓は純粹に兵力不足で袁紹に対抗することができないいらしかったの。だが董卓の軍師が何進の残兵が何進の弟が裏切り者であると知って揺らいでいるのを目敏く見つけて交渉を始めての、結果的に残兵を合わせて自軍にうまくいこと合併させたわ。確か軍師の名は賈クといったか。

その後軍師が矢継ぎ早に袁紹の叔父に話を持ちかけたのじゃ、自らの軍にそなたの娘を引き入れたいとな。』

ここまで読んで袁紹の叔父、袁隗の役職を思い出す。

この人物は確か三公の一つである司徒を経て太傅の地位に昇進した

な。

年少の皇帝の教育者として自らの権威を固める人物であることも噂
になっている。

『叔父の方は了承して娘も形式上了承したらしいが、イヤな物を感じたのか直ぐに洛陽から逃げ出したわ。』

その勳はずり当たつてな、董卓は群臣に少帝の廃立と協の即位を持ちかけたが、時期尚早なだけあつて反対派が主流を占めたわ。

ところがその持ち掛けの夜に反対派の代表格である丁原が亡くなつたんじゃ。時期が時期だけに皆暗殺を推測して次の会談では賛成派が主流となつた。

何太后は兄である何進が死んだことで意気消沈して身じろぎ一つしないほど枯れ果ててしもうて、特に何も言わなかつたわ。

余りにもそれが哀れでな、皆の予想通り劉協が皇帝となつた次の日の夜に洛陽から姉共々わしが居を構えている場所へ連れ去つたわ。』

272

おいおいと思わず突っ込んでしまう。仮にも皇帝の母代わりとなる人物と実の母親を拉致しておいて、連れ去つたの一言で済ませる気なのか。

いや、あの得体の知れない老人ならやりかねんと頭を振ると続きを読む。

『無論劉協の許可はとつてある。わし秘伝の仮死薬を飲ませて死を装わせる、それを皇帝が認可して埋葬を命じると、その役にわしがついて二人を運ぶ。』

後は二人が起きるまで待つだけじゃ。やっている過程は無茶苦茶で困難を極めると思つておろうが、わしにしてみれば思いの外楽な仕事じゃ。』

何故そんな不可能を可能にして、さらに楽といえるのだろうか。

半年以上も知り合っているのにこの老人の心も技も底を見せてこさせない。

『それから洛陽に戻って政情を見ていったが、酷いものじゃ。まず司空の張温が、袁術に通じているとされて謀殺された。そしてあるうことか相国、つまり大宰相の地位に就きおったわ。

漢王朝の歴史の中では二人しか就いていない地位に自らも就くことで権威を高めようとしたのじゃろう。李儒という軍師の入れ知恵らしいが、強引にも程がある。

また、曹孟徳の父である曹嵩が思いの外漢王朝の財物を使っておったようだな、予想以下の財しか手に入らなかった事に腹を立てた董卓が娘である曹操を故郷である豫州からエン州へと移封した。

移封に伴って生じる財力の消費や、娘の勢力拡大を妨害することを狙ったのであろうな。曹操は命が下った二日後には洛陽から居なくなっていたわ。豫州の後任には孫堅が任命された。

序で勃海郡の太守に袁紹を任命したわ。冀州牧が董卓側の人間であってこれを利用して何とか懐柔しようという魂胆じゃわ。

さらに事の成り行きを見届けなくなつたが、劉協個人からここを去るように忠告された。曰く姉と母の面倒を身と欲しいとのこと。

聡明といえども齡がまだ一桁であるからな、孫のような子供を残すのは断腸の思いだったが、この政情不安定の中では反ってわしがいたら邪魔に成るとも思い至って出立したわ。

今はわし含めた三人で洛陽から徐々に離れていつておる。向かう先はぬしのところじゃ。近くの他人より遠くの親戚といったところじゃな。

そちらに着いたら、天和達にも新たな世話を掛けることになるから今のうちに準備をしておいてくれ。頼むぞ、わし長旅の無事を祈つておいてくれ。

管輅

手紙をすらすらと黙読した男、丁儀は一息つくくと虚空を見つめて思

考を始める。

李儒という男、何か董卓の弱みを握っているらしい。さらにそれを揉み消すことが董卓にはできない事から、かなり大きな弱みなのだろう。

彼女の精神の清らかさを管輅は記していた、おそらく人質か何か。それとも漢王朝にとって大切なものなのか。

まだ疑問は残る。このような暴挙を行っているのが董卓だと諸侯は認識しているだろう、その場合どの機会でも均衡が壊れるのだろうか。均衡が壊れた時、反董卓で結合することになるが、その連合の統率者はどのような方法で董卓を攻めるのか。

それに何より彼が驚いたことは、袁紹が何進の妹も甥も見捨てたという事実であった。

「丁儀さん、誰からの手紙？」

水色の髪を揺らしながら元気よく入ってきた少女、地和が家屋の入り口から声を掛けてくる。

思考を止めた丁儀は柔らかな笑みを浮かべて応える。

「管輅だよ。今連れと一緒にこっちに向かっているそうだ。」

「へえ〜。それじゃ私達の家って大家族になるってこと!?!」

顎に指を遣って頭を傾げる彼女に対し笑みを少し深めて丁儀は応える。

「まあそんな感じかな。また賑やかになるぞ。」

「うん！そしたら私達の歌をいっぱい聞かせたい!!」

今から張り切っちゃうなあと瞳を輝かせる地和に心が和んでしま

乱の終わりから自分達は逃避を重ね、やっとこの地、徐州に身を落ち着かせた。

そして予てからの望みであるアイドル活動を少しずつ再開させていた。

時折、働き口の一つである自分が街で鍛冶屋の手伝いをしながら、時には武芸によって路銀を稼いでいる。

一つ驚いたことに、この鍛冶屋の親父は以前両刃の双手剣を渡した男の事を印象強く覚えており、

その男の話聞かせてもらう内にそれが仁ノ助だと確認するに至った。

あの男が一度居た街に自分も居るといふ面白い偶然に思わず笑ったものだ。

「そうと決まれば、もっと歌の練習を頑張らなきゃね！ほら、手伝ってー！」

「お、おい！」

座っていた丁儀の手を掴むと地和は外に向かって駆け出す。

引っ張られながらも体勢を直ぐに整えた丁儀は彼女の後に続いて家屋を出ていった。

彼の手から放られた手紙が宙を舞い、静かに床に落ちた。

「全く・・・董卓という男は酒池肉林を求める気なんでしょうかね

え？こうも権力濫用が目立つんじゃないやそう思えてしまいますよ。」
「権力は強烈な媚薬だ。彼にとつても例外ではないのだろう。」

蔣済が零した言葉に仁ノ助は答える。二人は今、自分達の執務室の片付けを率先して行っていた。

豫州に帰ってきた曹操は早々にエン州への移封の命を受けたと家臣団に語った。

これには穩健な者も含めて家臣団は一様に怒った。董卓は何故此処まで自らの権力を笠に着る行動をするのか、それでも漢王朝の臣なのか。

しかし曹操は内に抱く溶岩の如き怒りを抑えつつ言葉少なめに陰しく告げる。

曰く、これより我が命を忠実に実行せよ。エン州に着いた後、改めて軍議を開く。

軍議、その言葉に皆一様が驚きの色を露にした。エン州に着いた後に軍を起こすというのだ。

その対象は彼らの中では既に決まりついていた。悪逆、董卓である。そうと決まればと奮起して委細合切の処理を行っている最中、冷徹に物を見る男が居た。

この男、辰野仁ノ助と、その補佐である蔣済である。

無論、女性の軍師の中でも事を同様に推測し始める者が居た事は彼女らの面目のために言っておこう。

「曹操殿の発言、あれは董卓に対する反旗の印として見るべきではない。」
「よ。」

「皇帝を困っている奴の事だ、朝敵扱いをするのは目に見えている。」

「だが曹操殿の事、必ず勝てると踏んだ理由が存在しないはずはない。」

手に持った大量の書簡を丈夫な籠の中にどさりと置き、一息つきながら蔣済は言う。

中に入っている書簡の内容は曹操軍内で位が高い者にしか見せられない程の重要性のため、

一端の文官や兵達に片付けをさせるのは機密保護の観点から憚れていた。

馬に乗ることや戟などの武器を振ることもあって体力が尽きないのが幸いである。

「董卓と事を構える以上、彼我の戦力差を考える必要がある。自軍だけでは董卓軍の総兵力に到底足りん。」

「となると、連合軍ですな。それもかなりの規模の物。これを動員するにはあのお方だけの力ではどうにもならないでしょう。」

「ああ、だから俺は偽勅を使うのではないかと考えている。」

「・・・誰がそれを諸侯に交付するのです？」

蔣済は曹操の勢力が交付するとは限らないということにすぐ気付いて問いを投げる。

仁ノ助は数瞬答えるまでに間を空けた後、片付けをする手を止めずに言葉を出す。

「おそらく、渤海の袁紹だ。中原の反董卓諸侯の中では一番の勢力であり、何より三公を出している名家でもある。陛下の御身を憂えてとかいう文句を使えば誰も疑問に思わないさ。」

「まっ、それが妥当でしょうな。」

分かりきったかのように蔣済は無感動に言い、手を動かし始める。

徐々に片付けが進んでいく部屋は次第に彼らの動きで埃が巻き上がってきており、

それを窓から差し込む日の光が照らしていた。

「……戦乱か。」

「……董卓はこうなった以上無事では済まないでしょう。勝つても負けてもね。」

彼らの中では董卓の死は規定路線となつている。または通過点に過ぎない。

曹孟徳の勢いはこの半年で大きく拡大しており、いまや兵は二万を越えようかという位である。

また兵達の錬度も我ながらかなりの物と見てよかつた。惜しむらくは、移封時に生活の関係上幾ばくかの数が抜けるという事である。

これに各地の群雄達の軍隊が合流、洛陽に向かうとなると兵の総数は数十万ともなる。

董卓軍の数を三倍近くも上回る事と成り、彼は軍事的な窮地に立たされることとなるだろう。

その結果生じるのは更なる政情不安、そして身の回りに薄らと見え隠れする生命の危険だ。

戦いの最中でも戦場から遠く離れた自らの近辺を気にしなければならぬ程追い詰められる。

そこで彼は自らの手元にある駒の数を見て悲哀を抱くだろう、恨みや憎しみを大いに買った彼に味方する者はそうそう居ない。

実質的に彼は自らの選択肢をその権力によって消滅させていたのだ。

「で、私の主はどうなさるおつもりで？」

「……主だと？曹操は違うのか？」

「あの方はむしろ名宰相という感じですね。表面で頭を下げても、心から下げようとは思えません。」

「……で、いかがなさるおつもりで？」

蔣済は手を止めて笑みを深めてこちらを見る。

仁ノ助の野心を覗きその矛先を確かめたいという彼の知的好奇心、そしてどれ程の大器を持っているか測りたいという悪戯心が露骨に見えていた。

御し切れなかつたら戦の最中に見捨てられそうだなと内心ぼやくと彼は言う。

「……決まり切っている。俺は俺のやりたい事をやる。そのために曹孟徳と利害を一致させているだけ、それだけだ。」

「忠誠心という物はあなたには縁が遠い物らしいですな。で、やりたい事とは？」

ずけずけと皮肉を言いながら此方の心の深奥にまで手を伸ばそうとしてくる。

この凶々しさ、齒に衣着せぬ言動は見習いたいものだな。

仁ノ助は問いを答えようとするが、その瞬間彼の中で一つの疑問が生じた。

詩花と街を出たときには大陸の英雄達と肩を並べて乱世を生き残る事に胸を躍らせていたが、

それ以上に詩花と過ごす事に心を向かわせては居ないか。果たしてどちらを答えればよいのか。

答えに詰まり顎に手をやって悩み始める仁ノ助を蔣済は面白気に見ている。

蔣済はふと部屋の外から響いてくる足音に意識を向けた。

どうやらこの部屋に向かって足を運んでくるようである。

部屋の扉を先に開いて誰か来るのか確かめようとしたが、その前に扉が開かれた。

「仁、片付け終「まずは詩花を嫁にする。」わっ………
た………」

空気が死んだ。蔣済は顔を思いつきりにやつかせる。

部屋に入ってきた詩花は突如仁ノ助の口から吐き出された言葉に耳を奪われ、それを理解した瞬間動きを完全に静止させる。

仁ノ助は悩みぬいた末に選んだ答えに満足した表情を浮かべて、序で部屋の中で扉を開けたポーズのまま固まる詩花を見つめる。

視線が合った詩花はたちどころに顔を紅潮させた。のぼせ上がったかのように頸のうなじから耳まで湯気を吐いているように見える。

いつも浮かべている瞳の無垢な光は取り乱されて螺旋を描いている。口から訳の分からぬ言葉を漏らしながら羞恥と興奮と混乱で、そして何よりも喜びで可憐な顔をわなわなと震わせる。

仁ノ助はその彼女の混乱具合を十分に愉しむと、意を決して話しかけようとする。

「・・・なあ詩「バカかあんたあああああ！！！！！！！！！！」
花・・・」

呼びかけが麻痺から解放された詩花の大音声によってかき消される。火照った身体からさらに熱を放出しながらぶれる指で彼を差しさらに続ける。

蔣済が腹を押さえて笑いを抑えている。自分が撒いた会話の種が思わぬ形で咲くことになって笑わずには居られないのだろう。

「この、バカっ！！あほおっ！！！！変態！！！！！！！！！！」

「いや変態はないだろ。」

「うっさい馬鹿！！変態！！！！ド変態！！！！！！大変態！！！！！！！！！！」

「！！！！」

蹲った蔣済は必死に耐え切るように身体を震わせている。

息を荒げて怒声をあげて仁ノ助を睨んだ詩花は涙目になった顔をわなわなと震わせている。

あつた。

屋外へ出て行つた彼女の行く先を見る。向かう先は金毘と吉野を置いてある厩舎のようだった。

まさかこのまま街の外へと行く気かと焦りを露にした彼は全力で走る。

厩舎の中に入った途端入り口の横から伸ばされた手が自らの腕を掴み、

序で強い力で彼の身体を引っ張り藁が敷かれた地面に押し倒す。

受身を自然に取つて視界を確保すると、勢い任せに厩舎に入つていた顔を紅潮させたままの詩花が居り、

仰向けに倒された自分の顔の横に両手を力強く置く。

逃がさないと言っているのか、歴戦の武将と共に研鑽してより強靱となる筋肉に物を言わせた一撃は、

藁越しといえども地面を僅かに轟と震わせる。強くなりすぎではないか。

遅くなる彼女に若干引きながら仁ノ助は問いかける。

「これで……二人つきりだぞ？」

「……い……つて……」

羞恥心と期待に瞳をうるうると光らせて仁ノ助に顔を寄せて彼女は言う。

途切れて聞こえなかつた台詞、彼女は幽かな声で再度求婚を申し込むように言つたようだ。

渾身の勇気を出して言つたその言葉をもう一度言わせるのは忍びない。

彼は柔らかく微笑み彼女の熱を帯びた頬に手を優しく置く。

日の光が遮られる暗闇の中、二人の視線が合わさる。

「……俺と、夫婦になれ。」

「・・・・・・・・はい。・・・・・・・・はい！」

静かに時を刻みながら彼女が頷く。その拍子に、この月日で僅かに伸びた艶やかな赤髪が揺れ、潤んだ瞳から涙が一粒毀れる。毀れた涙が仁ノ助の頬に当たり細かな粒を撒く様に弾けた。

ぼろぼろと落ち頬と伝う涙を止めずに彼女は嬉しさをたたえようと笑おうとする。

しかし心を清らかに満たし、脳にゆっくりと浸透する感情の昂ぶりのために笑顔が上手に浮かべられない。

代わりに彼女の綺麗に整った顔立ちに作られたのは、笑みと涙が入り混じった泣き顔である。

彼女の頬に置いた手の指に流れる涙を感じるとゆっくりと彼女の涙を払っていく。

それでも尚彼女は心を震わせて滴を零していく。詩花はそれを誤魔化すように仁ノ助の唇に自分の唇を合わせる。

彼女は昂ぶった感情を抑えようとし、彼の愛を貪るように唇を使って愛撫をしたくなる自分を宥め込んでいる。

ここで行為に及ぶことは出来る。二人で寝台の中であるそれとは違い、開放感が満ちた屋外であるのも悪くはない。

しかしこの状況がそれをするのを憚られた。ここでまた事に及んでは、機を見つけては唯暴欲に滾る獣も同然。

それはあの時、長社の城で事の及びを観られた時に学んだことではないか。

彼女は心のうちに秘めた自らとの約定を思い起こし、熱をゆっくりと冷ましていく。

そして彼の横に置いた手を少しずらし、空いた場所に自らの顔を横向きに置く。

一寸の距離もないような間近で彼を見下ろしたり見上げたりすることもあったので特に抵抗はなかったが、

いつも以上に胸奥から想いを開いて直向に自分を見てくる彼が愛お

しくなる。

「詩花……、愛してる。」

仁ノ助の口から熱っぽく詩花を呼ぶ声が漏れる。愛の囁きが胸の中に響く。

琴線に触れたのか、彼女は仁ノ助の言葉に顔を緩めると言葉を交わす。

「お慕いいたしております……旦那様。」

重なっていた影がより緊密な距離を取り、痺れを切らしたのか一方の影がもう一方の影を弄り始める。

身体を妖艶に愛でるように撫でられるそれは抵抗する動きを僅かにしていたが、

その起伏のある身体を覆う彩色のよく行き届いた服の中に手を入れられて生肌を擦られると思わず口から声を高らかに漏らしてしまう。それを行為の肯定と受け取った主導権を握る影はより愛撫の度合いを強めていく。

喘声を上げる影は抵抗の手を徐々に緩め、次第に自らに齎される愛と快樂に身を委ね始める。

ただ一度、今回だけは特別と、ありきたりな事を考えながら。

その後彼女は特殊な状況下で行われる行為に悅樂を見出して、数ヶ月もしない内に自ら誘う痴態を晒すまでに調教されるのだが、それを諫言しても今の彼女は聞き入れはしないだろう。

近くで始まる情の交わりに厩舎を峙（ねぐら）とする二頭の馬は、節操の無い自らの主に対してそれぞれ呆れが混じった嘶きを漏らした。

その逢瀬より一月も経たぬうちにエン州へ移封となる彼らを待ち受けるように、一通の文書が諸侯の下へ勅命として回る。

『逆賊董卓、討つべし』。かくの如く記された其れは、疲弊した世を戦乱の波へと押し上げ情け無用の大地へと叩きつける物であった。

第三章：血を払うこと その四

渤海太守袁紹は勅命を得たと各諸侯に伝聞し、檄を飛ばす。『逆賊董卓、討つべし』と。

これを体現するように袁紹は三万の兵を率いて真つ先に名乗りを上げる。皇帝陛下の御為とあらば喜び勇み逆賊を討ち果たそうと。

この決起を聞くや否や董卓の専横に業を煮やした群雄も反旗を上げる。

南陽太守袁術・冀州刺史韓馥・豫州刺史孫堅。孫堅は豫州刺史となる前に長沙にて前太守を殺害した後に袁術が南陽を支配、孫堅はその影響下に置かれていた。

済北相鮑信・広陵太守張超・北海太守公融・西涼太守馬騰・徐州刺史陶謙・北平太守公孫讚・平原相劉備等そうそうたる群雄が軍を上げ、

この英傑達の中には此度の反董卓の動きの火付け役となる曹孟徳も無論参軍していた。

反董卓の元結集した連合軍、その数は優に二十万を超える大軍勢となった。

その中で彼女は思う。自らの覇道を天下に示す絶好の機会であると。

これに対して董卓は帝を救う自らを逆賊と称するは言語道断であると激怒。

反董卓連合軍結集の報復として、洛陽内に居た袁紹の叔父を初めとした連合軍関係者らをすぐさま処刑に連座させた。

しかし予想以上の大軍勢が集ったと知り狼狽した董卓に対し、軍師である賈クは進言する。

「所詮群雄共の集まりである奴らなど、いくら群れようが爵位がや出身がどうのと互いを牽制し合い徒に兵糧を費やすのみである。ただ時を重ねるが如く長期的に護れば勝手に空中分解する」と。

これに対し李儒が反論する。

「大軍勢が洛陽に向かっているとの事は既に民衆の知れ渡り皆一様に動揺している。今為すべき事は市井の秩序安定のための出兵にこそ有り。」

「さすれば我らが都と皇帝陛下の御許は安全なものとなりえるだろうと。」

身近な危険を感じていた董卓は待ちの姿勢を進める賈クの見解を退け、攻めの姿勢を執る李儒の見解を聞き入れる。

自らと同意の意見をよく口に出す事から信頼があり、一方で賈クは時折向けられる反抗の視線が気に食わなかったこともあるのだろう。董卓は虎牢関に総大将を賈クとして軍勢を派遣、前門である？水関と併せて連合軍を食い止めよと命令する。但し洛陽にも安全のため自分に李儒の軍をある程度は残すとした。

軍師且つ総大将である賈クは之を渋々承諾、自らの配下の軍勢を率いて出兵した。その数は凡そ九万。関を中心とした防衛戦では充分に機能し得る数であった。

かくして両陣営は軍を進め、その陣中より敵陣に居るはずの怨敵を睥睨した。

片や力を結集しつつも、内実は自らの権勢を誇り頂点に立つことを欲する者達。

片や囚われの身と成った自らの主君、最愛の友人のために智を働かせる軍師。

両者は虎牢関の手前の関、？水関にて集結しようとしていた。

第三章：血を払うこと その四

「空を流れる雲の如く自由に蠢く将兵ら、壮麗というべきか。」

「ん、お前って詩人の才でもあったか？」

遂に自らの部隊を率いるまでに功績を積み重ねた曹仁が隣から聞いてくる。

こうして歩を陣内で合わせるのも随分と久しぶりだ。この馴れ馴れしくも気負いを見せない態度が清清しい。

「なにいつてんの仁君、主にそんな才があつたら今頃曹操軍に入っていないって。」

「……詩才が参軍の一つの秤とでも考えているんですか、あなたは。」

蒋済はよく出来た弟分に対して肩を叩いて疑問を茶化す。

彼の主が曹操とされていけない事に若干不満を抱いた曹洪が不機嫌に且つ解せない感じで問う。

自らの才覚をもってして正々堂々と曹操軍で頭角を顕して来た彼にとってはたかが詩の才だけで精鋭揃いの曹操軍に入るのは例えられただけでも気を害すのだろう。

蒋済は軽い感じで悪かったと言いながら膨れっ面をした若人を宥める。

男四人で肩を並べて軍勢を見渡すのはこれが初めてではなからうか。ましてやこの規模は。

反董卓の旗の下に集った中原各地で豪腕を鳴らす諸侯らの軍勢、それに集う猛者達と知恵者達。

三国時代においても、ここまで将兵が入り乱れた機会などそう無からう。仁ノ助は目の前で陣営を構える大軍を見て思う。

今、我が主は？水関進軍へ向けた軍議を執り行いに袁紹軍の本陣へと赴いている。

まああの袁紹のこと、大した事は開けないし決まらないだろう。むしろ厄介な方面で事が進行する。

「……ああダメだ、あの高笑い女は碌なことしかしないしなあ。」

「胃薬いるか？」

「……気持ちだけで嬉しいよ。」

どう考えても胃痛、これから回ってくるであろう大変な役割に思いを巡らせると胃が痛くなる。

曹仁が懐から粉末状にした胃薬を取り出して服用を勧めてくるがその厚意だけで気が楽になる、礼だけをして断った。一度薬品を服用してしまえば中毒にかかったように何度も使用する羽目になるのが恐ろしい。

懐に仕舞い直した曹仁は自分達が下した命令に従って行動する兵達を眺める。

進軍の方法や順序が決まり次第陣を片付けるためになるべく簡易的な造りとさせている。片付けがし易いように備品や天幕の配置を変えているのは蒋済の入れ知恵だ。

「？水関はどのように攻略するのでしょうか？敵軍の守将は華雄と聞いております。」

「驍騎校尉であり、大斧を自在に扱う猛将らしいと。配下の兵に慕われているとも言われていますね。」

曹洪が会話の客体を連合軍参集の本題へと向ける。

「水関を守る敵の將軍は華雄、戦術眼が優れている猛将であり、その武は董卓軍の中でも特筆に値するとか。」

自らの主に忠誠を誓い、其のために只管に武勇を築き上げてきた彼女は、その戦歴や剛毅な人柄もあつて人望が厚い。

日本で読んだ古文書では葉雄とも記されていたが、この世界では華の方であるらしい。

「他に駐在している武将は、張遼、郭？、胡軫、徐栄か。」

「特に厄介なのは張遼と徐栄ですよ。この二人が抜きん出ている。無論他の駐在武将も強者なんです。」

史実において反董卓連合に対して最大の打撃を与えたのはこの徐栄である。

曹操・鮑信らが消極的な袁紹軍に業を煮やして攻め込んだのを見事追い払い大打撃を与えた上に、さらに衛茲ら連合軍の將軍を幾人か討ち取っている。

神速の用兵使いとの異名を持つ張遼はいわずもがな。演義より史実の方が活躍しているという歴史上稀に見る猛者だ。絶対にその騎馬隊には当たりたくない。

同時に彼は一つの安堵を湛えていた。あの関には飛將軍呂布がいない。初戦から天下無双の剛勇を誇る人間に來られてはこちらも意を挫かれると危惧してはいたが、どうやら奴は虎牢関に居るらしい。

しかし仁ノ助は確信が有った。連合軍が勝利を収めるといふ確信が。自らを主と仰ぐ蔣済は不敵に笑う仁ノ助を面白い人間だといわんば

かりに見つめる。

個人の武勇を求められる時勢において、この御仁はどのような働きを見せるのだろうか。

「ま、そこをなんとかしちゃうのが俺達の主君でしょ？」

「強ち間違っていないのが恐ろしい。あの方の深慮をはかる事ほど難しい事はないですよ。」

曹仁の何気なく呟いた台詞に曹洪が微妙な表情になりながら頷く。

彼にとつても自らの主の破格具合には驚嘆の溜息しか出てこないらしい。

此処に居る四人の見解は同一である。すなわち、曹孟徳こそが大陸一の覇者である。

彼女にとつて此度の戦はあくまでも前哨戦である、慢心せず圧倒的に捻じ伏せる気なのだろう。

既にには何人かの草を紛らわせている為に、情報の漏洩は約束されたようなもの。

事は確りと着実に進むだろうと思いつつ、しかし仁ノ助は一抹の不安を抱いていた。

それは、幾ら策謀を巡らせようと完膚なきまでに粉碎する敵軍の武力、呂布に対する不安でもあった。

まだ敵軍の将とは一度も顔を合わせていない、せめて誰が誰だか分かれば遠距離より射掛けて殺すのだが。

そう思考している彼の視界に自らの主が重用する夏侯姉妹と猫耳軍師を伴って自軍天幕に戻るのが見えた。

自信に満ちた顔立ちが崩れていないことから、既に勝機を見出しているらしい。

それを見てみると自分達の方へ伝令が走りよってきた。こちらに来る前に飛ばしていたのか。

「申し上げます！將軍の方々は曹操様の天幕に参上せよとのことです！」

「相分かった。すぐに参ろう、ご苦労。」
「はっ！！」

勞いの言葉をかけられた兵はそそくさと去っていく。

四人の魏の將軍達は互いの顔を見ずとも心を知っている、示し合わせたかのようにゆっくりと歩みを進める。

天幕前の衛兵が敬礼をし、それに皆が答礼する。幕に手を掛けて払い中へと入っていくと、上機嫌な面持ちの曹操が足を組みながら椅子に座っており傍に荀イクが控えている。

彼女らから向かって右側には夏侯姉妹が、左側には程イクと郭嘉が既に控えている。程イクはいつも通り舟を漕いでいる様子であった。郭嘉に目礼を交わすとその隣に、仁ノ助・曹仁・曹洪・蒋済の順についた。

「・・・曹操殿は偉く上機嫌だが、何かあったのか？」

仁ノ助の問いに郭嘉は一瞬曹操を見た後に肩を竦める。彼女にも検討がつかないらしい。

我が主は解せないことが多すぎると顔を振っていると、天幕に典韋と許チヨが元気良く入って来て夏侯姉妹の隣で歩を止める。

そこから待つ事一分、楽進・李典・于禁・詩花が続いて入ってきて、李典・詩花は蒋済の隣に、他の二人は許チヨの隣へと足を進ませた。猫耳軍師が強張った表情をするが気に留めたら負けだ。

これにて曹操軍の主力將軍が一同に会した事になる。……………まだ反董卓連合軍なのに豪華すぎないか？

無論、此処に居る中で直接千以上の兵を率いる事が出来る武官は功績順に曹操・夏侯姉妹・仁ノ助・曹洪・曹仁くらいであるがそれで

も凄い面子だ。なんかもう、天下取れそうな気がする。これでも人材不足と嘆いているのだからコレクターは恐ろしい。

「聞きなさい、連合軍の進軍の順序が決まったわ。連合軍を袁紹軍が先導。続いて他の諸侯達が間を進軍。丁度軍の中央に連合軍の補給部隊を挟む形となり、守備するのは袁術軍と劉備軍。我が軍は最後尾を進軍することになる。」

曹操が一度全員を見渡すと、威厳を持った口調で話す。皆が背筋を伸ばし主の話に傾注し、その言葉の意味を悟る。

軍議で決まったことは関に向かうまでに進軍の順序らしく、その道中にて自軍は連合軍の殿を守る事に成つたらしい。というか進軍しか決まらなかつたのか、思った以上に軍議での味方同士の牽制が凄いらしいな。この世界では各地の群雄もそれなりの勢力を誇っているから仕方ないのだが。

夏侯惇が真つ先に口火を切らす。

「なつ、それでは華雄を討ち取ることが出来ないではないですか！」

「落ちて着け姉者、今華琳様が仰つたのは関に着くまでの事であつて着いたら着いたでもう一度軍議を開くだろう。そこで攻撃に陣営を考えるのだ。」

「おお、つまり華雄を直接刃を交えるのはまだ何処の軍か分からないということか！」

「良かったですね、春蘭さま！！」

夏侯惇の馬鹿具合に典韋、真名を流流という、が拍車を掛けているように頭を抱えなくなる。溜息を漏らしそうに成るが主君の手前、そのような無礼は働けない

常成らぬ曹操はその頭を悩ましたくなる光景を齒牙に掛けず話を続

ける。

「春蘭の言う通り、華雄軍と相對する軍も関を攻める軍も決まってい
ない、ただ決まったのは関到着までの過程だけよ。」

「という事は、到着までに華雄軍との交戦が有った場合、その活躍
次第では前線配置も有り得ると？」

仁ノ助が思った事を率直に口にする。曹操は仁ノ助の疑問に風格を
持った笑みを浮かべもつたいぶつた風に問いに問いを返す。

「なぜ敵軍が攻めてくると推定したの？」

「？水関道中までは山脈が多いためその間の間道を抜けざるを得ま
せん。地の利に長け、且つ勇猛な将であれば高低差を利用した奇襲
を掛けて連合軍の足並みを崩す事を目論むでしょう。」

まして長蛇の陣となった連合軍の中央に位置するのは補給部隊であ
り守るのは弱小軍、絶好の鴨です。一撃加われれば此方の士気低下は
間逃れません。」

戦術的に見た仁ノ助の答えに曹操は鷹揚に頷く。満足気な表情が出
た事から一応の及第点は貰ったらしい。これでの外れな事でも言っ
たら恥を晒すだけではなさそうでおっかない。

「敵将も軍列を見れば同様の事を考えているでしょう。故に、その
敵の思惑を逆手に取る。桂花。」

「はっ。」

軍師筆頭である荀イクがこれから話をするらしい。一呼吸を置くと
華琳の描いた戦略を代わって話し始める。

「補給部隊守備隊である袁術軍と劉備軍の軍師と既に話をつけてい

るわ。敵が奇襲を掛けてきたらこれを迎え撃つて撤退に追い込ませる。予め奇襲が来ると分かっていたら対処の仕様があるわ。」
「そうですね、戟や槍を前にして守備を固めていれば機動力が命の奇襲は失敗するでしょう。」

郭嘉が荀イクの話に捕捉を埋める。つまり騎馬を使った奇襲に対し槍構えでもって迎え撃ち、相手に攻撃失敗と思わせる事に意味があるらしい。

さらに憶測を進めれば、中々の強敵が居ると思わせる事によって敵将が此方に対し敵愾心を燃やし、関に籠り防衛線を展開させる利点を放棄させる意思を生じさせようとする意味も有るのだろう。
流石に無理矢理な感が否めなくは無いが、郭嘉の話からそう想像してしまっただけだから仕方ない。荀イクは話を続ける。

「奇襲については袁術と劉備が協力して当たることになっているわ。我が軍は行軍しているだけね。」

「まあ、今のところは他に為すべき事もないからな。それで充分だろう。」

秋蘭、互いの真名を呼ぶ事は曹操軍の将の中では常識、は納得の意を見せて頷く。

彼らがこれを打ち払えなければその程度の存在だったという事。特段何かを感じる必要は無い。

反董卓連合軍の諸侯達は史実においては只管に饗宴をして戦闘に打って出なかつただけであったが、

この世界では働き者や忠義者が多いらしくそのような事は生じないらしい。意外なことだが。

曹洪が思案していた頭を上げて挙手する。

「一つ質問していいですか？奇襲についての援軍の伝令が此方にも

回った場合、敵将を捕縛・又は討伐する許可はいただけませんか？」
「ふん、そうなる前にまともな武将なら数の不利を悟って関に戻るわよ。万が一接敵したとしても討つのはダメ。関に籠った敵軍が防衛策に走る危険が生じるわ。」
「そうですね、所詮は烏合の衆である連合軍は長期戦には不利です。だからそうなった場合、関を前にしてただ連合軍離散を待つまでになつてしまいますね。」

荀イクが曹仁に対して当たり前のように問いを返し、眠気を保持している程イクがのほほんとした口調で話す。

夏侯惇はその話の意味を解せず、頭の大量の？を浮かべている。

「どういう意味だ。私にも分かりやすいように説明しろ！」

「つまりですね、守りを固めた敵が跋扈する城を攻める場合多くの死傷者が出ることを皆知っている訳です。そうなった場合、自軍に不利益なことをせず代わって味方をけしかける事を優先し始めるのです。」

「その結果起こるのはただ浪費されるだけの軍需品、溜まっていく不平不満。だが勅命を受けた以上真つ先に離反しては董卓と同じ逆賊と見られかねない。よって、皆何もせずに傍観し続け自然に連合軍は解散する。」

曹洪と蒋済が夏侯惇でも分かりやすい説明を始め納得させようとする。

仁ノ助や他の將軍達、ある程度以上は頭を使って行動する者に限る、はそれに同意する。

確かに軍事的に理はかなっている。敵軍に最大の損害を、自軍に最小の被害を目指すのは将として当たり前のことだ。

そして同時に都に居る皇帝を守るために参集した連合軍の誰一人が率先して戦いを挑まぬ事に辟易とする。

所詮は自らの武威と地位を誇り、皇帝陛下の御許を案ずるだけの猿芝居であるのだろうか。

幾人かの良心が苛まれ始めた時、夏侯惇は未だに？マークを解消し切れていない。

云云と頭を悩ませながら彼女が言う。

「つまり、広い所で叩けという事か？」

「まあそんな所だ。姉者は中々聡いではないか。」

「うん？そうか！はははははは！！！」

馬鹿な人間ほど時折非常に鋭い指摘をするというのは心臓に悪い。

夏侯惇將軍の場合は特にそうだ。『大体あつてる』という評価が常によく。

荀イクが溜息を漏らして夏侯惇を憐れんでいるのに彼女は気付かずただ自分の頭の良さに笑いを出し続けている。

曹操が平常運転をしている自らが信頼する猛将に微妙な表情をしていたが、それを消して話し始める。

「今桂花が話した通り、連合軍がすべき事は敵の揉め手を潰し、戦術と戦略両面における優位性を保つ事。これさえ出来れば後は短期決戦で事を済ませる事ができるわ。」

明後日の朝に各軍が出立する予定よ。それまでに貴方達は出陣準備を整えておきなさい。以上で軍議を終了する、解散！」

『はっ！！』

曹操の凜とした声に各將軍・軍師らが一斉に動き始めた。続々と各人が退出する中で仁ノ助は春蘭を捕まえる。

「なあ、なんで曹操殿はあんなにご機嫌だったんだ？」

「ふん！！！！知らんわ！！！！！！」

いや最初からあの人に付いていたから分かるだろう、という彼の疑問虚しく春蘭は肩を怒らせて去っていく。
手持ち無沙汰と成ったまま固まっている彼の手を程イクが指でつつく。何やら事情を知っているらしい。

「それはですね、連合軍の中に華琳様が新しくお気に召された女性が居たからですよ。」

「……えつ。つまり夏侯惇のアレって……嫉妬か？」

「女心クライ悟ツテヤレ、アンチャン！！」

また新しく発生した悩みの種に彼は頭を抱えた。

それに拍車を掛けるように程イクの頭の上に乗せられた人形だか彫像だか分からぬ宝？が飴を持ちながら喋る。

「……久しぶりに嵩蓮にでも会って、この胃痛と頭痛を解消してもらおう。」

俄かに騒がしくなる連合軍で仁ノ助はそのように憂えた。

「間者からの報告によると連合軍が進撃を開始した模様です。後五日程で、関の前に到着すると見積もっております。」

口元の周りに無精ひげを見事に生やし顔を横一線に鋭い傷跡が残っている壮年の男、徐栄が机の周りに居る將軍達に話す。

机を囲む將軍、華雄・張遼・郭？・胡軫らは一様に「ついに来たか」と表情を変える。

机の上に広げられた地図には連合軍が取るであろう進軍路が木で造られた矢印で記されている。

ほつれた髪をそのまま垂らした男性、郭？が尋ねる。

「敵はどのような軍列で来るのか？」

「敵方先導は連合軍筆頭の袁紹、序で鮑信と馬騰と公孫讚がその後に。袁術と劉備が連合軍の真ん中、補給部隊を守衛しており、最後尾には曹操です。」

「孫堅が居ると聞いたが？」

「袁術の支配から逃れられない彼らは袁術軍の配下として組み込まれています。」

「相分かった、袁術軍と同行していると考えよう。」

連合軍は軍列の先頭にて威圧を目的とし、最後尾から質で支えてくる軍列らしい。

華雄がその隊形を数瞬考えるとにやりと笑う。

「？水関に繋がっている道は統べて山脈に囲まれた険しい一本道、逆落としては絶好の機会だ。」

「華雄？あんた言うてるのは、補給部隊襲ってしまおうって寸法か？」

紫の髪の毛を前方を後ろにたくし上げ胸を晒（さらし）で巻いた女性、張遼が独特の関西弁で華雄の謂わんとした事を言い当てる。

連合軍の中では数だは前方に集中しているがその反面、軍や兵の質は良くない事は周知の事実。

特に袁紹軍と袁術軍の主力の兵達はいわば金で雇った兵、一撃強く打ち払えばそれだけで打ち倒す事が出来よう。

徐栄は顔に些かの不安の色を表す。

「この軍列を見る限り貴方の言い分は間違つては居ないが、敵軍もこの軍列の弱点に気付いているはず。あるいは逆手にとつて居るかも。」

「もつたいぶらずに話せ、徐栄。」

自らの意見に横から口を挟まれたのが気に入らなかつたのか華雄が目つきを鋭くして彼を見る。

徐栄はそれに意を解さず自らの思つた事を言葉を選びながら話す。

「敵軍の中央を敢えて脆弱な兵で固めることによつて此方の奇襲を呼び込むことを狙つているものと思ひます。」

「つまりや、こつちの奇襲を失敗に終わらして、数の暴力で鬨り殺すちゆうことか？」

「然様。奇襲を掛ける以上馬を使わざるを得ませんが、このような大量の將兵達に囲まれては足を止められて機動力が生かせません。」

よつて、逆落としによる奇襲は危険であると。」

徐栄の言う事には一理ある。敵方が此方の軍量を上回っている以上、それを利用しないことは有り得ない。

此方が敵の意を崩さんと揉め手を使つても結局は大した成果は出さず、逆に此方の兵を失うだけに留まるだらう。

彼の言葉の裏には、敵方と交戦せず防衛策を張ろうという目論見があつた。

華雄はその意を汲んだ上で怒りを露にする。

「穴熊を決め込んでいては我らが納得しようにも兵らは納得せん！宦官を皆殺しにした張本人である袁紹がその罪を董卓様に着せたのだぞ！？あの偽勅で！！」

あの当時全ての群雄が洛陽に居た訳ではない。連合軍の中では袁紹・袁術・曹操くらいしかその場に居合わせていなかった。

結果あの顛末を知るものが限られたためにこのような偽勅で参集する羽目となったのだ。

真相を知っていれば誰も董卓が都で暴政を敷く悪逆者だとは思えない。洛陽に居るあの醜男は本物の董卓ではない。

本物の彼女はとても繊細で、慈悲深い少女なのだ。郭？・胡軫が続けて言う。

「華雄將軍の申すとおりだ！！皇帝陛下の御名を身勝手にも拝借した忘恩の輩に一撃加えねばならん！！」

「洛陽の方針では我らは打って出て敵軍を敗走させる事を望まれています。消極的な態度を取っては都に戻った時、我らの身辺が危うくなる物かと。」

胡軫の身辺を危惧する発言を受けて徐栄は深く悩み始める。誰も何も発言しない状況に華雄が苛立ち始める。

彼女が痺れを切らし一気に話を片付けようとした時、徐栄が語った。

「分かりました。華雄將軍・郭？將軍・胡軫將軍に騎兵七千をお預けします。その軍で敵方中央の補給部隊を奇襲、一撃加えた後素早く退却して下さい。残る私と張遼將軍の下四万三千が此処で待機という形でよろしいでしょうか？」

「・・・分かればよい。有象無象の弱兵の集団など、我らの武勇を持つてすれば易々と離散することを証明してやろう！！」

自らの武威が唯の見せ掛けではないと華雄は率先して部屋を出て行く。

それに続いて二人の將軍が出て行く、胡軫はすまなさそうに張遼に

頭を下げて去っていく。

彼女もそれに首肯をすると机に両手をついたまま頭を垂れて考える徐栄に目を向けた。

「……これで向こうが諦めればそれでええんやがなあ。」

「……群雄の中にはこの軍列の脆弱性に気付いている者も必ず居るでしょう。予め手を打たないという事はありえません。」

「既に奇襲も読まれていると？」

「そうならないといいんですが、無理でしょうね……。」

小さく嘆息した徐栄の視線の先に、木製の矢印が置かれていた。

その向かう先は？水関、虎牢関、そして洛陽がある。

なんとしてでも連合軍の進撃を武力をもって抑えなければならぬ。徐栄は改めて心に堅い誓いを立てた。

第三章：血を払うこと その五

燦燦（さんさん）と照りつける太陽の下一人の男性が腰に業物の刀を差して平原をゆつくりと歩いていく。

真っ白の外套を羽織り内に緑色の上着を着こなし、体系に良く似合っている灰色の脚絆を履いている。

その男、丁儀は見晴らしが良い小さな丘の上に立つと自らの方向へ向かっているであろう一台の馬車に目をつけた。

（・・・時刻もほぼ正確か。土煙を見る限り、特に問題も無さそうだな。）

雄大な中原の大地を颯爽と駆けるその姿はさも一枚の水墨画のようである。

地面を強く踏み鳴らし轍（わだち）を刻みつけていくそれはゆるりと姿をはつきりとしていく。白い小さな天幕を馬車の台に作成しており、粗さは多少はあるのだろうが揺れにはそう簡単に負けぬ造りと成っていた。

二頭の馬の手綱を巧みに操るのは一人の老人である。長く伸びる白髪を風を切る音と共に後方に流しながら自分を見据えているようだ。迫り来る馬車は徐々に速度を落としていく。こちらとの接触まで後一町という所で老人の顔が判明する。

相も変わらず胡散臭く、尚且つ妙に悪戯気な雰囲気を漂わせる老人、管輅が表情に穏やかな笑みを浮かべているのが見えた。

その笑みの裏の老齢とは思えない積極的且つ突拍子の無い行動に何度泣かされた事が。

小高い丘の上に速度を緩めつつ馬車を停止させると、躍動感溢れる動きで地面に降り立ちこちわを見遣った。

「久しぶりじゃのう、若人。ぬしの顔から険が取れているようで安心したわ。」

「久方ぶりの馬使いで疲れているのか、御老人？いつもより皺が多いぞ。」

「ぬかせ小童。まだまだわしは現役じゃ。」

互いの肩に手を置き憎まれ口を叩き合うのはこの二人の間でのお約束らしい。

管輅は戦乱の最中に身をおいた若人の表情から温厚な性格の発露の兆しが出ている事に安堵し、

丁儀は身体にガタが現れ始めているのに無理をして鞭を叩く老人の苦勞を心配した。

彼はそれまで浮かべていた柔らかな光を消して眼に僅かな戦意を滾らせて問う。

「……ここまで追われて居ないだろうな？」

「洛陽を出た辺りから五日は追われていたが、寝首を？っ切ってたわ。誰も追っておらん。」

「全く……無茶をしすぎだろうに。」

自らの行動に自重と云う概念を持ち込まないこの男は珂珂珂と咽喉を震わせて笑う。

戦意を消して今度こそ柔和な笑みを見せた丁儀は老人の肩を何度か静かに叩く。

これまでの旅の健闘を素直に称えたそれに管輅は僅かに出した照れを隠すように微笑を浮かべる。

丁儀は老人から彼が操ってきた馬車の荷台にある天幕へと視線を移す。

今回の本命、つまり管輅が命を賭けて連れ出した人物がその中に居るといふのだ。

ここまでの遠路、遙遠き洛陽から徐州の片田舎にある小さな町まで何十里も越えてきたのだらう、近くで見る馬車は遠方から見た以上にあちらこちらに傷を残している。

よくここまで壊れずに来たものだと思ひ込んで感心してしまう程だ。

管輅からゆつくりと離れ馬車の後方へと歩いていく。予め馬車に備え付けてあつた手製の簡易階段を組み立てて設置する。

地面に階段を固定する杭が刺さつた事を確かめると丁儀はゆつくりとその階段を登つて行く。

足に力を入れる度に木製の段差が軋む音がする。枯れた一本の広葉樹から造られたそれは若々しい男の動きのまだある程度耐えられるらしい。

天幕の茫々たる真つ白な色彩をした幕に手を掛けてゆつくりと開く。彼の目に飛び込んできたのは年相応の弱さを見せる少女と、枯れた一本松のように身動きもせずただ眼を瞑っている熟年の女性であつた。

少女がこちらを見遣ると静かに笑みを浮かべて言う。

「態々、私達のために無理を聞き届けていただき有難う。」

「とんでも御座いません、劉弁様、何皇后様。私は漢王朝の一民草としての当然の責務を全うしたまでの事でありませぬ。無理を聞き届けるなどと申されてはなりません。」

「それでも、深く感謝しているわ。あと、私達は既に死んだ身なのだから堅苦しい言葉使いはやめて。」

「え、あ、いや、しかしですね「やめなさい。」「……気をつけます。」

半ば押し切られる形で丁儀は少女、前の皇帝であつた劉弁に仕方なく領き約定をする。

それに彼女は満足そうに笑みを浮かべて自らの実母に目を向けた。

ただの一度も微動だにしない女性はほんの僅かに、視認出来るのも難しいほどに眼を開けると肌を撫でる風の音に掻き消されるかの如く小さな声で言う。

「……有難う……」

「……はい。」

老人の送ってきた手紙はただの一枚限り。その一枚から推測してみてもこの女性が送ってきた陰惨且つ救いの無い人生に彼は同情の念を禁じ得なかった。

自業自得とも言われるかもしれないが、愛する兄を同じ建物で斬首された上に自らが頼みとする者達に悉く裏切られ、最後にはただの人質であった二人目の娘に間接的に命を救われる始末。

自らが築き上げてきた地位や権力に比べて何と儚くも呆気の無い末路であつただろう。

その現実に打ちのめされた彼女は周囲の動静に全くと言って良いほど反応を見せなくなるほど心を病んでしまったらしい。

丁儀はいたたまれない感情を抑えつつ劉弁に軽く一礼をすると天幕から外へ出て行く。

馬首の方へと目を向けると老人が既に手綱を握っているのが見えた。気の早い事だ。

地面に刺さつた杭を抜いて丁寧に簡易階段を畳み、元あつた天幕の入り口に備え付け固定すると彼も馬首へと向かう。

老人の隣に座り、腰に差してあつた刀を片手に持って立たせる。

管輅は気分を一新させるように明るい声を出して丁儀の注意を変えさせた。

「さて行くかの、若人。早く天和と地和と人和に合つて、古びれた耳を彼女らの歌で癒したいものじゃ。」

「最近もつと歌が上手になつていたからな。期待している。」

「当たり前じゃ。・・・はあっ!!」

強く鞭を馬にたたきつけると、嘶きをあげた二頭の馬がゆっくりと歩を進め始める。

小高い丘から静かに降りていく彼らは洛陽から背を向けて新たな住居へと向かっていく。

背を向けた洛陽の方面では一つの戦が起こると勘付きつつ、其処から発生する乱世に抗えない事も知りつつ、彼らは自らの逃避先を探し始めていた。

第三章：血を払うこと その五

規律良く足並みを揃え地を踏み鳴らし、身体に纏った鎧から金属が擦れて出される小刻みの良い音が漏れ、横幅の広い間道に響き渡る。馬上から見えるのは軍靴を踏み鳴らし行軍する大量の兵、大量の馬。そして自らを誇示する牙門旗。

これらの将兵を維持するだけでも大量の物資が必要となろう。そのため補給部隊である。

逐次物資部族と成りつつある軍隊に迅速に物資を配給し、連合軍の胃とアキレス腱を保護する役割を持つ。これが切れれば如何に強力な部隊であろうと戦線維持など持ったの他、軍の体裁を保つ事すら不可能となろう。

故にこれを守ることにはある意味戦場で先陣を切って戦うよりも重要な役割といえ、この任に就く者は何よりの責任を持たなければならぬ。

そう自問自答している北郷一刀は心のうちに、自らを慕う少女達の期待の応えようとする責任感を持って任務に当たっていた。

「曹操さんって、思った以上に親切な人だったんだね。」

隣に馬をよせて行軍する劉備、桃香が柔らかな表情でそう言う。

曹操は山中にて敵の奇襲の可能性が有る故迎撃の準備をしておけと子飼いの軍師を通じて態々弱小勢力の自分達に通達してくれた。

これから察するに、彼女は味方が足を引っ張り合う状況を作る事を嫌い、連合軍の勝利という目標を達成するには全力を尽くす人物であると推測できた。

彼女の親切には感謝の念が沸いてくるが、同時に軍師諸葛亮、朱里より窘められた。

曰く、彼女の本意は貸しを作ること、そして此方の実力を測ることのみであり、仮に奇襲があつてこれを迎撃できぬ有様を晒せば自分達に対して好意的に接することは無いだろうと。

その言い分は史実の曹操の活躍を知っている一刀であるからこそ尚分かりやすかった。

覇道を敷くために敵対勢力を一つずつ、完膚なきまでに叩き潰していく曹孟徳という人物は決して親切心だけで行動するような人間ではない。

一輪の花を思わせるような可憐且つ美麗な外見に惑わされては駄目だと自分に言い聞かせる。

桃香の言葉を受けて関羽、愛紗は顔を僅かに顰めて答える。

「そつでしようか。あの方はどう見ても野心の塊のような人物と見受けられましたか。」

「人の厚意は素直に有難く受け取るものだぞ、愛紗。何事につけて疑心悪鬼になつては心が磨り減るだけだ。」

「それは分かっているが、どうにもあれは油断ができませんのだ。」

公孫讚軍所属の客将である趙雲、星が頸を僅かに傾げて愛紗に言う
と彼女は頭を振りつつも解せぬという風に顔の顰めを止めない。
軍議の最中にも桃香の護衛として参上した彼女に曹操が熱い視線を送っていたことが忘れられない。

あの場ではそれがどのような意味を持つのか問えず仕舞いであった事もあり、いまいち彼女を信用し切れていなかった。

対する星は武人としての精神を全うする事を何よりの信条としており、武将としての矜持を持つ彼女にとっては曹孟徳による仁義に基づいた助言はただ単に有難い事であった。

悩んだ顔をした愛紗を横目に見つつ、桃香は確かめるように自らのもう一人の軍師である鳳統、雛里に問う。

「雛里ちゃんは、曹操さんの事をどう思う？」

「・・・此方の実力を測るために、敢えて情報を流した物だと思います。それ以上の事は過ぎた推測だけなので・・・」

「そつか、有難うね。・・・ご主人様は曹操さんを信用してるの？」

人目の多い場所で幾分か緊張したままの雛里は小さな声で自らの考えを述べる。

桃香はその勇氣に感謝を述べると自分に向けて話しかける。

「・・・そうだね、自分達の軍勢が行軍するに当たっては敵軍の奇襲を警戒しなくちゃいけないのは当然の事だし、その警戒の穴を埋めてくれる助言をしてくれた曹操さんは、真意はどうあれ今は信用に値する人だと思うな。」

「そうなのだ。だから皆で長い槍を持っているのだ。」

一刀の言葉に同意した鈴々は行軍する兵達が持つ、長さ三間（ 4・8メートル）あまりの長槍に目を向けて言う。北郷一刀発案、諸葛亮孔明作成のこの武器は劉備軍では『亮槍』と名づけられた。

仁ノ助がこれを眼にするとしたら、彼は真つ先にルネサンス時代の欧州騎士団が使用した長槍であるパイクを、又は古代マケドニア王国で使用された長槍であるサリツサを思い起こすであろう。

パイクとは歩兵が対騎兵と対歩兵の両用に使った長槍であり、木の葉の形をした刃を先端につけたものである。

敵方が騎兵による突撃をしてきた場合、防御用のパイク兵の陣形では先ず最前列の一人目が膝を、次列の二人目が腰を落としたら槍を構え、さらに三人目と四人目はそれぞれ腰・肩の高さで槍を構えて槍袞を展開する。

この状態であれば密集陣形から四段構えの槍による突きや叩きつける攻撃が可能であり、敵方の機動力を殺ぐ事が出来る。

サリツサという長槍はマケドニア王であったピリツポス二世がフアランクス陣形を改良・強化する時に作成した武器である。

基本戦術は前述のパイクと同様であり、そのリーチを生かした攻撃と密集陣形による防御力を誇った代物だ。後年、アレクサンドロス大王がこのサリツサを利用してペルシア征服まで成し遂げた物であるのだから、兵器としての信用性は随一と言って良いだろう。

但し両者を使用するに当たってはその得物の大きさと重さによりどうしても持つ者の機動力が犠牲となってしまう。

加えてこの武器を習練するためにはかなりの時間を費やす事から、

劉備軍ではこれの作成はあくまで小数に留まり、敵軍の騎兵突撃を逸らす目的で使用する事とした。

結果、歩兵のうち僅か一割程度しかこれを所持するものはいない。しかしそれを補うほどの軍事的成果を挙げる事が期待されている。劉備軍の主力武将達（特に槍使いである星）はこの武器の優位性を高く評価しているため、作成僅か数日といえどもこれを扱った陣形展開には余り齟齬がなさそうである。

皆が皆この槍をそれぞれの思いで見つめる。武勇・智謀・勇氣、そして勝利。

その時、突如劉備軍左側に広がる緩やかな岸壁から空高く響き、戦意と緊張を最大限まで高める銅鑼の音がした。

將兵皆が驚いてその方向を見遣ると、空を覆い隠すほどの土煙をあげながら大地の底から揺らすような地響きを奏でつつ突進してくる『華』の騎兵が視界に現れた。

それが何かをすぐさま察した朱里は叫ぶ。

「っ！！！！敵襲です！！！！！！！！」

「総員、防御陣形！！！！亮槍兵展開しろおおおお！！！！！！」

覚悟を既に決めていた愛紗は自軍に怒声を立てて命令を下す。慌しくも一応の規律を見せた動きで劉備軍の兵達が動き出す。

亮槍兵は三段構えに幅の広い三角錐のような陣形に展開していく。

その後方、そして埋めきれない最前線には槍兵が駆け寄り陣形を完成させる。それに留まらず槍兵の後方には他の歩兵、及び弓兵が群がるように展開していく。

最前列の槍兵が部隊長の雄叫びの如く轟く命令に併せて一斉に槍を構える。迫り来る騎兵に向かって槍を突き出すのは劉備軍選りすぐりの精鋭達、最前線の名譽を受ける者達だ。

号令より僅か数秒にて剣山の如く鋭く煌きその凶器を見せ付ける槍袈が敵軍の眼前に広がる。これを騎兵の先頭で指揮を執る華雄は思

わず動揺し、衝突する際に起こる自軍の結果に戦慄する。

(おのれえっ!!これでは勢い余って我らが長槍の餌食となる!!)
「騎兵隊、方向転進っ!!!左に避けるおおおおお!!!」

最早騎兵の勢いを潰せぬと確信した華雄はせめて正面衝突だけは避けようと、自部隊に転進命令を下す。その命令を副官や部隊長が聞き入れ、自部隊広くに伝わるよう大きな声で復唱した。

左、即ち劉備軍前方と袁術軍後方の間ならば騎兵隊大部分が入る事ができる分の空間が残されている。劉備軍に攻撃できなければせめて袁術軍を襲おう。

既に奇襲戦は敵方の防衛陣形によって破綻したも同然、ならば此処に長居をしてまで叩く意義も無い。この上は?水関にて決着をつける。

かくして華雄は腕に鳴らした猛将としての才能を發揮させ、撤退の決意を固めた。

急な転進命令を受けた騎馬部隊は突撃命令前に抱いていた自身を僅かに揺らつかせてはいたが、日々の訓練の賜物か將軍の命令を忠実に実行するために手綱を操り馬首の向きを変えさせる。

しかし幾ら方向を変えようと、騎兵右側に配置された部隊は急な転進をするとしても一部は長槍に当たり、その衝撃と刺突により絶命は間逃れないだろう。

それに追い討ちをかけるように、劉備軍の後方に配置された弓兵部隊が矢を番えて斉射命令を待つ準備を整えた。それを確認するや否や直ぐに愛紗が怒声を上げる。

「弓兵放てええええええ!!!」

弓の弦から指を離し数百の矢が敵兵目掛けて飛び宙に黒い線を大量

に描き、空間を切り裂く甲高い音を何重にも奏でる。放物線上に飛んだそれは斉射の勢いをその線上の頂点で殺しきると、重力にしたがって斜線上に急速に落ちていく。鏃（やじり）が疾走する騎兵目掛けて墜落してくる。迎撃するか、否、一本斬ったところで次の矢に射抜かれる。華雄らは真つ直ぐに駆けて行く。身体に刺さる前に一気に駆け抜ける事こそ上策。

生を求めて直走る彼らに遂に矢雨が濁流のように降り注いだ。天より降りるそれは鋭さをさらに極め、速さを求めて軽装となった華雄軍に情けを一切振るわなかった。音速に近い速度で鎧と肉を貫通し中の骨にまで鏃が刺さる。悪運無い者は矢が頸に刺さり嗚咽を吐きながら地面に向かつて落馬する。大腿を食い破り中の動脈まで喰われた者は傷口から発する血の放流に恐怖と動揺を隠せず馬上での手綱操りを疎かとする。結果、その者は突如失速する自らの愛馬諸共後続の味方と衝突、諸共雪崩の様に斜面を転がり落ちていった。

それに巻き込まれまいと他の者達が馬首を返すが、結果速度が低下して突撃の利点が減少していく。

既に劉備軍から二度目の斉射が始まり更なる惨禍を引き起こさんとしていた。まだ騎兵の半分も弓のキルゾーンから逃れられていない。この間道には更なる死傷者が出る事は請負だ。

大地を震わす轟音は遂に劉備軍後僅かまでに接近する。両陣営の視線が合わさった。戦意と殺意と、そして恐怖が入り混じり互いを睥睨する。

一瞬時が止まったかのような静止を兵士は感じると、次の瞬間には大量の馬首が劉備軍の槍構えに激突した。

馬上にて大きな薙刀、青龍偃月刀を大きく振って愛紗は腹の底より激励を送る。

手に持った大斧、金剛爆斧を振り被り、道中の敵を叩き切りながら華雄が馬の腹を蹴って進む。

雑兵ではない。

気を改めた華雄は柄で槍の刃を振り払うと、大斧を左斜め上段から打ち払う。身体を竦めて交わした趙雲が槍を返して胴体を狙うもそれを再度柄で払い、新たに右方より相手の首を狙う。

それも巧みに槍を使って受け流すと空気をすら両断するような勢いで一閃を見舞うも、瞬時に戻した大斧の刃でまた弾く。両者、この状況下においてはその武勇が拮抗し、更に相手の武を打ち破らんと猛威を振るい続けた。

趙雲が龍の如く自由自在に槍を操り敵の軀を斬り飛ばそうとすれば、華雄はこれを自慢の剛力でもって大斧を振るい弾き飛ばし、空に鉄が擦りあう火花を散らす。

反撃の意をもって膂力に任せ咆哮を上げてこれを振るえば、趙雲が自らの力に頼りを置かずこの暴塵を受け流す。

霧を発する戦場の先頭において斬撃と閃撃によって二十合武の応酬を見せた後、華雄は鏑競り合うかと見られた龍牙を力任せに弾き飛ばして隙を作り、馬首を逸らして趙雲から遠ざかっていく。

「再度武を競り合おうぞ、趙子龍！！！」
「待て卑怯者オオ！！！」

趙雲が罵声を上げて去っていく華雄の背中に刺す様な視線を送るも、彼女は部下の生存を賭けた闘争にまた集中していく。

華雄は自らの頬より滴る血筋を感じて喜悦を覚える。自らの身体を傷つけた敵の実力に改めて驚かされる。烏合の衆と思うが如く浅慮を恥ずべきであった、なれば再度この者達と武を交えた。

自らの内に宿る戦意に火が点り武将としての魂を燃やす。その歓喜を絶叫と代えつつ彼女は新たな獲物である袁術軍の突破を図っていく。

対する趙雲は自らの後方より走ってくる華雄軍の騎馬兵を自慢の槍業で狩りつつ、刃を交わした敵将を想う。猛将の名に恥じぬ武技で

あり、戦場で相見える事は中々の名誉となり愉しみと成ろう。
自らの思いによって彼女もまた戦意を轟々と燃やし紅に染まった龍
牙に新たな生命を吸わせ始めた。

一方で戦線を後方より見続けていた北郷一刀は華雄軍の騎馬奇襲を
防ぎ切り、補給部隊壊滅という難を見事妨げた事を実感すると共に、
初めて相対した敵の屈強さに驚愕していた。

黄巾賊の相手ではない事は十全より知っていた、そして敵将が演義
では猛将の一人だという事もだ。これよりこれらの敵と武と智をも
つて闘(せめ)ぎ合うとなれば自軍の損害は度し難いレベルと成る
事を考慮しなければならぬ。

討伐が一筋縄ではいかないことを再度確認している最中、軍師朱里
が口を開く。

「敵軍の攻撃を防ぎきりました！一度陣形を立て直して被害状況を
確認しましょう！」

「そうだね、敵も騎兵だから私達が追う事が出来ないもの。直ぐに
命令を出すね！！」

主、桃香が張り切った声で周囲に居る兵に命令を下す。それを聞いた
者達は命令を自軍に拡散しつつ陣形を整えていく。

戦場に立ち込めた土煙が晴れるまでは迂闊に軍を動かす事が出来な
い。まして自軍が連合軍の中でも保有兵が少なく、敵兵が既に去っ
た状況であるならば尚更だ。

殺意の余韻を残した戦場で、一刀は自らの生が未だ続く事に感謝し
ていた。

高々と掲げられた『張』の旗が風に揺れる？水関、その城壁の上に腕を組んで連合軍が来る方角、そして華雄が帰還してくる方角へと張遼は睥睨する。

彼女の心の中には一つの危惧がある。華雄の闘志に激烈な火が点るかも知れないという事だ。あの血の気が強い猪武者の事だ、一度自らが全力をもつて相手をする敵を見つけ出したならば、その願望を叶えるがために防衛の利を捨てかねない。

この？水関に駐在する武将の中で最も戦略に長けているのは徐栄であり、防衛戦の長点を良く理解しているのも彼だ。

その彼であつても一度戦意が滾つて興奮した華雄は止める事が出来ない。止める前に突つ込むからだ。

張遼は藁にも縋る思いで思わず祈りを捧げてしまふ。どうか猪が怒らぬようにと。

地響きが木霊し、山中の間に設立された？水関にまで響き渡ってくる。張遼はその木霊の根源を見定めると一先ず安心した。

『華』の旗を靡かせて襲撃部隊が戻ってきたのだ。彼女は城内の兵に向けて叫ぶ。

「華雄が戻ってきたで！！開門準備しときいや！！！！！！」

『はっ！！！！！！』

自らの仲間が無事帰還してきた事に喜びを抱き、兵達は駆け足に持ち場へと着く。

張遼は先頭に行く者が残り四分の一里で到着するという頃合に開門指示を出した。

城門を固定する門と鎖が外されていき、閉塞感が満ちた重い音を奏でながらゆっくりと門が開けられていく。

徐々に近づいて来る華雄軍の先鋒、大斧を背負った華雄の表情を見た時、張遼の中で深い嘆息が生じる。

（あかん……ありや火ついとるわ。）

極上の獲物を見つけた時にでも浮かべそうな獰猛な笑みを貼り付けた華雄は開いていく門の中に勢い良く入っていく。

その後続の兵たちは華雄とは裏腹に険しい表情をしていた。彼らの中には負傷をしている者、あるいは服装や容姿が血と土煙に塗れた者が多い。

七千で出撃した騎兵隊のうち、戻ってきたのを目測で大体の数を推測したら、約五千五百程の騎兵しかいなかった。

徐栄の読み通り、戦術的に敵に読まれていたらしい。大方槍や戟、あるいは弓を使った奇襲潰しを行っただけの話であろう。

これで？水関に残された自軍の騎兵隊の残りは約七千となった。これからは是が非でも籠城戦に持ち込まなければ犠牲がさらに増えるだろうが、果たして華雄がこれを耐え切れるだろうか。

続々と城門の中へ入っていき無事の帰還を祝う守兵から賞賛の声を浴びている騎兵隊に目を向けつつ、彼女はどのような言葉で華雄の戦意を宥めようかと頭を悩ませ始めていた。

第三章：血を払うこと その六

連合軍、袁紹軍の天幕にて一堂に会した諸侯達は自らを呼び出した張本人の董卓軍への恨み節を散々に聞かされて、内心既に辟易としていた。

巨大なドリルを描く髪を揺らしながら袁紹はけたたましく言う。

「一体全体どういうことですかの!？」

天幕の中に居る諸侯達は内心を心に顕さず、敢えて深刻そうな表情を装う。これの方が今の場合都合が良い。

しかし中には事の重大さを直面し、内心を隠そうと努力する余り無表情になる者が居る。

人間は心を制する事に徹する、又は感情が一定の線を越えると表情筋が全く動かなくなるものだが、この者達にとっては前者が妥当であろう。

関までの間道にて、連合軍の前衛を担い進軍していた鮑信は内に溜まる感情をひた隠そうとし、齒を食いしばり耐えている。

「華雄の奇襲を防いだ癖に、陣形を一気に突破され、拳句に配下の将を斬られるだなんて!?!?!?こんな事なら、文醜さんと顔良さんを連れてくれば良かったですわ!!!」

猛将の名は伊達では無かったらしい。華雄は内に滾る戦意を軍全体に伝達し、これに心えた騎馬部隊が多くの犠牲を払いつつも自らの十倍は越える連合軍の軍列を突破したのである。

この戦闘において華雄自らが連合軍武将、鮑信の実弟である鮑忠を大斧にて頸を薙ぎ払い、之を戦死せしめた。肉親を殺された鮑信の怒りは如何ばかりであろう。

他、袁術軍の兪涉と韓馥軍の勇将である潘鳳が討ち取られた。併せて三人の将が立て続けに殺害された事は連合軍にとつては大きな打撃であつた。

しかし諸侯達を大いに貶す袁紹軍ですら華雄に陣形を乱され突破されたは事実であり、連合軍を統括する彼女の責任は大いにある。

袁紹自身もそれを自覚し、自らの権威性で統合したと思つている連合軍にて不和の兆候が生まれる事に危惧を抱き、まず失態を招いた群雄達と自らを叱責している。

彼女は不満を顔に残しつつも溢れてくる激情を抑えて軍議を執り行う。

「まあ、補給部隊が壊滅の憂き目に会わなかつただけ良しとしまし
よう……。私の温情に感謝しなさい……。」

諸侯達は何も言わず唯沈黙を保ち続けている。彼女の話聞き飽きた者もいれば、これからの戦略に知恵を巡らせている者もいる。一つ彼らの中で共通している事は、袁紹相手に言葉を交わす意思を持つていない事だ。

袁紹は自らの言葉に無視を決め込んでいる諸侯らに苛立ちを募らせて目を痺攣させている。この気まずい雰囲気の中で勇氣を持って発言するものが現れ、天幕の中に居る人間の視線が集中する。

「……それで、？水関に居る華雄の軍勢に対してどうするんですか？」

「どうする、とはどのような意味ですか？」

発言をした者、平原の相劉備に向かつて袁紹はその意味を問う。質問を質問で返された劉備は臆する事無く自らの見地を述べる。

「？水関に居る董卓軍をどうやって攻撃して、敗退させるか。袁紹

さんはどのような方法でこれを実現させたいのですか？」

その質問の大胆さに諸侯が内心驚き、呆れる。連合軍内では最小と言って良い程の勢力の主が、連合軍最大の勢力にして連合軍総大将である袁紹にすけすけと内心を尋ねたのだ。遠慮無用、単刀直入の姿勢には皆の意が突かれた。

袁紹は自らの心中を堂々と探ってくる劉備に不快感を露にして答える。

「雄々しく、勇ましく、華麗に撃破ですわ。当然でしょう？」

華雄軍の猛攻撃によって自軍にも被害を受けた上で尚自身を失わず、高貴とした姿勢を崩さない彼女にはある種の感動を覚えるべきなのだろうか。

諸侯達はその見解をとらず、初手を挫かれ戦力を削られたのにも拘らず連合軍の圧勝を疑わない袁紹に冷ややかな視線を送る。敵方は自分達の想像以上に軍略が得手としており、圧勝等最早不可能に近いのだが。

劉備は更に袁紹に問う。

「敵将である華雄は文字通り猛将である事が先の戦いでも分かっているのですしたら、これからの戦闘は慎重に事を構えた方が良くないでしょうか？」

「・・・すけすけと物を言いますわね。連合軍の進軍方針に不満をお持ちなのだから、何か代案があるのでしょうか？若しくは、華雄を防いだ自分ならば上手くやれるとでも？」

「流石に私の軍だけでは華雄以下の将兵が居る？水関を落とせません。あそこを陥落させるには、敵を更に上回る武勇と知略、何よりも威光が必要です。」

劉備の話し方が変わり、袁紹を持ち上げる節が見られるのに皆が気付く。先の軍議では自らを余り主張せずに成行きをただ見ていただけの柔な娘だと思っていたが、どうも軍師辺りに何か吹き込まれたらしい。

袁紹はそうとも知れず、他者に無く自らのみに備わると自負する袁家の誇りを強調する見せ付ける良い機会だといわんばかりに、自尊心を浮かべた。

「当然ですわ。たかが一介の家柄には無き物、それは漢王朝の元に築き上げてきた威光、名誉。それらを全て備え合わせるのには、中原においてこの袁家において他はありませんわ。」

「・・・そうでしょうね。その袁家の跡取りでいらっしやる袁紹さんも、さぞやご立派な將軍でいらっしやるのでしょうか？」

「勿論ですわよ！四代に渡り三公を輩出してきた袁家の当主たる私、袁本初が將の將たる何かを知らぬ事などありえませんわ！」

劉備はそれを聞くと安心したように顔を緩める。彼女の近くに座る者、控える者はその笑みが腹黒い物だと思わず認識し、この劉備という少女の底の深さに僅かに瞠目する。しかしこの場の大半は袁紹の底の浅さ、気の移ろいやすさにあきれ返っていたのだが。

「・・・では、袁紹さん。將の將たる要素を深くご理解していらっしやる、聡明な貴方にお願ひがあります。」

「あら、なんですか？私、今機嫌が良いから何でも聞いてさしあげますわよ。」

袁紹の言葉に劉備は僅かに瞳を輝かせる。彼女は言質を取ったのだ、これより話す董卓軍への攻勢計画に対し袁紹が支援するという言葉を。劉備軍から見れば、彼女はとても扱いやすい女性であった。

数瞬間を開けた後、彼女はゆっくりとはつきり聞こえるように言葉

を出し、その場に居た諸侯達にさらなる驚きを齎し、幾人かの興味の視線を一身に受ける事と成った。

「……………どうか、私の軍に袁紹さんの兵と兵糧を貸していただけませんか？」

第三章：血を払うこと その六

「暇ねえ……………」

高々と聳え立つ山の峡谷の間に造られた、職人の腕が見事に現された石造りの城砦。山間（やまあい）に生じる山間部から平野部に向かつて吹き出して来る峡谷風により、城砦に掲げられた旗が翻る。どんよりと曇った灰色の空には紫に彩られた『董』の旗が靡き、音を立てる。反董卓連合軍の前衛部隊はその旗が薄らと見える場所に仁を構え、？水関と対峙していた。

陣を構えて早数日、散発的な攻撃によって董卓軍を挑発する事はあつても中の敵兵は一向に姿を門内より現さない。穴熊を決め込んで長期戦に持ち込もうとする意図は明白である。

？水関の守衛の任を貰つた華雄は何度も門外へ出て攻勢を仕掛ける事を提言しているが、徐栄と張遼の反発により軍の指揮が取れない状態である事が、忍び込ませていた細作の情報により判明した。

これから察するに、華雄という武將は噂に違わぬ猪武者であり、尚且つ彼女自身が指揮する兵の数は然程多くはなさそうだ。仮に多いとなれば兵の差など気にせず突っ込んでくるというのが猪武者の真骨頂である。

洛陽からの情報が途絶えているため推測に過ぎないが、恐らくかの地では攻勢積極派と攻勢消極派の二つに対立しているはず。無論董卓は積極派だろう。

対して虎牢関に本陣を構えているという敵の総大将兼軍師、賈クは軍の指揮系統を統一して打って出ようとする姿勢を欠片も見せていない。軍師の部下である張遼の態度を見れば明らかであり、という事は董卓軍において賈クの陣営は消極派なのであろう。

これを劉備が察しているのか知らないが、もしこれを知っていたとすれば彼女の手は読めてくる。攻勢積極派を集中的に挑発、侮蔑して関に籠城する利点を自ら放棄させる事だ。

「ふー、ふー。ムハツ、ハフツ！んっ・・・暇なのよねえ・・・」
「。。。。。。。。。」

仁ノ助の眉間に寄せられた皺がまた一本増える。自らの軍知を確かめるためにも、また日本で学んだ三国志に関する事を思い出すためにも以上のようにして思案をしていたのである。

その、年月と共に訪れる老いと忘却を跳ね返すための膨大且つ甚大な努力を鼻で笑つかのように、彼の鼻の頭を、良い加減に炒められた野菜の中に充満する肉汁が発する、無性に腹が空いてくる肉まん

の香りが撫で、天幕の中に充満する。

そういえば朝食は軽めの物だけしか食べていなかった。昼食は程好く温められた肉まんを食べ、喉と口腔を潤すお茶で嚙下しよう。

緊迫した神経を和らげる湯気の元に視線を送る。通常のそれならば大きくても拳二つ分であるのだが、今現在それを確かめると、大きさは拳十コ分はあろうかという程。

張り詰めた空気など屁でも思わぬ肉まんを思う存分に喜色を浮かべて頬張る女性、詩花の喰いっぷりには感動を覚える。流石は我妻、曹操軍の糧食がこの胃袋によってどれ程速いペースで消耗された事か。嗚呼、猫耳軍師が泣いている。

暇さえあれば何かを食べずには居られない、とまではいかないがそれにしても食べ過ぎである。大食漢に向けて言葉を放つ。

「仕方ないだろう、これも劉備軍の策を袁紹が受け入れた結果なのだからな。」

「かといって、丸数日城壁に軍を寄せずに、ただ威嚇斉射するだけというのはねえ……。」

劉備軍の執っている策を正確に読んでいる者は少ない。例外は仁ノ助と北郷一刀であろう、史実知識・演義知識という反則をもってして事を読んでいる。

詩花は劉備軍の攻撃をただの威嚇だと捉えているようだが、実際連合軍内ではその見解が通説と成っている。

籠城を決め込んだ敵に対しての攻勢は非常に難易度が高い代物だ。このような姿勢を取られた場合、何らかの方法で守備の構えを取る事を阻害するか、若しくは守備から攻撃の構えへと移行させなければ落城は難しいだろう。

「退屈という事か。」

「当たり前よ。暫くまともに敵と武器を交えていないんだもの。自

分の武技がどれくらいか、測る事すら出来ないじゃない。」

「今の状況下ではそれは無謀と云う物だ。まして敵方の将兵の大半が涼州出身の猛者が多いとくれば、な。」

涼州や中原西部出身の者は、その地特有の風土や治安の関係上体力作りがその地域内で盛んに行われている事もあって、強靱な肉体を作る事が民草から兵隊に至るまでの慣習となっている。

董卓軍の構成兵は董卓自身の抛り所や出身地が涼州という事にも繋がりがあってか、涼州出身者が多い。つまり精強な軍隊を保持できる能力があるという事だ。これは先の間道での戦闘でそれは証明済みである。

詩花は自らの武を振るう機会が恵まれない事に確信を持つと歯がゆい気持ち食欲に変えて、手に持った肉まんに勢い良く頬張る。

噛み千切られた肉や野菜から旨み成分が多く入ったエキスが迸り、歯茎の裏に隠された口腔の中へと飛び交う。同時に宙へと飛んだ肉汁が仁ノ助の外套に僅かに付着した。

尻を僅かに引き攣らせた彼は溜息を漏らす。椅子に腰掛けた自分の膝の上で態々肉まんを食べる意義があるのだろうか。これと同じ事を流流や風にさせたから、もしかや対抗しているのだろうか。

「仁ノ助殿、劉備軍に……失礼しました。」

「いや失礼しなくていいから、すぐこの子降ろすから待って！」

「ぶーぶー！」「不貞腐れないの！」

天幕の中に入ってきた空気がいまひとつ読めていない男、曹洪が二人の体勢を見てすぐさまに踵を返そうとした。仁ノ助はそれを声を出して呼び止める。

愛する男の膝の上で食べる肉まんは格別なのにと抗議するように詩花が口を尖らせる。仁ノ助はその彼女を背中から押して地面に立たせると、一呼吸を置いて曹洪に尋ねた。

「劉備軍がどうした？ やつと動いたか？」

「ええ、どうやら劉備だけではなく孫堅軍も動いている模様です。また、之に併せて全軍に出撃命令が出ました。我らの出番のようです。」

眼前に迫り徐々にその堅牢さを体現していく？ 水関。宛城を攻略した際はここまで城壁が高くは無かつたと、孫堅は思った。

宛城は城壁を駆け上る事が出来るほど壁の造りが甘いものであったが、流石に洛陽へと通じるこの関はそのような油断は一切無い。

反り立つ壁は地面と垂直かそれ同等というまでの造り。積み上げられた石の切り口が変色しておらず、一枚の岸壁のような印象を受ける。

長々と横に広がる城壁の中央には重厚な城門が威容を見せ付ける。騎馬で馬を横に合わせても優に横十列は通れそうな程の幅だ。

うつすらと明るんだ曇り空を受けて、緑の『劉』と赤の『孫』が門に近付いていく。城壁から充分に自らの姿を見せ付ける距離まで近付くとその軍靴は脚を止める。

孫堅は一息つくと、松明を持ち腰の紐帯に小さな油壺を吊り下げた黄蓋を連れて馬を走らせる。劉備軍の方へと目をやると大きな薙刀を担いだ女性が軍列から抜け出して前へ駆け出す。

あれだけの大きな得物を持てば身体の節々が悲鳴を上げてても可笑しくないのだが、その女性、劉備軍一の猛将と噂される関雲長は何の支障をきたしていない様だ。

徐々に両者の距離が近付き、やがて馬を横に合わせると走りを緩めていき、足を止める。城壁に翻る『董』の旗がよく見える。

嵐の前の静けさが破裂しそうな程高まる闘志により燦ぶる。静けさの中に一陣の風が吹き、清涼な空気を齎して汗ばんだ肌を撫でた。内に宿した闘志が心地よく感じられる。

関羽がこちらを鋭い目つきで見遣る。孫堅はそれに応と頷くと、彼女は肺を大きく膨らませて空気を吸い、瞬間、空気が怒声となって峡谷に木霊し、関へと伝わっていった。

「？水関守将、華雄へ告ぐ！！！！！！我は劉玄德が一の武將にして天下一の猛者、関雲長である！！！！！！！！」

『その心に一片の武の矜持あらば、表へ顔を現せええ！！！！！！』

「どうしたあ！？何が起きとるんや！？」

「敵方が、城門外から華雄將軍を挑発しています！！！！」

？水関内部の陣地にも届く名乗りに張遼と胡軫が慌てて城壁へと駆け上っていく。途中、兵に事態の詳細を聞くに、劉備軍は華雄の武人としての心を逆撫でして野戦へと持ち込もうとしているらしい。城壁には既に華雄が怒りに顔を赤く染め、腕を組みながら眼下の三者に向かって眼を凄ませている。数日に渡ってただ逃げに徹しまともな攻撃をする事も無く、この期に及んで武の矜持を持ち出す事自体彼女には武心に対する侮辱なのである。

『無為無策に安寧を破壊し、天下を乱す、悪徳董卓に仕えるが如き蛮行を止め、潔く真の天意の下に降伏せよ！！！！！！さもなくば漢王朝の忠義の刃が、貴様の骸を日の下に晒すであらう！！！！！！！！』

「何が悪徳だ……！あのお方の心労も知らぬ癖して一方的な……！」
「落ち着きや華雄！！ここで心乱したらあかんで！！……っ！同じ武器か！？」

鼻息を荒げて華雄はますます殺気を宿して猛りを揚げる関羽を睨みつける。その彼女を鎮め、感情に流され無いようにと張遼が諫め、関羽を見遣った時に彼女と同じ系統の武器を持っている事に驚きを露にした。

胡軫が顔の険を深めて連合軍を見据えていると、関羽がさらに言葉を続ける。彼女が乗りこなす馬が低く嘶いた。

「武人の武人たる所以、それは自らの命を正義と忠義に捧げる事なり！！！！決して巨悪を擁護する事ではない！！！！而して貴様は自らの武を紛うこと無き鬼畜所業の罪人へと捧げた！！！！善も悪も区別のつかぬ貴様に、武の矜持など存在しない！！！！天下を乱す、ただの一介の盗賊なり！！！！！」

「おのれ、腐れ阿婆擦れめ！！何を以って武人を語るか！！！！」
「華雄！！詠の言葉を忘れたんか！！？『出たら負け』や！！！！絶対に城を出たらあかん！！！！」

「將軍、どうか冷静に！！！！」

思わず近くの壁に立て掛けてあつた自らの得物である金剛爆斧の柄を握り締めてさらに怒髪を逆立てた。張遼は彼女の仲間であり親友である軍師賈クの厳命を説いた。亀が甲羅に籠るが如く、ただ嵐が過ぎるのを待てと。

胡軫もその命令に同意せざるを得ない。元々数で劣る上に董卓軍内で不和の芽が出始めている。此処に至って將軍までもが総大将の命令に反発するとなれば、政治を手中に収めていると自負する洛陽の悪人達が何をするか分かつたものではない。

必死に声を荒げて華雄を止めようとするが、それらに反発するように彼女は更に憤りを強め戦意を高めている。それを煽るかのように、関羽が華雄に対して止めの一声を投げかけた。

『この期に及び尚反旗を翻すとなれば、その蛮行は許しがたき物！
！！！！この一矢を天の意思と心得、悔い改めよ！！！！』

関羽は自らの言葉を言い終えた後、孫堅の近くに馬をよせて控えていた黄蓋に顔を向けて確りと頷く。黄蓋はそれに首肯を返すと孫堅と共に馬を数歩進める。彼女に掲げていた火を灯してある松明を渡すと、鞍に取り付けてあった大弓を手に取る。

一般の兵士が扱う其れよりも二倍はあろうかという強弓だ。弓を持った手で肩越しに背中へと手を回して動物の皮で拵（こしら）えた矢筒から矢を一本抜く。鐙の目の孔に紙を突き入れた矢である。空いた手で紐帯に結び付けられた油壺の蓋を取り矢の鏃をそこに突き入れて浸した。

用を無くした油壺を捨てると、孫堅が掲げた松明に矢の先を翳す。途端にそれは勢い良く火を吹いて火矢となる。黄蓋は矢を弓の弦に番え、力を込めて緩慢な動きで弦を引いていく。弓を構える彼女の視線の先に鏃から溢れる炎が見え、その先に曇り空から顔を覗かせた太陽が見えた。

孫堅はその機会を見計らって手に持った松明を関の方角に投げ捨てる。炎が空気に触れて弾けていく音を聞き入れた瞬間、黄蓋は矢から手を離す。弦が勢い良く弾かれて強く音を立て、空気を鋭く引き裂きながら矢が真っ直ぐ飛び、空漠とした宙を貫く甲高い音を発した。

？水関城壁に居る者の視線がその一矢の行方に集中する。あの強弓となれば飛距離は凄まじいものとなるであろう。放物線を描きながら矢は天へと登っていき、急速に落下していく。地表へと近付き、獲物を視界に捕らえる。隼が得物を狙うかのように下りたそれは、

城壁に高々と掲げられて風に靡く『董』の旗、その中心を見事に射抜いた。

董卓軍の誰もが眼を疑い、瞠目した。孫堅は自らの信頼する片腕が見事困難をやり遂げた事に会心の笑みを漏らす。鏃から移った炎が董卓軍の牙門旗を紅蓮の炎に包み込んだ。遠方から火の手が生じた事を連合軍将兵が確認し、黄蓋將軍の見事な弓の腕前に驚き、それを湛えるために手に持った武器を一齐に打ち鳴らす。

天地に雄大に響き渡る轟音を耳に入れた華雄の胸の奥で、綱が切れる音がする。何時の間にか自らを押さえつける事を止めた張遼に向かい、声を震わせて聞く。

「……張遼。我慢ならんぞ。」

「……そうやな。こんなん腹が立つて仕方ないわ……。」

鬼気迫る表情で華雄は呟く。心の奥底より湧き出す闘争心、そして敵意を抑え付ける事が困難になっている様子だ。武人としての名誉矜持を傷つけられた一矢であった。

張遼もそんな彼女を抑える事が出来ないと悟ったのか、静かに華雄の言葉を肯定する。胡軫は本性を見せた猛将の戦意に臆しながらも、冷静に勤めようと声を掛ける。

「そ、それでは、出撃なさるので？」

「ああ、出るぞ。武人として、董卓軍の一武将として、最早看過し難い……！」

「詠には悪いが、？水関は放棄せなあかな。……悪いが先に郭？と徐栄と一緒に軍を纏めて虎牢関に退かせてもらうぞ。」

「……承知しました。騎兵三千と歩兵二万を連れて、撤退指揮をお願いします。……ご武運を！」

関に残るは歩兵二万一千と騎兵四千、併せて約二万五千の部隊。ど

「聞こえましたか？」

「ああ、はつきりとな。」「なれば直ぐに馬を返して、策の通りに。」

猛将の怒号、軍兵の咆哮がつんざめき、三人の元へと空気を響かせて伝わる。燃え盛る闘志を爆発させた董卓軍は防衛の利を捨てて直に襲来する事になる。あの様子では出陣の準備が早々に終わるかもしれない。

三者は馬首を返してそれぞれ自軍が待機する方向へと急いで馬を走らせる。態々敵軍が城門を開ける所まで見る必要は無い。あれだけの挑発をすれば必ず出て来る。

数町走り抜けた後、関羽の後方から重厚で地響きを発する音が騒音が響く。振り向いた彼女の視界の中心、開けられつつある城門の間から、奔騰する血液を欲さんと靡く『董』・『華』の旗が見える。予想以上に出陣が早い、最初から出陣準備を整えていたのか。敵方の手回しの早さに一驚を喫すると、鞭を打って馬の足をさらに速めた。なるべく距離を稼いで味方と合流せねばならない。

後方から銅鑼が喧しく鳴らされ、大量の足が地面を踏み鳴らされ自らの方へと接近し始めるのを感じた。華雄が遂に進軍を始めたのだ。いよいよもって急がねば成らない。

関羽が自軍まで四分の一里も無い距離まで近付くと、『劉』の旗が左方へと展開していく。陣形構築を諸葛亮と鳳統がその聡慧を遺憾なく発揮し始めた。同時に孫堅の軍の方でも動きが見え、軍勢が右方へと広がる。両軍が羽を広げるように展開し始めた。

やがて両軍が構築していく陣の形が出来ていく。まるで一羽の鶴が大きく翼を延ばしているようにも見え、三日月のようにも見える。

この陣形こそ、鶴翼の陣。突撃する敵を横から回り込むように包囲、中央の部隊と共に多方向から集中攻撃を加える事が出来るのだ。これでもって突撃を仕掛けてきた華雄を押し潰す。

漸く劉備軍の布陣へと入っていき、その中央まで進むと敬愛する主

人、北郷が声を掛ける。

「有難う、愛紗!!! 引き続いて頼む!!!」
「お任せ下さい!!!」

天の御使い、中原の救世主である彼の前とあつては失態は犯せない。さらに奮い立つ闘志を胸に抱いて彼女は董卓軍が襲ってくる方角へと振り向いた。

地表より低く広域に渡って立ち上る土煙、?水関より疾駆する騎馬部隊の先鋒に『董』と『華』の旗が風を受けて巻き上げられる。地を這いずる様な低い唸りを上げて真つ直ぐ進んでくる彼らはさながら死地へと進む死兵の様であった。

なればその心に答える事もまた武将の務めか。突進する敵を伶俐な眼で見つめていた諸葛亮が何でもないように手を上げる。それに合わせて彼女の周囲に控えていた大量の弓兵が斉射の構えを取った。華雄率いる騎馬突撃兵が射程距離まで僅かという辺りで、諸葛亮と孫堅軍軍師である周瑜が謀ったかのような程同じタイミングで号令を下す。

「放てえええええ!!!」

糸を切らしたように一斉に矢の雨が人の雲集から発し、天に黒い矢雨を生じさせた。鉄灰色の雲の中を何百、千をも越える数の矢羽が飛び、獲物目掛けて突き進む董卓軍に襲い掛かる。

戦慄するような甲走った音を発した矢が緊張と熱意で火照った身体に服装も鎧も関係なしに貫き、突き刺さる。鉄の鏃が脂肪と筋肉を引き裂き、中の毛細血管をずたずたに傷つけ、矢傷と矢の間から赤い命水が流れ落ちる。

脳天や心臓・延髄といった急所を刺された者達は痛みを自覚する事無く次々と地面に倒れ臥し、後続の味方に意識が戻ってこない身体

を踏まれていく。身体から血を流しつつも自らの心に強く鞭を打ち、必死の形相となって馬を操る。

暇を与えず更に第二射が射られた。一矢一矢に必殺の意を込められたそれはまさしく死の雨、勇猛果敢に邁進する者達に一切の容赦を加えず、ただ無感情に人体に死を織り成していく。

華雄はそれを矢の雨あられを物ともしない。自らの頭上で大斧を豪然と振り回して敵兵が放った矢を弾き、叩き折っていく。その隙間を縫って何本かの矢が彼女と彼女の乗る馬を掠めて切り傷を生じさせるも、疾風となって走る彼女の勢いは止まらない。

先頭は華雄の騎馬部隊四千、後ろには遅れて歩兵一万七千が大挙して押し寄せてきた。残る四千は関に残り守備を守るつもりなのだろう。軍の大半を連れての進撃は、連合軍の攻勢の意思を挫いて董卓軍の武を天下に示さんと華雄の魂胆が如実に現れているといえよう。矢雨を浴びながら華雄の馬首は劉備軍と孫堅軍の間を狙って進撃する。策を弄そうと所詮は烏合の衆、怒りの一撃をまともには喰らえば直ぐ様醜態を晒す羽目となろう。それこそ先の間道での戦いの通りだ。

自らの戦術に自信を持って進む華雄。敵までの距離が残り一町となり、矢雨は頭上からは元より正面からも自らを襲ってくる。金剛爆斧は既に鉄と木を両断する事に飽きている。次は暢気に矢を番えている貴様らの肉を味あわせてもらおう。

今にも襲い掛からんとするその時、劉備軍と孫堅軍の間が邁進する華雄軍に道を譲るように二手に別たれて行った。戦意の拍子を突く形で新たな陣形が展開されていく。

思わぬ形で獲物を捕らえ損ねた騎馬隊はその道を逆らえずに進む羽目と成った。それを座して待つ連合軍ではない。彼らが走っていく横合い槍と戟を突き出して軀の奥の内臓を傷つけ刺殺する。馬を刺された者は前に横に投げ出され、追い討ちの刺突と斬撃を諸に喰らう。足を止めた者を馬上から引き摺り倒して石突で頭蓋を強打していき撲殺する。皮肉な事に先の間道戦と同じ展開となってしまった。

華雄ら騎馬先鋒に位置する精銳部隊はそれを身を挨つて交わし、あるいは迫り来る武器を弾き飛ばし、敵兵を始末して自らに対する危害を減らしていく。

奔走していく彼女が馬首の向く先、前方に目を向けると両軍のどちらでも無い旗がはためいていた。敵を今か今かと待ちかえる旗の字は『鮑』、そして『袁』。部下を多く殺害され肉親をも殺された鮑信と、孫堅の飼い主である袁術の部隊であった。

劉備の策、もとい北郷と諸葛亮と鳳統が相談して決めた策、それは此方に明確な敵意を持ち、同時に武を争う事に期待を寄せている敵を数日間煽り、焦れた所で決定的な挑発を行う。

猪武者であり直情的な華雄はそれを無視する事は出来ない。必ず防備を疎かにして突撃を仕掛けてくる。自軍は之を鶴翼の陣を敷いて弓兵と長槍兵で迎撃する。

そして華雄が接近してきたら陣形を態と二つに分断、予め待機させていた別の長槍・戟部隊で突撃の勢いを殺せない騎馬部隊を針鼠と化す、というものであった。

二段構えの防衛の形でもって敵の勢いを完全に殺ぐ策に袁紹・他諸侯らは同意、あるいは興味の追求としてそれを認可した。

策案者である劉備軍とそれに真つ先に同意をした孫堅軍が第一防衛陣を指揮、第二防衛陣には華雄に部下を殺された鮑信と孫堅を配下におく袁術の軍隊を適用。

劉備軍の考えた策は此処までであるが、関の攻略に関しては別の策が、彼女の与り知らない所で進行していた。

その一部を華雄は直感する。半包围された軍隊だけに何故時間を割く？から空きと成った関を狙うのが、連合軍の本来の目的であったはずだ。

自らの失態に漸く気付いた彼女に情け無用の追い討ちが掛かる。復讐の黒い炎を滾らせる鮑信と袁術の両部隊、何重にも槍と戟を突き出して待ち構える敵に遂に接敵した。

力を込めて踏ん張る槍の山々に騎馬が次々と衝突し、緊張が張り詰めた肉体に殺意が込められた鉄の兵器が襲い掛かる。

絶叫が木霊する戦場で華雄もまた自らの愛馬が刺し殺され、宙へと身体を投げ出される。敵方の槍や戟を無我夢中で切払い、なんとか地表で受身を取る。しかし運が悪かったのか、側頭部を地面に打ち付け頸を痛める体勢で受身を取ってしまった。

数度回転して勢いを殺した彼女は打ち身の時に生じた僅かな脳震盪に頭をふらふらとさせるも、自らを奮起させ無理矢理言う事が思うように聞かない身体を立たせようとす。

その彼女の努力は虚しく、一人の雑兵が近場にまで転んで槍で突き刺せぬ事に苛立ちながら、華雄目掛けて膝蹴りを見舞った。

鉄製の膝当を纏ったそれは視界がぼやけて咄嗟の反応が出来なかった華雄の顎を見事に捉えた。視界の中で火花が飛び散るような錯覚を覚えると、彼女の意識が暗く染まっていった。

第三章・血を払うこと その六（後書き）

久々のまともな戦闘描写、如何だったでしょうか。
途中冗長と思える描写をお見受けいたしましたら、
それは間違いなく作者の努力不足の現れであります。
この場を借りて、陳謝いたします。

第三章：血を払うこと その七

騎馬の群れが連合軍が意図を持って開いた血路を直進し、槍と戟の険山に飛び込んでいく。三方を敵に囲まれた上に残る一方は味方が塞いでいるも同然。幾ら死地へと赴くといった所で、此処で死ぬのはあまりに悲惨だ。

怨念を燃やす兵達は退却の意思を持つとするとする事すら許しはしない。手に持った武器で敵の身体を、敵の乗った馬も構わずに狙い、殺戮していく。

戟の餌食になるまいと足を遅めるか止めてしまおうとする者、開き直って突破を図ろうとする者、殺意に身を委ねて愉悦の笑みを溢す者も全てを飲み込んでいく。

阿鼻叫喚、鉄と血をもって生を競り合わせ始める。互いの死を追い求めて自らの獣を露にしている。

「華雄の部隊が混乱状態に陥り、袋叩きに遭っていますね！！」

「あれは混乱とは言わん！！狂乱というべきだ！！」

その死地を避ける様に、曹操軍が真の獲物を狙うべく疾風怒濤の勢いで通過していく。先鋒を率いるのは夏侯惇・夏侯淵將軍による精鋭部隊。次鋒に仁ノ助と蒋済の部隊だ。

仁ノ助は横目で劉備軍と孫健軍の奮闘を見遣ると意識と視線を自らが進軍する場所、敵方の兵が多く出払っているために手薄となった？水関へと送る。慌しく守兵が動いているようだが既に手遅れだ。その証拠に本来なら閉ざされているはずの門が開いたままである。曹操軍が先んじて放っていた間者、此方側に放たれていたが逆に手懐けた元敵方の間者、それらが協力し合って門の開放を維持しているのだ。

自軍が侵入し切るまでは間者が結成した反抗部隊は門を死守するだ

ろう、その後は数と卓越した城砦攻略戦法で一気に罅り殺す、若しくは投降を促す。

確かに乱戦に突入して華雄を討ち取る名誉は大きい、それ以上に？水関を落とす意義の方が大きい。また諸侯の注目を一心に集めると曹孟徳は判断したのだ。

「ともかく、さっさと関を落とすぞ！」

「美味しい所だけ持っていくのが最上、ってことですね!？」

穂先の下部に左右に分かれた枝刃を出している十文字槍を担いだ蔣済は、大地を震わし空気を響かせる轟音に掻き消されないように大声を上げる。

仁ノ助も腰の鞘から既にクレイモアを引き抜いている。左手馬の手綱を巧みに操り愛馬である吉野の走りを安定させ人馬一体となる。

彼は城壁の上で風に煽られる『董』の旗を睨みつけた。

少しずつ晴れて来た空、その中を未だに漂う雲間から煌々とした光の帯が地面に降り注ぐ。鍛え上げられた肉体から吐き出された血がそれを浴びて宿主の生命の残滓を輝かせる。戦場に舞い上げられた闘気と土霧が柔らかな光輝を受けて僅かに透けた。

視界が効かぬ煙の中で人のうめき、猛りが空気を振動させる。血を浴びて鉄が削れて尚光沢を残す凶刃を翳し、自らの命を散らさんとする敵に憎悪の火を燃やして襲いかかる。

完全な乱戦を演出する様相を呈した華雄軍と連合軍、それを避けて行動をする曹操軍。戦火の中で両軍入り乱れた戦闘は、一つの区切りを迎えていた。

第三章：血を払うこと その七

混沌とした意識の深層から華雄は徐々に視覚をはつきりとさせていく。視界の中で立ち上っている煙の中で背を向けて何かを振っている男達の姿が見え、それに対して別の男達が何かを振るって争っている。そうだ、今はまだ戦闘中であつた。両軍が衝突して激戦となつているのか。思わず呆然として辺りの光景を眺めてしまう。

背を向ける男達は、先程まで自分が指揮していた騎馬部隊の連中であり、今は愛馬を失つたのか地面に降りて白兵戦を挑んでいる。対する者達は鮑信軍か袁術軍の兵士達である事が、意識を失う前に捉えた認識が教えていた。

日々地面で戦う事を想定して訓練している敵に対し、大切な足を失つて不慣れな戦いをせざるを得ない自軍は大きな劣勢に立たされているらしい。敵軍から突き出される刺突や斬撃の嵐に難儀をし、身体に裂傷や切り傷を増やしているのが分かつた。

繰り出される槍を上手く上方から抑えて手に持った槍で頸を貫く。鮑信軍の一兵士は痛みと怒りを顔に出していたが、それを振り払うように槍が引き抜かれる。血潮を吹いて倒れる敵に一瞥をくれた後、その兵士が後ろで倒れていた華雄が意識を取り戻したのに気付く。急いで駆け寄ってきた兵士は自らの槍を地面に置き、華雄の近くに転がっていた金剛爆斧の柄を取るとそれを差し出して彼女に話す。

「將軍、退却の指示をつつっ!？」

然に身を寄せ合つて防御陣形を形成していく。全体を指揮するためにより高い場所から周囲を見なければ成らないと華雄はその列から直ぐに抜け出して走つた。

兵士達の合間を縫つて駆けて行く彼女の耳に聞き覚えのある声が入つた。その声がする方を向くと、一人の男が馬上で戟を振るつて董卓軍に大声を出して士気を維持しようと、指揮系統を統括しようと悪戦苦闘していた。

「胡軫つっ！！！！！」 「っ！？將軍、ご無事で！！！」

胡軫は自らの元へ意気揚々と駆け寄る華雄を見て安堵の息を漏らしかけるが、目を敵から離れた隙にまた矢が飛んでくるのに気付き慌ててそれを打ち払う。華雄は近くに駆け寄つた後、主を失つてその場に佇んでいた馬を見つけると横から飛び乗つて手綱を握つた。馬は突然の事に驚き暴れようとするが華雄は手綱を巧みに使い馬の腹を蹴つて落ち着かせる。

胡軫の傍まで馬を寄せると早口に問い質す。其れに対し胡軫も矢継ぎ早に応える。会話の最中でも飛んでくる矢を打ち払い、自らに押し寄せる雑兵を軽々と大斧と戟で斬り払う。

「戦況はどうなっている!?」

「悪化の一途！！彼我の死傷者は此方の方が多いです！！敵方の包囲陣を崩せぬ以上戦況は変わりません！！」

「相分かった！！これより我が軍は虎牢関に向けて撤退する！！貴様は疾く兵を纏めて事に掛かれ！！」

「承知！！將軍は如何なさるので!?」

彼の疑問に応えようとした時、一人の武芸者が馬上より猛りながら突撃を仕掛けてきた。それなりに腕に覚えがあると自負しているのか華雄の闘気を受けても冷や汗一つかいていない。薙刀を振り回し

て此方を睨みつけている。

華雄は男のその雄姿を鼻で嘲笑うと数歩馬を進めて金剛爆斧を中段に構えた。一見無抵抗に男の攻撃を待つ姿は隙があるように見えるが、全身から滲み出す彼女の戦意がその思考を許さない。自らの武を侮辱されたと感じた男は憤激して更に足を速めた。

馬を近くまで進めると男は大きく薙刀を振り被って一気に上段から打ち払う。唸り声を上げて下ろされるそれは華雄の身体を見事に捉えた。もし薙刀が届いていければの話だが。

(・・・なんとっ!?)

猛威を振るって敵将を討ち取ったと思つた男は薙刀を持っているのが自らの左手のみであるという事に驚き、その思考を持ったまま意識を宙へと投げ出された。地面に落ちていく男のぼやけた視界に、走り去っていく馬の上に乗つた男が右肘から先をを失くし、頸部を切断された姿を捉えた。

一人の無謀者を屠つたのは正しく華雄の金剛爆斧であつた。男の馬が交差する瞬間、薙刀が振るわれるより早く斧を薙ぎ払つただけである。而してその単調な動きは猛将である彼女の武を存分に見せ付けた。斧に付けられた大きな刃が男の頸を瞬時に両断し、勢いを保つたまま男の右肘を斬り落としたのである。

だが華雄は顎を打ち据えられた事で顔に違和感が生じ、自らの武に鈍りが生じている事に不満に思う。不満に思うが、之を気にする余裕は今自軍には無い。

「私は殿軍を務める!!!いいな!?決して振り返るな!!!!!!」

「つ・・・了解!!!!!!御武運をつ!!!!!!」

この死地を無事に生還するには敵軍の猛追撃を振り払う必要がある。即ち武によつて殿軍を支えなければ敵軍に一方的に狩られるだけの

格好となってしまう。胡軫は華雄の命令に驚愕するが、その事を直ぐに思い出して苦渋の決断をする。戟を一度振って血と払うと彼は馬首を返して退いていく。

部隊を統率した後の彼が向かう先は関の近辺から繋がっている一本の間道である。関の攻略に取り付いた敵を横から急襲するように造られたそれは、その開発目的とは反対の用途で使われる事と成る。

この間道は部隊が列を成して撤退するのに十分な広さを持っており、尚且つ関を迂回した後に虎牢関へと続いていく本道に合流する事も分かつている。胡軫はそれを使って撤退するのだ。

華雄は周囲に固まってくる味方に目を向ける。誰一人として無傷を保っているものは居ない。顔や身体の一部を斬られ血筋を生じさせているが、自らの主が卓越した武の持ち主である事に自信を持っている様子であり、不敵な表情と雰囲気を見せている。これならば文字通りの死戦と成る撤退戦を支えるのに疑問は要らなさそうだ。

「皆の者っつ！！！！これより我らは死兵となって味方を生地へと帰還せしめる！！！！その武を持って余す事なく、この地に敵兵の臍物をぶち撒けるおお！！！！！！！！」

『応おおおおおお！！！！！！！！！！！！』

絶叫にも似た激励を出すと、董卓軍の兵士らは戦意を爆発させて雄叫びを上げる。死にかけとなっていた敵が突如奮起した事に連合軍兵士らの中で動揺と怯えが発し始めた。華雄らはその敵の間隙に自らの猛威の血風を吹き込む。どうせ死ぬのならば、せめて華々しく散りたいと華雄は心躍らせて金剛爆斧に込める力をさらに強めた。

北郷は自らの後方で、包囲されて一方的に攻撃を受けている筈の華雄直属の騎馬隊が大きな雄叫びを上げたことに驚いて振り向いた。彼の近くに居た桃香や朱里・雛里も同様である。戦術的に考えたら到底再起の可能性が無い彼らが再び闘志を燃やし、力強い反抗を始めたのだ。

(やっぱり、考えただけでは及ばない事もあるんだよな・・・)

北郷は人間の精神の爆発が不可能を可能にする瞬間を垣間見たような感覚に陥る。敵方の威勢を見て驚愕したままの桃香は若干焦った様子で両軍師に尋ねる。

「ど、どうするの朱里ちゃん、雛里ちゃん!? 後ろから一気に敵が雪崩れ込んでくるよ!!」

「はわわ・・・後方から突撃を受けてしまえば、孫堅軍との連携を崩されてしまいます!」

「あわわ・・・華雄が死兵となってしまうです。非常に強い抵抗が予想されます・・・」

彼女らの危惧を現実に顕すように、怒涛の勢いで華雄軍が撤退を始めていく。

劉備軍・孫堅軍に半包囲されていた歩兵部隊が騎馬部隊との繋がりを残しながら徐々に退いていく。戦線維持に躍起になった歩兵らが我武者羅に武勇を振るうお陰で此方側の負傷者が増える危険性が増していく。窮鼠猫を噛むとはこの事であろう。

騎馬部隊は愛馬を失って己の足で駆ける羽目となった兵たちを護衛する形で、而し傍から見ても速いペースで軍を退いていく。華雄が直接指揮することで戦意を維持し、尚且つ猛将の下で鍛え上げられた兵が多い事で思う以上に連合軍は戦果を上げられていない。

既に騎馬隊は劉備軍の半ば付近まで戦線を下げている。精兵が多い傾向である孫堅軍も攻撃の手を加えているために華雄軍も死傷者が続々と出始めている様子であるが、やはり戦意が欠ける様子は無い。このままでは本当に此方の犠牲者が増えていつてしまう。それを防ぐためには華雄を止めなければならない。

今本当の意味で劉備軍随一の武将である鈴々は鶴翼の翼を維持する役目を負っており、此処には居ない。北郷は劉備達を守護するため近くに控えている愛紗に目を向ける。

「愛紗！！華雄を止める事は出来るか！？」

「はっ！！！！私の武をご信頼下さいませ！！！！」

「じゃあ、愛紗ちゃん！！！！お願いするね！！！！」

劉備軍総大将である桃香の力強い言葉に全面的に同意し、北郷も愛紗に頷く。このまま一気に駆け出そうとした愛紗の動きを押し留める形で朱里が声を上げた。

「待って下さい！！もしできれば華雄は生かすようにして下さい！！」

「！？生かすとはどういうつもりだ！！奴の攻撃によって此方に大勢死人が出ているのだぞ！？」

愛紗は敵方の武将を倒した後、態々捕らえるという事に納得がいかず怒りを露にする。朱里はその彼女の発する鬨気の煽りを受けても表情一つ変えず醒めた眼をして応えた。その姿はまさに水鏡塾で育ちあがった臥龍のそれであった。

「この戦が始まって以来、いいえ、それより前から洛陽からの情報が完全に途絶えてしまっています。私達の草を何人か忍び込ませて、も直ぐに始末されている様子です。つい数週間前まで洛陽の、それ

もかなり中枢の方まで居た華雄を捕まえれば、向こうの詳しい情勢を聞きだせるかもしれません。」

「……つまり、此方の優位の構築に役立つ情報を、華雄から聞き出そうという事だね？」

「その通りです、ご主人様。」

一刀が朱里の言葉を分かりやすいように噛み砕いて説明すると、朱里はそれを肯定する。

理には適っていると一刀は思い、彼女の言葉に同意する。軍全体の中で華雄はかなり上位の階級に位置している。その彼女から情報を尋問なり拷問なりで無理矢理聞き出して此方の作戦上有利に展開するようにそれを活用する。そうすれば今後連合軍の攻撃がさらに容易に、且つ安全な物と成る可能性が生じるのだ。

しかしいきり立った華雄を抑え、さらに生きて拘束する事が本当に出来るのだろうか。不安気に愛紗を見ると、彼女は凜々しい表情を僅かに不満の色を浮かべて言う。

「……生きているならば、多少傷つけてもよいのだな？」

「……なるべく傷の度合いを抑えてください。」

愛紗は不服そうに溜息を漏らすと、次の瞬間には戦意を滾らせて華雄を睨みつける。得物である金剛爆斧を縦横無尽に振るって、今また劉備軍の戟兵の頭部が血の噴水を上げながら飛んでいくのが見えた。

内心で思い描く中では華雄は彼女が担ぐ青龍偃月刀の血の錆になつて然るべき人間であるが、その私情を押し隠して自らの責務を果たすと愛紗は自分に鞭を打つ。

「では、皆は此方にてお待ち下さい。直ぐに成果をご覧に入れまし

「よう。」

「気をつけてね、愛紗ちゃん!」「君なら出来ると、信じているよ。」

背中を押す桃香の激励と一刀の信託を心地よく感じ、愛紗は今度こそ押し留めていた戦意を解放して馬を走らせた。颯爽として駆けて行く彼女を頼もしく思いながら桃香と一刀は見つめていた。

二人の気持ちを以心伝心の要領で感じ取っている愛紗は既に目の前の敵に視線を固定して離さない。敵が振るった大斧から血飛沫が噴出され、肉切れや切り崩された骨が一部宙を舞っている。顔に掛かった返り血や、体中に負っている掠り傷からの出血を自らの激動で飛ばしていく。

華雄の視線が不意に駆け寄ってくる愛紗に向けられ、僅かに目が見開かれる。次の瞬間にはその眼に大きな怒りを宿して更に殺意を放出した。事の原因が自分にあると思いつたのだろう。激情のままに周囲の敵兵を大斧で吹き飛ばすと、此方に向かって斧の先を突きつける。

彼女から直々に対一の決闘を申し込まれたようだ。なればこれを受けるのが武士としての礼儀というものだ。愛紗は担いだ青龍偃月刀を持ち直して一度振るい華雄へと駆け寄る。

両者の間が一気に縮まり、互いの得物が届く距離に成った瞬間、戦場に局所的な豪風が吹き荒れて二つの鉄が強く打ち合わされ、愛紗が通り過ぎていく。馬首を返して再度華雄へ向き直って近寄っていく。

愛紗は寄り様に再度自分から攻撃を仕掛けた。横からの強い薙ぎに華雄は素早く対応、斧の刃でそれを打ち払い、払い様に斧を振り下ろす。愛紗は弾かれた偃月刀を巧みに返すと華雄の大斧と刃を合わせて鏢競り合いを演じる。擦れ合う鉄から火花が生じて互いに降りかかる。

斧の刃の付近と石突の近くを持ち、歯を食いしばって力押しを試み

る華雄は唸りを上げて声を出す。

「貴様ああ、よくも挑発してくれたなあっ！！！！」

「っ、先の無礼はこの一戦にもって詫びよう。尋常に勝負為された
い！」

「言われるまでも無いわ、覚悟しろ、よっっっっ！！！！」

膂力ならば負けず劣らずの愛紗を華雄は見事に押し切って体勢を崩すと、横から一気に相手の腹目掛けて斧を振るう。愛紗は手馴れた様子でそれを弾き、槍で突き払うように相手の頭部・腹部・脚部を順に攻めるが、華雄はそれを斧の刃や柄を使って打ち払う。

なれば上段からの打ち下ろしはどうかと愛紗は偃月刀を一気に振り振り神速の如くそれを下ろす。華雄はそれを先程と同じく防ぐが、愛紗の攻撃はそれで終わらない。刃を下に滑らせて華雄の指を斬りおとそうとするも咄嗟に離されて失敗する。しかし愛紗は振り下ろしをそこで留まらせず、勢いのままに華雄の乗った馬の頸部を打ち据えて、鍛え上げた筋肉を纏う首をいとも容易く切断した。

「ちっ！！！！」

二度自らの足を失った羽目となる華雄は転倒する馬から咄嗟に飛び降りて、地面に着く寸前に下段から愛紗の足を断とうと斧を振るうが、彼女もそれを想定してか既に馬上から跳躍して地面に降り立ったようだ。

両者の間を一頭の生馬と死骸となった馬が遮り、一時的に膠着状態が発する。華雄は一息をついて敵への評価を訂正した。冷静に物を見る武将である。先の発言から察するに、挑発の時の態度は彼女の本意では無かつたらしい。なればこそ、遠慮は無用である。

華雄は息絶えた馬の胴体を踏み台に遮蔽物となっていた馬を飛び越える。高所の利点を生かした華雄は此方の行動に瞠目した相手目掛

けて金剛爆斧を力の限り振り下ろす。

「はああああっ！！！！」

しかし同じ豪傑の名を受けている愛紗はそれに直ぐに反応、咄嗟に横に転がる事で猛撃を回避する。振り下ろされた一撃は愛紗が先程までたっていた地面を叩き割り、その強力さを印象付ける。

華雄は深く刺さった斧を梃子の原理で引き抜くと立ち上がるうとする愛紗へ一気に距離をつめた。下段からの逆袈裟懸けを偃月刀の柄を使って逸らすも、瞬時に振るわれる頸部を狙った払いには上手く反応できない。反射的にその場にしゃがむ事でやむなきを得るが、間髪要れず斧が再び頭部を狙って振るわれた。後方へ一気に飛びのいた彼女の鼻先を刃が掠り、垂れていた美しい艶がある前髪を裁断する。

先程までと打って変わって一気にキレが良くなった攻撃に愛紗は心の内に残っていた僅かな余裕を消す。この手の手合いは時間をかければかけるほどより強くなる種の間人だ。早々にケリをつけねば此方が危うくなる。

「心しろよ、華雄！！！！」

意を決して自ら攻撃を仕掛ける事とした愛紗は得物を袈裟懸けに、その軌道をなぞる様に逆袈裟懸けを、序で振り下ろし・振り上げといった風に一方的に攻撃を仕掛けていった。

顔を興奮で紅潮させた華雄はそれらの攻撃を持ち前の強力で見事に跳ね返し、途中途中防御の合間に反撃の手を入れる。頭部や腹部を狙った攻撃は斧の強靭さを象徴する攻撃だ。一度当たればどう上手く回避したところで深手を負ってしまう。丁寧に且つ迅速にそれらを偃月刀の刃で打ち弾き、切り払う。

二十合打ち合って未だ両者の間に変化は生じない。二人の起こす危

険極まりない血闘に援護の手を入れるような無粋者、あるいは自殺志願者は居ないようだ。彼女らが刃を合わせて火花を散らしている間にも、董卓軍は徐々に退却の一途を進んでいる。愛紗の中に焦れたい思いが生じ始めた。

「シイツ!!!」

その思考も金剛爆斧から生じる陣風によって彼方へと吹き飛ぶ。怒りと戦意を滾らせる華雄の攻撃は一段を冴えを見せ続けており、愛紗の肝を冷やす事を何度か生じせしめていた。

下段からの一撃を後方へと跳躍する事で回避、数間の距離を開けて両者は再度膠着状態に入る。一息について冷静に武器を構える愛紗。対照的に、負傷しているにも拘らず長々と最前線で奮闘を見せた華雄の額と首筋には汗が浮かび上がり、呼吸が僅かに乱れていた。如何に武に自信があつても周囲から立続けに攻撃と殺意を受け、更に自分に匹敵する武人と相対するとなれば疲労の一つも覚えるというもの。

大きく鋭く息をついた華雄は再び武器を此方に向ける。僅かに腰を下ろし、腰溜めに構えた斧の切っ先が自らの心臓を狙っている。そして摺り足で徐々に近づいてく。地面を靴底が撫でるたびに死体から溢れ返る血液の流れを乱して波紋を広げる。両者の間は更に縮まり、大きく一步踏み出せば刃が敵の肌に食い込むまでとなる。

愛紗は偃月刀の切っ先を僅かに揺らして闘気を眼前の敵目掛けて放った。それに煽られた華雄は摺り足を行うペースを乱され、一瞬動きが止まる。それに付け込もうと愛紗は刹那の間に前へ踏み出し、腰を大きく捻りつて偃月刀を振り被ると勢いのままに振った。不意に襲ってきたかのような錯覚を受けた華雄は動揺した心を徹しつつ、その一撃を防ぐ。

しかし心を乱された彼女の防御は甘く、また疲弊のために攻めの一撃を完全に防ぎきれず体勢を崩してしまふ。気迫を吐きながら愛紗

は偃月刀を返して頸部を狙うも、華雄は何とかそれを防ぎきるも次第に愛紗の連撃に翻弄されて、息を明らかに乱していった。一瞬の油断を突いた愛紗は華雄の心を掻き乱すように攻撃を続けていく。腹部を狙った偃月刀を思わず仰け反りながら華雄。愛紗はその敵の乱れを逃さず、股から頭を切り抜けるように武器を振り上げる。望まぬ体勢のために武器に込める力を緩めてしまっている華雄はその一撃により斧の刃を完全に上方へ上げられてしまう。

「殺ったあああああ！！！！」

勝利を確信した愛紗は跳ね上げられた斧により空いた空間、華雄の腹部を今度こそ渾身の一撃で狙う。華雄はその一連の攻撃に瞠目して尚も武器の柄を使って防ごうとするが、愛紗の一撃がそれより早く身体を切り抜けた。旋風が肉体を駆け抜ける。

「・・・・・・・・くそ・・・・」

腹部に走る衝撃と強い痛みにより華雄は前屈みに崩れて膝を付いてうつ伏せに倒れる。頭部を軽く地面にぶつけて、混濁とさせてられていた意識が完全に落ち、最後まで込められていた手の力が解けて金剛爆斧が音を立てて転がる。

華雄を一瞬で落とした愛紗は振り抜けた姿のままである。そして自らの任務が終わった事に安堵の息を漏らす。最後の一撃は力こそ込めてはいるが、当たる直前で刃を反転させて峰打ちを決め込んだ。肋骨が数本折れているかもしれないが、猛将である華雄をそれだけで取り押さえたのだから褒められはすれ恨まれる事はないだろう。後はこのまま華雄を敢えて『討ち取った』と咆哮すれば敵は強い動揺を覚え、降参の意思を表示するかもしれない。

瞳を閉じて気絶している華雄を一瞥すると、関羽は青龍偃月刀を高々と天に掲げて吼えた。その一声は戦場を瞬く間に駆け巡り、彼女

すそれと一線を隔していた。

「俺は手前の武器だけで五十くらいだが、春蘭は？」

「ふん、まだまだひよつこだな！！！！私は二倍は殺ったぞ！！！！」

？水関に駐屯していた敵軍の数は四千近く、そのうちの百五十を僅か二人だけで殺した形となる。十分の一近くを殺害せしめ尚大暴れを展開する二人に対する董卓軍兵士の畏怖は著しいものであり、この恐怖が瞬く間に伝達していくとこの関の中ですらも戦わずして降伏する者が出る始末と相成った。

仁ノ助は戦いに飢えて武器を振るう上司に改めて感服の意を表す。よくもまあ此処までやるものだ。

「根こそぎやらなくても大丈夫だ。直ぐに此処は落ちる。その後は残敵に投降を促すだけになる。」

「・・・全く！！！！華雄を討ち取るのが私では無いとはな・・・。」

名残惜しそうな視線を平原に向ける。夏侯惇の願い虚しく劉備軍の策が取り入れられた結果曹操軍は関攻略の任を受け持ったのだ。彼女の願いである敵方の猛将との一戦は適わなかったが、その思いは虎牢関にてきつと適う事となろう、飛將軍呂布との決戦である。

けたたましい悲鳴が二人の横合いから響く。そちらの方向へ顔を向けると、十文字槍で残兵の心の臓を突き刺した蔣済が立っていた。真っ直ぐ槍の刃を抜いて倒れこむ死体を避けると、そこらかしこに転がる肉体の欠片を跨ぎながら彼は近付いた。

「城内の抵抗はもうほとんどありませんね。制圧同然、本当に楽な仕事だ。」

「弱兵を殺すだけだったではないか。退屈だ。」

膨れつ面で夏侯惇が蒋済の感想に不満を言う。彼は苦笑いを零すと二人に後方を向くように指を差した。丁度曹操軍が？水関に掲げられていた『董』の旗を降ろして、代わりに『曹』の旗を高々と掲げていく光景が其処にあった。自らの軍旗が敵地に翻る姿を見て兵士達は勝ち鬨（どき）を上げる。

先程の不満気な表情を打って変わって喜色と誇らしさに変えた夏侯惇は口から僅かに感嘆の息を漏らした。仁ノ助は『曹』の旗を一瞥すると、直ぐに間道入り口の方角へと目を向ける。連合軍の一部の騎兵部隊がまさに侵入する時であった。空気を切るたびに煽られる旗の字は『孫』と『袁』。孫堅と袁術の部隊が追撃をかけるものと見て間違いなさそうだ。

史実ならば曹操が、この世界ならば彼らが徐栄の反撃を受けるのだろう。反撃の可能性があるという事を一々告げるような事はしない。これから先に確実に敵となる勢力なのだから少しでも傷ついてもらわなければ此方が困る。それに？水関の存在で演義寄りという事が証明されたこの世界では、どの人間にも演義補正がかかっているであろう。ちよつとやそつとの事では勇将は死なない物だ。

開き直つたかのように醒めた目をした仁ノ助の表情は、彼の内心と事情を知らなければ然も悟りを開いて全ての事象を睥睨するかのよくな佇まいであった。蒋済の人の深層を遠慮無しに覗き込むような視線を受けて仁ノ助は若干居心地の悪さを感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5962x/>

真・恋姫†無双 現代若人の歩み、佇み

2011年11月22日23時50分発行